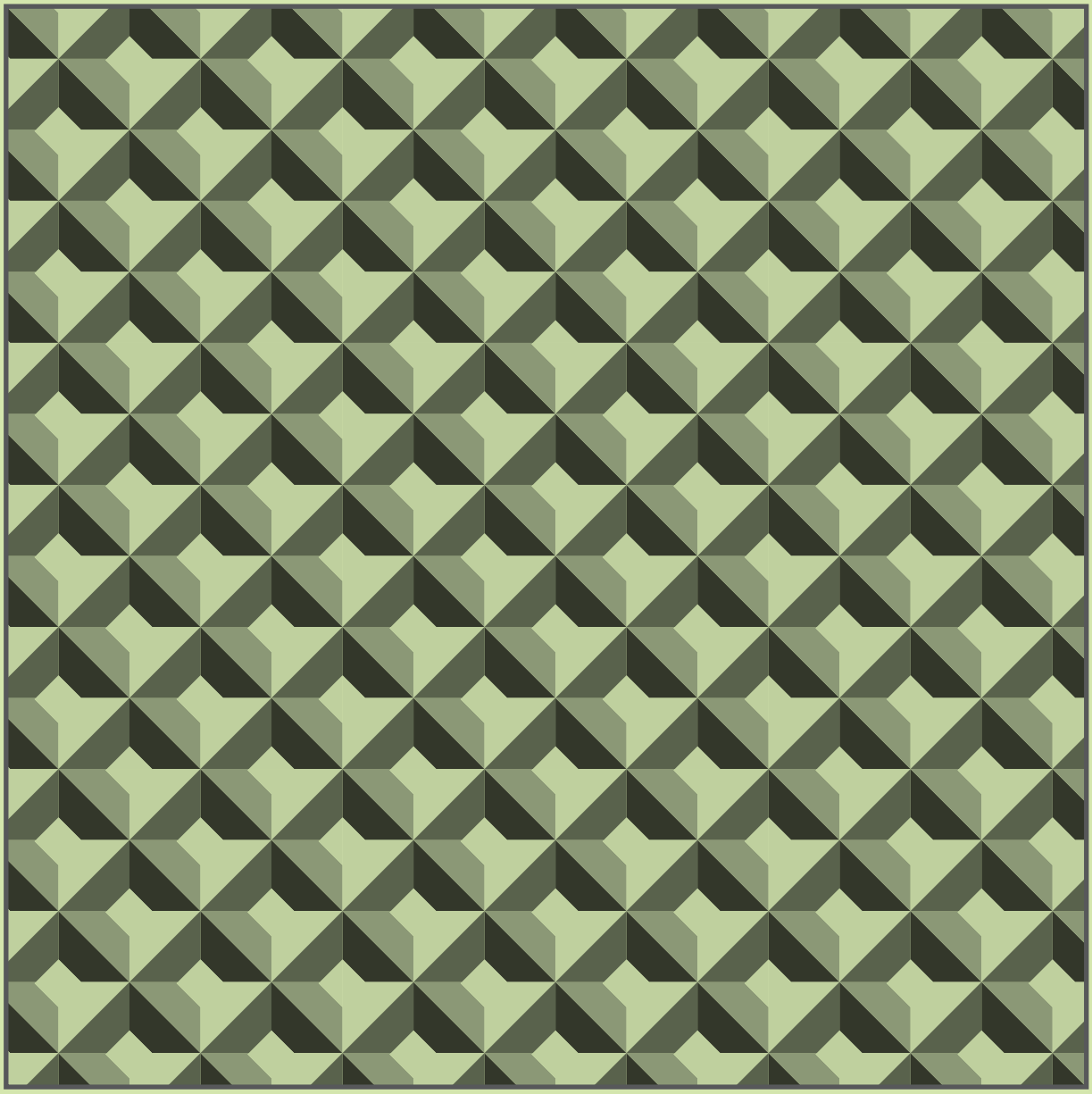
2014年度

シラバス

経済学部



秋学期は配布しません。1年間必ず保管すること。

獨協大学

シラバスは、科目の担当教員が学期ごとの授業計画、講義概要、評価方法などを学生に周知することにより、受講する際の指針とし、授業の理解を深めることを目的に作成されたものです。

シラバスをよく読んで、計画的な履修登録をしてください。

【シラバスの見方】

1. 目次について

①シラバスページの検索方法

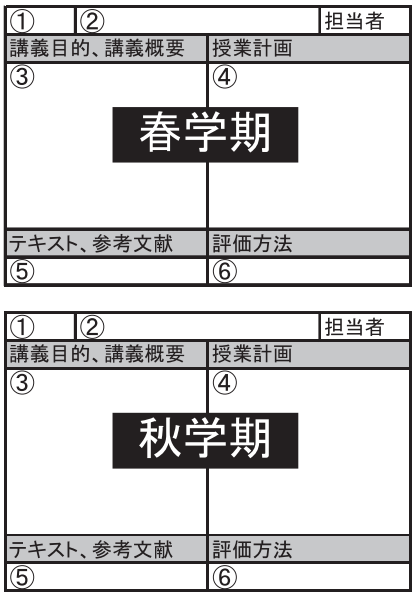
ページ端にあるインデックスで自分の入学年度に該当する目次ページを探してください。
目次の科目は、授業科目表（学則別表）と同じ順序で掲載しています。
※入学年度によっては授業科目表とシラバスの順序が一致していない場合があります。ご注意ください。

②履修できない科目

「履修不可」の欄に所属学部・学科名が記されている場合は、その科目を履修することができません。
〈略称説明〉

外：外国語学部	養：国際教養学部	経：経済学部	法：法学部
独：ドイツ語学科		済：経済学科	律：法律学科
英：英語学科		営：経営学科	国：国際関係法学科
仏：フランス語学科		環：国際環境経済学科	総：総合政策学科
交：交流文化学科			

2. シラバスページの見方（右図参照）



①入学年度

13年度以降‥‥2013年度以降入学者
08～14年度‥‥2008～2014年度入学者
08～12年度‥‥2008～2012年度入学者
05～14年度‥‥2005～2014年度入学者
03～14年度‥‥2003～2014年度入学者
01～14年度‥‥2001～2014年度入学者
01～12年度‥‥2001～2012年度入学者
01～07年度‥‥2001～2007年度入学者
01～04年度‥‥2001～2004年度入学者

②入学年度に対応した科目名
③授業の目的や講義全体の説明、学生への要望
④学期の授業計画

各回ごとの講義のテーマ、内容を記載しています。
授業計画回数と実際の回数は必ずしも一致しません。

⑤授業で使用するテキスト、参考文献
⑥評価方法

3. 注意事項

①履修条件

担当教員が履修者に対して、その他の科目の履修や単位の修得などを条件としている科目があります。
必ず「講義目的、講義概要」の欄(上図③の部分)および『授業時間割表』を確認してください。

②定員

経済学部の科目は、学習環境および防災上などの観点から、「全学共通授業科目」と同様に定員を設けています。
各科目の定員は、『授業時間割表』の「定員」の欄を参照してください。

2003～2012年度入学者用
経 済 学 科

＜＜学科基礎科目＞＞

◇外国語◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
インターナショナルコミュニケーションⅠa<01～12年度入学者のみ>	春	各担当教員		外 養 法	28
インターナショナルコミュニケーションⅠb<01～12年度入学者のみ>	秋	各担当教員		外 養 法	28
インターナショナルコミュニケーションⅡa<01～12年度入学者のみ>	春	各担当教員		外 養 法	29
インターナショナルコミュニケーションⅡb<01～12年度入学者のみ>	秋	各担当教員		外 養 法	29

◇経済・経営入門◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
大学入門講座(経済学科)<08～12年度入学者のみ>	春	内倉 滋	土 2	営 外 養 法	30
クラスセミナー(再履修者用)<08年度以降入学者のみ>	春	各担当教員		外 養 法	31
クラスセミナー(再履修者用)<08年度以降入学者のみ>	秋	浜本 光紹	水 1	外 養 法	31
経済学a(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	黒木 亮	月 1	営 外 養 法	32
経済学b(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	黒木 亮	月 1	営 外 養 法	32
経済学a(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	浜本 光紹	火 4	営 外 養 法	33
経済学b(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	浜本 光紹	火 4	営 外 養 法	33
統計学a(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	深江 敬志	金 3	営 外 養 法	34
統計学b(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	深江 敬志	金 3	営 外 養 法	34
統計学b(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	大床 太郎	月 5	営 外 養 法	35
統計学a(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	大床 太郎	月 5	営 外 養 法	35
コンピュータ入門a	春	各担当教員		外 養 法	36
コンピュータ入門b	秋	各担当教員		外 養 法	36
プレゼンテーション技法<01～12年度入学者のみ>	秋	未定	木 1		37
経営学a(経済学科生用)<01～12年度入学者のみ>	春	上坂 卓郎	水 1	営 外 養 法	112
経営学b(経済学科生用)<01～12年度入学者のみ>	秋	高松 和幸	水 1	営 外 養 法	112
簿記原理a	春	香取 徹	木 2		38
簿記原理b	秋	香取 徹	木 2		38
簿記原理a	春	細田 哲	木 2		39
簿記原理b	秋	細田 哲	木 2		39
簿記原理a	春	百瀬 房徳	火 1		40
簿記原理b	秋	百瀬 房徳	火 1		40
簿記原理a	春	山﨑 尚	火 1		41
簿記原理b	秋	山﨑 尚	火 1		41
簿記原理a	春	山﨑 尚	木 2		41
簿記原理b	秋	山﨑 尚	木 2		41
簿記原理a	春	湯田 雅夫	火 1		42
簿記原理b	秋	湯田 雅夫	火 1		42
簿記原理a	春	橋本 尚	火 5		43
簿記原理b	秋	橋本 尚	火 5		43
簿記原理b	春	齋藤 正章	月 5		44
簿記原理a	秋	齋藤 正章	月 5		44

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
数学a<01～12年度入学者のみ>	春	高木 悟	金 1	外 養 法	45
数学b<01～12年度入学者のみ>	秋	高木 悟	金 1	外 養 法	45
数学a<01～12年度入学者のみ>	春	高木 悟	金 2	外 養 法	45
数学b<01～12年度入学者のみ>	秋	高木 悟	金 2	外 養 法	45
高齢化社会論a<01～12年度入学者のみ>	春	奥山 正司	月 1	法	46
高齢化社会論b<01～12年度入学者のみ>	秋	奥山 正司	月 1	法	46
精神衛生論a<01～12年度入学者のみ>	春	中野 隆史	火 4		47
精神衛生論b<01～12年度入学者のみ>	秋	中野 隆史	火 4		47
医療・福祉概論a<01～12年度入学者のみ>	春	山岡 淳	水 2	法	48
医療・福祉概論b<01～12年度入学者のみ>	秋	山岡 淳	水 2	法	48
現代文化論a<01～12年度入学者のみ>	春	柴崎 信三	木 2	外 養 法	49

現代文化論b<01～12年度入学者のみ>	秋	柴崎 信三	木	2		外	養	法	49

<<学科専門科目>>

◇経済外国語◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可				ページ
経済外国語Ⅰa(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	奥山 正司	月	2	営	外	養	法	50
経済外国語Ⅰb(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	奥山 正司	月	2	営	外	養	法	50
経済外国語Ⅰa(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	清水 公一	月	4	営	外	養	法	51
経済外国語Ⅰb(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	清水 公一	月	4	営	外	養	法	51
経済外国語Ⅰa(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	鈴木 淳	水	1	営	外	養	法	52
経済外国語Ⅰb(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	鈴木 淳	水	1	営	外	養	法	52
経済外国語Ⅰa(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	徳永 潤二	木	2	営	外	養	法	53
経済外国語Ⅰb(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	徳永 潤二	木	2	営	外	養	法	53
経済外国語Ⅰa(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	益山 光央	木	1	営	外	養	法	54
経済外国語Ⅰb(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	益山 光央	木	1	営	外	養	法	54
経済外国語Ⅰa(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	山越 徳	火	2	営	外	養	法	55
経済外国語Ⅰb(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	山越 徳	火	2	営	外	養	法	55
経済外国語Ⅰb(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	黒川 文子	水	1	営	外	養	法	56
経済外国語Ⅰa(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	市原 博	水	1	営	外	養	法	57
経済外国語Ⅰa(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	岡村 国和	月	4	営	外	養	法	58
経済外国語Ⅰa(留学生再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	童 適平	火	2	営	外	養	法	59
経済外国語Ⅰb(留学生再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	童 適平	火	2	営	外	養	法	59
外書講読a<08～12年度入学者のみ>	春	岡村 国和	月	3		外	養	法	60
外書講読b<08～12年度入学者のみ>	秋	岡村 国和	月	3		外	養	法	60
経済外国語Ⅱa<01～07年度入学者のみ>	春	岡村 国和	月	3	営	外	養	法	60
経済外国語Ⅱb<01～07年度入学者のみ>	秋	岡村 国和	月	3	営	外	養	法	60
外書講読a<08～12年度入学者のみ>	春	御園生 眞	火	5		外	養	法	61
外書講読b<08～12年度入学者のみ>	秋	御園生 眞	火	5		外	養	法	61
経済外国語Ⅱa<01～07年度入学者のみ>	春	御園生 眞	火	5	営	外	養	法	61
経済外国語Ⅱb<01～07年度入学者のみ>	秋	御園生 眞	火	5	営	外	養	法	61
外書講読a(中国語)<08～12年度入学者のみ>	秋	全 載旭	水	1		外	養	法	62
外書講読b(中国語)<08～12年度入学者のみ>	秋	全 載旭	水	2		外	養	法	62
経済外国語Ⅱa(中国語)<01～07年度入学者のみ>	秋	全 載旭	水	1	営	外	養	法	62
経済外国語Ⅱb(中国語)<01～07年度入学者のみ>	秋	全 載旭	水	2	営	外	養	法	62

◇経済理論・経済学史◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
マクロ経済学a	春	塩田 尚樹	木	1	営	63
マクロ経済学b	秋	塩田 尚樹	木	1	営	63
マクロ経済学a	春	須藤 時仁	火	2	営	64
マクロ経済学b	秋	須藤 時仁	火	2	営	64
マクロ経済学a	春	山下 裕歩	月	1	営	65
マクロ経済学b	秋	山下 裕歩	月	1	営	65
ミクロ経済学a	春	小林 進	金	2	営	66
ミクロ経済学b	秋	小林 進	金	2	営	66
ミクロ経済学a	春	高畑 純一郎	木	2	営	67
ミクロ経済学b	秋	高畑 純一郎	木	2	営	67
ミクロ経済学a	春	藤山 英樹	月	3	営	68
ミクロ経済学b	秋	藤山 英樹	月	3	営	68
経済学史a	春	黒木 亮	木	2		69
経済学史b	秋	黒木 亮	木	2		69
経済変動論a<01～12年度入学者のみ>	春	山下 裕歩	月	3		70
経済変動論b<01～12年度入学者のみ>	秋	山下 裕歩	月	3		70
経済社会学a	春	森永 卓郎	火	1		71
経済社会学b	秋	森永 卓郎	火	1		71
経済哲学a<01～07年度入学者のみ>		本年度休講				
経済哲学b<01～07年度入学者のみ>		本年度休講				
経済思想a<08～12年度入学者のみ>		本年度休講				
経済思想b<08～12年度入学者のみ>		本年度休講				
ゲーム理論a	春	藤山 英樹	水	2		72

ゲーム理論b	秋	藤山 英樹	水	2			72

◇経済統計・計量経済◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可		ページ
経済統計論a	春	深江 敬志	金	4			73
経済統計論b	秋	深江 敬志	金	4			73
計量経済学a	春	藤山 英樹	月	1			74
計量経済学b	秋	藤山 英樹	月	1			74

◇経済政策◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可		ページ
経済政策論a	春	童 適平	火	4	営	法	75
経済政策論b	秋	童 適平	火	4	営	法	75
経済開発論a<01～12年度入学者のみ>	春	高安 健一	火	2			76
経済開発論b<01～12年度入学者のみ>	秋	高安 健一	火	2			76
環境政策論a	春	塩田 尚樹	火	1		法	77
環境政策論b	秋	塩田 尚樹	火	1		法	77

◇経済史◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可		ページ
日本経済史a	春	市原 博	月	4	営		78
日本経済史b	秋	市原 博	月	4	営		78
日本社会史a	春	新井 孝重	火	5			79
日本社会史b	秋	新井 孝重	火	5			79
東洋経済史a<01～12年度入学者のみ>		本年度休講					
東洋経済史b<01～12年度入学者のみ>		本年度休講					
西洋経済史a<01～12年度入学者のみ>	春	御園生 眞	火	1			80
西洋経済史b<01～12年度入学者のみ>	秋	御園生 眞	火	1			80

◇国際経済◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可			ページ
国際経済論a<01～12年度入学者のみ>	春	益山 光央	火	2	営	養	法	81
国際経済論b<01～12年度入学者のみ>	秋	益山 光央	火	2	営	養	法	81
国際金融論a	春	徳永 潤二	水	2			法	82
国際金融論b	秋	徳永 潤二	水	2			法	82

◇地域経済◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可			ページ
日本経済論a	春	須藤 時仁	木	5	営	養	法	83
日本経済論b	秋	須藤 時仁	木	5	営	養	法	83
アメリカ経済論a	春	本田 浩邦	月	4				84
アメリカ経済論b	秋	本田 浩邦	月	4				84
ラテンアメリカ経済論a	春	浦部 浩之	火	5				85
ラテンアメリカ経済論b	秋	浦部 浩之	月	4				85
西ヨーロッパ経済論a<01～12年度入学者のみ>	春	漆畑 春彦	金	4				86
西ヨーロッパ経済論b<01～12年度入学者のみ>	秋	漆畑 春彦	金	4				86
東ヨーロッパ経済論a<01～12年度入学者のみ>		本年度休講						
東ヨーロッパ経済論b<01～12年度入学者のみ>		本年度休講						
東アジア・中国経済論a	春	駒形 哲哉	金	2				87
東アジア・中国経済論b	秋	全 載旭	金	2				87
オセアニア経済論a	春	永野 隆行	火	2				88
オセアニア経済論b	秋	永野 隆行	火	2				88
アフリカ経済論a	春	佐野 康子	木	2				89
アフリカ経済論b	秋	佐野 康子	木	2				89
東南アジア経済論a	春	高安 健一	金	1		養		90
東南アジア経済論b	秋	高安 健一	金	1		養		90
中東経済論a	春	平井 文子	金	2				91
中東経済論b	秋	平井 文子	金	2				91

◇金融経済◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
金融経済論a<01～12年度入学者のみ>	春	斉藤　美彦	木	1	営	92
金融経済論b<01～12年度入学者のみ>	秋	斉藤　美彦	木	1	営	92
金融システム論a	春	斉藤　美彦	水	2		93
金融システム論b	秋	斉藤　美彦	水	2		93

◇財政◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
財政学a	春	野村　容康	木	3	営　法	94
財政学b	秋	野村　容康	木	3	営　法	94
公共経済学a	春	高畑　純一郎	火	3		95
公共経済学b	秋	高畑　純一郎	火	3		95
地方財政論a	春	嶋田　崇治	金	3	法	96
地方財政論b	秋	嶋田　崇治	金	3	法	96

◇環境・都市・経済地理◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
環境経済学a	春	浜本　光紹	火	2		97
環境経済学b	秋	浜本　光紹	火	2		97
都市経済学a	春	倉橋　透	金	1	法	98
都市経済学b	秋	倉橋　透	金	1	法	98
経済地理学a	春	犬井　正	月	2		99
経済地理学b	秋	犬井　正	月	2		99
交通経済論a<01～12年度入学者のみ>		本年度休講				
交通経済論b<01～12年度入学者のみ>		本年度休講				

◇産業経済◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
産業政策論a		本年度休講				
産業政策論b		本年度休講				
産業組織論a	春	和久津　尚彦	金	1	営	100
産業組織論b	秋	和久津　尚彦	金	1	営	100
産業構造論a	春	山越　徳	木	1		101
産業構造論b	秋	山越　徳	木	1		101

◇労働・社会保障◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
社会保障論a<05～13年度以降入学者のみ>	春	山岡　淳	水	1		102
社会保障論b<05～13年度以降入学者のみ>	秋	山岡　淳	水	1		102
社会政策a<01～04年度入学者のみ>	春	山岡　淳	水	1		102
社会政策b<01～04年度入学者のみ>	秋	山岡　淳	水	1		102
労働経済学a	春	森永　卓郎	木	1		103
労働経済学b	秋	森永　卓郎	木	1		103

<<関連専門科目>>

◇経営・会計◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
経営学原理a	春	岡部　康弘	金	2	営	113
経営学原理b	秋	岡部　康弘	金	2	営	113
経営学原理a	春	黒川　文子	火	5	営	114
経営学原理b	秋	黒川　文子	火	5	営	114
企業論a	春	平井　岳哉	月	1	営	129
企業論b	秋	平井　岳哉	月	1	営	129
会計学a	春	内倉　滋	木	3	営　法	104
会計学b	秋	内倉　滋	木	3	営　法	104

◇統計・情報科学◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
応用統計学a<01～12年度入学者のみ>	春	樋田　勉	火　1	営	146
応用統計学b<01～12年度入学者のみ>	秋	樋田　勉	火　1	営	146
標本調査論a<01～12年度入学者のみ>	春	大床　太郎	金　2	営	147
標本調査論b<01～12年度入学者のみ>	秋	大床　太郎	金　2	営	147
データベース論a<01～12年度入学者のみ>※	春	長　慎也	月　4	営	148
データベース論b<01～12年度入学者のみ>※	秋	長　慎也	月　4	営	148
データベース論a<01～12年度入学者のみ>※	春	堀江　郁美	水　2	営	149
データベース論b<01～12年度入学者のみ>※	秋	堀江　郁美	水　2	営	149
コンピュータシミュレーション論a<01～12年度入学者のみ>※	春	市川　新	月　4	営	150
コンピュータシミュレーション論b<01～12年度入学者のみ>※	秋	市川　新	月　4	営	150
マルチメディア論a※	春	大和田　勇人	金　2	営	151
マルチメディア論b※	秋	大和田　勇人	金　2	営	151
マルチメディア論a※	春	柏原　賢二	火　3	営	152
マルチメディア論b※	秋	柏原　賢二	火　3	営	152
マルチメディア論a※	春	立田　ルミ	水　2	営	153
マルチメディア論b※	秋	立田　ルミ	水　2	営	153
プログラミング論a※	春	柏原　賢二	火　2	営	156
プログラミング論b※	秋	柏原　賢二	火　2	営	156
プログラミング論a※	春	加藤　尚吾	月　3	営	157
プログラミング論b※	秋	加藤　尚吾	月　3	営	157
プログラミング論a※	春	立田　ルミ	水　1	営	158
プログラミング論b※	秋	立田　ルミ	水　1	営	158
プログラミング論a※	春	堀江　郁美	木　2	営	159
プログラミング論b※	秋	堀江　郁美	木　2	営	159

※a,bセット履修

◇政治・法律◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
法学a	春	大川　俊	水　2	外　養　法	169
法学b	秋	木藤　茂	水　2	外　養　法	169
政治学総論a	春	杉田　孝夫	木　1	外　養　法	170
政治学総論b	秋	杉田　孝夫	木　1	外　養　法	170
民法a	春	納屋　雅城	金　1	法	171
民法b	秋	納屋　雅城	金　1	法	171
商法a<01～12年度入学者のみ>	春	高木　正則	金　3	法	172
商法b<01～12年度入学者のみ>	秋	高木　正則	金　3	法	172

◇総合講座・特殊講義◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
総合講座a	春	経済学部	水　3		174
総合講座b	秋	経済学部	水　3		174
特殊講義a(金融資産運用論)	春	山崎　元	木　3		175
特殊講義b(金融資産運用論)	春	山崎　元	木　5		176
特殊講義a(金融資産運用論)	秋	山崎　元	木　3		175
特殊講義b(金融資産運用論)	秋	山崎　元	木　5		176
特殊講義a(宇宙・深海への旅と生物多様性)	春	山根　一眞	月　3		177
特殊講義b(宇宙・深海への旅と生物多様性)	秋	山根　一眞	月　3		177
特殊講義a(専門英語)	春	小林　進	金　1		178
特殊講義b(専門英語)	秋	小林　進	金　1		178
特殊講義b(資本市場の役割と証券投資)	秋	経済学部	水　4		179

◇外国人学生・帰国学生(特別入試入学者)について◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
外国人学生・帰国学生(特別入試入学者)の授業科目履修について					27

2003～2012年度入学者用
経 営 学 科

＜＜学科基礎科目＞＞

◇外国語◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
インターナショナルコミュニケーションⅠa<01～12年度入学者のみ>	春	各担当教員		外 養 法	28
インターナショナルコミュニケーションⅠb<01～12年度入学者のみ>	秋	各担当教員		外 養 法	28
インターナショナルコミュニケーションⅡa<01～12年度入学者のみ>	春	各担当教員		外 養 法	29
インターナショナルコミュニケーションⅡb<01～12年度入学者のみ>	秋	各担当教員		外 養 法	29

◇経営・経済入門◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
大学入門講座(経営学科)<08～12年度入学者のみ>	春	内倉 滋	土 2	済 外 養 法	30
クラスセミナー(再履修者用)<08年度以降入学者のみ>	春	各担当教員		外 養 法	31
クラスセミナー(再履修者用)<08年度以降入学者のみ>	秋	浜本 光紹	水 1	外 養 法	31
経営学a(再履修者用)	春	有吉 秀樹	水 1	済 外 養 法	105
経営学b(再履修者用)	秋	有吉 秀樹	水 1	済 外 養 法	105
経営学a(再履修者用)	春	岡部 康弘	水 1	済 外 養 法	106
経営学b(再履修者用)	秋	岡部 康弘	水 1	済 外 養 法	106
経営学a(再履修者用)	春	陰山 孔貴	火 2	済 外 養 法	107
経営学b(再履修者用)	秋	陰山 孔貴	火 2	済 外 養 法	107
経営学a(再履修者用)	春	小林 哲也	火 2	済 外 養 法	108
経営学b(再履修者用)	秋	小林 哲也	火 2	済 外 養 法	108
経営学a(再履修者用)	春	鈴木 淳	火 2	済 外 養 法	109
経営学b(再履修者用)	秋	鈴木 淳	火 2	済 外 養 法	109
経営学a(再履修者用)	春	高松 和幸	水 1	済 外 養 法	110
経営学b(再履修者用)	秋	上坂 卓郎	水 1	済 外 養 法	110
経営学a(再履修者用)	春	平井 岳哉	火 2	済 外 養 法	111
経営学b(再履修者用)	秋	平井 岳哉	火 2	済 外 養 法	111
簿記原理a(再履修者用)	春	香取 徹	木 2		38
簿記原理b(再履修者用)	秋	香取 徹	木 2		38
簿記原理a(再履修者用)	春	細田 哲	木 2		39
簿記原理b(再履修者用)	秋	細田 哲	木 2		39
簿記原理a(再履修者用)	春	百瀬 房徳	火 1		40
簿記原理b(再履修者用)	秋	百瀬 房徳	火 1		40
簿記原理a(再履修者用)	春	山﨑 尚	火 1		41
簿記原理b(再履修者用)	秋	山﨑 尚	火 1		41
簿記原理a(再履修者用)	春	山﨑 尚	木 2		41
簿記原理b(再履修者用)	秋	山﨑 尚	木 2		41
簿記原理a(再履修者用)	春	湯田 雅夫	火 1		42
簿記原理b(再履修者用)	秋	湯田 雅夫	火 1		42
簿記原理a(再履修者用)	春	橋本 尚	火 5		43
簿記原理b(再履修者用)	秋	橋本 尚	火 5		43
簿記原理b(再履修者用)	春	齋藤 正章	月 5		44
簿記原理a(再履修者用)	秋	齋藤 正章	月 5		44
コンピュータ入門a	春	各担当教員		外 養 法	36
コンピュータ入門b	秋	各担当教員		外 養 法	36
プレゼンテーション技法<01～12年度入学者のみ>	秋	未定	木 1		37
経済学a(経営学科生用)<01～12年度入学者のみ>	春	黒木 亮	月 1	済 外 養 法	32
経済学b(経営学科生用)<01～12年度入学者のみ>	秋	黒木 亮	月 1	済 外 養 法	32
経済学a(経営学科生用)<01～12年度入学者のみ>	春	浜本 光紹	火 4	済 外 養 法	33
経済学b(経営学科生用)<01～12年度入学者のみ>	秋	浜本 光紹	火 4	済 外 養 法	33
統計学a<01～12年度入学者のみ>	春	深江 敬志	金 3		34
統計学b<01～12年度入学者のみ>	秋	深江 敬志	金 3		34

◇関連科目◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
数学a<01～12年度入学者のみ>	春	高木　悟	金　1	外　養　法	45
数学b<01～12年度入学者のみ>	秋	高木　悟	金　1	外　養　法	45
数学a<01～12年度入学者のみ>	春	高木　悟	金　2	外　養　法	45
数学b<01～12年度入学者のみ>	秋	高木　悟	金　2	外　養　法	45
高齢化社会論a<01～12年度入学者のみ>	春	奥山　正司	月　1	法	46
高齢化社会論b<01～12年度入学者のみ>	秋	奥山　正司	月　1	法	46
精神衛生論a<01～12年度入学者のみ>	春	中野　隆史	火　4		47
精神衛生論b<01～12年度入学者のみ>	秋	中野　隆史	火　4		47
医療・福祉概論a<01～12年度入学者のみ>	春	山岡　淳	水　2	法	48
医療・福祉概論b<01～12年度入学者のみ>	秋	山岡　淳	水　2	法	48
現代文化論a<01～12年度入学者のみ>	春	柴崎　信三	木　2	外　養　法	49
現代文化論b<01～12年度入学者のみ>	秋	柴崎　信三	木　2	外　養　法	49

＜＜学科専門科目＞＞

◇経営外国語◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
経営外国語Ⅰa(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	奥山　正司	月　2	済　外　養　法	50
経営外国語Ⅰb(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	奥山　正司	月　2	済　外　養　法	50
経営外国語Ⅰa(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	清水　公一	月　4	済　外　養　法	51
経営外国語Ⅰb(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	清水　公一	月　4	済　外　養　法	51
経営外国語Ⅰa(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	鈴木　淳	水　1	済　外　養　法	52
経営外国語Ⅰb(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	鈴木　淳	水　1	済　外　養　法	52
経営外国語Ⅰa(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	徳永　潤二	木　2	済　外　養　法	53
経営外国語Ⅰb(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	徳永　潤二	木　2	済　外　養　法	53
経営外国語Ⅰa(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	益山　光央	木　1	済　外　養　法	54
経営外国語Ⅰb(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	益山　光央	木　1	済　外　養　法	54
経営外国語Ⅰa(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	山越　徳	火　2	済　外　養　法	55
経営外国語Ⅰb(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	山越　徳	火　2	済　外　養　法	55
経営外国語Ⅰb(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	黒川　文子	水　1	済　外　養　法	56
経営外国語Ⅰa(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	市原　博	水　1	済　外　養　法	57
経営外国語Ⅰa(再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	岡村　国和	月　4	済　外　養　法	58
経営外国語Ⅰa(留学生再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	春	童　適平	火　2	済　外　養　法	59
経営外国語Ⅰb(留学生再履修者用)<01～12年度入学者のみ>	秋	童　適平	火　2	済　外　養　法	59
外書講読a<08～12年度入学者のみ>	春	岡村　国和	月　3	外　養　法	60
外書講読b<08～12年度入学者のみ>	秋	岡村　国和	月　3	外　養　法	60
経営外国語Ⅱa<01～07年度入学者のみ>	春	岡村　国和	月　3	済　外　養　法	60
経営外国語Ⅱb<01～07年度入学者のみ>	秋	岡村　国和	月　3	済　外　養　法	60
外書講読a<08～12年度入学者のみ>	春	御園生　眞	火　5	外　養　法	61
外書講読b<08～12年度入学者のみ>	秋	御園生　眞	火　5	外　養　法	61
経営外国語Ⅱa<01～07年度入学者のみ>	春	御園生　眞	火　5	済　外　養　法	61
経営外国語Ⅱb<01～07年度入学者のみ>	秋	御園生　眞	火　5	済　外　養　法	61
外書講読a(中国語)<08～12年度入学者のみ>	秋	全　載旭	水　1	外　養　法	62
外書講読b(中国語)<08～12年度入学者のみ>	秋	全　載旭	水　2	外　養　法	62
経営外国語Ⅱa(中国語)<01～07年度入学者のみ>	秋	全　載旭	水　1	済　外　養　法	62
経営外国語Ⅱb(中国語)<01～07年度入学者のみ>	秋	全　載旭	水　2	済　外　養　法	62

◇経営◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
経営学原理a	春	岡部　康弘	金　2	済	113
経営学原理b	秋	岡部　康弘	金　2	済	113
経営学原理a	春	黒川　文子	火　5	済	114
経営学原理b	秋	黒川　文子	火　5	済	114
経営戦略論a	春	陰山　孔貴	月　2		115
経営戦略論b	秋	陰山　孔貴	月　2		115
経営管理論a	春	黒川　文子	木　3		116
経営管理論b	秋	黒川　文子	木　3		116
経営組織論a	春	高松　和幸	金　3		117

経営組織論b	秋	高松　和幸	金	3		117
経営財務論a	春	細田　哲	木	1		118
経営財務論b	秋	細田　哲	木	1		118
人的資源管理論a	春	岡部　康弘	火	3		119
人的資源管理論b	秋	岡部　康弘	火	3		119
国際経営論a	春	小林　哲也	火	1	法	120
国際経営論b	秋	小林　哲也	火	1	法	120

◇経営史◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
経営史a<01～12年度入学者のみ>	春	柳　敦	火	4		121
経営史b<01～12年度入学者のみ>	秋	柳　敦	火	4		121
日本経営史a	春	平井　岳哉	木	5		122
日本経営史b	秋	平井　岳哉	木	5		122

◇商業◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
マーケティング論a	春	有吉　秀樹	金	3		123
マーケティング論b	秋	有吉　秀樹	金	3		123
広告論a	春	清水　公一	月	3		124
広告論b	秋	清水　公一	月	3		124
行動科学論a	春	有吉　秀樹	木	4		125
行動科学論b	秋	有吉　秀樹	木	4		125
保険論a	春	岡村　国和	木	3		126
保険論b	秋	岡村　国和	木	3		126
貿易論a<01～12年度入学者のみ>	春	米山　昌幸	火	1		127
貿易論b<01～12年度入学者のみ>	秋	米山　昌幸	火	1		127
証券市場論a	春	髙橋　元	木	2		128
証券市場論b	秋	髙橋　元	木	2		128

◇企業◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
企業論a	春	平井　岳哉	月	1	済	129
企業論b	秋	平井　岳哉	月	1	済	129
企業経済論a<05～12年度以降入学者のみ>	春	和久津　尚彦	金	2	済　外　養　法	130
企業経済論b<05～12年度以降入学者のみ>	秋	和久津　尚彦	金	2	済　外　養　法	130
企業形態論a<01～04年度入学者のみ>	春	和久津　尚彦	金	2	済　外　養　法	130
企業形態論b<01～04年度入学者のみ>	秋	和久津　尚彦	金	2	済　外　養　法	130
ベンチャ-ビジネス論a<01～12年度入学者のみ>	春	上坂　卓郎	火	1		131
ベンチャ-ビジネス論b<01～12年度入学者のみ>	秋	上坂　卓郎	火	1		131
非営利組織マネジメント論a<01～12年度入学者のみ>	春	高松　和幸	金	2		132
非営利組織マネジメント論b<01～12年度入学者のみ>	秋	高松　和幸	金	2		132
企業文化論a	春	齊藤　善久	水	4		133
企業文化論b	秋	齊藤　善久	水	4		133
研究・開発マネジメントa	春	鈴木　淳	金	2		134
研究・開発マネジメントb	秋	鈴木　淳	金	2		134

◇会計◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
会計学原理a	春	本年度休講				
会計学原理b	秋	本年度休講				
財務会計論a	春	内倉　滋	月	1		135
財務会計論b	秋	内倉　滋	月	1		135
管理会計論a	春	香取　徹	火	4		136
管理会計論b	秋	香取　徹	火	4		136
社会会計論a	春	湯田　雅夫	火	2		137
社会会計論b	秋	湯田　雅夫	火	2		137
原価計算論a	春	齋藤　正章	月	4		138
原価計算論b	秋	齋藤　正章	月	4		138

会計監査論a	春	福薗　健	木	1		139
会計監査論b	秋	福薗　健	木	1		139
税務会計論a	春	平　仁	土	1		140
税務会計論b	秋	平　仁	土	1		140
経営分析論a	春	百瀬　房徳	水	3		141
経営分析論b	秋	百瀬　房徳	水	3		141
上級簿記(工業)a	春	香取　徹	火	3		142
上級簿記(工業)b	秋	香取　徹	火	3		142
上級簿記(商業)a	春	細田　哲	金	2		143
上級簿記(商業)b	秋	細田　哲	金	2		143
国際会計論a	春	橋本　尚	火	4		144
国際会計論b	秋	橋本　尚	火	4		144

◇情報科学◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
経営数学a<01～12年度入学者のみ>	春	大床　太郎	金	1		145
経営数学b<01～12年度入学者のみ>	秋	大床　太郎	金	1		145
応用統計学a<01～12年度入学者のみ>	春	樋田　勉	火	1	済	146
応用統計学b<01～12年度入学者のみ>	秋	樋田　勉	火	1	済	146
標本調査論a<01～12年度入学者のみ>	春	大床　太郎	金	2	済	147
標本調査論b<01～12年度入学者のみ>	秋	大床　太郎	金	2	済	147
ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ論a※	春	長　慎也	月	4	済	148
ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ論b※	秋	長　慎也	月	4	済	148
ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ論a※	春	堀江　郁美	水	2	済	149
ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ論b※	秋	堀江　郁美	水	2	済	149
ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｼﾐｭﾚｰｼｮﾝ論a<01～12年度入学者のみ>※	春	市川　新	月	4	済	150
ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｼﾐｭﾚｰｼｮﾝ論b<01～12年度入学者のみ>※	秋	市川　新	月	4	済	150
マルチメディア論a※	春	大和田　勇人	金	2	済	151
マルチメディア論b※	秋	大和田　勇人	金	2	済	151
マルチメディア論a※	春	柏原　賢二	火	3	済	152
マルチメディア論b※	秋	柏原　賢二	火	3	済	152
マルチメディア論a※	春	立田　ルミ	水	2	済	153
マルチメディア論b※	秋	立田　ルミ	水	2	済	153
情報検索論a	春	福田　求	火	3		154
情報検索論b	秋	福田　求	火	3		154
情報検索論a	春	福田　求	水	1		154
情報検索論b	秋	福田　求	水	1		154
情報システム論a	春	今福　啓	木	1		155
情報システム論b	秋	今福　啓	木	1		155
プログラミング論a※	春	柏原　賢二	火	2	済	156
プログラミング論b※	秋	柏原　賢二	火	2	済	156
プログラミング論a※	春	加藤　尚吾	月	3	済	157
プログラミング論b※	秋	加藤　尚吾	月	3	済	157
プログラミング論a※	春	立田　ルミ	水	1	済	158
プログラミング論b※	秋	立田　ルミ	水	1	済	158
プログラミング論a※	春	堀江　郁美	木	2	済	159
プログラミング論b※	秋	堀江　郁美	木	2	済	159
情報社会論a	春	柴崎　信三	水	3		160
情報社会論b	秋	柴崎　信三	水	3		160
情報通信ネットワークb	春	三宅　真	木	4		161
情報通信ネットワークa	秋	今福　啓	木	2		161
コンピュータネットワーク<01～12年度入学者のみ>	春	未定	木	1		162
コンピュータアーキテクチャ<01～12年度入学者のみ>	春	今福　啓	木	2		163
情報と職業a<01～12年度入学者のみ>	秋	小林　哲也	水	2		164
情報と職業b<01～12年度入学者のみ>		本年度休講				
アルゴリズム論a	春	木村　昌史	月	2		165
アルゴリズム論b	秋	木村　昌史	月	2		165

※a,bセット履修

◇経営システム工学◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
オペレーションズ・リサーチa	春	伊呂原　隆	月　1		166
オペレーションズ・リサーチb	秋	伊呂原　隆	月　1		166
システムズエンジニアリングa<01～12年度入学者のみ>	春	広瀬　啓雄	月　1		167
システムズエンジニアリングb<01～12年度入学者のみ>	秋	広瀬　啓雄	月　1		167
経営システム工学a<01～12年度入学者のみ>	春	鈴木　淳	火　4		168
経営システム工学b<01～12年度入学者のみ>	秋	鈴木　淳	火　4		168

<<関連専門科目>>

◇経済理論・経済政策◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
マクロ経済学a	春	塩田　尚樹	木　1	済	63
マクロ経済学b	秋	塩田　尚樹	木　1	済	63
マクロ経済学a	春	須藤　時仁	火　2	済	64
マクロ経済学b	秋	須藤　時仁	火　2	済	64
マクロ経済学a	春	山下　裕歩	月　1	済	65
マクロ経済学b	秋	山下　裕歩	月　1	済	65
ミクロ経済学a	春	小林　進	金　2	済	66
ミクロ経済学b	秋	小林　進	金　2	済	66
ミクロ経済学a	春	高畑　純一郎	木　2	済	67
ミクロ経済学b	秋	高畑　純一郎	木　2	済	67
ミクロ経済学a	春	藤山　英樹	月　3	済	68
ミクロ経済学b	秋	藤山　英樹	月　3	済	68
経済政策論a	春	童　適平	火　4	済　法	75
経済政策論b	秋	童　適平	火　4	済　法	75

◇日本経済・国際経済◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
日本経済論a	春	須藤　時仁	木　5	済　養　法	83
日本経済論b	秋	須藤　時仁	木　5	済　養　法	83
日本経済史a	春	市原　博	月　4	済	78
日本経済史b	秋	市原　博	月　4	済	78
国際経済論a<01～12年度入学者のみ>	春	益山　光央	火　2	済　養　法	81
国際経済論b<01～12年度入学者のみ>	秋	益山　光央	火　2	済　養　法	81

◇金融・財政◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
金融経済論a<01～12年度入学者のみ>	春	斉藤　美彦	木　1	済	92
金融経済論b<01～12年度入学者のみ>	秋	斉藤　美彦	木　1	済	92
財政学a	春	野村　容康	木　3	済　法	94
財政学b	秋	野村　容康	木　3	済　法	94

◇政治・法律◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
法学a	春	大川　俊	水　2	外　養　法	169
法学b	秋	木藤　茂	水　2	外　養　法	169
政治学総論a	春	杉田　孝夫	木　1	外　養　法	170
政治学総論b	秋	杉田　孝夫	木　1	外　養　法	170
民法a	春	納屋　雅城	金　1	法	171
民法b	秋	納屋　雅城	金　1	法	171
商法a<01～12年度入学者のみ>	春	高木　正則	金　3	法	172
商法b<01～12年度入学者のみ>	秋	高木　正則	金　3	法	172
著作権法a	春	長塚　真琴	火　2	法	173
著作権法b	秋	長塚　真琴	火　2	法	173

◇総合講座・特殊講義◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
総合講座a	春	経済学部	水 3		174
総合講座b	秋	経済学部	水 3		174
特殊講義a(金融資産運用論)	春	山崎 元	木 3		175
特殊講義b(金融資産運用論)	春	山崎 元	木 5		176
特殊講義a(金融資産運用論)	秋	山崎 元	木 3		175
特殊講義b(金融資産運用論)	秋	山崎 元	木 5		176
特殊講義a(宇宙・深海への旅と生物多様性)	春	山根 一眞	月 3		177
特殊講義b(宇宙・深海への旅と生物多様性)	秋	山根 一眞	月 3		177
特殊講義a(専門英語)	春	小林 進	金 1		178
特殊講義b(専門英語)	秋	小林 進	金 1		178
特殊講義b(資本市場の役割と証券投資)	秋	経済学部	水 4		179

◇外国人学生・帰国学生(特別入試入学者)について◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
外国人学生・帰国学生(特別入試入学者)の授業科目履修について					27

2013年度以降入学者用
経 済 学 科

＜＜学部共通科目＞＞

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
クラスセミナー<13年度以降入学者のみ>	春	各担当教員	水 1	営 環 外 養 法	31
クラスセミナー（再履修者用）	秋	浜本 光紹	水 1	外 養 法	31
経済学(ミクロ)<13年度以降入学者のみ>	春	倉橋 透	水 2	営 環 外 養 法	181
経済学(マクロ)<13年度以降入学者のみ>	秋	倉橋 透	水 2	営 環 外 養 法	181
経済学(ミクロ)<13年度以降入学者のみ>	春	小林 進	水 2	営 環 外 養 法	182
経済学(マクロ)<13年度以降入学者のみ>	秋	小林 進	水 2	営 環 外 養 法	182
経済学(ミクロ)<13年度以降入学者のみ>	春	益山 光央	水 2	営 環 外 養 法	185
経済学(マクロ)<13年度以降入学者のみ>	秋	益山 光央	水 2	営 環 外 養 法	185
経済学(ミクロ)（再履修者用）<13年度以降入学者のみ>	春	倉橋 透	金 2	外 養 法	187
経済学(マクロ)（再履修者用）<13年度以降入学者のみ>	秋	倉橋 透	金 2	外 養 法	187
経営学a	春	平井 岳哉	火 2	営 環 外 養 法	111
経営学b	秋	陰山 孔貴	火 2	営 環 外 養 法	107
経営学a	春	小林 哲也	火 2	営 環 外 養 法	108
経営学b	秋	平井 岳哉	火 2	営 環 外 養 法	111
経営学a	春	鈴木 淳	火 2	営 環 外 養 法	109
経営学b	秋	小林 哲也	火 2	営 環 外 養 法	108
経済経営数学入門<13年度以降入学者のみ>	春	陰山 孔貴	火 1	営 環 外 養 法	188
統計学入門<13年度以降入学者のみ>	秋	陰山 孔貴	火 1	営 環 外 養 法	188
経済経営数学入門<13年度以降入学者のみ>	春	須藤 時仁	火 1	営 環 外 養 法	189
統計学入門<13年度以降入学者のみ>	秋	須藤 時仁	火 1	営 環 外 養 法	189
経済経営数学入門<13年度以降入学者のみ>	春	徳永 潤二	火 1	営 環 外 養 法	192
統計学入門<13年度以降入学者のみ>	秋	徳永 潤二	火 1	営 環 外 養 法	192
経済経営数学入門（再履修者用）<13年度以降入学者のみ>	春	塩田 尚樹	水 1	外 養 法	195
統計学入門（再履修者用）<13年度以降入学者のみ>	秋	塩田 尚樹	水 1	外 養 法	195
経済経営数学入門（再履修者用）<13年度以降入学者のみ>	春	山下 裕歩	火 2	外 養 法	196
統計学入門（再履修者用）<13年度以降入学者のみ>	秋	山下 裕歩	火 2	外 養 法	196

＜＜学科基礎科目＞＞

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
ミクロ経済学a	春	小林 進	金 2	営	66
ミクロ経済学b	秋	小林 進	金 2	営	66
ミクロ経済学a	春	高畑 純一郎	木 2	営	67
ミクロ経済学b	秋	高畑 純一郎	木 2	営	67
ミクロ経済学a	春	藤山 英樹	月 3	営	68
ミクロ経済学b	秋	藤山 英樹	月 3	営	68
マクロ経済学a	春	塩田 尚樹	木 1	営	63
マクロ経済学b	秋	塩田 尚樹	木 1	営	63
マクロ経済学a	春	須藤 時仁	火 2	営	64
マクロ経済学b	秋	須藤 時仁	火 2	営	64
マクロ経済学a	春	山下 裕歩	月 1	営	65
マクロ経済学b	秋	山下 裕歩	月 1	営	65
統計学a<13年度以降入学者のみ>	春	大床 太郎	月 4		197
統計学b<13年度以降入学者のみ>	秋	大床 太郎	月 4		197

統計学a<13年度以降入学者のみ>	春	樋田　勉	水	2				198
統計学b<13年度以降入学者のみ>	秋	樋田　勉	水	2				198
経営学原理a	春	岡部　康弘	金	2	営			113
経営学原理b	秋	岡部　康弘	金	2	営			113
経営学原理a	春	黒川　文子	火	5	営			114
経営学原理b	秋	黒川　文子	火	5	営			114
会計学a	春	内倉　滋	木	3	営		法	104
会計学b	秋	内倉　滋	木	3	営		法	104
簿記原理a	春	香取　徹	木	2				38
簿記原理b	秋	香取　徹	木	2				38
簿記原理a	春	細田　哲	木	2				39
簿記原理b	秋	細田　哲	木	2				39
簿記原理a	春	百瀬　房徳	火	1				40
簿記原理b	秋	百瀬　房徳	火	1				40
簿記原理a	春	山﨑　尚	火	1				41
簿記原理b	秋	山﨑　尚	火	1				41
簿記原理a	春	山﨑　尚	木	2				41
簿記原理b	秋	山﨑　尚	木	2				41
簿記原理a	春	湯田　雅夫	火	1				42
簿記原理b	秋	湯田　雅夫	火	1				42
簿記原理a(再履修者用)	春	橋本　尚	火	5				43
簿記原理b(再履修者用)	秋	橋本　尚	火	5				43
簿記原理b(再履修者用)	春	齋藤　正章	月	5				44
簿記原理a(再履修者用)	秋	齋藤　正章	月	5				44
コンピュータ入門a	春	各担当教員				外	養 法	36
コンピュータ入門b	秋	各担当教員				外	養 法	36
情報社会論a	春	柴崎　信三	水	3				160
情報社会論b	秋	柴崎　信三	水	3				160
環境学<13年度以降入学者のみ>	春	中村　健治	水	2				199
サステイナビリティ学<13年度以降入学者のみ>	秋	木原　隆司	水	2				199

<<学科専門科目>>

◇理論・学史◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
経済経営数学a<13年度以降入学者のみ>	春	大床　太郎	金	1		145
経済経営数学b<13年度以降入学者のみ>	秋	大床　太郎	金	1		145

◇経済史◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
日本社会史a	春	新井　孝重	火	5	環	79
日本社会史b	秋	新井　孝重	火	5	環	79
日本経済史a	春	市原　博	月	4		78
日本経済史b	秋	市原　博	月	4		78
外国経済史a<13年度以降入学者のみ>	春	御園生　眞	火	1	環 法	80
外国経済史b<13年度以降入学者のみ>	秋	御園生　眞	火	1	環 法	80
社会経済史a<13年度以降入学者のみ>	春	新井　孝重	木	4	外 養 法	200
社会経済史b<13年度以降入学者のみ>	秋	新井　孝重	木	4	外 養 法	200

◇統計・計量◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
経済統計論a	春	深江　敬志	金　4	環	73
経済統計論b	秋	深江　敬志	金　4	環	73
社会調査論a<13年度以降入学者のみ>	春	大床　太郎	金　2		147
社会調査論b<13年度以降入学者のみ>	秋	大床　太郎	金　2		147

◇経済政策・応用経済◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
日本経済論a	春	須藤　時仁	木　5	環　養　法	83
日本経済論b	秋	須藤　時仁	木　5	環　養　法	83
経済政策論a	春	童　適平	火　4	環　法	75
経済政策論b	秋	童　適平	火　4	環　法	75
公共経済学a	春	高畑　純一郎	火　3	環	95
公共経済学b	秋	高畑　純一郎	火　3	環	95
金融論a<13年度以降入学者のみ>	春	斉藤　美彦	木　1		92
金融論b<13年度以降入学者のみ>	秋	斉藤　美彦	木　1		92
金融システム論a	春	斉藤　美彦	水　2		93
金融システム論b	秋	斉藤　美彦	水　2		93
財政学a	春	野村　容康	木　3	法	94
財政学b	秋	野村　容康	木　3	法	94
地方財政論a	春	嶋田　崇治	金　3	法	96
地方財政論b	秋	嶋田　崇治	金　3	法	96
環境経済学a	春	浜本　光紹	火　2	環	97
環境経済学b	秋	浜本　光紹	火　2	環	97
環境政策論a	春	塩田　尚樹	火　1	環　法	77
環境政策論b	秋	塩田　尚樹	火　1	環　法	77
地球環境論a<13年度以降入学者のみ>	春	中村　健治	火　1	環	201
地球環境論b<13年度以降入学者のみ>	秋	中村　健治	火　1	環	201
資源・エネルギー経済論a<13年度以降入学者のみ>	春	鈴木　滋	火　3	環	202
資源・エネルギー経済論b<13年度以降入学者のみ>	秋	鈴木　滋	火　3	環	202
都市経済学a	春	倉橋　透	金　1	環　法	98
都市経済学b	秋	倉橋　透	金　1	環　法	98
経済地理学a	春	犬井　正	月　2		99
経済地理学b	秋	犬井　正	月　2		99
経済地誌a<13年度以降入学者のみ>	春	飯嶋　曜子	木　3	営　外　養　法	203
経済地誌b<13年度以降入学者のみ>	秋	飯嶋　曜子	木　3	営　外　養　法	203
労働経済学a	春	森永　卓郎	木　1		103
労働経済学b	秋	森永　卓郎	木　1		103
経済社会学a	春	森永　卓郎	火　1		71
経済社会学b	秋	森永　卓郎	火　1		71
産業政策論a	春	本年度休講			
産業政策論b	秋	本年度休講			

◇国際経済◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
国際経済学a<13年度以降入学者のみ>	春	益山　光央	火　2	養　法	81
国際経済学b<13年度以降入学者のみ>	秋	益山　光央	火　2	養　法	81
国際貿易論a<13年度以降入学者のみ>	春	米山　昌幸	火　1		127
国際貿易論b<13年度以降入学者のみ>	秋	米山　昌幸	火　1		127

国際金融論a	春	徳永 潤二	水	2	環	法	82
国際金融論b	秋	徳永 潤二	水	2	環	法	82
開発経済学a<13年度以降入学者のみ>	春	高安 健一	火	2	環		76
開発経済学b<13年度以降入学者のみ>	秋	高安 健一	火	2	環		76
アメリカ経済論a	春	本田 浩邦	月	4	環		84
アメリカ経済論b	秋	本田 浩邦	月	4	環		84
ヨーロッパ経済論a<13年度以降入学者のみ>	春	漆畑 春彦	金	4	環		86
ヨーロッパ経済論b<13年度以降入学者のみ>	秋	漆畑 春彦	金	4	環		86
ラテンアメリカ経済論a	春	浦部 浩之	火	5	環		85
ラテンアメリカ経済論b	秋	浦部 浩之	月	4	環		85
東アジア・中国経済論a	春	駒形 哲哉	金	2	環		87
東アジア・中国経済論b	秋	全 載旭	金	2	環		87
東南アジア経済論a	春	高安 健一	金	1	環	養	90
東南アジア経済論b	秋	高安 健一	金	1	環	養	90
南アジア経済論a<13年度以降入学者のみ>	春	本年度休講			環		
南アジア経済論b<13年度以降入学者のみ>	秋	本年度休講			環		
オセアニア経済論a	春	永野 隆行	火	2	環		88
オセアニア経済論b	秋	永野 隆行	火	2	環		88
アフリカ経済論a	春	佐野 康子	木	2	環		89
アフリカ経済論b	秋	佐野 康子	木	2	環		89
中東経済論a	春	平井 文子	金	2	環		91
中東経済論b	秋	平井 文子	金	2	環		91

◇人口・保健・医療◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可		ページ
精神保健福祉論a<13年度以降入学者のみ>	春	中野 隆史	火	4		法	47
精神保健福祉論b<13年度以降入学者のみ>	秋	中野 隆史	火	4		法	47
現代人口論a<13年度以降入学者のみ>	春	奥山 正司	月	1		法	46
現代人口論b<13年度以降入学者のみ>	秋	奥山 正司	月	1		法	46
社会保障論a	春	山岡 淳	水	1			102
社会保障論b	秋	山岡 淳	水	1			102
医療経済学a<13年度以降入学者のみ>	春	山岡 淳	水	2		法	48
医療経済学b<13年度以降入学者のみ>	秋	山岡 淳	水	2		法	48

◇政治・法律◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時			履修不可			ページ
法学a	春	大川 俊	水	2	営	外	養	法	169
法学b	秋	木藤 茂	水	2	営	外	養	法	169
政治学総論a	春	杉田 孝夫	木	1	営	外	養	法	170
政治学総論b	秋	杉田 孝夫	木	1	営	外	養	法	170

◇総合講座・特殊講義◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
総合講座a	春	経済学部	水	3		174
総合講座b	秋	経済学部	水	3		174
特殊講義a(金融資産運用論)	春	山崎 元	木	3		175
特殊講義b(金融資産運用論)	春	山崎 元	木	5		176
特殊講義a(金融資産運用論)	秋	山崎 元	木	3		175
特殊講義b(金融資産運用論)	秋	山崎 元	木	5		176

特殊講義a(宇宙・深海への旅と生物多様性)	春	山根　一眞	月　3	177
特殊講義b(宇宙・深海への旅と生物多様性)	秋	山根　一眞	月　3	177
特殊講義a(専門英語)	春	小林　進	金　1	178
特殊講義b(専門英語)	秋	小林　進	金　1	178
特殊講義b(資本市場の役割と証券投資)	秋	経済学部	水　4	179

◇関連専門科目◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
日本史概説Ⅰ		免許課程シラバスを参照のこと			
日本史概説Ⅱ		免許課程シラバスを参照のこと			
外国史概説Ⅰ		免許課程シラバスを参照のこと			
外国史概説Ⅱ		免許課程シラバスを参照のこと			
地理学概説Ⅰ		免許課程シラバスを参照のこと			
地理学概説Ⅱ		免許課程シラバスを参照のこと			
地誌学概説Ⅰ		免許課程シラバスを参照のこと			
地誌学概説Ⅱ		免許課程シラバスを参照のこと			
社会学概説Ⅰ		免許課程シラバスを参照のこと			
社会学概説Ⅱ		免許課程シラバスを参照のこと			

◇外国人学生・帰国学生(特別入試入学者)について◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
外国人学生・帰国学生(特別入試入学者)の授業科目履修について					27

2013年度以降入学者用
経 営 学 科

＜＜学部共通科目＞＞

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
クラスセミナー<13年度以降入学者のみ>	春	各担当教員	水 2	済 環 外 養 法	31
クラスセミナー(再履修者用)	秋	浜本 光紹	水 1	外 養 法	31
経済学(ミクロ)<13年度以降入学者のみ>	春	徳永 潤二	木 1	済 環 外 養 法	183
経済学(マクロ)<13年度以降入学者のみ>	秋	徳永 潤二	木 1	済 環 外 養 法	183
経済学(ミクロ)<13年度以降入学者のみ>	春	童 適平	木 1	済 環 外 養 法	184
経済学(マクロ)<13年度以降入学者のみ>	秋	童 適平	木 1	済 環 外 養 法	184
経済学(ミクロ)<13年度以降入学者のみ>	春	米山 昌幸	木 1	済 環 外 養 法	186
経済学(マクロ)<13年度以降入学者のみ>	秋	米山 昌幸	木 1	済 環 外 養 法	186
経済学(ミクロ)(再履修者用)<13年度以降入学者のみ>	春	倉橋 透	金 2	外 養 法	187
経済学(マクロ)(再履修者用)<13年度以降入学者のみ>	秋	倉橋 透	金 2	外 養 法	187
経営学a	春	高松 和幸	水 1	済 環 外 養 法	110
経営学b	秋	岡部 康弘	水 1	済 環 外 養 法	106
経営学a	春	有吉 秀樹	水 1	済 環 外 養 法	105
経営学b	秋	上坂 卓郎	水 1	済 環 外 養 法	110
経営学a	春	岡部 康弘	水 1	済 環 外 養 法	106
経営学b	秋	有吉 秀樹	水 1	済 環 外 養 法	105
経済経営数学入門<13年度以降入学者のみ>	春	樋田 勉	火 2	済 環 外 養 法	191
統計学入門<13年度以降入学者のみ>	秋	樋田 勉	火 2	済 環 外 養 法	191
経済経営数学入門<13年度以降入学者のみ>	春	中村 健治	火 2	済 環 外 養 法	193
統計学入門<13年度以降入学者のみ>	秋	中村 健治	火 2	済 環 外 養 法	193
経済経営数学入門<13年度以降入学者のみ>	春	米山 昌幸	火 2	済 環 外 養 法	194
統計学入門<13年度以降入学者のみ>	秋	米山 昌幸	火 2	済 環 外 養 法	194
経済経営数学入門(再履修者用)<13年度以降入学者のみ>	春	塩田 尚樹	水 1	外 養 法	195
統計学入門(再履修者用)<13年度以降入学者のみ>	秋	塩田 尚樹	水 1	外 養 法	195
経済経営数学入門(再履修者用)<13年度以降入学者のみ>	春	山下 裕歩	火 2	外 養 法	196
統計学入門(再履修者用)<13年度以降入学者のみ>	秋	山下 裕歩	火 2	外 養 法	196

＜＜学科基礎科目＞＞

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
簿記原理a	春	香取 徹	木 2		38
簿記原理b	秋	香取 徹	木 2		38
簿記原理a	春	細田 哲	木 2		39
簿記原理b	秋	細田 哲	木 2		39
簿記原理a	春	百瀬 房徳	火 1		40
簿記原理b	秋	百瀬 房徳	火 1		40
簿記原理a	春	山﨑 尚	火 1		41
簿記原理b	秋	山﨑 尚	火 1		41
簿記原理a	春	山﨑 尚	木 2		41
簿記原理b	秋	山﨑 尚	木 2		41
簿記原理a	春	湯田 雅夫	火 1		42
簿記原理b	秋	湯田 雅夫	火 1		42
簿記原理a(再履修者用)	春	橋本 尚	火 5		43
簿記原理b(再履修者用)	秋	橋本 尚	火 5		43
簿記原理b(再履修者用)	春	齋藤 正章	月 5		44

簿記原理a(再履修者用)	秋	齋藤 正章	月	5			44
経営学原理a	春	岡部 康弘	金	2	済 環		113
経営学原理b	秋	岡部 康弘	金	2	済 環		113
経営学原理a	春	黒川 文子	火	5	済 環		114
経営学原理b	秋	黒川 文子	火	5	済 環		114
ミクロ経済学a	春	小林 進	金	2	済 環		66
ミクロ経済学b	秋	小林 進	金	2	済 環		66
ミクロ経済学a	春	高畑 純一郎	木	2	済 環		67
ミクロ経済学b	秋	高畑 純一郎	木	2	済 環		67
ミクロ経済学a	春	藤山 英樹	月	3	済 環		68
ミクロ経済学b	秋	藤山 英樹	月	3	済 環		68
マクロ経済学a	春	塩田 尚樹	木	1	済 環		63
マクロ経済学b	秋	塩田 尚樹	木	1	済 環		63
マクロ経済学a	春	須藤 時仁	火	2	済 環		64
マクロ経済学b	秋	須藤 時仁	火	2	済 環		64
マクロ経済学a	春	山下 裕歩	月	1	済 環		65
マクロ経済学b	秋	山下 裕歩	月	1	済 環		65
コンピュータ入門a	春	各担当教員				外 養 法	36
コンピュータ入門b	秋	各担当教員				外 養 法	36
情報社会論a	春	柴崎 信三	水	3			160
情報社会論b	秋	柴崎 信三	水	3			160
統計学a<13年度以降入学者のみ>	春	大床 太郎	月	4			197
統計学b<13年度以降入学者のみ>	秋	大床 太郎	月	4			197
統計学a<13年度以降入学者のみ>	春	樋田 勉	水	2			198
統計学b<13年度以降入学者のみ>	秋	樋田 勉	水	2			198
環境学<13年度以降入学者のみ>	春	中村 健治	水	2			199
サステイナビリティ学<13年度以降入学者のみ>	秋	木原 隆司	水	2			199

<<学科専門科目>>

◇経営◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
経営管理論a	春	黒川 文子	木	3		116
経営管理論b	秋	黒川 文子	木	3		116
経営戦略論a	春	陰山 孔貴	月	2		115
経営戦略論b	秋	陰山 孔貴	月	2		115
経営組織論a	春	高松 和幸	金	3		117
経営組織論b	秋	高松 和幸	金	3		117
経営財務論a	春	細田 哲	木	1		118
経営財務論b	秋	細田 哲	木	1		118
人的資源管理論a	春	岡部 康弘	火	3		119
人的資源管理論b	秋	岡部 康弘	火	3		119
国際経営論a	春	小林 哲也	火	1	環 法	120
国際経営論b	秋	小林 哲也	火	1	環 法	120
NPOマネジメント論a<13年度以降入学者のみ>	春	高松 和幸	金	2	環	132
NPOマネジメント論b<13年度以降入学者のみ>	秋	高松 和幸	金	2	環	132
リスク・マネジメント論a<13年度以降入学者のみ>	春	本年度休講				
リスク・マネジメント論b<13年度以降入学者のみ>	秋	本年度休講				
研究・開発マネジメントa	春	鈴木 淳	金	2		134
研究・開発マネジメントb	秋	鈴木 淳	金	2		134
日本経営史a	春	平井 岳哉	木	5		122

日本経営史b	秋	平井 岳哉	木	5	122
外国経営史a<13年度以降入学者のみ>	春	柳 敦	火	4	121
外国経営史b<13年度以降入学者のみ>	秋	柳 敦	火	4	121

◇ビジネス◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
企業論a	春	平井 岳哉	月	1		129
企業論b	秋	平井 岳哉	月	1		129
ベンチャー企業論a<13年度以降入学者のみ>	春	上坂 卓郎	火	1		131
ベンチャー企業論b<13年度以降入学者のみ>	秋	上坂 卓郎	火	1		131
企業文化論a	春	齊藤 善久	水	4		133
企業文化論b	秋	齊藤 善久	水	4		133
マーケティング論a	春	有吉 秀樹	金	3		123
マーケティング論b	秋	有吉 秀樹	金	3		123
広告論a	春	清水 公一	月	3		124
広告論b	秋	清水 公一	月	3		124
保険論a	春	岡村 国和	木	3		126
保険論b	秋	岡村 国和	木	3		126
証券市場論a	春	髙橋 元	木	2		128
証券市場論b	秋	髙橋 元	木	2		128
国際貿易論a<13年度以降入学者のみ>	春	米山 昌幸	火	1		127
国際貿易論b<13年度以降入学者のみ>	秋	米山 昌幸	火	1		127

◇会計◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
上級簿記(工業)a	春	香取 徹	火	3		142
上級簿記(工業)b	秋	香取 徹	火	3		142
上級簿記(商業)a	春	細田 哲	金	2		143
上級簿記(商業)b	秋	細田 哲	金	2		143
会計学原理a	春	本年度休講				
会計学原理b	秋	本年度休講				
国際会計論a	春	橋本 尚	火	4		144
国際会計論b	秋	橋本 尚	火	4		144
財務会計論a	春	内倉 滋	月	1		135
財務会計論b	秋	内倉 滋	月	1		135
原価計算論a	春	齋藤 正章	月	4		138
原価計算論b	秋	齋藤 正章	月	4		138
管理会計論a	春	香取 徹	火	4		136
管理会計論b	秋	香取 徹	火	4		136

◇情報・統計◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
経済経営数学a<13年度以降入学者のみ>	春	大床 太郎	金	1		145
経済経営数学b<13年度以降入学者のみ>	秋	大床 太郎	金	1		145
社会調査論a<13年度以降入学者のみ>	春	大床 太郎	金	2		147
社会調査論b<13年度以降入学者のみ>	秋	大床 太郎	金	2		147
コンピュータ・アーキテクチャ<13年度以降入学者のみ>	春	今福 啓	木	2		163
アルゴリズム論a	春	木村 昌史	月	2		165
アルゴリズム論b	秋	木村 昌史	月	2		165
プログラミング論a※	春	柏原 賢二	火	2		156

プログラミング論b※	秋	柏原　賢二	火	2		156
プログラミング論a※	春	加藤　尚吾	月	3		157
プログラミング論b※	秋	加藤　尚吾	月	3		157
プログラミング論a※	春	立田　ルミ	水	1		158
プログラミング論b※	秋	立田　ルミ	水	1		158
プログラミング論a※	春	堀江　郁美	木	2		159
プログラミング論b※	秋	堀江　郁美	木	2		159
情報システム論a	春	今福　啓	木	1		155
情報システム論b	秋	今福　啓	木	1		155
データベース論a※	春	長　慎也	月	4	環	148
データベース論b※	秋	長　慎也	月	4	環	148
データベース論a※	春	堀江　郁美	水	2	環	149
データベース論b※	秋	堀江　郁美	水	2	環	149
情報通信ネットワークb	春	三宅　真	木	4		161
情報通信ネットワークa	秋	今福　啓	木	2		161
マルチメディア論a※	春	大和田　勇人	金	2	環	151
マルチメディア論b※	秋	大和田　勇人	金	2	環	151
マルチメディア論a※	春	柏原　賢二	火	3	環	152
マルチメディア論b※	秋	柏原　賢二	火	3	環	152
マルチメディア論a※	春	立田　ルミ	水	2	環	153
マルチメディア論b※	秋	立田　ルミ	水	2	環	153
情報と職業<13年度以降入学者のみ>	秋	小林　哲也	水	2		164
情報メディア論<13年度以降入学者のみ>	秋	福田　求	火	4		204
情報メディア論<13年度以降入学者のみ>	秋	福田　求	水	2		204

※a,bセット履修

◇人口・保健・医療◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
精神保健福祉論a<13年度以降入学者のみ>	春	中野　隆史	火	4	法	47
精神保健福祉論b<13年度以降入学者のみ>	秋	中野　隆史	火	4	法	47
現代人口論a<13年度以降入学者のみ>	春	奥山　正司	月	1	法	46
現代人口論b<13年度以降入学者のみ>	秋	奥山　正司	月	1	法	46
社会保障論a	春	山岡　淳	水	1		102
社会保障論b	秋	山岡　淳	水	1		102
医療経済学a<13年度以降入学者のみ>	春	山岡　淳	水	2	法	48
医療経済学b<13年度以降入学者のみ>	秋	山岡　淳	水	2	法	48

◇経済・政治・法律◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時		履修不可	ページ
日本経済史a	春	市原　博	月	4		78
日本経済史b	秋	市原　博	月	4		78
経済地理学a	春	犬井　正	月	2		99
経済地理学b	秋	犬井　正	月	2		99
経済地誌a<13年度以降入学者のみ>	春	飯嶋　曜子	木	3	済 環 外 養 法	203
経済地誌b<13年度以降入学者のみ>	秋	飯嶋　曜子	木	3	済 環 外 養 法	203
国際経済学a<13年度以降入学者のみ>	春	益山　光央	火	2	養 法	81
国際経済学b<13年度以降入学者のみ>	秋	益山　光央	火	2	養 法	81
法学a	春	大川　俊	水	2	済 環 外 養 法	169
法学b	秋	木藤　茂	水	2	済 環 外 養 法	169
政治学総論a	春	杉田　孝夫	木	1	済 環 外 養 法	170

政治学総論b	秋	杉田 孝夫	木 1	済 環 外 養 法	170

◇総合講座・特殊講義◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
総合講座a	春	経済学部	水 3		174
総合講座b	秋	経済学部	水 3		174
特殊講義a(金融資産運用論)	春	山崎 元	木 3		175
特殊講義b(金融資産運用論)	春	山崎 元	木 5		176
特殊講義a(金融資産運用論)	秋	山崎 元	木 3		175
特殊講義b(金融資産運用論)	秋	山崎 元	木 5		176
特殊講義a(宇宙・深海への旅と生物多様性)	春	山根 一眞	月 3		177
特殊講義b(宇宙・深海への旅と生物多様性)	秋	山根 一眞	月 3		177
特殊講義a(専門英語)	春	小林 進	金 1		178
特殊講義b(専門英語)	秋	小林 進	金 1		178
特殊講義b(資本市場の役割と証券投資)	秋	経済学部	水 4		179

◇関連専門科目◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
日本史概説Ⅰ	免許課程シラバスを参照のこと				
日本史概説Ⅱ	免許課程シラバスを参照のこと				
外国史概説Ⅰ	免許課程シラバスを参照のこと				
外国史概説Ⅱ	免許課程シラバスを参照のこと				
地理学概説Ⅰ	免許課程シラバスを参照のこと				
地理学概説Ⅱ	免許課程シラバスを参照のこと				
地誌学概説Ⅰ	免許課程シラバスを参照のこと				
地誌学概説Ⅱ	免許課程シラバスを参照のこと				
社会学概説Ⅰ	免許課程シラバスを参照のこと				
社会学概説Ⅱ	免許課程シラバスを参照のこと				

◇留学生◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
外国人学生・帰国学生(特別入試入学者)の授業科目履修について					27

2013年度以降入学者用
国 際 環 境 経 済 学 科

＜＜学部共通科目＞＞

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
クラスセミナー<13年度以降入学者のみ>	春	各担当教員	水 1	済 営 外 養 法	31
クラスセミナー（再履修者用）	秋	浜本 光紹	水 1	外 養 法	31
経済学(ミクロ)<13年度以降入学者のみ>	春	木原 隆司	木 1	済 営 外 養 法	180
経済学(マクロ)<13年度以降入学者のみ>	秋	木原 隆司	木 1	済 営 外 養 法	180
経済学(ミクロ)（再履修者用）<13年度以降入学者のみ>	春	倉橋 透	金 2	外 養 法	187
経済学(マクロ)（再履修者用）<13年度以降入学者のみ>	秋	倉橋 透	金 2	外 養 法	187
経営学a	春	陰山 孔貴	火 2	済 営 外 養 法	107
経営学b	秋	鈴木 淳	火 2	済 営 外 養 法	109
経済経営数学入門<13年度以降入学者のみ>	春	高畑 純一郎	火 1	済 営 外 養 法	190
統計学入門<13年度以降入学者のみ>	秋	高畑 純一郎	火 1	済 営 外 養 法	190
経済経営数学入門（再履修者用）<13年度以降入学者のみ>	春	塩田 尚樹	水 1	外 養 法	195
統計学入門（再履修者用）<13年度以降入学者のみ>	秋	塩田 尚樹	水 1	外 養 法	195
経済経営数学入門（再履修者用）<13年度以降入学者のみ>	春	山下 裕歩	火 2	外 養 法	196
統計学入門（再履修者用）<13年度以降入学者のみ>	秋	山下 裕歩	火 2	外 養 法	196

＜＜学科基礎科目＞＞

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
環境学<13年度以降入学者のみ>	春	中村 健治	水 2		199
サステイナビリティ学<13年度以降入学者のみ>	秋	木原 隆司	水 2		199
ミクロ経済学a	春	小林 進	金 2	営	66
ミクロ経済学b	秋	小林 進	金 2	営	66
ミクロ経済学a	春	高畑 純一郎	木 2	営	67
ミクロ経済学b	秋	高畑 純一郎	木 2	営	67
ミクロ経済学a	春	藤山 英樹	月 3	営	68
ミクロ経済学b	秋	藤山 英樹	月 3	営	68
マクロ経済学a	春	塩田 尚樹	木 1	営	63
マクロ経済学b	秋	塩田 尚樹	木 1	営	63
マクロ経済学a	春	須藤 時仁	火 2	営	64
マクロ経済学b	秋	須藤 時仁	火 2	営	64
マクロ経済学a	春	山下 裕歩	月 1	営	65
マクロ経済学b	秋	山下 裕歩	月 1	営	65
統計学a<13年度以降入学者のみ>	春	大床 太郎	月 4		197
統計学b<13年度以降入学者のみ>	秋	大床 太郎	月 4		197
統計学a<13年度以降入学者のみ>	春	樋田 勉	水 2		198
統計学b<13年度以降入学者のみ>	秋	樋田 勉	水 2		198
経営学原理a	春	岡部 康弘	金 2	営	113
経営学原理b	秋	岡部 康弘	金 2	営	113
経営学原理a	春	黒川 文子	火 5	営	114
経営学原理b	秋	黒川 文子	火 5	営	114
会計学a	春	内倉 滋	木 3	営 法	104
会計学b	秋	内倉 滋	木 3	営 法	104
簿記原理a	春	香取 徹	木 2		38
簿記原理b	秋	香取 徹	木 2		38

簿記原理a	春	細田　哲	木　2			39
簿記原理b	秋	細田　哲	木　2			39
簿記原理a	春	百瀬　房徳	火　1			40
簿記原理b	秋	百瀬　房徳	火　1			40
簿記原理a	春	山﨑　尚	火　1			41
簿記原理b	秋	山﨑　尚	火　1			41
簿記原理a	春	山﨑　尚	木　2			41
簿記原理b	秋	山﨑　尚	木　2			41
簿記原理a	春	湯田　雅夫	火　1			42
簿記原理b	秋	湯田　雅夫	火　1			42
簿記原理a(再履修者用)	春	橋本　尚	火　5			43
簿記原理b(再履修者用)	秋	橋本　尚	火　5			43
簿記原理b(再履修者用)	春	齋藤　正章	月　5			44
簿記原理a(再履修者用)	秋	齋藤　正章	月　5			44
コンピュータ入門a	春	各担当教員			外　養　法	36
コンピュータ入門b	秋	各担当教員			外　養　法	36
情報社会論a	春	柴崎　信三	水　3			160
情報社会論b	秋	柴崎　信三	水　3			160

＜＜学科専門科目＞＞

◇専門外国語◇

科目名		担当教員名	曜時	履修不可	ページ
英語ビジネス・コミュニケーション<13年度以降入学者のみ>	春	海老沢　達郎	火　3	外　養　法	205
英語ビジネス・コミュニケーション<13年度以降入学者のみ>	秋	海老沢　達郎	火　3	外　養　法	205
英語ビジネス・コミュニケーション<13年度以降入学者のみ>	春	海老沢　達郎	水　3	外　養　法	206
英語ビジネス・コミュニケーション<13年度以降入学者のみ>	秋	海老沢　達郎	水　3	外　養　法	206
英語ビジネス・コミュニケーション<13年度以降入学者のみ>	春	杉山　晴信	木　3	外　養　法	207
英語ビジネス・コミュニケーション<13年度以降入学者のみ>	秋	杉山　晴信	木　3	外　養　法	207
英語ビジネス・コミュニケーション<13年度以降入学者のみ>	春	杉山　晴信	木　4	外　養　法	208
英語ビジネス・コミュニケーション<13年度以降入学者のみ>	秋	杉山　晴信	木　4	外　養　法	208
英語ビジネス・コミュニケーション<13年度以降入学者のみ>	春	信　達郎	月　1	外　養　法	209
英語ビジネス・コミュニケーション<13年度以降入学者のみ>	秋	信　達郎	月　1	外　養　法	209
英語ビジネス・コミュニケーション<13年度以降入学者のみ>	春	信　達郎	月　2	外　養　法	210
英語ビジネス・コミュニケーション<13年度以降入学者のみ>	秋	信　達郎	月　2	外　養　法	210

◇公共経済◇

科目名		担当教員名	曜時	履修不可	ページ
日本経済論a	春	須藤　時仁	木　5	済　営　養　法	83
日本経済論b	秋	須藤　時仁	木　5	済　営　養　法	83
経済政策論a	春	童　適平	火　4	済　法	75
経済政策論b	秋	童　適平	火　4	済　法	75
公共経済学a	春	高畑　純一郎	火　3	済	95
公共経済学b	秋	高畑　純一郎	火　3	済	95
都市経済学a	春	倉橋　透	金　1	済　法	98
都市経済学b	秋	倉橋　透	金　1	済　法	98

◇環境◇

科目名		担当教員名	曜時	履修不可	ページ
地球環境論a<13年度以降入学者のみ>	春	中村　健治	火　1	済	201
地球環境論b<13年度以降入学者のみ>	秋	中村　健治	火　1	済	201

経済地理学a	春	犬井 正	月	2				99
経済地理学b	秋	犬井 正	月	2				99
環境経済学a	春	浜本 光紹	火	2	済			97
環境経済学b	秋	浜本 光紹	火	2	済			97
環境政策論a	春	塩田 尚樹	火	1	済		法	77
環境政策論b	秋	塩田 尚樹	火	1	済		法	77
資源・エネルギー経済論a<13年度以降入学者のみ>	春	鈴木 滋	火	3	済			202
資源・エネルギー経済論b<13年度以降入学者のみ>	秋	鈴木 滋	火	3	済			202
環境ビジネス論a<13年度以降入学者のみ>	春	山根 一眞	月	2				211
環境ビジネス論b<13年度以降入学者のみ>	秋	山根 一眞	月	2				211

◇国際◇

科目名		担当教員名	曜	時			履修不可	ページ
国際公共政策論a<13年度以降入学者のみ>	春	木原 隆司	木	3				212
国際公共政策論b<13年度以降入学者のみ>	秋	木原 隆司	木	3				212
国際経済学a<13年度以降入学者のみ>	春	益山 光央	火	2			養 法	81
国際経済学b<13年度以降入学者のみ>	秋	益山 光央	火	2			養 法	81
国際貿易論a<13年度以降入学者のみ>	春	米山 昌幸	火	1				127
国際貿易論b<13年度以降入学者のみ>	秋	米山 昌幸	火	1				127
国際金融論a	春	徳永 潤二	水	2	済		法	82
国際金融論b	秋	徳永 潤二	水	2	済		法	82
開発経済学a<13年度以降入学者のみ>	春	高安 健一	火	2	済			76
開発経済学b<13年度以降入学者のみ>	秋	高安 健一	火	2	済			76
国際経営論a	春	小林 哲也	火	1		営	法	120
国際経営論b	秋	小林 哲也	火	1		営	法	120
国際開発論a<13年度以降入学者のみ>	春	木原 隆司	金	2				213
国際開発論b<13年度以降入学者のみ>	秋	木原 隆司	金	2				213
開発社会学<13年度以降入学者のみ>	春	北野 収	金	3			外 養 法	214
国際NPO論a<13年度以降入学者のみ>	春	長瀬 理英	金	5				215
国際NPO論b<13年度以降入学者のみ>	秋	長瀬 理英	金	5				215

◇外国経済◇

科目名		担当教員名	曜	時			履修不可	ページ
アメリカ経済論a	春	本田 浩邦	月	4	済	営		84
アメリカ経済論b	秋	本田 浩邦	月	4	済	営		84
ヨーロッパ経済論a<13年度以降入学者のみ>	春	漆畑 春彦	金	4	済	営		86
ヨーロッパ経済論b<13年度以降入学者のみ>	秋	漆畑 春彦	金	4	済	営		86
ラテンアメリカ経済論a	春	浦部 浩之	火	5	済	営		85
ラテンアメリカ経済論b	秋	浦部 浩之	月	4	済	営		85
東アジア・中国経済論a	春	駒形 哲哉	金	2	済	営		87
東アジア・中国経済論b	秋	全 載旭	金	2	済	営		87
東南アジア経済論a	春	高安 健一	金	1	済	営	養	90
東南アジア経済論b	秋	高安 健一	金	1	済	営	養	90
南アジア経済論a<13年度以降入学者のみ>	春	本年度休講			済	営		
南アジア経済論b<13年度以降入学者のみ>	秋	本年度休講			済	営		
オセアニア経済論a	春	永野 隆行	火	2	済	営		88
オセアニア経済論b	秋	永野 隆行	火	2	済	営		88
アフリカ経済論a	春	佐野 康子	木	2	済	営		89
アフリカ経済論b	秋	佐野 康子	木	2	済	営		89

中東経済論a	春	平井 文子	金	2	済 営	91
中東経済論b	秋	平井 文子	金	2	済 営	91

◇調査・統計分析◇

科目名		担当教員名	曜	時	履修不可	ページ
経済統計論a	春	深江 敬志	金	4	済 営	73
経済統計論b	秋	深江 敬志	金	4	済 営	73
経済経営数学a<13年度以降入学者のみ>	春	大床 太郎	金	1		145
経済経営数学b<13年度以降入学者のみ>	秋	大床 太郎	金	1		145
社会調査論a<13年度以降入学者のみ>	春	大床 太郎	金	2		147
社会調査論b<13年度以降入学者のみ>	秋	大床 太郎	金	2		147
データベース論a※	春	長 慎也	月	4	済 営	148
データベース論b※	秋	長 慎也	月	4	済 営	148
データベース論a※	春	堀江 郁美	水	2	済 営	149
データベース論b※	秋	堀江 郁美	水	2	済 営	149

※a,bセット履修

◇地域・実践◇

科目名		担当教員名	曜	時	履修不可	ページ
NPOマネジメント論a<13年度以降入学者のみ>	春	高松 和幸	金	2	営	132
NPOマネジメント論b<13年度以降入学者のみ>	秋	高松 和幸	金	2	営	132
地域メディア論<13年度以降入学者のみ>	秋	岡村 圭子	水	2	外 養 法	216

◇人口・保健・医療◇

科目名		担当教員名	曜	時	履修不可	ページ
精神保健福祉論a<13年度以降入学者のみ>	春	中野 隆史	火	4		47
精神保健福祉論b<13年度以降入学者のみ>	秋	中野 隆史	火	4		47
現代人口論a<13年度以降入学者のみ>	春	奥山 正司	月	1		46
現代人口論b<13年度以降入学者のみ>	秋	奥山 正司	月	1		46
社会保障論a	春	山岡 淳	水	1		102
社会保障論b	秋	山岡 淳	水	1		102
医療経済学a<13年度以降入学者のみ>	春	山岡 淳	水	2		48
医療経済学b<13年度以降入学者のみ>	秋	山岡 淳	水	2		48

◇経済史◇

科目名		担当教員名	曜	時	履修不可	ページ
日本社会史a	春	新井 孝重	火	5	済 営	79
日本社会史b	秋	新井 孝重	火	5	済 営	79
日本経済史a	春	市原 博	月	4		78
日本経済史b	秋	市原 博	月	4		78
外国経済史a<13年度以降入学者のみ>	春	御園生 眞	火	1	済 法	80
外国経済史b<13年度以降入学者のみ>	秋	御園生 眞	火	1	済 法	80

◇総合講座・特殊講義◇

科目名		担当教員名	曜	時	履修不可	ページ
総合講座a	春	経済学部	水	3		174
総合講座b	秋	経済学部	水	3		174
特殊講義a(金融資産運用論)	春	山崎 元	木	3		175
特殊講義b(金融資産運用論)	春	山崎 元	木	5		176

特殊講義a(金融資産運用論)	秋	山崎　元	木　3	175
特殊講義b(金融資産運用論)	秋	山崎　元	木　5	176
特殊講義a(宇宙・深海への旅と生物多様性)	春	山根　一眞	月　3	177
特殊講義b(宇宙・深海への旅と生物多様性)	秋	山根　一眞	月　3	177
特殊講義a(専門英語)	春	小林　進	金　1	178
特殊講義b(専門英語)	秋	小林　進	金　1	178
特殊講義b(資本市場の役割と証券投資)	秋	経済学部	水　4	179

◇外国人学生・帰国学生（特別入試入学者）について◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜時	履修不可	ページ
外国人学生・帰国学生（特別入試入学者）の授業科目履修について					27

外国人学生・帰国学生（特別入試入学者）の授業科目履修について

外国人学生・帰国学生(特別入試入学者）の授業科目については、「外国人学生の授業科目履修に関する特例」、「帰国学生の授業科目履修に関する特例」により、該当科目を履修する必要があります。
履修の方法や単位集計先などについては、『履修の手引』および『授業時間割表』の該当頁を参照してください。

科目名	単位集計先	担当教員	該当シラバス	該当頁
日本語(総合IAa,b)	−	各担当教員	全学共通授業科目シラバス	−
日本語(総合IBa,b)	−	各担当教員	全学共通授業科目シラバス	−
日本語(総合ICa,b)	−	各担当教員	全学共通授業科目シラバス	−
日本語(総合Ⅱa,b)	−	各担当教員	全学共通授業科目シラバス	−
歴史と文化2（日本事情1,2)	全カリ選択必修科目	守田　逸人	全学共通授業科目シラバス	−
日本経済論a,b	学科専門科目(選択)	須藤　時仁	経済学部シラバス	83
日本経済史a,b	学科専門科目(選択)	市原　博	経済学部シラバス	78
日本経営史a,b	学科専門科目(選択)	平井　岳哉	経済学部シラバス	122
日本社会史a,b	学科専門科目(選択)	新井　孝重	経済学部シラバス	79

※太枠の「日本事情に関する科目」の中から、4単位選択して卒業までに必ず修得してください。

*太枠の「日本事情に関する科目」は、2012年度以前に入学した学生にも適用されます。

03～12 年度（春）	インターナショナルコミュニケーション Ia(再履修者用)	担当者	各担当教員

講義目的、講義概要	授業計画
（担当者が複数ですので、各担当教員によるクラス別ガイダンスに従ってください） この授業は、経済学部 1 年生のために設けられた英語ネイティブ教員による科目です。 International Communication（IC）とは、TOEIC（Test of English for International Communication）からとったもので、国際的に通用する実用英語の習得を目指すものです。英語による日常のコミュニケーション、つまり話す(Speaking)、書く(Writing)、読む(Reading)、聞く(Listening)という 4 つの能力を高めることを目指す授業です。 講師はすべて英語を母語とするネイティブ教員です。教員および参加者相互でコミュニケーションをとりながら、英語を学習していきます。	1　ガイダンス 2-4　Unit 1 and teacher's own materials 5-8　Unit 2 and teacher's own materials 9-15　Unit 3 and teacher's own materials
テキスト、参考文献	**評価方法**
タイトル：Business Venture: Student Book Pack Elementary level 著者：Roger Barnard, Jeff Cady, Angela Buckingham, Grant Trew 出版社：Oxford Univ. Press, 出版年：2009 年 ISBN: 978-0194578172 上記のテキストを必ず購入すること. （書き込みのある中古本，および旧版(2003 年出版，ISBN: 978-0194573733)を使用しないこと.）	各担当教員による。 原則として、欠席 4 回以上した場合には不可となるので、注意すること。

03～12 年度（秋）	インターナショナルコミュニケーション Ib(再履修者用)	担当者	各担当教員

講義目的、講義概要	授業計画
インターナショナル・コミュニケーション I a を参照してください。	1-3　Unit 4 and teacher's own materials 4-6　Unit 5 and teacher's own materials 7-9　Unit 6 and teacher's own materials 10-15　Review and teacher's own materials
テキスト、参考文献	**評価方法**
タイトル：Business Venture: Student Book Pack Elementary level 著者：Roger Barnard, Jeff Cady, Angela Buckingham, Grant Trew 出版社：Oxford Univ. Press, 出版年：2009 年 ISBN: 978-0194578172 上記のテキストを必ず購入すること （書き込みのある中古本，および旧版(2003 年出版，ISBN: 978-0194573733)を使用しないこと.）	各担当教員による。 原則として、欠席 4 回以上した場合には不可となるので、注意すること。

03～12 年度（春）	インターナショナルコミュニケーションⅡa(再履修者用)	担当者	各担当教員

講義目的、講義概要	授業計画
（担当者が複数ですので、各担当教員によるクラス別ガイダンスに従ってください） この授業は、経済学部 2 年生のために設けられた英語ネイティブ教員による科目です。 International Communication（IC）とは、TOEIC（Test of English for International Communication）からとったもので、国際的に通用する実用英語の習得を目指すものです。英語による日常のコミュニケーション、つまり話す(Speaking)、書く(Writing)、読む(Reading)、聞く(Listening)という 4 つの能力を高めることを目指す授業です。 講師はすべて英語を母語とするネイティブ教員です。教員および参加者相互でコミュニケーションをとりながら、英語を学習していきます。	1　ガイダンス 2-4　Unit 7 and teacher's own materials 5-8　Unit 8 and teacher's own materials 9-15　Unit 9 and teacher's own materials
テキスト、参考文献	**評価方法**
タイトル：Business Venture: Student Book Pack Elementary level 著者：Roger Barnard, Jeff Cady, Angela Buckingham, Grant Trew 出版社：Oxford Univ. Press, 出版年：2009 年 ISBN: 978-0194578172 上記のテキストを必ず購入すること （書き込みのある中古本，および旧版(2003 年出版，ISBN: 978-0194573733)を使用しないこと.）	各担当教員による。 原則として、欠席 4 回以上した場合には不可となるので、注意すること。

03～12 年度（秋）	インターナショナルコミュニケーションⅡb(再履修者用)	担当者	各担当教員

講義目的、講義概要	授業計画
インターナショナル・コミュニケーションⅡa を参照してください。	1-3　Unit 10 and teacher's own materials 4-6　Unit 11 and teacher's own materials 7-9　Unit 12 and teacher's own materials 10-15　Review and teacher's own materials
テキスト、参考文献	**評価方法**
タイトル：Business Venture: Student Book Pack Elementary level 著者：Roger Barnard, Jeff Cady, Angela Buckingham, Grant Trew 出版社：Oxford Univ. Press, 出版年：2009 年 ISBN: 978-0194578172 上記のテキストを必ず購入すること. （書き込みのある中古本，および旧版(2003 年出版，ISBN: 978-0194573733)を使用しないこと.）	各担当教員による。 原則として、欠席 4 回以上した場合には不可となるので、注意すること。

08～12 年度（春）	大学入門講座（再履修者用）	担当者	内倉　滋

講義目的、講義概要	授業計画
なお本講座は 2012 年度以前入学者のためのものであることから、「授業計画」および「講義概要」の内容について、参加者に応じて変更されることがある。 **履修予定のものは、教務課の掲示に注意して、必ず１回目のガイダンスに出席すること。** この講義は、新入生の皆さんがスムーズに大学生活に移行できるよう、大学での勉学や生活について体系的に案内するものです。 大学では、高校までの生活と異なり、皆さんの自主性が尊重されます。授業の選択など、皆さんが自由に選択することができるのです。しかしその反面、皆さんの選択の自由は、責任を伴うものでもあります。学習の進展、サークル選び、友達とのつきあい、就職活動など、これからの大学生活は、すべて皆さんの責任の下で選び取っていく元となります。 この講座では、大学生活を送る上での重要なポイントを説明し、皆さんが実り豊かな大学時代を過ごせるようにお手伝いするものです。	１　科目履修のポイント ２　大学生活のポイント（１） ３　大学生活のポイント（２） ４　外国語学習術　（１） ５　外国語学習術　（２） ６　キャリアガイダンス ７　思考技術入門　（１） ８　思考技術入門　（２） ９　思考技術入門　（３） １０　大学内の情報関連施設 １１　研究調査期間　大学院案内 １２　演習科目の紹介 １３　夏休みの読書　留学案内 １４　経済学部の４年間　（１） １５　経済学部の４年間　（２）
テキスト、参考文献	**評価方法**
A.W.コーンハウザー『大学で勉強する方法』玉川大学出版部　（自分で勉強する動機をつかむことが重要です）	授業への参加度およびレポート。受講生は、必ず第１回目のガイダンスに出席すること。

		担当者	

講義目的、講義概要	授業計画
テキスト、参考文献	**評価方法**

14 年度（春） 08～13 年度（春）	クラスセミナー クラスセミナー（再履修者用）	担当者	各担当教員

講義目的、講義概要	授業計画
この授業は、学部共通のテキストに沿って、データを収集・整理し、情報を抽出し、自分の意見を発表するといったアカデミック・スキルを習得することを目的としています。 大学では、広い教養と専門分野の基礎・応用知識を習得することが重要ですが、大学で学問に向き合うときに最も大切なのは、 ・自らの問題意識を醸成し、主体的にテーマ設定する ・先行研究を読み解き、論点を整理・構成する ・データを収集・加工し、情報を抽出する ・自分なりの結論を導き出し、それを発信・議論する という創造的な「知の技巧」を身に付けることです。 しかし、こういった力を身に付けるためには、テキストを読んで「わかった」というだけでは不十分であり、実際に「使える」ようにならなければなりません。そのため、この授業では主体的に授業に参加し、議論したり、課題に取り組むという姿勢が求められます。 学問や研究というと、一人で課題に向き合う個人的な作業のように考えがちですが、クラス、グループ、ゼミといった仲間で議論し、意見を出し合うことが重要です。そのことから生まれる相乗効果こそが、まさに大学が「学問を通じての人間形成の場」となるために必要不可欠なものであるといえます。	１．プレゼンテーション・スキルの基礎 ２．コミュニケーション・スキルを磨く ３．情報探索方法のモデル―キーワードを考える― ４．情報探索方法のモデル―「読む」力をつける１― ５．情報探索方法のモデル―「読む」力をつける２― ６．プレゼンテーション・スキルを磨く１ ７．プレゼンテーション・スキルを磨く２ ８．情報探索方法のモデル―電子情報を見つける― ９．情報探索方法のモデル―「探す」力をつける― １０．学習・研究テーマの選び方１ １１．学習・研究テーマの選び方２ １２．情報の加工 １３．レポートを書く１ １４．レポートを書く２ １５．図書館セミナー なお、上の計画では便宜的に 15 回目に「図書館セミナー」を入れていますが、クラスによって、何週目に入るかが異なります。これについては、担当教員よりお知らせします。
テキスト、参考文献	**評価方法**
経済学部で編集したテキスト『クラスセミナーテキスト―知の技巧―』を用います。最初の授業時に配布します。参考文献は、担当教員が適宜紹介します。	受講態度や授業への積極性、課題提出、期末レポートによって総合的に評価する。

08～14 年度（秋）	クラスセミナー（再履修者用）	担当者	浜本　光紹

講義目的、講義概要	授業計画
大学において講義を受けたりゼミでの活動を行ったりするうえで必要な基礎的スキルを習得することを目的とする。具体的には，文章の読み方やまとめ方，情報収集の仕方，グループで議論したり作業したりするうえでの作法，およびレポート作成の仕方について，実践を通じて学んでいく。	１．　ガイダンス ２．　さまざまな文献の読み方・まとめ方（１） ３．　さまざまな文献の読み方・まとめ方（２） ４．　さまざまな文献の読み方・まとめ方（３） ５．　さまざまな文献の読み方・まとめ方（４） ６．　グループワーク（１） ７．　グループワーク（２） ８．　グループワーク（３） ９．　グループワーク（４） １０．　情報収集の基礎と実践（１） １１．　情報収集の基礎と実践（２） １２．　レポート作成に向けて（１） １３．　レポート作成に向けて（２） １４．　レポート作成に向けて（３） １５．　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
クラスセミナーのテキスト	与えられた課題への対応に基づいて評価する。

01～12 年度（春）	経済学 a	担当者	黒木　亮

講義目的、講義概要	授業計画
講義の目的 本講義の目的は、経済学の基本的な考え方を紹介することにある。具体的な経済問題や日本経済の事例にも触れながら、複雑な経済現象を理解し、整理するための見方、すなわち経済学の基本を習得してもらいたい。 講義の概要 テキストに沿って下記のテーマに関する講義を行う予定である。 Ⅰ．ミクロ経済学の基本 Ⅱ．ゲーム理論の考え方 Ⅲ．マクロ経済学の基本 Ⅳ．日本の経済をマクロの視点でとらえる （なお以上のテーマとその順番は、下記のテキスト上巻の第Ⅳ・Ⅴ・Ⅱ・Ⅲに対応している）。	Ⅰ． 1．ガイダンス――経済学とはどのような学問か 2．民営化・規制緩和の経済学的根拠 3．市場メカニズムを解剖する 4．市場はこうして失敗する Ⅱ． 5．ゲーム理論のエッセンス 6．囚人のジレンマ 7．コミットメントとは何か 8．出店戦略分析 Ⅲ． 9．GDP を中心にマクロ経済を考える 10．需要と供給で考える 11．マクロ経済のコントロール――財政金融政策の役割 Ⅳ． 12．日本経済の構造変化――石油ショックと変動相場制 13．日本経済のグローバル化――プラザ合意前後 14．バブルの形成と崩壊後の日本経済 15．まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
伊藤元重『はじめての経済学（上）』日本経済新聞社.	レポート・期末試験のいずれか、ないし両方。

01～12 年度（秋）	経済学 b	担当者	黒木　亮

講義目的、講義概要	授業計画
講義の目的 本講義の目的は、春季に習得した経済学の基本を、現実理解に即してマスターしてもらうことにある。財政や金融、企業や産業、ビジネスや労働、国際経済や為替の動き等々、具体的な事例や経済問題を通して、経済学の考え方にさらに磨きをかけてもらいたい。 講義の概要 テキストに沿って下記のテーマに関する講義を行う予定である。 Ⅰ．公共部門の経済学 Ⅱ．金融システムを理解する Ⅲ．国際経済を見る目を養う （なお以上のテーマとその順番は、下記のテキスト下巻の第Ⅵ・Ⅶ・Ⅸ章に対応している）。	Ⅰ． 1．ガイダンス――経済学とはどのような学問か 2．公共部門の三つの機能 3．財政支出と累進課税 4．自然独占と公共財 5．景気対策と日本の財政状況 6．プライマリーバランス――財政の未来を考える Ⅱ． 7．貨幣のもつ様々な機能 8．マネーストックと金融政策 9．信用乗数と資産市場の全体像 10．バブルの形成と崩壊が生じるメカニズム Ⅲ． 11．国際収支表の基本 12．為替相場の仕組みとその動向 13．企業の戦略および収益と為替の関係 14．比較優位――国際的な自由貿易の恩恵 15．まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
伊藤元重『はじめての経済学（下）』日本経済新聞社.	レポート・期末試験のいずれか、ないし両方。

01～12 年度（春）	経済学 a	担当者	浜本　光紹

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は，様々な経済現象を理論的に考察するための分析道具であるミクロ経済学の基礎を習得し，経済理論に基づいて現実の経済問題を検討する力を養うことを目標とする。 講義では，まず経済学という学問が考察対象とする課題について解説しつつ，基本的概念の説明を行なう。続いて，経済主体の行動と経済の効率性に関する理解に必要な基礎知識の習得を図る。そのうえで，余剰分析について解説し，市場構造のあり方が経済厚生にどのような影響をもたらすかを考察する。また，「市場の失敗」とその諸要因について理解を深めながら，政府の役割と市場の役割のあり方を考える能力を身につける。	１．　ガイダンス ２．　経済学とはどのような学問か ３．　分業の利益 ４．　消費者行動と財の需要（１） ５．　消費者行動と財の需要（２） ６．　企業行動と財の供給（１） ７．　企業行動と財の供給（２） ８．　余剰分析（１） ９．　余剰分析（２） １０．　完全競争と経済の効率性 １１．　不完全競争 １２．　外部効果 １３．　公共財 １４．　ミクロ経済学の応用 １５．　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
講義中に配布する資料など	定期試験による。

01～12 年度（秋）	経済学 b	担当者	浜本　光紹

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は，日本経済に関して理論的に考察するうえで必要な分析道具であるマクロ経済学の基礎を習得し，現実の経済問題の本質的要因を探り処方箋を考える力を養うことを目標とする。 講義では，まず国民所得の決定メカニズムおよびマクロ経済における家計・企業・政府の各部門の関係について解説する。これを踏まえて，財政政策・金融政策の理論と現実について検討し，マクロ経済政策の効果に関する理解を深める。また，開放マクロ経済の基礎知識を習得し，グローバル化が進展する中で国際的な経済現象が日本にもたらす影響について考える能力を養う。 講義においては，昨今の日本経済を取り巻く様々な出来事を取り上げることで，受講生にとって理論と現実との対応関係が理解できるように配慮したい。	１．　ガイダンス ２．　マクロ経済学の課題 ３．　家計の消費行動と貯蓄動機 ４．　企業の投資行動 ５．　企業の資金調達と家計の資産選択 ６．　直接金融：株式市場の理論と実際 ７．　間接金融：銀行の役割 ８．　中央銀行の役割と貨幣市場モデル ９．　ケインズ経済学：有効需要の原理 １０．　財市場モデルと乗数効果 １１．　財政政策と金融政策（１） １２．　財政政策と金融政策（２） １３．　労働市場と失業 １４．　開放マクロ経済 １５．　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
福田慎一・照山博司『マクロ経済学・入門』（第 4 版），有斐閣	定期試験による。

01～12 年度（春）	統計学 a	担当者	深江　敬志

講義目的、講義概要	授業計画
IT 化の急速な進展によって，情報のひとつの形態であるデータをいかに取り扱うかが重要となっている．つまり，データを扱う統計学に対するニーズが高まっているといえよう．近年，比較的入手が容易になった各種データを単に鵜呑みにするのではなく，批判的にみる事は仕事上，日常生活においても非常に重要である． したがって，本講義では，データや図表の内容を的確に把握し，計算結果を有効なものにするために，統計学の基本的な考え方について学習する事を目的とする． 本講義のスタイルは，各テーマの解説のみならず，理解をより深めるべく計算演習を併せて行う事とする．	1　イントロダクション 2　度数分布表・ヒストグラム 3　ローレンツ曲線・ジニ係数 4　代表値の種類 5　平均値計算(1) 6　平均値計算(2) 7　分散・標準偏差(1) 8　分散・標準偏差(2) 9　相関係数(1) １０　相関係数(2) １１　回帰直線 １２　標本調査 １３　確率の考え方(1) １４　確率の考え方(2) １５　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストは特に指定しない．講義時に，適宜レジュメおよび参考資料を配布し，それらに沿って講義を進める．	定期試験 70%，小テスト 30%(2～3 回程度)

01～12 年度（秋）	統計学 b	担当者	深江　敬志

講義目的、講義概要	授業計画
IT 化の急速な進展によって，情報のひとつの形態であるデータをいかに取り扱うかが重要となっている．つまり，データを扱う統計学に対するニーズが高まっているといえよう．近年，比較的入手が容易になった各種データを単に鵜呑みにするのではなく，批判的にみる事は仕事上，日常生活においても非常に重要である． したがって，本講義では，データや図表の内容を的確に把握し，計算結果を有効なものにするために，統計学の基本的な考え方について学習する事を目的とする． 本講義のスタイルは，各テーマの解説のみならず，理解をより深めるべく計算演習を併せて行う事とする．	1　イントロダクション 2　復習(代表値) 3　復習(散布度) 4　復習(相関関係) 5　復習(確率) 6　離散型確率分布(1) 7　離散型確率分布(2) 8　連続型確率分布(1) 9　連続型確率分布(2) １０　標本分布 １１　母数推定 １２　統計的検定(1) １３　統計的検定(2) １４　統計的検定(3) １５　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストは特に指定しない．講義時に，適宜レジュメおよび参考資料を配布し，それらに沿って講義を進める．	定期試験 70%，小テスト 30%(2～3 回程度)

01～12 年度（春）	統計学 b（再履修者用）	担当者	大床　太郎

講義目的、講義概要	授業計画
【講義目的】 　基本的な統計学の概念を，具体的な例題を解きつつ修得することを目的とします. 【講義概要】 　本講義では，例題や演習問題の豊富なテキストを用いて，経済・経営の諸課題における実証分析に必要となる統計学の基礎を網羅的に概説します．解法の手引きを講義したのちに，授業参加者それぞれが演習問題を解き進めてもらいます.	以下のような予定で，適宜修正しつつ進めます．第 1 回は，講義の進め方や単位の修得に関わる説明を行いますので，必ず受講してください. 第 1 回　イントロダクション・代表値 第 2 回　代表値（つづき） 第 3 回　小テスト① 第 4 回～第 5 回　ばらつき 第 6 回　小テスト② 第 7 回～第 8 回　確率① 第 9 回　小テスト③ 第 10 回～第 11 回　確率② 第 12 回　小テスト④ 第 13 回～第 14 回　正規分布 第 15 回　小テスト⑤
テキスト、参考文献	**評価方法**
吉田耕作（2006）『直感的統計学』，日経 BP 社.	授業貢献（50%）・小テスト（50%） 詳しくは，第 1 回のイントロダクションで説明します.

01～12 年度（秋）	統計学 a（再履修者用）	担当者	大床　太郎

講義目的、講義概要	授業計画
【講義目的】 　基本的な統計学の概念を，具体的な例題を解きつつ修得することを目的とします. 【講義概要】 　本講義では，例題や演習問題の豊富なテキストを用いて，経済・経営の諸課題における実証分析に必要となる統計学の基礎を網羅的に概説します．解法の手引きを講義したのちに，授業参加者それぞれが演習問題を解き進めてもらいます.	以下のような予定で，適宜修正しつつ進めます．第 1 回は，講義の進め方や単位の修得に関わる説明を行いますので，必ず受講してください. 第 1 回　イントロダクション・サンプリング理論① 第 2 回　サンプリング理論①（つづき） 第 3 回　小テスト① 第 4 回～第 5 回　サンプリング理論② 第 6 回　小テスト② 第 7 回～第 8 回　推定 第 9 回　小テスト③ 第 10 回～第 11 回　検定① 第 12 回　小テスト④ 第 13 回～第 14 回　検定② 第 15 回　小テスト⑤
テキスト、参考文献	**評価方法**
吉田耕作（2006）『直感的統計学』，日経 BP 社.	授業貢献（50%）・小テスト（50%）. 詳しくは，第 1 回のイントロダクションで説明します.

01～14 年度（春）	コンピュータ入門 a	担当者	各担当教員

講義目的、講義概要	授業計画
この講義は、大学でのレポート作成や、ゼミでの調査研究において必要となる、情報検索、ワードプロセッサ、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトの実際的な利用方法を、実習を通して身につけることと、コンピュータの基本的な知識を身につけることを目的とする。 コンピュータの単なるスキルではなく、社会に出てから必要となるコンピュータおよびネットワークの基礎的な知識および技能を身につけることが目的である。 毎回のレポート提出は、ポータルサイトを利用する。 なお、各テーマが取り扱われる順序や、時間配分については、担当教員によって異なることがある。	1. 講義概要と注意 2. 利用のための準備と設定 3. コンピュータの構造 4 インターネットの基礎と利用(ドメイン、情報検索) 5. ワードプロセッサの基礎と応用(表、図) 6. レポート作成 7. 表計算ソフトへのデータ入力とグラフ作成 8. 関数を使った計算 1（合計、平均、標準偏差、相対参照と絶対参照） 9. 関数を使った計算 2（IF 関数、AND、OR） 10. 関数を使った計算 3（VLOOKUP、IF 関数との組み合わせ） 11. データの再集計（ピボットテーブル） 12. データの並び替えと目的データの抽出､操作の記録(マクロ) 13. プレゼンテーションソフトの基礎と利用 14. プレゼンテーションソフトで調査資料作成 15. 課題作成
テキスト、参考文献	**評価方法**
立田ルミ、堀江郁美他『大学で必要な情報基礎』日経ＢＰ社 森夏節、立田ルミ他『日経パソコン Edu で学ぶ』、日経ＢＰ社	レポート-50%、試験-50%

01～14 年度（秋）	コンピュータ入門 b	担当者	各担当教員

講義目的、講義概要	授業計画
この講義では、経済学部で学ぶ上で役に立つ表計算の関数について学ぶとともに、プログラミングの基本についても学ぶ。 表計算ソフトは、数式や関数により計算を行うことや得られたデータをグラフ化するだけではなく、より複雑なデータ分析や処理に利用することが可能である。またコンピュータを利用することで、複雑な数式を記述することなく処理を行い、結果をグラフィカルに確認することが可能となる。本講義ではさまざまな例題を用いて、表計算ソフトによりデータ分析を行う方法を学ぶ。 　大量のデータに対して同様の処理をくり返す際には、表計算ソフトでの操作を記録して利用するマクロ機能が有効となる。この講義では操作を記録するだけでなく、操作内容を追加して記述し、データ処理を効率的に行う方法についても学ぶ。	1. 講義の進め方について 2. 複利計算とローン返済計画 3. 利子率の計算（ソルバー､What-if 分析の使い方） 4. データの変化量の計算（微分） 5. データの特徴を抽出する（移動平均、ヒストグラム、回帰分析） 6. 効率的な作業配分（0-1 整数計画問題） 7. 限られた資源の有効活用（線形計画法） 8. 使用言語の特徴とプログラムの作成方法 9. 簡単な処理とプログラム 10. 簡単なアルゴリズムと場合分けプログラム 11. アルゴリズムとプログラム 12. 繰り返し処理とプログラム 13. 場合分けと繰り返し処理のプログラム 14. インタラクティブなプログラム 15. 課題の作成（担当教員が指定した問題を、数回の講義に分けて作成する）
テキスト、参考文献	**評価方法**
各担当教員指定の教科書または印刷物	レポート-50%、試験-50%

（春）		担当者	

講義目的、講義概要	授業計画

テキスト、参考文献	評価方法

01～12 年度（秋）	プレゼンテーション技法	担当者	未定（掲示で確認）

講義目的、講義概要	授業計画
講義目的： 発表資料作成や口頭発表の実践及びディスカッションを通じて、プレゼンテーションスキルの向上を目指す。 講義概要： プレゼンテーションスキルは、自分の提案や成果を、聴衆に魅力的に伝え、認めてもらうための技術である。大きな成果が期待される素晴らしい提案であっても、それをきちんと伝えることができなければ、他者の協力を得ることは難しい。それゆえ、今後の人生における多くの場において、プレゼンテーションスキルは、非常に重要な能力の一つとなる。本講義では、より実践的にプレゼンテーションスキルを鍛えるために、資料の作成だけではなく、登壇して実際に発表を行うことを重視する。更に、発表者としてだけではなく、聴衆としてディスカッションに参加し、スキルを互いに磨き合うプロセスにも重点を置く。 前提知識： Microsoft PowerPoint の操作ができることが望ましい。不安な受講者は春学期のコンピュータ入門の履修を勧める。	※ガイダンスには原則として必ず出席すること ※発表の日程や回数は受講者の数により変更する １．ガイダンス ２．プレゼンテーションの基本とテーマ設定 ３．事前準備・内容構成・視覚化・図式化 ４．PowerPoint の基礎 ５．スライド作成 ６．スライド検討会（１） ７．スライド検討会（２） ８．話し方・ボディランゲージ ９．発表リハーサル（１） １０．発表リハーサル（２） １１．発表リハーサル（３） １２．発表リハーサル（４） １３．最終登壇発表（１） １４．最終登壇発表（２） １５．総括

テキスト、参考文献	評価方法
	基本的には最終登壇発表の結果に基づいて評価する。その他、講義中の学習態度や中間課題を十分に加味して、総合的に評価する。詳細はガイダンスで説明する。

01～14 年度（春）	簿記原理 a	担当者	香取　徹

講義目的、講義概要	授業計画
簿記は必ず身に付けておかなければならない基本的な技術です。どのような職業についても簿記の知識は実社会で不可欠ですから、全学科の学生が履修する必要があります。この講義では、日本商工会議所簿記検定 3 級の範囲を完全に網羅します。また、会計学原理、財務会計論、原価計算論、管理会計論などの会計に関連する科目を学ぶ上でとても重要な基礎になります。 簿記は決して難しいものではありませんが、技術ですから、身につけるためには、練習が必要です。そのため、毎回の講義では、一つずつ項目を説明し例題の解説をしてから講義に合せてワークブックで練習します。残った練習問題は自宅で学習してください。 (皆さんの理解に応じて進み方は変更する場合があります。)	1 ガイダンス 2 簿記の基礎 3 日常の手続き 1 4 日常の手続き 2 5 商品売買 1 6 (中間テスト) 7 商品売買 2 8 現金 9 当座預金 10 小口現金 11 手形 1 12 手形 2 13 手形 14 練習 15 テスト
テキスト、参考文献	**評価方法**
合格テキスト　日商簿記 3 級　TAC 出版 合格トレーニング　　日商簿記 3 級　TAC 出版	試験で評価します。出席は取りません。小テストをする場合があります。

01～14 年度（秋）	簿記原理 b	担当者	香取　徹

講義目的、講義概要	授業計画
同上	1 ガイダンス 2 その他の取引 1 3 その他の取引 2 4 その他の取引 3 5 試算表 1 6 試算表 2 7 決算 1 8 決算 2 9 決算 3 10 決算 4 11 決算 5 12 同上 13 決算 6 14 伝票 15 テスト
テキスト、参考文献	**評価方法**
同上	同上

01～14 年度（春）	簿記原理 a	担当者	細田　哲

講義目的、講義概要	授業計画
講義の目標 「複式簿記」の基本的仕組み、簿記一巡の手続きについて理解すること。また企業における基本的な取引について記帳し、決算手続きを遂行し、損益計算書、貸借対照表作成ができるようになることを目標とする。 講義概要 春学期講義は、学生諸君が複式簿記を理解し、簡単な精算表の作成、決算本手続を遂行できるようにすることを目的とする。講義の個々のテーマを列挙すると、次の通りである。 ・ 複式簿記とは ・ 簿記の仕組み ・ 試算表と精算表 ・ 決算(Ⅰ)	1.「1.複式簿記とは(1)」 a)簿記の目的と種類 2.「1.複式簿記とは(2)」 b)複式簿記の計算要素 3.「2.簿記の仕組み(1)」 a)取引と勘定、b)勘定記入法 4.「2.簿記の仕組み(2)」 a)取引と勘定、b)勘定記入法 5.「2.簿記の仕組み(3)」 c)仕訳と転記、d)仕訳帳と総勘定元帳 6.「2.簿記の仕組み(4)」 c)仕訳と転記、d)仕訳帳と総勘定元帳 7.「3.試算表と精算表(1)」 a)試算表の作成、b)精算表の作成 8.「3.試算表と精算表(2)」 a)試算表の作成、b)精算表の作成 9.「4.決算(Ⅰ)(1)」 a)決算の意味と手続 10.「4.決算(Ⅰ)(2)」 b)大陸式決算法、c)英米式決算法 11.「4.決算(Ⅰ)(3)」 b)大陸式決算法、c)英米式決算法 12.「4.決算(Ⅰ)(4)」 d)損益計算書と貸借対照表の作成、 e)開始記入 13. 決算手続の演習（1） 14. 決算手続の演習（2） 15. 総まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
中村泰将（編著）『演習　現代簿記』（中央経済社）	期末試験の結果による。

01～14 年度（秋）	簿記原理 b	担当者	細田　哲

講義目的、講義概要	授業計画
秋学期講義は、学生諸君が次の事項を容易に遂行できるようにすることを目的とする。個々の取引に対する記帳、8 桁精算表の作成、決算本手続の遂行、損益計算書と貸借対照表の作成である。講義の個々のテーマを列挙すると、次の通りである。 ・ 現金・預金取引の記帳 ・ 商品売買取引の記帳 ・ 手形取引の記帳 ・ その他の取引の記帳 ・ 決算(Ⅱ)決算整理 ・ 損益計算書と貸借対照表の作成	1.「5.現金･預金取引の記帳」 2.「6.商品売買取引の記帳(1)」 a)分記法、3 分法 3.「6.商品売買取引の記帳(2)」 b)仕入帳と売上帳、c)商品有高帳 4.「6.商品売買取引の記帳(3)」 b)仕入帳と売上帳、 c)商品有高帳、d)掛取引の記帳 5.「7.手形取引の記帳(1)」 a)約束手形と為替手形、 b)受取手形勘定と支払手形勘定、 c)手形の裏書と割引 6.「7.手形取引の記帳(2)」 a)受取手形記入帳と支払手形記入帳 b)不渡手形、f) 手形貸付金と手形借入金 7.「8.その他の取引の記帳」 a)その他の債権、債務取引、b)有価証券取引 c)固定資産取引、d)営業費等の取引 8.「9.決算(Ⅱ)決算整理(1)」 a)決算整理の意味、b)棚卸減耗損及び商品評価損 9.「9.決算(Ⅱ)決算整理(2)」 c)有価証券評価損益、d)固定資産の減価償却 10.「9.決算(Ⅱ)決算整理(3)」 e)費用・収益の繰延と見越、f)８桁精算表の作成 11.「9.決算(Ⅱ)決算整理(4)」 e)費用・収益の繰延と見越、f)８桁精算表の作成 12.「10.損益計算書と貸借対照表の作成」 13. 精算表作成の演習（1） 14. 精算表作成の演習（2） 15. 総まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
中村泰将（編著）『演習　現代簿記』（中央経済社）	期末試験の結果による。

01～14 年度（春）	簿記原理 a	担当者	百瀬　房徳

講義目的、講義概要	授業計画
簿記原理では、複式簿記を内包した簿記を取り上げる。この簿記を商業簿記と称する。複式簿記は、取引の借方と貸方による仕訳に基づき勘定に分解し、元帳における勘定へ転記し、このシステムを通じて、事業の資産、負債および資本の増減を測定する。この勘定システムと事業体の組織に関連して、各勘定の意義および機能と、各勘定の具体的な処理について基本的な理解を深める。	1　複式簿記の現代における意義 2　複式簿記の体系および簿記における取引とは何か 3　仕訳の基本的原理および取引勘定への転記 4　補助簿への記入および試算表の作成 5　精算表の作成原理および損益勘定と残高勘定への転記 6　取引パターン別の仕訳例の説明 7　パターン別に仕訳された例の勘定への転記 8　例題による取引の仕訳および勘定への転記 9　大陸法と英米法による勘定の締切 10　大陸法と英米法による勘定の記入例 11　例題による精算表の作成および決済に際しての損益勘定および残高勘定の完成 12　練習問題 取引の仕訳帳記入および仕訳帳から元帳への転記 13　練習問題 試算表の作成および精算表の作成 14　練習問題 元帳の締め切りによる損益勘定および残高勘定の完成 15　試算表および精算表の作成
テキスト、参考文献	**評価方法**
百瀬 房徳『体系複式簿記』森山書店	テスト

01～14 年度（秋）	簿記原理 b	担当者	百瀬　房徳

講義目的、講義概要	授業計画
複式簿記の基本的勘定システムを理解した後、各勘定について、勘定とそれに関連する補助簿の記入を具体的に理解する。そして、最終的に決算制度に関連して、試算表および精算表の作成を通じて、損益勘定から損益計算表を、残高勘定（大陸法）から貸借対照表を作成するプロセスを理解する。	1　現金勘定と現金出納帳 2　当座預金と当座預金出納帳、および小口現金と小口現金出納帳 3　商品勘定の記入方法 単純な商品勘定、混合商品勘定および商品勘定の分割 4　仕入勘定と仕入帳、商品の仕入価格および商品の返品と値引き 5　売上勘定と売上帳 6　繰越商品勘定と商品有高帳、および棚卸減耗損および商品評価損 7　売掛金勘定と得意先元帳、および買掛金勘定と仕入先元帳 8　受取手形と支払手形 9　受取手形勘定と受取手形記入帳、および支払手形勘定と支払手形記入帳 10　貸倒引当金の処理 11　その他の債権・債務の諸勘定、有価証券勘定 12　固定資産の諸勘定 特に減価償却による処理 13　決算前の諸勘定の整理について 14　決算 勘定の締め切り、損益勘定および残高勘定（大陸法）の完成 15　８桁精算表の作成
テキスト、参考文献	**評価方法**
百瀬 房徳『体系複式簿記』森山書店	テスト

01～14 年度（春）	簿記原理 a	担当者	山﨑　尚

講義目的、講義概要	授業計画
授業目的： 本講座の目的は、企業における一定期間の利益（フロー）と一定時点の財産の有高（ストック）を計算するための記録と計算の原理(「複式簿記」という。)を学ぶことです。 授業概要： 春学期は、簿記の基本原理である、簿記の一連のプロセス[経済活動の識別→仕訳→勘定→試算表→(精算表)→決算→B/S とP/L の作成]を学びます。これを「簿記のワン・サイクル」とよびます。このプロセスが春学期で学ぶ主な範囲です。 授業では、パワーポイントを使って説明します。数回の授業で宿題やquiz(小テスト)を出します。	1. 簿記とは何か 2. 複式簿記の基本構造 3. 簿記上の取引と種類 4. 貸借対照表と損益計算書 5. 勘定 6. 仕訳 7. 仕訳帳と総勘定元帳 8. 試算表 9. 精算表 10. 決算(1) 11. 決算(2) 12. 現金と当座預金(1) 13. 現金と当座預金(2) 14. 演習問題 15. 演習問題
テキスト、参考文献	**評価方法**
中村泰將編著『演習 現代簿記（第２版）』中央経済社	授業参加度・宿題・小テスト（20%）、定期試験（80%）

01～14 年度（秋）	簿記原理 b	担当者	山﨑　尚

講義目的、講義概要	授業計画
講義目的：春学期と同様。 講義概要： 秋学期では、新しい取引や勘定科目が数多く発生してくるので、春学期で学んだ簿記の「記録と計算の原理」を基本として、それらの取引をどのように各種の帳簿に記録し、計算するかを学びます。 秋学期もパワーポイントを使って授業をします。数回の授業で宿題やquiz(小テスト)を出します。	1. 商品勘定の処理 (1)商品の売買利益の計算　(2)商品の3分法 2. 商品勘定の処理 (3)商品有高帳の作成　(4)仕入帳と売上帳 3. 有価証券の処理 4. 固定資産の処理 5. その他の債権・債務 6. 手形の取引 7. 資本金と引出金の処理 8. 決算の修正手続き(1) 9. 〃 (2) 10. 〃 (3) 11. 8 桁精算表の作成(1) 12. 〃 (2) 13. 演習問題 14. 演習問題 15. 演習問題
テキスト、参考文献	**評価方法**
中村泰將編著『演習 現代簿記（第２版）』中央経済社	授業参加度・宿題・小テスト（30%）、定期試験（70%）

01～14 年度（春）	簿記原理 a	担当者	湯田　雅夫

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は、受講生全員が日本商工会議所検定 3 級の実力を修得するよう、初級簿記の原理と技法を懇切丁寧に解説する。 複式簿記の基礎的な原理と技法を修得させることを主眼として、講義と記帳・計算練習を並行して行う。 受講生は、授業の進歩度に応じて教科書の練習問題について、記帳練習を重ねる必要がある。	1. イントロダクション：講義概要ならびに授業の進め方 2. 簿記の歴史 3. 第 1 章　簿記の意義と役立ち 第 2 章　資産・負債・純資産、収益、費用 4. 第 3 章　取引 第 4 章　勘定科目と勘定記入の法則 5. 第 5 章　仕訳と転記 6. 第 6 章　貸借平均の原理と試算表 7. 第 7 章　精算表（6 桁） 8. 第 8 章　簿記一巡の手続　　第 9 章　帳簿 9. 小テスト 10. 第 10 章　現金・預金 11. 第 11 章　商品売買 12. 第 11 章　商品売買 13. 第 12 章　有価証券 14. 第 13 章　売掛金と買掛金 15. 春学期まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
渋谷・湯田編著『ベーシック簿記教室』 中央経済社　2011 年	期末試験

01～14 年度（秋）	簿記原理 b	担当者	湯田　雅夫

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は、受講生全員が日本商工会議所検定 3 級の実力を修得するよう、初級簿記の原理と技法を懇切丁寧に解説する。 複式簿記の基礎的な原理と技法を完全に修得させることを主眼として、講義と記帳・計算練習を並行して行う。 受講生は、授業の進歩度に応じて教科書の練習問題について、記帳練習を重ねる必要がある。	1. 第 14 章　受取手形と支払手形 2. 第 15 章　その他の債権・債務 3. 第 16 章　貸倒れと貸倒引当金 4. 第 17 章　固定資産と減価償却 第 18 章　純資産（資本） 第 19 章　税金 5. 第 20 章　収益・費用の見越・繰延、消耗品 6. 第 21 章　伝票会計 7. 第 22 章　決算予備手続 8. 小テスト 9. 第 23 章　精算表（8 桁） 10. 第 24 章　決算本手続（帳簿の締め切り） 11. 第 25 章　決算報告手続（財務諸表の作成） 12. 復習① 13. 復習② 14. 復習③ 15. 講義の終わりにあたりひとこと
テキスト、参考文献	**評価方法**
渋谷・湯田編著『ベーシック簿記教室』 中央経済社　2011 年	期末試験

01～13 年度（春）	簿記原理 a （再履修者用）	担当者	橋　本　　尚

講義目的、講義概要	授業計画
複式簿記は、「人間の精神が創造した最もすばらしいものの１つである（Ｊ.W.ゲーテ)」と賛美されるように、経済活動を一定のルールに従って記録・計算・整理する技術です。グローバル社会におけるビジネスの共通言語である簿記に関する知識は、今日の経済社会で生活する者にとっては、特別の専門知識というよりも、当然に習得しておかなければならない素養といえます。本講義においては、会計学領域全体の枠組みを概観した上で、今日の経済社会の実情を踏まえつつ、複式簿記の基本的概念と構造を基礎からわかりやすく解説していきます。また、限られた時間内ではありますが、問題演習にも重点をおく予定です。 簿記原理は、会計学関連科目全体の基礎をなす重要な学科目であると同時に、資本主義経済を支える企業の活動状況を正しく理解する上で不可欠な知識です。本講義においては、基礎から解説していくので履修の前提科目は特に問いませんが、学科目の性格上、何よりも継続的な努力を必要とするため、受講者に対しては欠かさず出席することを強く希望します。	第 1 回 簿記の基礎概念 第 2 回 簿記上の取引の意義と種類 第 3 回 勘定の意義と分類、勘定記入の法則 第 4 回 仕訳、転記、貸借平均の原理 第 5 回 仕訳の演習問題 第 6 回 試算表 第 7 回 ６桁精算表、決算手続 第 8 回 現金、現金出納帳 第 9 回 現金過不足 第 10 回 小口現金、小口現金出納帳 第 11 回 当座預金・当座借越・当座、当座預金出納帳 第 12 回 有価証券 第 13 回 商品売買 第 14 回 売上高・売上原価・売上総利益の計算 第 15 回 商品に関する補助簿
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：八田進二・橋本　尚『簿記の基本を学ぶ』同文舘出版　2011 年	講義への取り組み状況などの平常点（30%）と試験の結果（70%）に基づいて総合的に判定する。

01～13 年度（秋）	簿記原理 b（再履修者用）	担当者	橋　本　　尚

講義目的、講義概要	授業計画
複式簿記は、「人間の精神が創造した最もすばらしいものの１つである（Ｊ.W.ゲーテ)」と賛美されるように、経済活動を一定のルールに従って記録・計算・整理する技術です。グローバル社会におけるビジネスの共通言語である簿記に関する知識は、今日の経済社会で生活する者にとっては、特別の専門知識というよりも、当然に習得しておかなければならない素養といえます。本講義においては、会計学領域全体の枠組みを概観した上で、今日の経済社会の実情を踏まえつつ、複式簿記の基本的概念と構造を基礎からわかりやすく解説していきます。また、限られた時間内ではありますが、問題演習にも重点をおく予定です。 簿記原理は、会計学関連科目全体の基礎をなす重要な学科目であると同時に、資本主義経済を支える企業の活動状況を正しく理解する上で不可欠な知識です。本講義においては、基礎から解説していくので履修の前提科目は特に問いませんが、学科目の性格上、何よりも継続的な努力を必要とするため、受講者に対しては欠かさず出席することを強く希望します。	第 1 回 手形（１） 第 2 回 手形（２） 第 3 回 その他の債権債務 第 4 回 固定資産・固定資産台帳 第 5 回 決算整理事項（１） 第 6 回 決算整理事項（２） 第 7 回 決算整理事項（３）、訂正仕訳 第 8 回 仕訳の総合問題（１） 第 9 回 仕訳の総合問題（２） 第 10 回 伝票会計 第 11 回 試算表の総合問題（１） 第 12 回 試算表の総合問題（２） 第 13 回 ８桁精算表（決算整理事項） 第 14 回 ８桁精算表（推定） 第 15 回 財務諸表の作成
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：八田進二・橋本　尚『簿記の基本を学ぶ』同文舘出版　2011 年	講義への取り組み状況などの平常点（30%）と試験の結果（70%）に基づいて総合的に判定する。

01～13 年度（春）	簿記原理 b(再履修者用)	担当者	齋藤 正章

講義目的、講義概要	授業計画
講義の目的 　簿記は、会社における経済価値の変動を一定のルールに基づいて記録・計算し、集計する技術です。簿記のルールはきわめて単純明快でありますが、少なからずの人が簿記に苦手意識をもつのも事実です。それは、頭だけで簿記を理解しようとするところに原因があると思われます。簿記は技術ですから、ただ単に教科書を読んでいるだけでは不十分で、実際に手を動かして体で覚えて初めて使いこなせるようになるという要素が多くあります。 　この講義の目的は、苦手意識がどこにあるかを確認し、複式簿記の基礎原理と仕訳から財務諸表の作成に至る一連の手続きについて習得することにあります。 講義概要 　簿記は暗記科目ではありません。「なぜそうなるのか」を中心に解説していきます。	1. 簿記とは何か 2. 簿記の基本と確認テスト 3. 確認テストの復習 4. 現金取引の復習 5. 商品売買取引の復習（1） 6. 商品売買取引の復習（2） 7. 債権債務の復習（1） 8. 債権債務の復習（2） 9. 有形固定資産取引の復習（1） 10. 有形固定資産取引の復習（2） 11. その他の取引の復習（1） 12. その他の取引の復習（2） 13. 決算手続きの復習（1） 14. 決算手続きの復習（1） 15. 問題演習
テキスト、参考文献	**評価方法**
各自既に所有しているテキストを持参して下さい。	平常点 20%，定期試験の結果 80%で評価します。

01～14 年度（秋）	簿記原理 a（再履修者用）	担当者	齋藤 正章

講義目的、講義概要	授業計画
講義の目的 　簿記は、会社における経済価値の変動を一定のルールに基づいて記録・計算し、集計する技術です。簿記のルールはきわめて単純明快でありますが、少なからずの人が簿記に苦手意識をもつのも事実です。それは、頭だけで簿記を理解しようとするところに原因があると思われます。簿記は技術ですから、ただ単に教科書を読んでいるだけでは不十分で、実際に手を動かして体で覚えて初めて使いこなせるようになるという要素が多くあります。 　この講義の目的は、苦手意識がどこにあるかを確認し、複式簿記の基礎原理と仕訳から財務諸表の作成に至る一連の手続きについて習得することにあります。 講義概要 　簿記は暗記科目ではありません。「なぜそうなるのか」を中心に解説していきます。	1. 簿記とは何か 2. 簿記の基本と確認テスト 3. 確認テストの復習 4. 現金取引の復習 5. 商品売買取引の復習（1） 6. 商品売買取引の復習（2） 7. 債権債務の復習（1） 8. 債権債務の復習（2） 9. 有形固定資産取引の復習（1） 10. 有形固定資産取引の復習（2） 11. その他の取引の復習（1） 12. その他の取引の復習（2） 13. 決算手続きの復習（1） 14. 決算手続きの復習（1） 15. 問題演習
テキスト、参考文献	**評価方法**
各自既に所有しているテキストを持参して下さい。	平常点 20%，定期試験の結果 80%で評価します。

01～12 年度（春）	数学ａ	担当者	高木　悟

講義目的、講義概要	授業計画
経済学や経営学を学習するうえで必要となる数学のうち，線形代数学（行列・連立１次方程式）について講義する．また，これらを応用した産業連関問題や線形計画問題についても解説する．この講義で得た数学の知識や論理的な思考能力は今後の人生において必ず役に立つのでしっかり勉強してほしい．**最初の授業時にガイダンスとして講義内容や成績評価方法について説明し，下記「授業のページ」の資料を開くためのパスワードを述べるので，必ず出席すること（パスワードをメール等で知らせることはしない）．また，下記教科書も授業で毎回使用するので早めに購入すること（秋学期「数学ｂ」でも引き続き使用する）．** **★授業のページ URL★** http://home.att.ne.jp/air/satorut/lec/ から当該年度・時限の数学ａ「授業のページ」をクリック	１．ガイダンス，数の概念 ２．行列の定義 ３．行列の演算 ４．行列と連立１次方程式 ５．行列の基本変形 ６．行列の簡約化 ７．行列の階数 ８．連立１次方程式の解なし ９．連立１次方程式の不定解 １０．行列式の定義 １１．行列式の性質 １２．逆行列 １３．クラーメルの公式 １４．経済・経営学への応用 １５．期末レポート
テキスト、参考文献	**評価方法**
教科書：『経済・経営学のための数学』（高木 悟 著） 獨協大学内「ぶっくぎゃらりぃ DUO」でのみ販売中． 秋学期の「数学ｂ」でも同教科書を引き続き使用する．	授業中または宿題としてときどき出す課題の合計を 40%，学期末に実施する期末レポートを 60%として評価する．100 点満点で 60 点以上を合格とする．

01～12 年度（秋）	数学ｂ	担当者	高木　悟

講義目的、講義概要	授業計画
経済学や経営学を学習するうえで必要となる数学のうち，解析学（関数・グラフ・微分・偏微分・極値問題）について講義する．また，これらを応用した損益分岐点問題や最適化問題についても解説する．この講義で得た数学の知識や論理的な思考能力は今後の人生において必ず役に立つのでしっかり勉強してほしい．**最初の授業時にガイダンスとして講義内容や成績評価方法について説明し，下記「授業のページ」の資料を開くためのパスワードを述べるので，必ず出席すること（パスワードをメール等で知らせることはしない）．また，下記教科書も授業で毎回使用するので早めに購入すること（春学期「数学ａ」と同じ）．** ※春学期の「数学ａ」を受講していなくても特に問題ない． **★授業のページ URL★** http://home.att.ne.jp/air/satorut/lec/ から当該年度・時限の数学ｂ「授業のページ」をクリック	１．ガイダンス，関数の概念 ２．２次関数 ３．分数関数 ４．指数関数 ５．対数関数 ６．極限と微分の定義 ７．微分の計算 ８．合成関数の微分 ９．関数の増減と凹凸 １０．グラフ描画 １１．問題演習 １２．偏微分の定義と計算 １３．条件付き極値問題 １４．経済・経営学への応用 １５．期末レポート
テキスト、参考文献	**評価方法**
教科書：『経済・経営学のための数学』（高木 悟 著） 獨協大学内「ぶっくぎゃらりぃ DUO」でのみ販売中． 春学期の「数学ａ」受講時に購入の場合は再度の購入不要．	授業中または宿題としてときどき出す課題の合計を 40%，学期末に実施する期末レポートを 60%として評価する．100 点満点で 60 点以上を合格とする．

13 年度以降（春） 01～12 年度（春）	現代人口論 a 高齢化社会論 a	担当者	奥山　正司

講義目的、講義概要	授業計画
人々がある時点及びある地域に集まって社会を構成するとき、そこに生活している人々の集まりを「人口」という。現代社会は、そうした人口に焦点をあて、日本及び世界的視野から検討すると、先進国及び発展途上国ではさまざまな問題を抱えている。ここでは、こうした課題に接近し、理解を深めることにしたい。 形式人口学（人口統計学）といわれる狭義で扱う人口学的事象の研究は、本来、政治、社会、経済、地理、文化、環境、公衆衛生等他の学問分野と深い関わりを持っており、広義の人口学領域と関連した考察が不可欠である。したがって、ここでは、こうした人口動向を把握する上では統計的指標を把握することが必須である。そのため、基礎的な用語の理解、統計データの見方等を学習し、人口構造の動向とその要因、出生、結婚などの人口問題へのアプローチを紹介し、日本及び世界の動向を概観する。	1．授業の進め方と授業内容 2．現代人口論とは 3．人口属性の概観―世界の動きー 4．人口属性の概観と人口移動―日本の動きー 5．年少人口、労働力人口、老年人口 6．出生率低下とその要因、 7．死亡率低下とその要因 8．労働供給理論と人口 9．ライフ・サイクルの過程及び高齢者の生活 10．人口高齢化と都市・農村 11．人口高齢化と社会的インパクト 12．人口高齢化と高齢者世帯の所得水準、消費水準 13．高齢者の就業率等と社会活動及び医療行動等 14．諸外国の高齢者生活 15．講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
教科書及び参考文献は、授業の中で指示する。	受講条件：b を必ず履修すること。筆記試験（80%）を基礎にして，レポート（10%），授業参加点（10%）等を加味して総合的に評価する。

13 年度以降（秋） 01～12 年度（秋）	現代人口論 b 高齢化社会論 b	担当者	奥山　正司

講義目的、講義概要	授業計画
人口は、空間的範囲に限定された人間の集合的な表現であるが、その一方では、年齢別、男女別、就業別、高齢者人口のように、非空間的な概念でもあり、社会経済的な属性によって、その性格が大きく異なってくる。 ここでは、日本をはじめ、世界の先進国が抱えている高齢化や少子化の問題を中心に、課題を浮き彫りにし、その問題点を整理した上で人口政策はどうあるべきか、を概観する。 少子化による労働力率の変化や結婚・離婚・配偶関係の変化等人口学的要因が家族や地域社会にどのような影響を与えているのか、都市と農村に分けて検討する。特に、寿命や高齢化に伴う高齢者の問題及びその対応策は、日本を始め、東アジアの中国と韓国、北欧のデンマークやスウェーデン、米国などの国々ではどのようになされているのか、を理解する。	1. 授業の進め方と授業内容 2. 結婚・離婚・配偶関係別人口 3. 寿命と環境、公衆衛生 4. 世帯・家族形態の変化と高齢化 5. 高齢化と都市交通・都市コミュニティ 6. 人口高齢化と孤立・孤独・孤独死 7. 人口構造のアンバランスと世代間扶養 8. 施設及び在宅福祉サービスと高齢化 9. 日本におけるアジア系女性の移民と農村社会 10. 日本における外国人の移民労働者と都市社会 11. 東アジアの人口動向と人口政策―中国― 12. 東アジアの人口動向と人口政策―韓国― 13. 西欧及び北欧の人口政策と老齢保障 14. 米国および諸外国の人口政策と老齢保障 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
教科書及び参考文献は、授業の中で指示する。	受講条件：a を履修すること。筆記試験（80%）を基礎にして，レポート（10%），授業参加点（10%）等を加味して総合的に評価する。

13 年度以降（春） 01～12 年度（春）	精神保健福祉論 a 精神衛生論 a	担当者	中 野 隆 史

講義目的、講義概要	授業計画
現代の社会では心の健康に関連するできごとが大きな問題となっている。長引く経済不況下で中高年の自殺が増加し、自殺者は年間２万人台から３万人台へと激増した。それから様々な対策がなされ 15 年経過した現在、ようやく年間２万人台への減少がみられた。精神保健（メンタルヘルス）の知識は現代を生きる上で不可欠である。本講義では精神保健と精神医学の基本的な知識を身につけることによって自己を理解し、自身の学生生活とその後の人生を豊かにし、友人・家族など身近な人、職場の同僚や部下に対する援助のできる社会人を育成することを目標とする。 精神保健の概念とその実践の対象から講義を始める。次いで精神保健の理解に必要な精神医学の基本的知識を学ぶ。これらを踏まえてライフサイクルから見た精神保健すなわち各ライフステージにおける発達課題とその障害について考えていく。講義全体を通して自分の身の回りの実例やマスメディアの報道などを精神保健の視点からとらえ、これらの事例に関する討論を通じて精神保健の知識と理解を深めてゆく。	1 オリエンテーション；精神保健とは？ 2 精神保健の実践の対象 3 精神医学の基本的知識（1）精神障害の成因・分類 4 精神医学の基本的知識（2）心因性精神障害 5 精神医学の基本的知識（3）気分障害（うつ病ほか） 6 精神医学の基本的知識（4）統合失調症 7 精神医学の基本的知識（5）精神科の治療 8 ライフサイクルから見た精神保健（1）乳幼児期 9 ライフサイクルから見た精神保健（2）児童期・思春期 10 ライフサイクルから見た精神保健（3）青年期 11 ストレスとその対処法 12 ライフサイクルから見た精神保健（4）成人期 13 ライフサイクルから見た精神保健（5）老年期 14 タバコ・アルコール・依存性薬物について 15 まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストはとくに指定しない。レジュメを配布する。 参考文献は講義の際に紹介する。	試験の成績による。 講義の際の提出物は加点の対象とする。 原則として、再試験・追試験は行わない。

13 年度以降（秋） 01～12 年度（秋）	精神保健福祉論 b 精神衛生論 b	担当者	中 野 隆 史

講義目的、講義概要	授業計画
精神保健（メンタルヘルス）や精神障害の問題は一部の特別な人だけのものではない。現代のストレスフルな社会（虐待、いじめ、リストラ、非正規雇用‥‥）では誰もが必ず関わることがある問題である。「明日はわが身」である。本講義では健常者の精神的健康の維持増進のためのストレス対処法やメンタルヘルス不全者への対応などの基本的な知識を身につけることによって自己を理解し、自身の学生生活とその後の人生を豊かにし、友人・家族など身近な人、職場の同僚や部下に対する援助のできる社会人を育成することを目標とする。 精神保健福祉論 a を踏まえて（精神保健福祉論 b のみを履修することも可能である）、それぞれの生活の場（家族、学校、職場、地域）から見た精神保健を考えていく。さらに、世界とわが国の医療、精神科医療の現状について学ぶ。講義全体を通して自分の身の回りの実例やマスメディアの報道などを精神保健の視点からとらえ、これらの事例に関する討論を通じて精神保健の知識と理解を深めてゆく。	1 オリエンテーション；精神保健とは？ 2 生活の場から見た精神保健（1）家族の精神保健(1) 3 生活の場から見た精神保健（2）家族の精神保健(2) 4 生活の場から見た精神保健（3）学校の精神保健（1） 5 生活の場から見た精神保健（4）学校の精神保健（2） 6 ストレスとその対処法 7 生活の場から見た精神保健（5）職場の精神保健（1） 8 生活の場から見た精神保健（6）職場の精神保健（2） 9 生活の場から見た精神保健（7）職場の精神保健（3） 10 生活の場から見た精神保健（8）地域の精神保健（1） 11 生活の場から見た精神保健（9）地域の精神保健（2） 12 わが国の精神科医療の現状 13 医療費の抑制・市場原理の導入・混合診療の解禁の得失 14 タバコ・アルコール・依存性薬物について 15 まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストはとくに指定しない。レジュメを配布する。 参考文献は講義の際に紹介する。	試験の成績による。 講義の際の提出物は加点の対象とする。 原則として、再試験・追試験は行わない。

13 年度以降（春） 01～12 年度（春）	医療経済学 a 医療・福祉概論 a	担当者	山岡　淳

講義目的、講義概要	授業計画
本講義では、財(サービス)としての「医療」が持つ特徴を経済学の理論により説明します。 「医療」という財(サービス)は、一般的な財(サービス)とは異なった性質をもちます。ゆえに医療を利用する個人や、提供する医療機関(病院等)が形成する市場や、経済主体の行動も特徴を有します。こうした財や経済主体の特徴を経済学の理論を用いて説明するのが、医療経済学です。 講義の中では、日本や諸外国における医療制度について簡単に解説したうえで、医療経済学の理論について紹介します。 本講義を履修される学生の皆さんには、医療経済学の導入部にあたる理論を習得することを目的とします。 講義は授業計画通り進めていきますが、履修者の理解度を考慮しますので、一部の単元の内容が変更されることがあります。 なお、試験には計算問題を含みます。	1. イントロダクション 2. 社会保障の中の医療 3. 日本の医療政策の歴史 4. 日本の医療政策の特徴 5. 医療サービスの特殊性 6. 日本の医療制度の独自性 7. 医療サービスのマーケット 8. 患者の医療経済学 9. 医療機関(病院)の医療経済学 10. 地域レベルの医療経済学 11. 国レベルの医療経済学 12. 医療保険の仕組み 13. 医療費の適正化 14. 医療の質の向上 15. 総括
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：牛越博文『医療経済学入門』岩波書店。	期末試験(90%)および授業への参加度（10%)による評価。なお、出席回数が 3 回以下の履修者の成績は F(不可)とする。詳細な評価方法は授業中に紹介する。

13 年度以降（秋） 01～12 年度（秋）	医療経済学 b 医療・福祉概論 b	担当者	山岡　淳

講義目的、講義概要	授業計画
本講義では、具体的に日本の医療の制度的な特徴や、現場で生じている課題について、医療経済学の理論を用いて解説します。 本講義では、「医師不足」「皆保険」「終末期医療」などといったトピックを取り上げ、それぞれについて医療経済学の理論を用いて解説を行ないます。その上で、現在の医療経済学の成果と限界について、紹介します。 本講義を履修される学生の皆さんには、医療経済学の理論と現実との整合性がどの程度であるか理解することを目的とします。 講義は授業計画通り進めていきますが、履修者の理解度を考慮しますので、一部の単元の内容が変更されることがあります。本講義は医療経済学の理論の応用となりますので、履修を考えている皆さんは前期の医療経済学 a をあらかじめ履修されている事が望まれます。 なお、試験には計算問題を含みます。	1. イントロダクション 2. 日本の医療政策の展開 3. 日本の医療政策の特徴と課題の概要① 4. 日本の医療政策の特徴と課題の概要② 5. 医療サービスと自由競争 6. 医療サービスと市場の失敗 7. 公的保険制度の必要性 8. 病床規制と供給者誘発需要仮説 9. 医療機関の広告規制と情報の非対称 10. 医師不足問題における必要と需要 11. 救急医療体制の現状と課題 12. 医療と介護の境界領域 13. 医療と介護のサービスの代替補完関係 14. 日本人の死生観と終末期医療 15. 総括
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：河口洋行『医療の経済学』日本評論社。	期末試験(90%)および授業への参加度（10%)による評価。なお、出席回数が 3 回以下の履修者の成績は F(不可)とする。詳細な評価方法は授業中に紹介する。

01～12 年度（春）	現代文化論 a	担当者	柴崎　信三

講義目的、講義概要	授業計画
古来、文明史はグローバリゼーションの歴史の集積でもあるが、米国がこの百年ほどの間に世界に及ぼしたものはきわめて大きい。9/11、リーマンショックなどの直近の大きな出来事から振り返って、とくに 20 世紀の世界に米国文化がもたらしたものの意味を考える。 言語、宗教、生活習慣、社会システム、人々の価値観など「文化」がかかわる領域は幅広い。20 世紀の社会はそれぞれの国や地域の固有性に根ざしながら、民主主義という統治の仕組みから市場経済システムのありかたや大量消費の文化など、米国というモデルの強い影響力の下で統合されてきたとみることができる。 21 世紀の今日、その米国の文化的な覇権が揺らいでいることは、9/11 から金融危機や国際秩序の混乱を見るまでもない。日本や欧州諸国に比べれば、米国の歴史は浅く、その若い人工的な国家が超大国となって 20 世紀の覇権を世界にもたらしてきた文化的な影響力の由来とその限界を、歴史にさかのぼって考える。国家や民族、地域の文化が持つ固有性と、それを飲み込む普遍性を通してグローバリゼーションの意味を学びたい。	1　はじめに 2　文明のかたち 3　「帝国」と覇権 4　フランクリン型人間像 5　トクヴィルが見た米国 6　WASP と移民国家 7　ロックフェラーと石油の世紀 8　大量生産・大量消費の文化 9　冷戦と「豊かな時代」 １０　「信頼」と社会 １１　「大きな政府」から「小さな政府」へ １２　米国標準とソフトパワー １３　アメリカンシステムと金融危機 １４　主役はどこへー文化の覇権の行方 １５　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
各回、資料を配布する。渡辺靖『文化と外交』（岩波新書）を参考文献とする。	定期試験の成績（80%）に加えて、通常の授業で課するリポートの実績（20%）を勘案して評価する。

01～12 年度（秋）	現代文化論 b	担当者	柴崎　信三

講義目的、講義概要	授業計画
「日本」とは何だろう。われわれの生きている場は、それぞれの言語や風土、民族や宗教、伝統と文化の下に置かれている。現代社会はこうした固有の環境がグローバリズムという大きなうねりと衝突し、あるいは融合して変化しながら、新たな文化のかたちとなった。 中国文明の強い影響と極東の島国という地理的な条件の下で、日本は古来独特の文化を育んできた。外来の知識や技術の積極的な受け容れとその固有の風土への融合による、ハイブリッド（混合）型の文化がその特徴といわれる。明治維新以降の日本は近代化を進めた結果、アジアの先頭を切って西欧列強へ仲間入りした。近隣諸国の植民地化と敗戦という負の遺産を超えて、戦後に果たした復興と経済大国への道には、そうした日本の文化的な特質が少なからず寄与している。 近代の日本というモデルを通して、文芸や美術などの表象から社会システムや技術のありかたなど、その「文化」のさまざまな現れ方を探り、グローバリズムと伝統や固有の価値とのかかわりを考える。グローバル化の波に異文化がどのように向き合ってきたかを問うとともに、普遍的な価値と固有の価値のダイナミックな交渉とその葛藤のプロセスをそこで学んでゆきたい。	1　はじめに 2　脱亜入欧とジャポニスム 3　「蝶々夫人」と武士道 4　日本型システムの起源 5　天皇制という仕組み 6　敗戦とアメリカの影 7　1955 年体制と戦後日本 8　MADE　IN　JAPAN 9　高度成長と中流社会 １０　ブランドと消費社会 １１　日本礼賛と日本たたき １２　表象としての日本 １３　＜日本＞という価値 １４　グローバリズムと文化 １５　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
各回、資料を配布する。夏目漱石『三四郎』（岩波文庫）、ロナルド・ドーア『働くということ』（中公新書）を参考文献とする。	定期試験の成績（80%）に加えて、通常の授業で課するリポートの実績（20%）を勘案して評価する。

01～12 年度（春）	経済外国語Ｉａ（再履修者用）・経営外国語Ｉａ（再履修者用）	担当者	奥山 正司

講義目的、講義概要	授業計画
２１世紀に入り、日本は本格的な高齢社会をむかえようとしている。高齢化や高齢者に関しては、社会福祉や保健･医療の分野だけでなく、経済学及び法律学的な問題などさまざまな視点から論ぜられるようになってきている。こうした中で、高齢者と家族、地域社会とのかかわり及び寝たきり老人や認知症高齢者など要介護高齢者を対象とした狭義の福祉や保健･医療サービスなどについては、今後どのようにしていくかというきわめて重要な課題がある。本年度はそれらの課題を視野に入れながら、高齢者問題について、日本の農村及び大都市及び英国の文献を読むことにするとともに、その分野について考える力を身につけさせる。	１．授業の進め方及び内容の紹介 ２．東北農村のアジア系外国人妻の生活と高齢者介護（1） ３．東北農村のアジア系外国人妻の生活と高齢者介護（2） ４．日本を含む高齢者の５か国調査の内容（1） ５．日本を含む高齢者の５か国調査の内容（2） ６．日本を含む高齢者の５か国調査の内容（3） ７．英国における高齢者の家族生活（1）全体の概観 ８．英国における高齢者の家族生活（2）家庭と家族 ９．英国における高齢者の家族生活（3）生活と親族 10．英国における高齢者の家族生活（4）家族と介護 11．英国における高齢者の家族生活（5）家庭経済 12．英国における高齢者の家族生活（6）息子と娘 13．英国における高齢者の家族生活（7）兄弟と姉妹 14．英国における高齢者の家族生活（8）拡大家族 15．英国における高齢者の家族生活（9）家族と地域

テキスト、参考文献	評価方法
授業のはじめに、コピーした原書を配布する。S.Okuyama, Farmer's Successors and the Immigration of Female Asian Spouses in Rural Japan *Elderly parents attitudes toward the relationship with their children*, 2007	発表（70%）を基礎にして，授業参加点（20%）及びレポート（１０%）を加味して総合的に評価する。

01～12 年度（秋）	経済外国語Ｉｂ（再履修者用）・経営外国語Ｉｂ（再履修者用）	担当者	奥山 正司

講義目的、講義概要	授業計画
２１世紀に入り、日本は本格的な高齢社会をむかえようとしている。高齢化や高齢者に関しては、社会福祉や保健･医療の分野だけでなく、経済学及び法律学的な問題などさまざまな視点から論ぜられるようになってきている。こうした中で、高齢者と家族、地域社会とのかかわり及び寝たきり老人や認知症高齢者など要介護高齢者を対象とした狭義の福祉や保健･医療サービスなどについては、今後どのようにしていくかというきわめて重要な課題がある。本年度はそれらの課題を視野に入れながら、高齢化について日本及び英国を中心にした文献を読むことにするとともに、その分野について考える力を身につけさせる。	１．授業の進め方及び内容の紹介 ２．退職とその後の生活 ３．貧困と経済的生活 ４．孤独と孤立 ５．国の高齢者への保健医療福祉サービス ６．国の高齢者への保健医療福祉サービス ７．国の高齢者へのサービス ８．国の高齢者への保健医療福祉サービスサービス ９．国の高齢者への保健医療福祉サービスサービス 10．家族・子どもとの接触頻度 11．家族と高齢者問題 12．家族と高齢者問題 13．家族と高齢者問題 14．結論 15．授業のまとめ

テキスト、参考文献	評価方法
授業のはじめに、コピーした原書を配布する。 Text: Peter Townsend, *The Family Life of Old People,* Pelican Book	発表（70%）を基礎にして，授業参加点（20%）及びレポート（１０%）を加味して総合的に評価する。

01～12 年度（春）	経済外国語Ｉa(再履修者用)・経営外国語Ｉａ(再履修者用)	担当者	清水　公一

講義目的、講義概要	授業計画
私たちが経営学を勉強しようとするとき、アメリカやヨーロッパで書かれた文献を読んでグローバルに対処して行かなければ十分とは言えません。本講座は英文を読んで、その内容が理解できるようにトレーニングすることを目的としています。 経営の資源にはヒト・モノ・カネ・情報があり、これらの中で情報である企業のコミュニケーションに焦点を絞って、読んで行きたいと思います。内容はマーケティングや広告について見ていくようにしたいと思います。 授業の方法としては、予めプリントを渡しますので、１行目に英文を書き、２行目に分らない単語について英和辞典で調べてその意味を書き込み、３行目にセンテンスごとに日本語に訳してみる。これをレポートとして授業の後に提出してもらうということを繰り返してゆきたいと思います。 学期末にこれまでやったところの英文和訳の課題をやってもらいます。	1.　教材の配布と授業の進め方 2.　Commensal Marketing No.1. 3.　Commensal Marketing No.2. 4.　Commensal Marketing No.３. 5.　Symbiotic Marketing No.1. 6.　Symbiotic Marketing No.2. 7.　Symbiotic Marketing No.3. 8.　Advertising　Strategy No.1. 9.　Advertising　Strategy No.2. 10.　Advertising　Strategy No.3. 11.　Advertising　Strategy No.4. 12.　Advertising Media No.1. 13.　Advertising Media No.2. 14.　Advertising Media No.3. 15.　Advertising Media No.4.
テキスト、参考文献	**評価方法**
Brian Solis(2011) *Engage!: The Complete Guide for Brands and Businesses to Build, Cultivate, and Measure Success in the New Web*, John Wiley & Sons, Inc.	評価方法：期末試験の結果を70%、平常授業における課題レポートの結果を30%のウェイトで評価します。

01～12 年度（秋）	経済外国語Ｉb(再履修者用)・経営外国語Ｉb(再履修者用)	担当者	清水　公一

講義目的、講義概要	授業計画
経営外国語Ｉａに続いて、経営外国語Ｉbでは経営に関する英文を読んで、その内容が理解できるようにトレーニングすることを目的としています。 経営の資源にはヒト・モノ・カネ・情報があり、人事管理や労務管理、商品開発やサービスの開発、簿記・会計、そして、コンピュータや企業の広告コミュニケーションについて学習してゆきます。 これらの中で情報である企業のコミュニケーションに焦点を絞って、読んで行きたいと思います。 授業の方法としては、予めプリントを渡しますので、１行目に英文を書き、２行目に分らない単語について英和辞典で調べてその意味を書き込み、３行目にセンテンスごとに日本語に訳してみる。これをレポートとして授業の後に提出してもらうということを繰り返してゆきたいと思います。 学期末にこれまでやったところの英文和訳の課題をやってもらいます。	1.　教材の配布と授業の進め方 2.　Advertising effectiveness:　Newspaper. No.1. 3.　Advertising effectiveness:　Newspaper. No.2. 4.　Advertising effectiveness:　Magazine. 5.　Advertising effectiveness:　Radio. 6.　Advertising effectiveness:　Television. No.1. 7.　Advertising effectiveness:　Television. No.2. 8.　Advertising effectiveness:　Television. No.3. 9.　Advertising effectiveness:　Television. No.4. 10.　Advertising effectiveness:　Out Of Home. No.1. 11.　Advertising effectiveness:　Out Of Home. No.2. 12.　Advertising effectiveness:　Out Of Home. No.3. 13.　Marketing Communication No.1. 14.　Marketing Communication No.2. 15.　Marketing Communication No.3.
テキスト、参考文献	**評価方法**
Ronald Lane, Karen W. King and Thomas Russell(2005) *Kleppner's Advertising Procedure*, 16th ed.,	評価方法：期末試験の結果を70%、平常授業における課題レポートの結果を30%のウェイトで評価します。

01～12 年度（春）	経済外国語Ｉa（再履修者用）・経営外国語Ｉa （再履修者用）	担当者	鈴木　淳

講義目的、講義概要	授業計画
経営学に関する英語の文献を読み、用語や意味、内容を把握するための能力向上を目的とします。 経営学、特に研究開発や生産または意思決定に関する英語文献をテキストとし、当番を決めて分担して読み、決められた日に担当部分の内容を発表し、それに対して出席者間で質疑応答や補足説明などを行ってもらう予定です。 第１回目の授業では、テキスト候補の文献の紹介を行い使用テキストを決定し、各受講生の担当する部分を決める予定ですので、受講希望の学生は欠席しないようにして下さい。また、担当部分の発表当日に無断欠席しないで下さい。	1. ガイダンス、テキストの説明、分担決定 2～15. テキストの輪読、質疑、補足説明
テキスト、参考文献	**評価方法**
第１回目の授業で指示します。	課題の発表状況（60%）、授業への参加状況（20%）、レポート（20%）程度の基準で評価する予定です。

01～12 年度（秋）	経済外国語Ｉb（再履修者用）・経営外国語Ｉb （再履修者用）	担当者	鈴木　淳

講義目的、講義概要	授業計画
経営学に関する英語の文献を読み、用語や意味、内容を把握するための能力向上を目的とします。 経営学、特に研究開発や生産または意思決定に関する英語文献をテキストとし、当番を決めて分担して読み、決められた日に担当部分の内容を発表し、それに対して出席者間で質疑応答や補足説明などを行ってもらう予定です。 第１回目の授業では、テキスト候補の文献の紹介を行い使用テキストを決定し、各受講生の担当する部分を決める予定ですので、受講希望の学生は欠席しないようにして下さい。また、担当部分の発表当日に無断欠席しないで下さい。	1. ガイダンス、テキストの説明、分担決定 2～15. テキストの輪読、質疑、補足説明
テキスト、参考文献	**評価方法**
第１回目の授業で指示します。	課題の発表状況（60%）、授業への参加状況（20%）、レポート（20%）程度の基準で評価する予定です。

01～12 年度（春）	経済外国語Ｉa（再履修者用）・経営外国語Ｉa（再履修者用）	担当者	徳永　潤二

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は、英語で書かれた経済学の文献についての読解力を向上させることを目的とします。 Bowels, S, R. Edwards, and F. Roosevelt, *Understanding Capitalism: Competition, Command, and Change, Third Edition*, Oxford University Press をテキストとします。同時に、講義内では、時事英語に触れるためにFinancial TimesやWall Street Journalの新聞記事の読解とヒアリングのテストも毎回行います。 毎回、できるだけ多くの人に英語の読解を行ってもらいますので、予習は必須です。授業中の私語や携帯電話の利用は厳禁です。授業に集中して下さい。	1. イントロダクション 2. 中学・高校英語の復習 3. Capitalism Shakes the World(1) 4. Capitalism Shakes the World(2) 5. Capitalism Shakes the World(3) 6. American Capitalism: Accumulation and Change(1) 7. American Capitalism: Accumulation and Change(2) 8. American Capitalism: Accumulation and Change(3) 9. Supply and Demand: How Markets Work(1) 10. Supply and Demand: How Markets Work(2) 11. Supply and Demand: How Markets Work(3) 12. Competition and Coordination: The Invisible Hand(1) 13. Competition and Coordination: The Invisible Hand(2) 14. Competition and Coordination: The Invisible Hand(3) 15. Competition and Coordination: The Invisible Hand(4) 受講生の理解度に応じて、上記の授業計画を変更することもあります。
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストの必要な部分と新聞記事は授業内で配布します。英語に苦手意識を持っているならば、中学・高校で使用した教科書と参考書も役立ちます。	学期末テスト（50%）、予習の出来や講義での受け答えと積極的な参加の姿勢（50%）により総合的に評価します。

01～12 年度（秋）	経済外国語Ｉb（再履修者用）・経営外国語Ｉb（再履修者用）	担当者	徳永　潤二

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は、春季の経済外国語Ｉa（再履修者用）に続いて、英語で書かれた経済学の文献についての読解力を向上させることを目的とします。 Bowels, S, R. Edwards, and F. Roosevelt, *Understanding Capitalism: Competition, Command, and Change, Third Edition*, Oxford University Press をテキストとします。同時に、講義内では、時事英語に触れるためにFinancial TimesやWall Street Journalの新聞記事の読解とヒアリングのテストも毎回行います。 毎回、できるだけ多くの人に英語の読解を行ってもらいますので、予習は必須です。授業中の私語や携帯電話の利用は厳禁です。授業に集中して下さい。	1. イントロダクション 2. The Mosaic of Inequality(1) 3. The Mosaic of Inequality(2) 4. The Mosaic of Inequality(3) 5. Aggregate Demand, Employment, and Unemployment(1) 6. Aggregate Demand, Employment, and Unemployment(2) 7. Aggregate Demand, Employment, and Unemployment(3) 8. Aggregate Demand, Employment, and Unemployment (4) 9. The Dilemmas of Macroeconomic Policy(1) 10. The Dilemmas of Macroeconomic Policy(2) 11. The Dilemmas of Macroeconomic Policy(3) 12. The Dilemmas of Macroeconomic Policy(4) 13. The Future of Capitalism(1) 14. The Future of Capitalism(2) 15. The Future of Capitalism(3) 受講生の理解度に応じて、上記の授業計画を変更することもあります。
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストの必要な部分と新聞記事は授業内で配布します。英語に苦手意識を持っているならば、中学・高校で使用した教科書と参考書も役立ちます。	学期末テスト（50%）、予習の出来や講義での受け答えと積極的な参加の姿勢（50%）により総合的に評価します。

01～12 年度（春）	経済外国語Ｉa(再履修者用)・経営外国語Ｉa(再履修者用)	担当者	益山　光央

講義目的、講義概要	授業計画
米国の大学で使われている国際経済学のテキストを読む。予定では *World Trade and Payments*, 2nd ed. Ronal Jones & Richard Cave の貿易に関する基本的な部分を担当者が発表し、それについてディスカッションする。具体的には二つのパート、The Basic Trade Model と Production, Income Distribution, and Trade Patterns の主要部分を扱う。英文・専門用語を理解するという目標と国際経済学を学ぶという目標があるので、基本的な英単語や英文法の知識を習得しているという前提ですすめます。英語が不得意の受講者は、予習、復習を欠かさないで欲しい。一年間、落ち着いてじっくり学習する受講生、困難な事から逃げない学生を希望する。 開講時にさらに良いテキストがみつかれば変更する可能性もあります。	The Basic Trade Model 1　International Exchange of Commodities 2　International Exchange of Commodities 3　International Exchange of Commodities 4　International Exchange of Commodities 5　International Exchange of Commodities 6　Production and the Demand for Imports 7　Production and the Demand for Imports 8　Production and the Demand for Imports 9　Production and the Demand for Imports １０　Production and the Demand for Imports １１　Applications of the Basic Trade Model １２　Applications of the Basic Trade Model １３　Applications of the Basic Trade Model １４　予備 １５　質問
テキスト、参考文献	**評価方法**
必要な部分を教室において配布する。	試験のみで評価

01～12 年度（秋）	経済外国語Ｉb(再履修者用)・経営外国語Ｉb(再履修者用)	担当者	益山　光央

講義目的、講義概要	授業計画
春学期の続きで、Production, Income Distribution, and Trade Patterns を読む。	1　The Ricardian Model 2　The Ricardian Model 3　The Ricardian Model 4　The Ricardian Model 5　Factor Endowments and Multilateral Trade 6　Factor Endowments and Multilateral Trade 7　Factor Endowments and Multilateral Trade 8　Factor Endowments and Multilateral Trade 9　Factor Endowments and Multilateral Trade １０　Patterns of Trade and Economic Chanage １１　Patterns of Trade and Economic Chanage １２　Patterns of Trade and Economic Chanage １３　Patterns of Trade and Economic Chanage １４　まとめ １５　質問
テキスト、参考文献	**評価方法**
必要な部分を教室において配布する。	試験のみで評価

01～12 年度（春）	経済外国語Ｉａ（再履修者用）・経営外国語Ｉａ(再履修者用)	担当者	山越　徳

講義目的、講義概要	授業計画
この科目は外国語を通して、経済の新しい動きや姿について触れると同時に、専門用語についての知識を増して、国際化の進行に少しでも順応できるようにすることを意図している。そこで本講義ではニュービジネス、新商品、技術変化、グローバリゼーション、産業集積、地域活性化、雇用問題などの関連文献の中から、幾つかのペーパーを選び出し、それを共に読み、議論し、理解を進めていくことにする。そのためより多くの課題に触れられるよう、一回につき数ページをこなし多くのペーパーに取り組みたい。 なお授業中、関連項目に触れたり、調べたりするので辞書を常に持参すること また関連事項について次回までに調べてきてもらう場合もある。 扱っている事項を理解するために日本語の関連文献を合わせて読むことを望む。	なるべく多くの課題、論文を読み進めるため、一回につき、4～5 ページは読み進めていきたい。
テキスト、参考文献	**評価方法**
順次、ペーパーのコピーを授業で配布	課題ペーパー（授業で配布）を訳し、レポートを提出したものと、期末テストの結果および授業への参加度（授業の受け答え）による。特に再履修者には授業への参加度を重視する。

01～12 年度（秋）	経済外国語Ｉｂ（再履修者用）・経営外国語Ｉｂ(再履修者用)	担当者	山越　徳

講義目的、講義概要	授業計画
Ｉａの課題の関連ペーパーをさらに読み進めていく。したがってＩａとセットで履修することが望ましい。	同上
テキスト、参考文献	**評価方法**
同上	同上

01～12 年度（春）	経済外国語Ⅰb(再履修者用)・経営外国語Ⅰb (再履修者用)	担当者	黒川 文子

講義目的、講義概要	授業計画
本講義では、国際人として活躍するために必要である国際ビジネスに関する知識を獲得し、かつ実践的な英語能力を習得することを目標とする。 グローバル企業で働くためには、外国人とのコミュニケーション能力が必須となる。しかし、ビジネス英語の能力には、単なる会話能力だけではなく、相手の国の文化や、習慣、エチケットに関する知識まで含まれる。異文化を理解した上で国際ビジネスに携わるならば、ビジネスで成功することがより容易となるであろう。本講義ではそのようなニーズに答えるために、ビジネスに関する英語の読解，英作文の勉強をしていきます。	1 **講義の概要** 2 Chapter 1. SONY 3 Chapter 2. GUCCI: A FAMILY STORY 4 Chapter 3.SAM WALTON: FOUNDER OF THE WAL-MART EMPIRE 5 Chapter 4.IKEA 6 Chapter 5. ANDREW CARNEGIE 7 Chapter 6. ANITA RODDICK: THE BUSINESS OF BETTERING THE WORLD 8 Chapter 7. GOOGLE POWER! 9 Chapter 8. AMAZON: MORE THAN JUST A BOOKSELLER 10 Chapter 9. AZIM PREMJI: THE BILLIONAIRE OF BANGALORE 11 Chapter 10. SKYPE: LET'S TALK! 12 Chapter 11. EBAY: SOMETHING FOR EVERYONE 13 Chapter 12. STARBUCKS AROUND THE WORLD 14 Chapter 13. LENOVO: CHINA'S PC POWERHOUSE 15 **講義のまとめ**
テキスト、参考文献	**評価方法**
Andrew E. Bennett et al., *"Bottom Line Business Stories"*, SEIBIDO, 2012.	期末試験と授業への参加度によって、総合的に評価する。

		担当者	

講義目的、講義概要	授業計画
テキスト、参考文献	**評価方法**

		担当者	

講義目的、講義概要	授業計画

テキスト、参考文献	評価方法

01～12 年度(秋)	経済外国語Ⅰa（再履修者用）・経営外国語Ⅰa（再履修者用）	担当者	市原　博

講義目的、講義概要	授業計画
この授業は、経済問題に関する英語の文献を読めるようになることを目的に、英語文献の読解を行います。最初に経済英語の文章を読んでもらい、それに慣れた後、時々刻々変化する経済事象を扱った英語の文章を皆で読みます。それを基に、皆で意見を交換します。 教材としては、英字新聞の記事を中心に考えていますが、受講生の皆さんの関心に合わせて選ぶ予定です。 グローバル化が進み、英語での情報収集の能力がどのような仕事をするにも求められるようになりました。私は日本経済史を専門としていますので、以前はそれほど英語を使う機会がなかったのですが、近年は国際会議で英語で報告する機会が増え、海外の先生方との交流も必要になりました。そのため、英語力向上にかなりの時間とお金を費やしてきました。その苦労から得た教訓も皆さんに伝えられればと思います。 その他、授業時間の一部を使って、簡単なテーマについて自分の考えを英語で表現することもやってみたいと思います。	授業計画は以下の通りです。 第 1 回　ガイダンス 第 2 回～第 5 回　経済英語の文献の読解 第 6 回～第 14 回　経済関係の英文記事等の読解 第 15 回　まとめ 毎週事前に文献を渡し、予習をして来てもらいます。それほど長い英文ではありませんので、毎週英文を読むつもりでいて下さい。細かな進め方は受講生の皆さんと相談して決めます。

テキスト、参考文献	評価方法
読む文献をプリントして事前に配布する。	平常点（授業への参加度・発表など）を重視して 70%、期末レポート 30%で評価します。

		担当者	

講義目的、講義概要	授業計画

テキスト、参考文献	評価方法

01～12 年度（秋）	経済外国語Ｉa（再履修者用）・経営外国語Ｉa(再履修者用)	担当者	岡村　国和

講義目的、講義概要	授業計画
本講義の目的は、ヨーロッパやアジアの経済・金融事情の最新の情報を知ることにあります。 できるだけ平易な文章を選びますが、経済・ビジネス専門誌なので、知っている単語でも決まった専門訳がある単語が出てきますので、注意が必要です。 今年度は、ＥＵの財政問題について皆さんと一緒に輪読します。時々ディスカッションを行いますので、経済新聞や関連書物を図書館などで探して予習・事前準備をお願いします。 本講義の特徴は、英文和訳にあるのではなく、内容の理解とディスカッションにあります。英文和訳して終わる講義ではありませんので、注意してください。	①The economist (economist.com) の Business and finance から、ＥＵの財政問題について最新のトピックスを選んで輪読します。 ②第１回目はガイダンスですが第２回目から第 15 回目まで輪読を行います。 ③途中で何度かディスカッションを行います。 ④参考書などは随時紹介します。翻訳書がないテキストを使用しますが、関連した内容については邦文の書籍が多数ありますので、参考になるかと思います。 ⑤上記テキストはプリントして配布します。

テキスト、参考文献	評価方法
テキストはポルタに UP します。	講義への参加度を重視し、講義中の発表回数や小テスト、期末試験等で評価します。

01～12 年度（春）	経済外国語Ｉａ（留学生用）・経営外国語Ｉａ（留学生用）	担当者	童　適平

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は、日本の大学生が卒業するまでにマスターする英語力の基礎と同等レベル、また、世界中の企業やビジネスについて平易な英語でビジネスの実際の姿を読むことを通じて、英語力の向上と金融知識の同時取得を目的としている。 グローバルタスクフォース社が選んだ企業ファイナスの基礎知識を講義の内容とする。 講義は、主として受講者にテキストの音読、内容の解説（と和訳）をしてもらう形式で行われる。受講者全員に練習のチャンスを与えるように、毎回の授業の際に、次の授業の報告者を決める。	第 1 回 ガイダンス 第 2 回 ファイナンスの役割 第 3 回 投資家とは 第 4 回 時間的価値 第 5 回 単利と複利 第 6 回～ 第 7 回 投資の決定を将来の価値、現在の価値、収益率で考える 第 8 回 割引率とは 第 9 回 キャッシュフローと利益 第 10 回 キャッシュフローの流れ 第 11 回 なぜ利益ではなくキャッシュフローなのか 第 12 回 キャッシュフローの定義 第 13 回 永続価値 第 14 回 リスクとは何か 第 15 回 2 種類のリスク
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：グローバルタスクフォース著『英語で学ぶＭＢＡファイナンス』大和書房 2007 年	平時の授業の参加度合いと分担内容の準備を総合考慮して評価する

01～12 年度（秋）	経済外国語Ｉｂ（留学生用）・経営外国語Ｉｂ（留学生用）	担当者	童　適平

講義目的、講義概要	授業計画
講義目的と講義概要は基本的に春学期と同じである。春学期に続き、ローバルタスクフォース著『英語で学ぶＭＢＡファイナンス』の残りの部分を勉強する。 講義は、主として受講者にテキストの音読、内容の解説（と和訳）をしてもらう形式で行われる。受講者全員に練習のチャンスを与えるように、毎回の授業の際に、次の授業の報告者を決める。	第 1 回 なぜ資本コストなのか 第 2 回～ 第 3 回 資本コストとは 第 4 回 負債コストの計算 第 5 回～ 第 6 回 株主資本コストの計算 第 7 回 転換社債、新株引受権付き社債の資本コスト 第 8 回 加重平均資本コスト 第 9 回 正味現在価値法 第 10 回 内部収益法 第 11 回 割引回収機関法 第 12 回 会計上の収益率 第 13 回 収益性指標 第 14 回 投資の評価にどの方法を使うか 第 15 回 新たな投資評価手法
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：グローバルタスクフォース著『英語で学ぶＭＢＡファイナンス』大和書房 2007 年	平時の授業の参加度合いと分担内容の準備を総合考慮して評価する

08～12年度（春） 01～07年度（春）	外書講読ａ 経済外国語Ⅱａ・経営外国語Ⅱａ	担当者	岡村　国和

講義目的、講義概要	授業計画
本講義の目的は、ヨーロッパやアジアの経済・金融事情の最新の情報を知ることにあります。 できるだけ平易な文章を選びますが、経済・ビジネス専門誌なので、知っている単語でも決まった専門訳がある単語が出てきますので、注意が必要です。 今年度は、ＥＵの財政問題について皆さんと一緒に輪読します。時々ディスカッションを行いますので、経済新聞や関連書物を図書館などで探して予習・事前準備をお願いします。 本講義の特徴は、英文和訳にあるのではなく、内容の理解とディスカッションにあります。英文和訳して終わる講義ではありませんので、注意してください。	①The economist (economist.com) の Business and finance から、ＥＵの財政問題について最新のトピックスを選んで輪読します。 ②第１回目はガイダンスですが第２回目から第15回目まで輪読を行います。 ③途中で何度かディスカッションを行います。 ④参考書などは随時紹介します。翻訳書がないテキストを使用しますが、関連した内容については邦文の書籍が多数ありますので、参考になるかと思います。 ⑤上記テキストはプリントして配布します。
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストはポルタに UP します。	講義への参加度を重視し、講義中の発表回数や小テスト、期末試験等で評価します。

08～12年度（秋） 01～07年度（秋）	外書講読ｂ 経済外国語Ⅱｂ・経営外国語Ⅱｂ	担当者	岡村　国和

講義目的、講義概要	授業計画
秋学期も基本的には春学期と同様の方法で講義を進めます。 前期に引き続きＥＵの財政問題について皆さんと一緒に考えながら輪読します。時々ディスカッションを行いますので、経済新聞や関連書物を図書館などで検索して、予習や事前準備をお願いします。 本講義の特徴は、英文和訳にあるのではなく、内容の理解とディスカッションにあります。英文和訳して終わる講義ではありませんので、注意してください。	テキストについては、履修者の状況によって春学期テキストの継続（Ⅱａを履修済み）か、新規テキスト（Ⅱｂのみの履修者対象）にするかは履修者と相談して決めます。 さしあたり The economist (economist.com) の Business and finance から、ＥＵの財政問題に関する最新のトピックスを選んで輪読します。 その他については、春学期を参照して下さい。
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストはポルタに UP します。	講義への参加度を重視し、講義中の発表回数や小テスト、期末試験等で評価します。

08～12 年度（春） 01～07 年度（春）	外書講読 a 経済外国語Ⅱa・経営外国語Ⅱa	担当者	御園生　眞

講義目的、講義概要	授業計画
(1) 講義目的 グローバル史・グローバル経済史の英文著作を読み、新たな視点から世界の歴史を再検討する。 (2) 講義概要 履修者と相談のうえ授業の進め方を決定する。 (3) 注意 履修者は必ず予習をして出席すること。第 1 回の授業でテキストのプリントを配布するので、履修者は欠席しないこと。 (4) テキスト(予定) Jack Goldstone, Why Europe?: The Rise of the West in World History, 1500-1850	1. Preface 2. Introduction; Earth: A Global View 3. (続) 4. Chapter One; The World circa 1500: When Riches were in the East 5. (続) 6. (続) 7. Chapter Two; Patterns of Change in World History 8. (続) 9. (続) 10. Chapter Three; The Great Religions and Social Change 11. (続) 12. (続) 13. Chapter Four; Trade and Conquest 14. (続) 15. (続)
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストはプリントを作成し配布する。	授業への参加度、定期試験の成績などを総合して評価する。ただし 4 回欠席すると単位は認定されない。

08～12 年度（秋） 01～07 年度（秋）	外書講読 b 経済外国語Ⅱb・経営外国語Ⅱb	担当者	御園生　眞

講義目的、講義概要	授業計画
春学期に同じ。	1. Chapter Five; Family Life and Standards of Living 2. (続) 3. (続) 4. Chapter Six; States, Laws, Taxes, and Revolutions 5. (続) 6. (続) 7. Chapter Seven; Changing the Pace of Change: Was There an Industrial Revolution? 8. (続) 9. (続) 10. Chapter Eight; Trajectories of Science in Asia and Europe 11. (続) 12. (続) 13. Conclusion; The Rise of the West: A Temporary Phase? 14. (続) 15. (続)
テキスト、参考文献	**評価方法**
春学期に同じ。	春学期に同じ。

08～12 年度（秋） 01～07 年度（秋）	外書講読 a（中国語） 経済外国語Ⅱ a (中国語)・経営外国語Ⅱa（中国語)	担当者	全　載旭

講義目的、講義概要	授業計画
この授業では経済・経営外国語Ⅰ（中国語）を履修し、さらに中国経済に関心のある学生を対象にする。 ただし経済・経営外国語Ⅰ（中国語）を履修しなくてもこの授業が履修できる中国語の能力があれば対象にする。授業の内容は履修者の中国語習得レベルに合わせて調整する。 中国政治・経済及びアジア経済に関する新聞記事（中国語と日本語）を取り上げて授業を進めるが、必要に応じて講義とディスカッションもする。	【秋学期　週 2 回開講】 最初の授業時に説明するが、受講者と相談して決める。
テキスト、参考文献	**評価方法**
第一回目の授業にて参考文献を紹介する。 必要に応じて資料を配布する。	筆記試験によって評価する

08～12 年度（秋） 01～07 年度（秋）	外書講読 b（中国語） 経済外国語Ⅱb 中国語)・経営外国語Ⅱb(中国語)	担当者	全　載旭

講義目的、講義概要	授業計画
最近の中国経済の動向や日中経済関係などの経済関連記事を選び、それに沿って授業を進める。 講読資料の選択には学生諸君の提案も可能である。 中国政治・経済及びアジア経済に関する新聞記事（中国語と日本語）を取り上げて授業を進めるが、必要に応じて講義とディスカッションもする。	【秋学期　週 2 回開講】 最初の授業時に説明するが、受講者と相談して決める。
テキスト、参考文献	**評価方法**
第一回目の授業にて参考文献を紹介する。 必要に応じて資料を配布する。	筆記試験によって評価する

01～14 年度（春）	マクロ経済学 a	担当者	塩田　尚樹

講義目的、講義概要

マクロ経済理論の標準的な内容の理解をめざします．新聞・雑誌などの経済記事を読むための基礎知識としても有効です．

まず，「一国全体の経済活動をどのようにとらえるか」という問題からスタートし，GDP・国民所得・物価指数・雇用量といったマクロ経済指標を解説します．次に，これらの水準がどのような要因によって決まるのかということに目を向け，さらに貨幣や証券の需給との関係について検討します．また，経済活動における金融機関の役割についても触れる予定です．なお，右の計画は最速の場合を想定しています．

見慣れない記号や用語がたくさん登場すると思います．また内容も，はじめは抽象的に感じられるかもしれません．けれども，一度『ノル』と後は一本調子です．一気に見通しがよくなると思います．そこまで辛抱してください．

なお，「各人の授業を受ける権利」は「他の人の授業を受ける権利」を侵害しない範囲内で行使されるべきだと考えますので，授業態度のよくない人は退出してもらいます．

授業計画

1. マクロ経済学的な視点の必要性
2. GDP とは？（簡単な計算例）
3. 国民経済計算の三面等価
4. 物価指数
5. 雇用指標
6. GDP 決定の理論
7. 財政政策の効果
8. 貨幣とは？
9. 債券価格と利子率
10. 実物投資と資金調達
11. 貨幣と債券の選択
12. GDP と利子率の同時均衡
13. 財政政策の効果の修正
14. 金融政策の効果
15. まとめ

テキスト

中谷武 他(2009)『新版マクロ経済学』勁草書房

評価方法

定期試験で評価します．ただし，講義中の私語などの迷惑行為で減点する場合があります．

01～14 年度（秋）	マクロ経済学 b	担当者	塩田　尚樹

講義目的、講義概要

本年度の「マクロ経済学 a」の内容の理解を前提として進めます．履修しなかった人は独習が必要です．

今日の日本経済を理解する上で不可欠な，国際的な取引についての話題を積極的に取り上げる予定です．

まず，外国為替市場や通貨制度について一通りのことを学んだ後，国際的な取引に関する統計を読む能力を身につけます．次に，投機や金融派生商品など比較的新しいトピックについて概観します．その後，為替レートの決定理論や主要なマクロ変数に関する決定理論を学びます．

ただし，春学期の進度，および，春学期の定期試験の結果により，授業計画を大幅に変更する場合がありますので気をつけてください．第 1 回目の授業の際，詳しくお知らせします．

なお，春学期同様，「各人の授業を受ける権利」は「他の人の授業を受ける権利」を侵害しない範囲内で行使されるべきだと考えますので，授業態度のよくない人は退出してもらいます．

授業計画

1. 春学期の概要と秋学期の授業計画の確認
2. 対外決済と外国為替市場
3. 国際通貨制度
4. 国際収支統計 (1)
5. 国際収支統計 (2)
6. 投機とは？
7. 通貨オプションと金融派生商品
8. 為替レート決定理論 (1)
9. 為替レート決定理論 (2)
10. マンデル・フレミングモデル (1)
11. マンデル・フレミングモデル (2)
12. 開放体系での経済政策 (1)
13. 開放体系での経済政策 (2)
14. 国際協調介入
15. まとめ

参考書

中谷武 他(2009)『新版マクロ経済学』勁草書房

評価方法

定期試験で評価します．ただし，講義中の私語などの迷惑行為で減点する場合があります．

01～14 年度（春）	マクロ経済学 a	担当者	須藤　時仁

講義目的、講義概要	授業計画
個人による消費、企業による生産・投資・輸出入を一国の集計ベースで見たときに、それらはどのような要因で決まるのだろうか。また、それらを合計した一国経済の活動水準はどのように決まるのだろうか。そこには当然、政府や中央銀行による財政・金融政策もかかわってくるが、それらの経済政策は経済活動にどのような影響を及ぼすのだろうか。こうした問題を扱うのがマクロ経済学である。 本講義では、まず、一国経済の全体像を表す国民経済計算を説明する。次いで、家計による消費と貯蓄、企業による設備投資がどのように決まるのかを考える。最後に、こうした家計や企業の経済行動をベースとした時、一国経済の生産規模がどのように決まるのかを示す。 講義ではマクロ経済理論の説明だけでなく、現実の日本経済にも言及しながら進めていく。	1. イントロダクション 2. 国民経済計算とは 3. 三面等価の原則 4. 消費関数 5. ライフサイクル仮説 6. 恒常所得仮説 7. 貯蓄関数と貯蓄率 8. 設備投資と資本ストックの概念 9. 資本ストックと加速度原理 10. 設備投資の決定要因：金利と期待 11. 有効需要の原理 12. 均衡国民所得 13. 乗数の考え方 14. 乗数と経済政策 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストは特に指定しない。講義ではレジメを配り、それに基づいて進める。	定期試験により評価する。

01～14 年度（秋）	マクロ経済学 b	担当者	須藤　時仁

講義目的、講義概要	授業計画
マクロ経済学 a では、消費、設備投資といった生産物市場のみを取り上げ、一国経済の生産規模がどのように決定されるのかを考えた。本講義では、さらに貨幣市場、労働市場、海外市場を順次取り込む形で拡張していく。 この拡張によって 2 つのメリットが生じる。1 つは、一国の生産規模だけでなく、利子率、物価、為替レートなどの経済変量がどのように決まるかを分析する枠組みが得られることである。2 つ目は、政府による財政政策、中央銀行による金融政策が生産規模や利子率などに及ぼす影響をより精密に分析できるようになることである。 講義ではマクロ経済理論の説明だけでなく、現実の日本経済にも言及しながら進めていく。	1. イントロダクション 2. 貨幣市場とは：貨幣量の概念 3. 貨幣需要 4. 利子率の決定 5. 財市場と IS 曲線 6. 貨幣市場と LM 曲線 7. IS―LM 分析と財政・金融政策 8. 労働市場とは 9. 財・貨幣市場と AD 曲線 10. 労働市場と AS 曲線 11. AD―AS 分析と財政・金融政策 12. 為替レート決定のメカニズム 13. マンデル・フレミングモデルの考え方 14. マンデル・フレミングモデルと財政・金融政策 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストは特に指定しない。講義ではレジメを配り、それに基づいて進める。	定期試験により評価する。

01～14 年度（春）	マクロ経済学 a	担当者	山下　裕歩

講義目的、講義概要	授業計画
マクロ経済学は、国内総生産（GDP）、利子率、失業率、貨幣供給量といったマクロ経済を表す変数の値やその変化を観察することを通じて、一国の経済活動全体の運動を考察する学問である。特に GDP 水準の決定メカニズムを考察することが主要な目的である。そのためにまず、そもそも生産とは何かといった問題をはじめとして、マクロ経済を表す変数の定義を理解することが重要である。その上で、この講義では、ケインズ経済学と古典派経済学の対応関係を１つの視点としながら、マクロ経済学の初歩を学んでいく。マクロ経済学を学習することによって、現実の経済で発生する様々な現象やそれに対する経済政策のあり方を体系的に考察できるようになる。	1. マクロ経済学とは？ 2. 内生変数と外生変数 3. 生産と付加価値 4. 三面等価の原則 5. 完全雇用と不完全雇用 6. セイ法則 7. 有効需要原理 8. 消費１ 9. 消費２ 10. 45 度線モデル 11. 投資１ 12. 投資２ 13. 貨幣需要 14. 貨幣供給 15. 貨幣市場均衡
テキスト、参考文献	**評価方法**
講義ではレジュメを配布し教科書は特に指定しないが、参考書として以下を推薦する。初級：『マクロ経済学・入門』第４版、福田慎一・照山博司著、有斐閣アルマ、中級：『マンキュー経済学・Ⅱマクロ編』、グレゴリー・マンキュー著、東洋経済新報社	学期末テストにより評価する。

01～14 年度（秋）	マクロ経済学 b	担当者	山下　裕歩

講義目的、講義概要	授業計画
マクロ経済を一般均衡論的立場から考察すること、各モデル間の類似点・相違点を理解すること、この 2 点が主要な講義目的である。具体的には、最も標準的なケインズ経済学の理論モデルである IS－LM モデルをはじめとして、AD－AS モデル、古典派モデルを学ぶ。また、財政・金融政策の基本事項を上記のマクロ経済モデルに立脚しながら学習する。首尾一貫した理論体系を学ぶことによって、様々な経済現象をつぎはぎの説明で理解・解釈してしまうという誘惑・失敗から開放され得る。なお、春学期のマクロ経済学 a と合わせて受講することが望ましい。	1. 労働市場 2. 生産物市場 3. 貨幣市場 4. IS－LM モデル１ 5. IS－LM モデル２ 6. 財政・金融政策１ 7. 財政・金融政策２ 8. AD－AS モデル１ 9. AD－AS モデル２ 10. 古典派モデル１ 11. 古典派モデル２ 12. 新古典派総合 13. マクロ経済学の新展開 14. 練習問題の解説 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
講義ではレジュメを配布し教科書は特に指定しないが、参考書として以下を推薦する。初級：『マクロ経済学・入門』第４版、福田慎一・照山博司著、有斐閣アルマ、中級：『マンキュー経済学・Ⅱマクロ編』、グレゴリー・マンキュー著、東洋経済新報社	学期末テストにより評価する。

01～14 年度（春）	ミクロ経済学 a	担当者	小林　進

講義目的、講義概要	授業計画
受講者が経済理論を理解して現実の経済問題に応用できる水準に達することを目標とする。ただし受講者のすべて人のレベルが必ずしも高いとはいえないので、場合によっては初歩的な経済理論にも随時触れる予定である。参考書については(原　則として本学図書館にあるものを)必要に応じて推薦し､受講者の一層の学習努力を促すようにする。	講義中にプリント配布 (完全競争を中心にして講義)
テキスト、参考文献	**評価方法**
使用しない。参考文献は講義中に指示する。	学期末試験

01～14 年度（秋）	ミクロ経済学 b	担当者	小林　進

講義目的、講義概要	授業計画
受講者が経済理論を理解して現実の経済問題に応用できる水準に達することを目標とする。ただし受講者のすべて人のレベルが必ずしも高いとはいえないので、場合によっては初歩的な経済理論にも随時触れる予定である。参考書については(原則として本学図書館にあるものを)必要に応じて推薦し、受講者の一層の学習努力を促すようにする。	講義中にプリント配布 (不完全競争を中心にして講義)
テキスト、参考文献	**評価方法**
使用しない。参考文献は講義中に指示する。	学期末試験

01～14 年度（春）	ミクロ経済学 a	担当者	高畑　純一郎

講義目的、講義概要	授業計画
＜講義の概要＞ ミクロ経済学では、各経済主体の直面する問題に注目し、最適な行動がどうなるかを考える。春学期は消費者行動の基本について学習する。 ＜講義の目的＞ ミクロ経済学の基礎として、消費者の直面する問題を把握し、それを解けるようになることが目的である。 ＜講義の方針＞ 1 年生配当の「経済学」履修を前提としたレベルで講義をする。講義中に練習問題を出題するので、手を動かしながら解いて理解を深めてもらう。	1　イントロダクション(ミクロ経済学とは) 2　需要曲線と供給曲線の導出とシフト 3　市場均衡と余剰分析 4　予算線と予算制約 5　選好と効用関数 6　無差別曲線と限界代替率 7　消費者の最適化行動(1) 8　消費者の最適化行動(2) 9　所得効果と代替効果 10　弾力性と財の分類 11　最適化問題の応用(1)：労働供給の決定 12　最適化問題の応用(2)：貯蓄の決定 13　パレート最適とその性質 14　交換経済での競争均衡と社会的最適 15　不確実性と期待効用
テキスト、参考文献	**評価方法**
授業では完全にテキストに沿って解説はしないが、参考書として以下を挙げておく； 『ミクロ経済学　第 2 版』伊藤元重　日本評論社 『マンキュー経済学Ⅰミクロ編』N.グレゴリー・マンキュー　東洋経済新報社	評価割合は試験(60%)、宿題(20%)、小テスト(20%)とする。

01～14 年度（秋）	ミクロ経済学 b	担当者	高畑　純一郎

講義目的、講義概要	授業計画
＜講義の概要＞ ミクロ経済学では、各経済主体の直面する問題に注目し、最適な行動がどうなるかを考える。秋学期は生産者行動の基本と、市場の価格メカニズムの性質について学習する。 ＜講義の目的＞ ミクロ経済学の基礎として、生産者の直面する問題を把握し、それを解けるようになること、また市場で決まる資源配分の性質を理解することが目的である。 ＜講義の方針＞ 1 年生配当の「経済学」履修を前提としたレベルで講義をする。講義中に練習問題を出題するので、手を動かしながら解いて理解を深めてもらう。	1　種々の費用 2　収入と利潤 3　生産者の最適化行動 4　生産技術と生産関数 5　生産者の参入と退出 6　要素需要の決定：労働と資本 7　短期と長期 8　生産可能性フロンティアと等量曲線 9　生産経済での競争均衡と社会的最適 10　厚生経済学の基本定理と市場の失敗 11　独占と参入障壁 12　独占企業の直面する問題 13　寡占と囚人のジレンマ 14　寡占と動学ゲーム 15　補足のトピックス
テキスト、参考文献	**評価方法**
授業では完全にテキストに沿って解説はしないが、参考書として以下を挙げておく； 『ミクロ経済学　第 2 版』伊藤元重　日本評論社 『マンキュー経済学Ⅰミクロ編』N.グレゴリー・マンキュー　東洋経済新報社	評価割合は試験(60%)、宿題(20%)、小テスト(20%)とする。

01～14 年度（春）	ミクロ経済学 a	担当者	藤山　英樹

講義目的、講義概要	授業計画
＜講義の概要＞ ミクロ経済学とは，個々の最適な意思決定と社会全体での帰結を考察する学問といえる。春学期は，市場メカニズム，消費者行動，生産者行動の基本について解説する． ＜講義の目的＞　ミクロ経済学に出てくるさまざまな基礎的な概念を習得する．方針としては，第 1 に諸概念の直感的な理解を得て，第 2 に諸概念の抽象的な記号表現をマスターする．以上は，3 年生，4 年生となり，更なる勉強をするときに必要不可欠となる． ＜講義の方針＞　1 年生配当の「経済学」の既習は前提としたレベルで講義をする．	1　イントロダクション　(ミクロ経済学とは) 2　需要曲線と供給曲線の導出とシフト 3　需要と供給の理論の応用と弾力性 4　弾力性の応用 5　市場均衡と余剰分析 6　余剰分析の応用 7　消費者行動の定式化 8　消費者の最適な行動の特徴づけ(効用最大化) 9　所得効果と代替効果 10　生産者行動の定式化 11　生産者の最適な行動の特徴づけ(利潤最大化) 12　費用最小化という視点 13　費用曲線 14　費用曲線と経済のダイナミクス 15　その他の補足
テキスト、参考文献	**評価方法**
欠席した授業の補完として最も有用なテキストとして， 『ミクロ経済学　第 2 版』伊藤元重　日本評論社 を挙げておく． 他に， 『マンキュー経済学Ⅰミクロ編』N.グレゴリー・マンキュー　東洋経済新報社 『ミクロ経済学』奥野正寛(編著)　東京大学出版会 も参考にすると良い．	定期試験で評価する．

01～14 年度（秋）	ミクロ経済学 b	担当者	藤山　英樹

講義目的、講義概要	授業計画
＜講義の概要＞ 秋学期では，春学期の知識をふまえて，はじめに一般均衡分析の議論をし，その後不完全競争市場の分析を中心にミクロ経済学の基本的な内容を解説する． ＜講義の目的＞　ミクロ経済学の基礎を習得する．より具体的には，第 1 に諸概念の直感的な理解を得る．第 2 に諸概念の抽象的な記号表現をマスターする．以上は，3 年生，4 年生となり，更なる勉強をするときに必要不可欠となる． ＜講義の方針＞　1 年生配当の「経済学」の既習は前提としたレベルで講義をする．	1　単一市場から複数の市場へ(2 財・2 主体の交換経済) 2　一般均衡分析の基本定理(ボックスダイアグラム) 3　交換と国際貿易について（比較優位) 4　独占市場の理論 5　完全競争，独占，独占的市場の比較 6　戦略的関係の分析 1：同時に決定する場合 7　戦略的関係の分析 2：意思決定の順番あり 8　市場の失敗：外部性について 9　市場の失敗への対処とコースの定理 10　外部性と財の特徴（公共財と共有資源) 11　不確実性と期待値（いつ現実妥当的か) 12　リスクと選好（リスク回避と保険の機能) 13　情報の経済学（逆選択，モラルハザード) 14　その他の補足(1) 15　その他の補足(2)
テキスト、参考文献	**評価方法**
欠席した授業の補完として最も有用なテキストとして， 『ミクロ経済学　第 2 版』伊藤元重　日本評論社 を挙げておく． 他に， 『マンキュー経済学Ⅰミクロ編』N.グレゴリー・マンキュー　東洋経済新報社 『ミクロ経済学』奥野正寛(編著)　東京大学出版会 も参考にすると良い．	定期試験で評価する．

01～14 年度（春）	経済学史 a	担当者	黒木　亮

講義目的、講義概要	授業計画
講義の目的 本講義の目的は、経済学の形成過程を追体験し、経済理論への理解を深めてゆくための手がかりとして、経済学者が実際に取り組んだ問題や社会的背景、時代的文脈を考察することにある。 講義の概要 近代自由主義社会の確立を基礎づけた 17 世紀の経済思想から 19 世紀末の経済思想までを通覧する。	1. ガイダンス：　経済学史とはどのような学問か 2. ロックとヒューム 市場社会の成立を支えた思想 3. フランソワ・ケネー 人類最初のエコノミスト 4-5.　アダム・スミス 市場社会の仕組みを解明した経済学の父 6. ジェレミー・ベンサム 「最大多数の最大幸福」を夢想した功利主義者 7. トーマス・ロバート・マルサス 市場社会における貧困と「人口の原理」 8-9. デイビッド・リカードウ 古典派経済学の体系化 10.　大陸の経済学者たち セー、シスモンディー、リスト 11. ジョン・スチュアート・ミル 功利主義思想と古典派経済学の批判的統合 12-13. カール・マルクス 資本主義社会と古典派経済学への根源的批判 14-15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献： 高哲男編『自由と秩序の経済思想』名古屋大学出版会. 根井雅弘『経済学の歴史』講談社.	レポート・期末試験のいずれか、ないし両方。

01～14 年度（秋）	経済学史 b	担当者	黒木　亮

講義目的、講義概要	授業計画
講義の目的 本講義の目的は、経済学の形成過程を追体験し、経済理論への理解を深めてゆくための手がかりとして、経済学者が実際に取り組んだ問題や社会的背景、時代的文脈を考察することにある。 講義の概要 19 世紀末の経済思想から、われわれの社会を支え、その将来を基礎づけるであろう今日の経済思想までを通覧する。	1. ガイダンス： 春季から秋季への橋渡し 2. グスタフ・シュモラー 新歴史学派の社会政策思想 3. カール・メンガー 主観主義のミクロ経済学 4-5. ジェヴォンズとワルラス 経済学の数理科学化 6-7. アルフレッド・マーシャル 「冷静な頭脳と暖かい心」の経済学 8-9. ソースティン・ヴェブレン 大量生産・大量消費社会の制度分析 10-11. ヨゼフ・シュンペーター 企業者の創造的破壊が生み出すダイナミクス 11-12. ジョン・メイナード・ケインズ 貨幣経済のマクロ分析 13-14.　ケインズ以降の経済学 ケインジアン、ポストケインジアン、 シカゴ学派、合理的期待形成学派、ハイエク、 ニューケインジアン etc. 15 ．まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献： 高哲男編『自由と秩序の経済思想』名古屋大学出版会. 根井雅弘『経済学の歴史』講談社.	レポート・期末試験のいずれか、ないし両方。

01～12 年度（春）	経済変動論 a	担当者	山下　裕歩

講義目的、講義概要	授業計画
入門的マクロ経済学では、ケインズ経済学と新古典派経済学の対応関係が中心的な視点である。しかし、1970 年代以降、マクロ経済学は大きく変貌し、主流派の経済学では、ケインズ経済学対新古典派経済学という対応関係を視点とした上でのマクロ経済論争は建設的なものではないというコンセンサスが一旦は形成されるに至った。本講義では、マクロ経済学がどのように変わってきたのか、そして何故このような変化が起こったのか、またこのような変化の結果として政策的含意がどう変化するのかなどを理解することを目的とする。また、様々なマクロ経済政策に対して、その是非を判断する際に、重要な視点を与えると考えられる経済学的論理を学ぶことも主要な目的である。	1. 新古典派総合（短期と長期） 2. マネタリズム 3. 新古典派経済学 4. マクロ経済学のミクロ経済学的基礎 5. 貨幣(1) 6. 貨幣(2) 7. インフレーション 8. 期待形成 9. 資産市場と資産価格 10. ブレトンウッズ体制と IS－LM モデル 11. 新しい IS－LM モデル 12. マクロ経済政策 13. 動学的不整合性と経済政策のルール化 14. 練習問題の解説 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
講義でレジュメを配布し教科書は特に指定しない。参考書は授業中に適宜紹介する。	学期末テストにより評価する。

01～12 年度（秋）	経済変動論 b	担当者	山下　裕歩

講義目的、講義概要	授業計画
この講義では、マクロ経済的現象としての経済変動を経済成長と景気循環の 2 つの視点から考察する。具体的には、右の講義計画に沿って、マルサス・モデル、ソロー・モデル、ラムゼイ・モデル、内生的成長モデル、実物的景気循環論などの様々な経済成長理論・景気循環理論を学ぶ。経済成長も景気循環も時間の流れを通じた経済現象であり、必然として「時間」という概念が入ってくる。時間の流れを明示的に経済理論に導入することは動学化と呼ばれている。「マクロ経済理論の動学化」という分析視点が何を意味するのか、またこの分析視点により政策的含意等に対して具体的に何がもたらされるのか、これらのことを経済成長理論・景気循環理論を通じて理解することが本講義の主要な目的である。	1. 動学的マクロ経済モデル 2. 生産要素と生産関数 3. 経済成長論の概説 4. マルサス・モデル 5. 経済成長論１（ソロー・モデル） 6. 経済成長論２（ラムゼイ・モデル） 7. 経済成長論３（AK モデル） 8. 経済成長論４（人的資本モデル） 9. 経済成長論５（研究開発モデル） 10. 経済成長論６（統一成長理論） 11. 所得格差と経済成長 12. 景気循環論の概説 13. 景気循環論１（乗数加速度モデル） 14. 景気循環論２（実物的景気循環論） 15. 景気循環論３（不決定性）
テキスト、参考文献	**評価方法**
講義でレジュメを配布し教科書は特に指定しない。参考書は授業中に適宜紹介する。	学期末テストにより評価する。

01～14 年度（春）	経済社会学 a	担当者	森永　卓郎

講義目的、講義概要	授業計画
我々は一人ひとりがより豊かな暮らしをするために社会を作り、経済を発展させてきました。しかし、現実にはいまでも多くの人が貧困と抑圧に苦しんでいます。この講義では、なぜ資本主義社会がすべての人を幸せにできないのかを経済社会の歴史と日本の現状を踏まえて考えていきます。	1．ガイダンス 2．人はどうしたら幸せになれるのか 3．経済社会はどのように発展してきたのか 4．　社会民主主義の興隆と変容 5．共産主義社会の失敗と新自由主義の台頭 6．遅れてやってきた日本の新自由主義 7．新自由主義と戦争 8．税制と経済社会 9．日本の税制 10. 社会保障とセーフティネット 11. 教育と格差 12. 人はなぜ狂うのか 13. 新自由主義と利権 14.貧困とは何か. 15.まとめ ※項目は確定ではありません
テキスト、参考文献	**評価方法**
ネット上で講義資料を公開します	試験

01～14 年度（秋）	経済社会学 b	担当者	森永　卓郎

講義目的、講義概要	授業計画
この講義では、金融資本主義のもたらした経済社会の問題点を歴史に基づいて明らかにするとともに、我々が真に豊かに暮らすために必要な経済社会のビジョンを考えていきます。	1．ガイダンス 2．アメリカ発の金融危機 3．日本の金融危機 4．小泉構造改革と金融資本主義 5．リーマンショックと日本経済 6．バブル発生のメカニズム 7．所得格差拡大とライフスタイルの多様化 8．真の IT 革命の成果とは 9．市場構造の変化 10. インターネットオークション 11. 共同購入とモノ作りのコスト 12. 萌えとは何なのか 13. 萌え市場の規模と方向性 14. ２１世紀の経済社会像 15. まとめ ※項目は確定ではありません
テキスト、参考文献	**評価方法**
ネット上で講義資料を公開します	試験

08～14 年度（春）	ゲーム理論 a	担当者	藤山　英樹

講義目的、講義概要	授業計画
＜講義の概要＞ 　ゲーム理論とは，戦略的な状況のもとで社会全体としてどのような状況が安定となるかを分析し，さまざまな状況に対する明快な解を示す学問である．応用分野は経済学にとどまらず，社会学，政治学，生物学などにもおよぶ． 　春学期は戦略形ゲームを中心として講義する． ＜講義の目的＞　ゲーム理論の基礎を習得する．より具体的には，第 1 に諸概念の直感的な理解を得る．第 2 に諸概念の抽象的な記号表現をマスターする．第 3 に代表的なモデル分析を理解する． ＊2 年次配当の「ミクロ経済学」，および，微分程度の数学の知識は前提としたレベルで講義をする．	1　イントロダクション　(戦略的状況と支配戦略) 2　囚人のジレンマゲーム 3　支配される戦略の繰り返し削除 4　最適反応戦略とナッシュ均衡 5　ナッシュ均衡の応用(1)：調整ゲーム 6　支配戦略均衡とナッシュ均衡の関係 7　ナッシュ均衡の応用(2)：複占市場の分析 8　ナッシュ均衡の応用(3)：立地モデルの分析 9　混合戦略と期待利得 10　混合戦略でのナッシュ均衡の簡便な求め方 11　混合戦略の応用(しつけゲーム)と簡便法の証明 12　進化ゲームの安定性 (ESS) 13　ナッシュ均衡と ESS の関係 14　ESS の応用(タカハトゲーム，ネットワークゲーム) 15　その他の補足
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考書：(講義中も適宜，良書を紹介する。) *Strategy: An Introduction to Game Theory*, J. Watson, W.W.Norton & Company *Economics and the Theory of Games*, F. Vega-Redondo, Cambridge Univ. Press. *Strategies and Games: Theory and Practice*, P.K. Dutta, MIT Press	定期試験で評価する． (ただし，受講生の人数をみて，授業内に試験をして，定期試験の代替とすることもある．)

08～14 年度（秋）	ゲーム理論 b	担当者	藤山　英樹

講義目的、講義概要	授業計画
＜講義の概要＞ 　ゲーム理論とは，戦略的な状況のもとで社会全体としてどのような状況が安定となるかを分析し，さまざまな状況に対する明快な解を示す学問である．応用分野は経済学にとどまらず，社会学，政治学，生物学などにもおよぶ． 　秋学期は展開形ゲームを中心として講義する。 ＜講義の目的＞　ゲーム理論の基礎を習得する．より具体的には、第 1 に諸概念の直感的な理解を得る．第 2 に諸概念の抽象的な記号表現をマスターする。第 3 に代表的なモデル分析を理解する． ＊2 年次配当の「ミクロ経済学」，および，微分程度の数学の知識は前提としたレベルで講義をする．	1　イントロダクション 2　展開形ゲームと解き方(後ろ向き帰納法) 3　応用：後ろ向き帰納法と合理性 4　応用：最後通牒ゲームと交渉 5　戦略形と展開形の関係： 　情報集合の導入と部分ゲーム完全均衡 6　情報集合ごとの合理性と完全ベイジアン均衡 7　不完備情報ゲーム とベイジアンナッシュ均衡： 　相手のタイプがわからない状況の戦略形での解釈 8　不完備情報ゲームへの完全ベイジアン均衡の応用 　展開形表現での解釈と適切な均衡概念 9, 10　応用例：シグナルとしての資格など 11　情報の経済学 1：Principal-Agent モデル 12　情報の経済学 2：リスクとインセンティブ 13　オークションについて 14　繰り返しゲーム：協力の実現 15　その他の補足
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考書：(講義中も適宜，良書を紹介する。) *Strategy: An Introduction to Game Theory*, J. Watson, W.W.Norton & Company *Economics and the Theory of Games*, F. Vega-Redondo, Cambridge Univ. Press. *Strategies and Games: Theory and Practice*, P.K. Dutta, MIT Press	定期試験で評価する． (ただし，受講生の人数をみて，授業内に試験をして，定期試験の代替とすることもある．)

01～14 年度（春）	経済統計論 a	担当者	深江　敬志

講義目的、講義概要	授業計画
経済統計とは，経済・社会現象を知り，学ぶために必要なデータに関する基礎的な知識とともに，それらを分析するための手法について学習することを目指した学問である． 近年，情報化の進展により，情報の形態のひとつであるデータをどのように取り扱うかが非常に重要となっている．同時にデータを扱う統計学に対する必要性が高まっている．よって，われわれは現在容易に入手可能なデータおよび図表を単純に鵜呑みにするのではなく，それらが意味していることを統計学に基づき正確に理解することが必要不可欠であるといえよう． したがって，本講義では，わが国の統計制度および統計分類など，経済統計の基本を学び，そこで公表されているデータや図表の内容を的確に把握し，かつそれらを有効なものにするために，統計学の基本的な考え方について理解することを目標とする．	1 イントロダクション 2 統計データの読み方 3 統計データの整理(統計調査・統計資料の整理) 4 統計データの整理(統計図表) 5 統計データの特性値(代表値・散布度) 6 統計データの特性値(相関関係) 7 標本と確率分布 8 標本と確率分布 9 標本分布と推定 10 標本分布と推定 11 回帰モデルによる統計的分析 12 回帰モデルによる統計的分析 13 回帰モデルによる統計的分析 14 まとめ 15 まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストは特に指定しない．講義時に，適宜レジュメおよび参考資料を配布し，それらに沿って講義を進める．	定期試験 70%，小テスト 30%(1～2 回程度)

01～14 年度（秋）	経済統計論 b	担当者	深江　敬志

講義目的、講義概要	授業計画
経済統計とは，経済・社会現象を知り，学ぶために必要なデータに関する基礎的な知識とともに，それらを分析するための手法について学習することを目指した学問である． 近年，情報化の進展により，情報の形態のひとつであるデータをどのように取り扱うかが非常に重要となっている．同時にデータを扱う統計学に対する必要性が高まっている．よって，われわれは現在容易に入手可能なデータおよび図表を単純に鵜呑みにするのではなく，それらが意味していることを統計学に基づき正確に理解することが必要不可欠であるといえよう． したがって，本講義では，わが国の統計制度および統計分類など，経済統計の基本を学び，そこで公表されているデータや図表の内容を的確に把握し，かつそれらを有効なものにするために，統計学の基本的な考え方について理解することを目標とする．	1 イントロダクション 2 経済統計と統計データ 3 統計制度と標準統計分類 4 わが国の統計行政 5 人口と労働に関する統計 6 家計に関する統計 7 産業と企業に関する統計 8 個別産業に関する統計 9 財政と金融に関する統計 10 財政と金融に関する統計 11 物価指数と数量指数 12 国民経済計算 13 国民経済計算 14 まとめ 15 まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストは特に指定しない．講義時に，適宜レジュメおよび参考資料を配布し，それらに沿って講義を進める．	定期試験 70%，小テスト 30%(1～2 回程度)

01～14 年度（春）	計量経済学 a	担当者	藤山　英樹

講義目的、講義概要	授業計画
自学自習ではなかなか理解できない，理論的な側面を重視し，統計学の基礎から計量経済学を解説してゆく． 春学期の目標は， (1)　計量経済学で最も基本的な考え方である，最小 2 乗法のしっかりとした理解， (2)　秋学期で頻出する複数の確率変数の表現方法(行列)と演算に慣れること， (3)　EXCEL で実際に計算ができるようになること， である． 数学的な概念はできるだけ基礎から解説をし，EXCEL での計算とあわせて，理解すること・実際に計算をおこなうことの楽しさを重視する． 単なる公式・手順の暗記ではなく，今後計量経済学を学ぶ上で，自ら伸びてゆける素養を身につけること，これが大きな意味での講義目標となる．	以下のトピックスを順次解説してゆく． 1　イントロダクション 2　データの要約：平均・分散・標準偏差 3　確率変数の要約 4　データと確率変数の関係，データの変換 5　異なるデータの比較と行列表現 6　複数のデータと確率変数（行列表現の応用） 7　複数のデータ・確率変数での分散・共分散 8　複数のデータの変換と相関係数，計量経済学のモデル 9　最小 2 乗法の考え方　(ぴったりと線を引く方法) 10 係数の導出　(行列の微分・逆行列) 11 平均と分散と係数の関係　(単純回帰で) 12 決定係数　(モデルの当てはまりの良さについて) 13 正規分布・多変量正規分布について 14 確率モデルと最小 2 乗法　(係数の推定) 15 推定した係数の期待値（不偏性：望ましい性質 1)
テキスト、参考文献	**評価方法**
藤山英樹『統計学からの計量経済学入門』昭和堂	授業のはじめにおこなう小テスト．ただし，受講生全体の状況をみて，レポートをおこなえばそれも考慮する．

01～14 年度（秋）	計量経済学 b	担当者	藤山　英樹

講義目的、講義概要	授業計画
秋学期の目標は， (1)　確率モデルにおける最小 2 乗法の望ましい性質を理解すること (2)　Σ記号ではなく，行列による簡明な概念理解 (3)　検定の考え方を理解し，その具体的な方法を理解すること (4)　推定・検定における実際的な手法を理解すること， (5)　標準的な仮定が満たされない場合の発見方法と対処方法を学ぶこと (6)　EXCEL で具体的に計算を行えること である． 数学的な概念はできるだけ基礎から解説をし，EXCEL での計算とあわせて，理解すること・実際に計算をおこなうことの楽しさを重視する． 単なる公式・手順の暗記ではなく，今後計量経済学を学ぶ上で，自ら伸びてゆける素養を身につけること，これが大きな意味での講義目標となる． なお，「計量経済学 a」の既習を前提とする．	以下のトピックスを順次解説してゆく． 1　イントロダクション 2　推定した係数の分散　(BLUE：望ましい性質 2) 3　検定の考え方 4　検定に使う確率変数の導出 5　F 検定について 6　検定についてのまとめと t 検定 7　関数形の工夫 8　説明変数の工夫：ダミー変数 9　ダミー変数の応用：構造変化について 10 標準的仮定を崩す：不均一分散の発見 11 標準的仮定を崩す：不均一分散への対処 12 標準的仮定を崩す：系列相関の発見と対処 13 説明変数の選択について(過少，過剰，多重共線性) 14 標準的な仮定を崩す：説明変数と攪乱項の相関 15 その他の補足
テキスト、参考文献	**評価方法**
藤山英樹『統計学からの計量経済学入門』昭和堂	授業のはじめにおこなう小テスト．ただし，受講生全体の状況をみて，レポートをおこなえばそれも考慮する．

01～14 年度（春）	経済政策論 a	担当者	童　適平

講義目的、講義概要	授業計画
資本主義市場経済において、経済問題は主として市場メカニズムを通じて解決されることになっている。しかし、市場の失敗のように、市場メカニズムですべての経済問題がうまく解決されるわけではないのである。政府は、この市場の失敗を補完するために、資源配分機能、経済安定化機能、富と所得の再分配機能という３つの役割を持っている。本講義は、これら３つの機能を、ミクロ経済学とマクロ経済学の知識を使用して説明することを通じて、受講生の経済学理論への理解を深めるだけでなく、現実の経済問題への分析力を養うことを目的とする。 経済政策論 a において、ミクロ経済政策を中心にその理論的背景、経済政策的解決の効果を解説することにする。理論だけでなく現実の経済現象を取上げて説明することによって、受講生に臨場感を与え、理解しやすいように心掛ける。また、経済政策の理解を助けるために、講義中にミクロ経済学の基礎知識を解説することもある。	第 1 回　ガイダンス 第 2 回　経済システムと経済政策 第 3 回　経済政策のミクロ経済学の基礎(1)-消費者行動 第 4 回　経済政策のミクロ経済学の基礎(2)-生産者行動 第 5 回　資源配分効率の基準-消費者余剰と生産者余剰 第 6 回　自然独占とその対策（1） 第 7 回　自然独占とその対策(2) 第 8 回　外部経済とその対策 第 9 回　公共財と公共財の供給（1） 第 10 回　公共財と公共財の供給（2） 第 11 回～第 15 回　情報の不完全性・非対称性とその解決策
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストを指定しない。参考文献：1､岩田規久男・飯田泰之著『ゼミナール経済政策入門』日本経済新聞出版社。 2､横山将義『経済政策』成文堂	期末試験を行う。学期中数回小テストを行う。学期中の練習問題の解答と小テストを考慮して 30%、期末試験 70%

01～14 年度（秋）	経済政策論 b	担当者	童　適平

講義目的、講義概要	授業計画
資本主義市場経済においては、経済問題は主として市場メカニズムを通じて解決されることになっている。しかし、市場の失敗のように、市場メカニズムですべての経済問題がうまく解決されるわけではないのである。政府は、この市場の失敗を補完するために、資源配分機能、経済安定化機能、富と所得の再分配機能という３つの役割を持っている。本講義は、これら３つの機能を、ミクロ経済学とマクロ経済学の知識を使用して説明することを通じて、各受講生の経済学理論への理解を深めるだけでなく、現実の経済問題への分析力を養うことを目的とする。 経済政策論 b において、まず、簡単にマクロ経済学の基礎知識を解説する。続いて、経済成長政策、経済安定政策、所得再分配政策、対外均衡政策の順でマクロ経済政策を理論的な背景、手段とその効果から解説する。同様に、理論だけでなく現実の経済現象を取上げて説明することによって、受講生に臨場感を与え、理解しやすいように心掛ける。	第 1 回　経済政策のマクロ経済学の基礎 第 2 回　IS-LM モデル 第 3 回　財政政策 第 4 回　金融政策 第 5 回　財政政策と金融政策の効果(1) 第 6 回　財政政策と金融政策の効果(2) 第 7 回　経済成長政策 第 8 回　経済安定政策 第 9 回　物価変動と経済政策 第 10 回　所得再分配政策 第 11 回　税制と税政策 第 12 回　医療政策 第 13 回　年金政策 第 14 回　為替レートと国際収支 第 15 回　対外均衡政策
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストを指定しない。参考文献：1､岩田規久男・飯田泰之著『ゼミナール経済政策入門』日本経済新聞出版社。 2､横山将義『経済政策』成文堂	期末試験を行う。学期中数回小テストを行う。学期中の練習問題の解答と小テストを考慮して 30%、期末試験 70%

13 年度以降（春） 01～12 年度（春）	開発経済学 a 経済開発論 a	担当者	高安　健一

講義目的、講義概要	授業計画
この講義の目的は、３つあります。第1は、開発途上国が抱えている貧困問題を理解することです。貧困層の特定、貧困の悪循環、人間開発などに焦点をあてます。 第２は、東アジア諸国を念頭に、経済成長のメカニズムを学ぶことです。直接投資、輸出構造の変化、産業構造の高度化などが主な論点です。 第３は、貧困問題の解決に向けた新しい取り組みについて学習することです。マイクロファイナンス（バングラデシュで農村の女性に金融サービスを提供しているグラミン銀行等）、貧困削減と利益確保の両立を目指すBOPビジネス等を取り上げます。 受講生が講義内容を、大学での研究や就職活動のみならず、卒業後も活用することを期待します。開発経済学bも履修して下さい。第1回の講義に必ず出席すること（出席カード配布予定）。	1.　講義の目的、成績評価等 2.　開発経済学の学説史（アダム・スミスから『最底辺のポートフォリオ』まで） 3.　政策のターゲットとなるべき貧困層とは 4.　東アジアの経済発展再考 5.　直接投資と産業発展 6.　経済発展における金融の役割 7.　情報通信技術と経済発展 8.　ソーシャルビジネス、アイデア、そしてデザイン 9.　アジア最貧国バングラデシュの挑戦 10.　包摂的開発（Inclusive Development）と企業の役割 11.　マイクロファイナンス（グラミン銀行の挑戦） 12.　貧困層向け（BOP）ビジネスの拡大 13.　貧困層向けビジネスへの日本企業の対応 14-15 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
教員が作成した資料を配布する。参考文献は、最初の講義で紹介する。	学期末試験（100%）。感想文や授業中の発言による加点あり。出席が一定回数を下回ると自動的に不可評価になるので注意のこと（詳細は第１回の講義で説明）。

13 年度以降（秋） 01～12 年度（秋）	開発経済学 b 経済開発論 b	担当者	高安　健一

講義目的、講義概要	授業計画
この講義の目的は、３つあります。第1は、開発途上国が抱える経済リスクを把握することです。事例として、1980年代にラテンアメリカで深刻化した累積債務問題、1990年代から国際社会が取り組んでいる重債務貧困国への支援、そして1997年に発生したアジア経済危機を取り上げます。 第２は、日本企業の新興国戦略に直結する人口問題（含む高齢化社会の到来）と消費市場の拡大について理解することです。 第３は、わが国企業と開発途上国（新興国）との関連について考察することです。インフラ整備は近年注目を集めている分野の一つです。多国籍企業は今や、国連ミレニアム開発目標を意識することなしに、新興国で事業を展開できません。 受講生が講義内容を、大学での研究や就職活動のみならず、卒業後も活用することを期待します。開発経済学aも履修して下さい。第1回の講義に必ず出席すること（出席カード配布予定）。	1.　講義の目的、成績評価等 2.　経済のグローバル化と開発途上国 3.　リスクについて考える 4.　カントリーリスク、ソブリンリスク、格付け 5.　1980 年代の累積債務問題、重債務貧困国 6.　アジア経済危機の背景と処方箋 7.　国際通貨基金（ＩＭＦ）・世界銀行の開発戦略 8.　開発途上国における人口問題 9.　人口動態の変化と経済発展 10.　消費市場の拡大 11.　開発途上国におけるインフラ整備 12.　国連ミレニアム開発目標の意義と限界 13.　日本企業と開発途上国 14-15 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
教員が作成した資料を配布する。参考文献は、最初の講義で紹介する。	学期末試験（100%）。感想文や授業中の発言による加点あり。出席が一定回数を下回ると自動的に不可評価になるので注意のこと（詳細は第１回の講義で説明）。

01～14 年度（春）	環境政策論 a	担当者	塩田　尚樹

講義目的、講義概要	授業計画
地球温暖化問題のしくみと政策現場での議論について概観し，環境問題の自発的解決の困難さと公的機関による政策の必要性について経済学的に解説します． まず代表的な環境問題の一つである地球温暖化を取り上げ，環境問題についての具体的なイメージを深めます．本年度は，化石燃料にかわるエネルギーとして積極的に導入されてきた原子力にかかわる問題，および，京都議定書以降の温暖化対策にも力点をおく予定です． その後，多くの環境問題に共通する構造を抽象化し，非協力ゲーム理論を使って分析します．「われわれ一人ひとりにとって望ましい行動が，社会にとって望ましい行動と一致しないため，自発的解決が期待できず，政策を講じる必要がある」という環境問題の特徴が，よく理解できると思います． なお，「各人の授業を受ける権利」は「他の人の授業を受ける権利」を侵害しない範囲内で行使されるべきだと考えますので，授業態度のよくない人は退出してもらいます．	1. 授業のねらいと方針 2. 地球環境の歴史 3. 地球温暖化のメカニズム 4. 地球温暖化対策の歴史 5. 気候変動枠組条約と京都議定書 6. 京都メカニズム 7. 第 1 約束期間以降の環境政策 8. 化石エネルギー消費の歴史 9. 原子力発電とその問題点 (1) 10. 原子力発電とその問題点 (2) 11. 環境問題のモデル化 12. 個人の最適性と社会的最適性 13. 『共有地の悲劇』 14. 自発的協力の可能性 15. まとめ
参考文献	**評価方法**
環境省ホームページの地球環境・国際環境協力にあげられている行政資料が有用です．	定期試験で評価します．ただし，講義中の私語などの迷惑行為で減点する場合があります．

01～14 年度（秋）	環境政策論 b	担当者	塩田　尚樹

講義目的、講義概要	授業計画
環境政策の手段の有効性について，ミクロ経済学の立場から考察します．環境問題の具体的なトピックとしては，主に地球温暖化問題を取り上げます． 環境税や排出量取引制度のような「経済的」手段が，固定的排出量割当などの「非経済的」手段と比べてどう優れているのかが主要論点です．ミクロ経済学で学ぶ「資源配分の効率性」という概念が基礎となります． まず，経済学で環境問題を取り扱う場合に必ず登場する「ピグー税」と呼ばれる課税ルールのしくみとその限界について解説します．その後，実際の環境政策の現場で「経済的」な政策手段が支持される最大の根拠の一つとなっている汚染削減費用の最小化特性について検討します． 本学で開講されている「ミクロ経済学」，「公共経済学」，「環境経済学」などの科目を合わせて履修すると，相互に理解が深まると思います．強制ではありませんが，履修選択の際の参考にしてください． なお，「各人の授業を受ける権利」は「他の人の授業を受ける権利」を侵害しない範囲内で行使されるべきだと考えますので，授業態度のよくない人は退出してもらいます．	1. 授業のねらいと方針 2. 環境問題の経済学的把握 3. 利潤とその平均変化率 (1) 4. 利潤とその平均変化率 (2) 5. 企業の利潤最大化行動 6. 環境汚染の社会的費用とその平均変化率 7. 市場均衡と社会的最適汚染量 8. 単位税の企業行動への影響 9. ピグー税による社会的最適性の回復 10. ピグー税の難点 11. 汚染削減費用とその最小化 12. ボーモル・オーツ税 13. 排出量取引制度 (1) 14. 排出量取引制度 (2) 15. まとめ
参考文献	**評価方法**
塩田尚樹「環境税の経済学的基礎」（講義支援システムにより配布予定）	定期試験で評価します．ただし，講義中の私語などの迷惑行為で減点する場合があります．

01～14 年度（春）	日本経済史 a	担当者	市原　博

講義目的、講義概要	授業計画
明治時代以降のおよそ1世紀の間、日本経済は目覚ましい経済成長を遂げました。それは、「世界史的にも例を見ない」とか、「奇跡」と形容されるほどのものでした。我々の現在の生活はその上に築かれたものです。この講義では、こうした日本経済の成長がどのようにして実現したのかを歴史的に考えます。国際的経済関係、政府の政策、企業の主体的行動、国内市場の条件など、さまざまな要因に目配りし、その歴史過程を総合的に考察します。 「現在」は歴史の意積み重ねの上に存在します。それは「未来」も歴史の延長上にあることを意味します。経済史の勉強を通じて、現在の日本経済を相対化し、広い視野から「現在」と「未来」を考える力を身につけていただきたいと思います。 この講義が扱う時期は、近代経済成長の前提が形成された徳川時代から、近代経済成長を経て経済構造の変化が求められるようになった1920年代末までです。 講義では毎回プリントを配ります。	1. イントロダクションー日本経済史の問題関心 2. アーリー・モダンとしての徳川時代 3. 徳川時代の「経済社会」の形成 4. 幕末開港と日本経済の再編 5. 近代日本の経済成長のマクロ的概観 6. 明治新政府による制度改正と産業政策の役割 7. 松方財政と「松方デフレ」のもたらしたもの 8.「企業勃興」の展開と輸出産業の役割 9.「日清戦後経営」と金本位制度の確立 10. 日露戦争と日本経済 11. 重工業の発展と大企業経済の成立 12. 第一次世界大戦ブームと日本経済の構造変化 13. 1920 年代「相対的高成長」と都市型消費社会の形成 14.「金解禁」問題と金融恐慌の発生 15.「井上財政」と昭和恐慌
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストは指定せず、毎回資料を配布します。参考書は、杉山伸也『日本経済史』岩波書店、牛島利明他『日本経済史 1600－2000』慶應技術大学出版会、三和良一『概説日本経済史』東京大学出版会です。	おおよそ、授業への参加度 10%、小テスト・レポート 10%、定期試験 80%で評価します。

01～14 年度（秋）	日本経済史 b	担当者	市原　博

講義目的、講義概要	授業計画
1929 年の世界第恐慌を機に、世界の資本主義経済は、経済活動への政府の介入を前提とする経済構造へと変貌しました。この段階の資本主義経済は「現代資本主義」と呼ばれてきました。本講義は、「日本経済史 a」で検討した日本経済の発展過程をもう一度概観した後、「現代資本主義」に移行した後の日本経済の成長・発展の過程を考察します。この時期の日本は、経済面のみならず、社会のあらゆる面で大変動を経験しました。政府の財政政策による恐慌からの脱出、第二次世界大戦による戦時統制経済への移行、敗戦後の経済改革と経済復興を経て、日本を根本から変えた高度経済成長が始まり、その終焉後に「経済大国」ともてはやされる時代が到来し、そしてバブル経済とその崩壊後の長期不況を経験しました。講義では、特に高度経済成長期までに重点を置いて、激動の過程を振り返り、現在の日本経済の問題を歴史的に理解できる幅広い視野を育成したいと思います。 講義では毎回プリントを配ります。	1．　イントロダクションー現代資本主義の特徴 2．　昭和恐慌と「高橋財政」の意義 3．　「帝国」の拡大と植民地経営 4．　戦時経済統制による「計画経済」への移行 5．　戦時下の企業経営の変容 6．　戦後経済改革の歴史的意義 7．　経済復興政策の展開 8．　高度経済成長のメカニズム（1） 9．　高度経済成長のメカニズム（2） 10．　高度経済成長と日本社会の変容 11．　企業経営の進化 1、企業間関係の変化 12．　企業経営の進化 2、日本的経営の形成 13．　高度経済成長の終えん 14．　ジャパン・アズ・ナンバーワンの時代 15．　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストは指定せず、毎回資料を配布します。参考書は、杉山伸也『日本経済史』岩波書店、牛島利明他『日本経済史 1600－2000』慶應技術大学出版会、三和良一『概説日本経済史』東京大学出版会です。	おおよそ、授業への参加度 10%、小テスト・レポート 10%、定期試験 80%で評価します。

01～14 年度（春）	日本社会史 a	担当者	新井　孝重

講義目的、講義概要	授業計画
全長 40 メートルの戦艦、炸裂する火薬兵器、降りそそぐ毒矢、異形の巨大軍隊モンゴル軍に打ちのめされた日本の武者達は、かつてないストレスに悩まされ、蔓延する恐怖の念は、全土を神仏頼りの祈祷列島に変えていく。幕府は直面する危機にどう対処したのか。そして、九州の武士は…。合戦死傷者のその後までを追う。 わが国の中世社会はモンゴル戦争を画期にして大きく変わる。この変化が歴史の発展であるのか、それとも単なる民族史的に日本人の性質が変わったにすぎないのか、日本の歴史学の中では大きな問題である。本講義ではこのことを念頭において、まずはモンゴル戦争（蒙古襲来）の実相に迫っていきたい。	①　授業の説明 ②　モンゴル帝国の「世界」 ③　「世界」の吸引力 ④　「世界」に身構える日本 ⑤　文永合戦・異なる戦争の作法 ⑥　戦力の質的違い ⑦　外征計画の挫折 ⑧　日本の船は外征に耐えたか ⑨　モンゴル帝国の海上軍事力 ⑩　イスラム商人が造った船 ⑪　異国警固と石築地 ⑫　有無を言わせぬ戦時統制 ⑬　モンゴル戦争期の社会状態 ⑭　東大寺僧が見たもの ⑮　本所一円地の住民動員
テキスト、参考文献	**評価方法**
新井孝重『蒙古襲来』吉川弘文館 （教科書を必ず携えて授業にのぞむこと）	テストの成績(100%)による。

01～14 年度（秋）	日本社会史 b	担当者	新井　孝重

講義目的、講義概要	授業計画
風濤に砕けるモンゴル艦船、合戦恩賞を要求する武士の訴訟、権力中枢に勃発するクーデタ、中世の日本は確実に不安と流動の時代へ入る。 春学期の講義をうけて秋学期では弘安合戦とそれ以降の、特に日本国内の社会様相を観察する。	①　授業の説明 ②　クビライ、第二次遠征を命ずる ③　艦船、激浪に覆没する ④　三度目の外征計画、悪党を兵力に転用 ⑤　武士の家、討ち死にによる相続争い ⑥　刀創・矢傷の治療法 ⑦　幕府はどのように武士の手柄を認めたか ⑧　農村領主に「国家」はあったか ⑨　弘安徳政の挫折、クーデタと粛清 ⑩　祈祷の防衛体制、敵を図にして祈り倒す ⑪　「軍事」と「神事」の関係 ⑫　時代の変わり目 ⑬　日元貿易が生むバサラの文化 ⑭　帝国主義戦争撃退のパラドックス ⑮　東アジアの住民として
テキスト、参考文献	**評価方法**
新井孝重『蒙古襲来』吉川弘文館 （教科書を必ず携えて授業にのぞむこと）	テストの成績(100%)による。

13 年度以降（春） 01～12 年度（春）	外国経済史 a 西洋経済史 a	担当者	御園生　眞

講義目的、講義概要	授業計画
現代経済の起点であるイギリス産業革命を対象とし、その特徴と問題点を多面的に考察する。 （注意事項） ①最新のシラバスを第1回の授業で配布するので、履修希望者は必ず出席すること。 ②出席は第1回より毎回取る。欠席が4回になると単位は認定されない。 ③試験は定期試験期間中に持ち込み無し、論述問題で行う。 ④評価方法は、2年生、3年生、4年生ともに共通である。 ⑤この授業は、a,bの順番で履修することを前提としている。	1. ガイダンス。序論：産業革命とは何か？ 2. 序論（続） 3. 産業革命の前提条件(1)イギリス農業の発展 4. （同上）　(2)イギリス家内工業の発展 5. 技術革新と工場制生産の出現 6. （同上） 7. 動力源の技術革新 8. 製鉄業の技術革新 9. 交通手段の技術革新：鉄道の出現 10. 企業家と事業形態 11. （同上） 12. イギリス産業革命と世界市場 13. （同上） 14. イギリス産業革命の波及 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
第 1 回の授業で説明する。	欠席が 4 回以内であることと、定期試験成績 60 点以上の両方の条件を満たすことが単位認定の条件である。

13 年度以降（秋） 01～12 年度（秋）	外国経済史 b 西洋経済史 b	担当者	御園生　眞

講義目的、講義概要	授業計画
イギリスに遅れて産業革命を展開した後発国の事例としてドイツを取り上げ、ドイツ産業革命の特徴と問題点をイギリスと比較しつつ考察する。 （注意事項） 春学期に同じ。	1. ガイダンス。序論：後発国産業革命の特徴と問題点 2. 序論（続） 3. 産業革命前夜のドイツ経済 4. 産業革命の前提条件の形成(1)プロイセン改革 5. （同上） 6. 産業革命の前提条件の形成(2)ドイツ関税同盟の成立 7. （同上） 8. ドイツ産業革命の展開(1)綿工業 9. ドイツ産業革命の展開(2)製鉄業 10. ドイツ産業革命と産業技術教育 11. （同上） 12. ドイツ産業革命と鉄道業 13. （同上） 14. ドイツ産業革命と銀行業 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
春学期に同じ。	春学期に同じ。

13 年度以降（春） 01～12 年度（春）	国際経済学 a 国際経済論 a	担当者	益山　光央

講義目的、講義概要	授業計画
国際経済を理解するのに最低限必要と思われる基本的な考えを講義します。その中心は貿易理論、国際貿易の一般均衡、貿易政策となります。講義で扱う内容は、よりすすんだ諸理論を学ぶのに必須の基礎的事項なので厳密な展開を心がけたいと思います。受講生には予習と復習を求めます。私語厳禁。	1　国際貿易概観 2　リカード的比較優位説 3　リカード的比較優位説 4　ヘクシャー・オリーン定理 5　ヘクシャー・オリーン定理 6　国際貿易の一般均衡 7　国際貿易の一般均衡 8　経済成長と貿易 9　国際資本移動と移民 １０　国際資本移動と移民 １１　関税・輸入数量制限 １２　関税・輸入数量制限 １３　輸入補助金と輸出自主規制 １４　輸入補助金と輸出自主規制 １５　質問とまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
大山道広・伊藤元重『国際貿易』　岩波書店	試験のみで評価

13 年度以降（秋） 01～12 年度（秋）	国際経済学 b 国際経済論 b	担当者	益山　光央

講義目的、講義概要	授業計画
春学期に扱った貿易理論とともに国際経済学の大きな柱である国際収支調整メカニズムに関連する事柄を学びます。国際収支の赤字、黒字からはじまり、だんだんと高度な内容へと移行します。すべて基本的な内容なので、きちんと理解する必要があります。 春学期の国際経済論 a を履修しているほうがより理解が深まります。私語厳禁。	1　国際収支と国民所得勘定 2　国際収支と国民所得勘定 3　外国為替市場 4　外国為替市場 5　外国為替市場 6　固定相場制下の所得決定 7　固定相場制下の所得決定 8　変動相場制下の所得決定 9　変動相場制下の所得決定 １０　国際収支と財政・金融政策 １１　国際収支と財政・金融政策 １２　国際資本移動と財政・金融政策 １３　国際資本移動と財政・金融政策 １４　質問とまとめ １５　質問とまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
未定	試験のみで評価

01～14 年度（春）	国際金融論 a	担当者	徳永　潤二

講義目的、講義概要	授業計画
「100年に1度」と言われる現在の世界的な経済危機は，「100年に1度」のパラダイム・シフトを感じさせる事態を生じてさせています。それは、ドル基軸通貨体制への揺さぶりが公然となされ，世界経済が「ドル一極支配後」の国際金融システムを模索し始めたことだと言えるでしょう。今こそ、国際金融の知識を学び、世界経済の将来を考えるという姿勢と能力が求められているのです。 本講義では，外国為替及び国際金融の基礎理論について学びます。それによって、国際金融をめぐる現実の様々な動きを理解できるようになりましょう。なお、国際金融情勢において激動が生じた場合は、随時、現実の問題を取り上げます。 講義ではパワーポイントを用いますので、私の説明も含めて講義ワークノートをしっかりととって下さい。大規模教室での授業となりますが、授業中の私語や携帯電話の利用は厳禁です。授業に集中して下さい。	1. イントロダクション 2. 外国為替取引と国際決済 3. 国際収支 4. 債権国と債務国 5. IS バランスと経常収支 6. 国際資本移動 7. 国際収支決定の理論（１）―短期理論― 8. 国際収支決定の理論（２）―中長期理論― 9. 外国為替市場と外国為替相場 10. 外国為替相場決定の理論（１）―長期理論― 11. 外国為替相場決定の理論（２）―超短期理論― 12. 開放経済下の金融・財政政策（１） 13. 開放経済下の金融・財政政策（２） 14. 国際金融市場（１） 15. 国際金融市場（２）

テキスト、参考文献	評価方法
講義用ワークノートを毎回配布するため、特定のテキストは使用しません。参考文献は適宜紹介します。	学期末テストの結果で評価します。授業中に課すリアクションペーパーの内容を成績に加味する場合もあります。

01～14 年度（秋）	国際金融論 b	担当者	徳永　潤二

講義目的、講義概要	授業計画
春季の国際金融論 a に続いて、国際金融の知識について学び，世界経済の将来を考えるという姿勢と能力を付けていくことを目的とします。なお、国際金融情勢において激動が生じた場合は、随時、現実の問題を取り上げます。 講義ではパワーポイントを用いますので、私の説明も含めて講義ワークノートをしっかりととって下さい。大規模教室での授業となりますが、授業中の私語や携帯電話の利用は厳禁です。授業に集中して下さい。	1. 国際通貨 2. ポンド体制 3. 再建国際金本位制 4. ブレトン・ウッズ体制 5. ニクソンショックと変動相場制への移行 6. 中南米のバブル（1970 年代） 7. 日本のバブル（1980 年代） 8. 東アジアのバブル（1990 年代） 9. アメリカのバブル（2000 年代） 10. 世界金融危機の発生 11. ヨーロッパにおける脱ドルの動き 12. ユーロ危機 13. 東アジアにおける脱ドルの動き 14. 東アジア経済と日本の将来 15. 国際金融システムの将来

テキスト、参考文献	評価方法
講義用ワークノートを毎回配布するため、特定のテキストは使用しません。参考文献は適宜紹介します。	学期末テストの結果で評価します。授業中に課すリアクションペーパーの内容を成績に加味する場合もあります。

01～14 年度（春）	日本経済論 a	担当者	須藤　時仁

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は、基礎的な経済理論をベースに日本経済の仕組みや日本経済が抱えている問題点を明らかにするものである。講義を通じて、現実の日本経済がどうなっているのか、また実際の経済現象が理論的にどのように説明されるのかについて理解してもらいたい。なお、新聞やニュースで取り上げられている経済問題も紹介しながら講義を行う予定である。 特に受講の条件というわけではないが、受講生はマクロ経済学とミクロ経済学の基礎的な知識を学習していることが望ましい。また、できるかぎり新聞や雑誌に目を通して、現実の経済の動きを理解するよう努めてもらいたい。	1. イントロダクション 2. 国民経済計算とは 3. 三面等価の原則 4. 日本の経済成長 5. 産業構造の変遷 6. 日本の景気循環 7. 個人消費の特徴 8. 消費の決定要因 9. 消費と資産価格 10. 貯蓄率の動向 11. 設備投資の特徴 12. 設備投資の決定要因：資本ストックと金利 13. 設備投資の決定要因：企業経営者の経済見通し 14. 資金調達と設備投資 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストは特に指定しない。講義ではレジメを配り、それに基づいて進める。	定期試験により評価する。

01～14 年度（秋）	日本経済論 b	担当者	須藤　時仁

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は、基礎的な経済理論をもとに日本経済の仕組みや日本経済が抱えている問題点を明らかにすることを主眼としており、日本経済論 a の続編である。この講義では、民間経済主体の行動についての理解を前提として、政府の行動が経済に及ぼす影響、金融市場と実体経済との関係、世界経済と日本経済との相互の関係について理解してもらいたい。なお、本講義でも新聞やニュースで取り上げられている経済問題も紹介しながら講義を行う予定である。 特に受講の条件というわけではないが、日本経済論 a の場合と同様に、受講生はマクロ経済学とミクロ経済学の基礎的な知識を学習していることが望ましい。また、できるかぎり新聞や雑誌に目を通して、現実の経済の動きを理解するよう努めてもらいたい。	1. イントロダクション 2. 日本の雇用状況 3. 雇用の非正規化 4. 日本の物価動向 5. 日本の物価はなぜ上昇し難いのか 6. 財政とは 7. 財政と国債 8. 日本財政の問題点と展望 9. 金融とは 10. 日本の資金循環 11. 日本の金融システム 12. 国際収支の特徴 13. 外国為替レートの推移 14. 経常収支の決定要因 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストは特に指定しない。講義ではレジメを配り、それに基づいて進める。	定期試験により評価する。

01～14年度（春）	アメリカ経済論a	担当者	本田　浩邦

講義目的、講義概要	授業計画
アメリカ経済の現代的な成り立ちについて、できるだけ分かりやすく説明したいと思います。アメリカ経済は経済学や経済政策論の争点がある程度分かっているととても面白く勉強できますので、講義では、学部レベルで基本的に知っておくべきことをできるだけわかりやすく説明するようにします。 春学期は、マクロ経済の歴史的発展に焦点を当てて講義します。テキストの該当箇所は、第１部と第２部です。 テキストを中心に行いますので、該当箇所をよく読んで講義を聴いて下さい。それ以外にも授業中指示する文献などで自分なりに調べて受講して下さい。	1. はじめに――講義内容、評価方法、注意事項 2. アメリカ経済の段階的発展 3. 人種問題とアメリカ社会 4. アメリカの政治権力構造 5. １９３０年代の大恐慌 6. ニューディールⅠ 7. ニューディールⅡ 8. 戦後マクロ経済――経済安定化 9. 産業構造と労働市場Ⅰ 10. 産業構造と労働市場Ⅱ 11. 所得格差と貧困Ⅰ 12. 所得格差と貧困Ⅱ 13. 社会保障制度――年金・医療 14. 社会保障制度――貧困対策プログラム 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
中本悟・宮崎礼二編『現代アメリカ経済研究入門』日本評論社、２０１３年。	毎回出席をとります。学期中に２度レポートを課します。それらを総合して評価します。授業への参加度３０％＋レポート３５％×２＝１００％

01～14年度（秋）	アメリカ経済論b	担当者	本田　浩邦

講義目的、講義概要	授業計画
秋学期は、財政と金融、マネーフロー、日米経済関係に焦点を当てて講義します。テキストの該当箇所は、第３部と第４部です。 テキストを中心に行いますので、該当箇所をよく読んで講義を聴いて下さい。それ以外にも授業中指示する文献などで自分なりに調べて受講して下さい。	1. はじめに――講義内容、評価方法、注意事項 2. 財政政策――歴史 3. 財政政策――現状 4. 金融市場と金融政策――歴史 5. 金融市場と金融市場――現状 6. 「プラザ合意」 7. グローバルな資金循環とドル体制 8. リーマンショックの分析 9. ドルと財政赤字の持続可能性 10. 経済政策 11. 日米経済関係――戦後の日米関係 12. 日米経済関係――日米構造協議からＴＰＰへ 13. 経済の二重構造と社会保障制度Ⅰ 14. 経済の二重構造と社会保障制度Ⅱ 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
中本悟・宮崎礼二編『現代アメリカ経済研究入門』日本評論社、２０１３年３月。	毎回出席をとります。学期中に２度レポートを課します。それらを総合して評価します。授業への参加度３０％＋レポート３５％×２＝１００％

01～14 年度（春）	ラテンアメリカ経済論ａ	担当者	浦部　浩之

講義目的、講義概要	授業計画
本講義ではラテンアメリカという地域の多様性を知り、またこの地域の経済・政治・社会の基本構図を理解することを目標とする。 講義の流れとしては、まずラテンアメリカ地域経済の基盤となる自然環境と資源、植民地化による社会の基礎構造の成立を概観する。次に独立後ラテンアメリカの経済・政治・社会の歩みをとらえる。そしてラテンアメリカの域内における共通性と多様性について検討を進める。最後に現代ラテンアメリカの抱える経済・政治・社会の問題について考察する。 なお、8～11 回は内容を圧縮し、最新の政治経済トピックの解説に代えることがある。 ※秋学期の「ラテンアメリカ経済論ｂ」のシラバスも合わせて読むこと。	Ⅰ．ラテンアメリカ地域の概要 1.　アンデスの自然環境と資源 2.　アマゾンの自然環境と資源 3.　ラテンアメリカの植民地と経済 Ⅱ．　独立後ラテンアメリカの経済・政治・社会の歩み 4.　19 世紀の一次産品輸出経済 5.　輸入代替工業化とポピュリズム政権 6.　国家主導型経済戦略の破綻と累積債務問題 7.　新自由主義改革の時代 Ⅲ．ラテンアメリカ地域の共通性と多様性 8.　アンデス地域（ペルー、ボリビアなど） 9.　コノスール地域（アルゼンチン、ブラジルなど） 10．メキシコ・中米地域（メキシコ、グアテマラなど） 11．カリブ地域（ジャマイカ、ハイチなど） Ⅳ．現代ラテンアメリカの政治経済問題 12．ネオリベラリズムと貧困・社会格差 13．先住民運動と多文化主義 14．麻薬問題と暴力・ゲリラ 15．授業のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献は授業で随時紹介する。	期末試験で評価する（これに授業への参加状況を加味する場合がある）。

01～14 年度（秋）	ラテンアメリカ経済論ｂ	担当者	浦部　浩之

講義目的、講義概要	授業計画
本講義では国際政治経済構造のなかでのラテンアメリカについて理解を深めることを目標とする。 講義の流れとしては、まずラテンアメリカの国際政治経済の史的展開を概観する。次に、米国とラテンアメリカの関係という観点からラテンアメリカの政治経済構造を読み解く。そして現代ラテンアメリカの国際政治経済問題を検討する。最後に日本とラテンアメリカの関係について概観する。 なお、一部の項目の内容を圧縮し、最新の政治経済トピックの解説に代えることがある。 【重要な注意事項】 できるだけ平易な解説を心がけるが、春学期の「ラテンアメリカ経済論ａ」を履修していることを前提としているので、基本的な事柄については頭に入っているものとして講義を進める。秋学期のみの受講は、制度的には制限されていないが、推奨しない。 ※春学期の「ラテンアメリカ経済論ａ」のシラバスも合わせて読むこと。	Ⅰ．ラテンアメリカの国際政治経済史 1.　コロンブスとラテンアメリカ（植民地期） 2.　ラテンアメリカの近代化と世界経済（19 世紀） 3.　米国の覇権主義とラテンアメリカ（20 世紀） 4.　地域協調時代のラテンアメリカ（1990 年代以降） Ⅱ．米州域内の国際政治経済 5.　キューバと米国 6.　南米の軍事政権の開発主義と米国 7.　経済危機とワシントン・コンセンサス 8.　1990 年代のネオリベラリズム改革 Ⅲ．現代ラテンアメリカの国際政治経済 9.　自由貿易の拡大とインフラ統合 10．経済のグローバル化と貧困の増大 11．反グローバリズムと社会運動 12．反米・左傾化するラテンアメリカ Ⅳ．日本とラテンアメリカ 13．日本人移民と日本の対ラテンアメリカ協力 14．日本とラテンアメリカ諸国の政治経済関係 15．授業のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献は授業で随時紹介する。	期末試験で評価する（これに授業への参加状況を加味する場合がある）。

13 年度以降（春） 01～12 年度（春）	ヨーロッパ経済論 a 西ヨーロッパ経済論 a	担当者	漆畑　春彦

講義目的、講義概要	授業計画
この講義では、EU経済の歴史・現状・将来展望について考察する。特に欧州連合（EU）の経済及び通貨統合を、1970～2000年代の欧州経済及び世界経済のあり方を踏まえながら理解することを目指すこととする。第2次世界大戦後、経済統合を基盤に復興・発展をとげた欧州だが、2000年代には、経済統合特有の要因から生じる諸問題が顕在化している。そのことを意識しながら、地域・経済統合の背景、経済・通貨政策、経済・産業、2008年の世界金融危機と欧州債務危機への発展、EU経済の今後の展望までを、統計などに基づきできる限り詳細に検討する。	1. 講義の概要 2. 世界の地域統合と欧州統合 3. 関税同盟と単一市場 4. EU の政治・非政治機関と立法 5. EU の共通政策 6. EU の財政政策 7. EU の通貨協力 8. EU の通貨統合 9. 通貨統合の諸問題 10. EU の経済 11. EU の産業 12. EU 経済の構造的不均衡 13. 欧州の金融システム（1） 14. 欧州の金融システム（2） 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
（テキスト）田中素香・長部重康・久保広正・岩田健治著『現代ヨーロッパ経済（第 3 版）』有斐閣 2011 年　毎回レジュメを配布、参考文献は随時指示する。	授業への参加度・貢献度、平常講義の中で課す小レポート、期末試験により評価。各々のウェイトは、順に 20%、40%、40%とする。

13 年度以降（秋） 01～12 年度（秋）	ヨーロッパ経済論 b 西ヨーロッパ経済論 b	担当者	漆畑　春彦

講義目的、講義概要	授業計画
EU 統合の全体観に重きをおく「ヨーロッパ経済論 a」に続き、「ヨーロッパ経済論 b」では、EU を形成する各国の経済・産業・金融・政治・政策に目を向けて検討する。できる限り、政府機関等の統計データを用い、EU 各国の歴史・現状を把握し、展望が明らかとなるような講義に努めたい。	1. 講義の概要 2. 英国と EU 経済 3. ドイツと EU 経済 4. フランスと EU 経済 5. 北欧諸国と EU 経済 6. 中東欧諸国及びロシアと EU 経済 7. EU の対外通商政策 8. 世界金融危機と EU の経済・金融（1） 9. 世界金融危機と EU の経済・金融（2） 10. 世界金融危機と EU の経済・金融（3） 11. 金融危機後の EU 金融制度改革（1） 12. 金融危機後の EU 金融制度改革（2） 13. ユーロと国際通貨・金融システム 14. EU 経済と統合の展望 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
（テキスト）田中素香・長部重康・久保広正・岩田健治著『現代ヨーロッパ経済（第 3 版）』有斐閣 2011 年　毎回レジュメを配布、参考文献は随時指示する。	授業への参加度・貢献度、平常講義の中で課す小レポート、期末試験により評価。各々のウェイトは、順に 20%、40%、40%とする。

01～14 年度（春）	東アジア・中国経済論 a	担当者	駒形　哲哉

講義目的、講義概要	授業計画
近年東アジアの急速な発展と域内諸国の相互依存関係の強化によって、東アジアは世界経済を牽引する存在になったと言われている。なかでも中国経済の動向は 21 世紀の世界経済の新たな秩序を左右する最大のファクターの一つである。特に 2010 年の中国の名目 GDP が日本を上回り、米国に次ぐ世界第 2 位の経済大国になった。今後中国の存在感がますます大きくなりそうである。この授業では東アジア全体に目を配りつつ、中国経済を中心に考察する。 日本もまた東アジアにあって、この地域の諸国と相互に密接な関係をもっている。本科目の履修を通じて、この地域のあり方に関心を向けてもらいたい。 この授業では中国経済の歴史、発展可能性などについて 1970 年代末から始まった改革･開放を中心に講義を進めていきたい。	1. 中国経済の全般的な動向(1) 2. 中国経済の全般的な動向(2) 3. どのように GDP 世界第 2 位に到達したか？(1) 4. どのように GDP 世界第 2 位に到達したか？(2) 5. 社会主義市場経済とは何か？(1) 6. 社会主義市場経済とは何か？(2) 7. メイド・イン・チャイナは世界市場を席捲するか？(1) 8. メイド・イン・チャイナは世界市場を席捲するか？(2) 9. 国有企業改革はどこまで進んだか？(1) 10. 国有企業改革はどこまで進んだか？(2) 11. 農村はいかに変化したか？(1) 12. 農村はいかに変化したか？(2) 13. 労働力は本当に不足しているのか？(1) 14. 労働力は本当に不足しているのか？(2) 15. 総括
テキスト、参考文献	**評価方法**
南亮進・牧野文夫編『中国経済入門第 3 版』日本評論社、2012 年。 その他必要に応じて資料を配布する。	筆記試験によって評価する。リアクションペーパーの提出等を通じた授業への参加、貢献度を加味することもある。

01～14 年度（秋）	東アジア・中国経済論 b	担当者	全　載旭

講義目的、講義概要	授業計画
「東アジア・中国経済論 b」では、春学期の「東アジア・中国経済論 a」で学んだ中国の国民経済発展の基本的なメカニズムを前提に、国際経済との融合が、中国経済に与えたインパクトについて論じる。そのうえで、経済成長と国際経済との融合が中国の政治・経済・社会にもたらしている諸問題について考察する。 日本にとって中国は 2002 年より最大輸入相手国となり､輸出においても 2009 年より米国を抜いて最大相手国となっている。中国にとって日本は最大の輸入相手国であり、米国に次ぐ第 2 位の輸出相手国である。中国は日本にとって、好き嫌いでつきあうかどうかを決められる存在ではなく、いかなる摩擦があろうとも経済面で不可分の関係にあることを理解されたい。 本講義の履修にあたっては､「東アジア・中国経済論 a」をすでに履修していることが望ましい。	1. 中国は世界最大の資本輸出国であり続けるか(1) 2. 中国は世界最大の資本輸出国であり続けるか(2) 3. 外需依存型成長からの転換は可能か？(1) 4. 外需依存型成長からの転換は可能か？(2) 5. 外資は何をもたらしたか？(1) 6. 外資は何をもたらしたか？(2) 7. 米中両国の経済依存関係は災か福か？(1) 8. 米中両国の経済依存関係は災か福か？(2) 9. 日中関係はいかにあるべきか？(1) 10. 日中関係はいかにあるべきか？(2) 11. 持続成長は可能か？(1) 12. 持続成長は可能か？(2) 13. 成長の果実は誰の手に？(1) 14. 成長の果実は誰の手に？(2) 15. 総括
テキスト、参考文献	**評価方法**
南亮進・牧野文夫編『中国経済入門第 3 版』日本評論社、2012 年。 その他必要に応じて資料を配布する。	筆記試験によって評価する。リアクションペーパーの提出等を通じた授業への参加、貢献度を加味することもある。

01～14 年度（春）	オセアニア経済論 a	担当者	永野　隆行

講義目的、講義概要	授業計画
本講義の目的は、オーストラリアの歴史をイギリスの植民地時代から第二次世界大戦終結期まで振り返り、現代オーストラリア理解の一助とすることである。 多くの日本人が観光客、留学生として訪れ、また経済的にも繋がりが深い国でありながら、これまでオーストラリアがどのような歴史をたどってきたのかを知る者はおどろくほど少ない。また知りたいと思っても、日本では文献がそもそも少なく、オーストラリアを知る機会はおのずと限られてしまっている。 そこで本講義では、イギリス人が18世紀後半に入植してから６つの植民地がそれぞれ発展を遂げ、それが1901年にオーストラリア連邦として独立し、そして20世紀前半の二つの世界大戦を経験するまでの、オーストラリアの歴史を、イギリス（英帝国、英連邦）やアメリカ、アジア地域（日本や中国、東南アジア）との関係性の中で振り返って行く。 本講義ではアウトラインを提示したレジメを配付する。なお２～３回、小テストを実施する予定。	第１回：イントロダクション～オーストラリアを学ぶ意義 第２回：植民地オーストラリア①～植民地の誕生 第３回：植民地オーストラリア②～植民地の発展 第４回：大英帝国・英連邦とオーストラリア① ～英帝国の起源とその発展 第５回：大英帝国・英連邦とオーストラリア② ～英帝国から英連邦、コモンウェルスへ 第６回：ゴールドラッシュと白豪主義政策 第７回：多文化主義社会オーストラリア 第８回：講義前半の総括と質疑応答 第９回： 20 世紀初頭の戦争とオーストラリア ～「二つのナショナリズム」 第 10 回：20 世紀初頭の戦争とオーストラリア ～第一次世界大戦とアンザック精神 第 11 回：20 世紀初頭の戦争とオーストラリア ～第一次世界大戦とオーストラリア国内社会 第 12 回：第二次世界大戦～アジア国際関係と黄禍論 第 13 回：２つの捕虜収容所～アンボンとカウラ 第 14 回：対日講和問題とオーストラリア 第 15 回：総括と質疑応答
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：永野隆行他編著『オーストラリア入門』東京大学出版会、2007 年。 参考文献：講義第一回目に詳しい参考文献リストを配布	不定期に実施する数回の小テストの実施（30%）と学期末の定期試験（70%）による評価。

01～14 年度（秋）	オセアニア経済論 b	担当者	永野　隆行

講義目的、講義概要	授業計画
日本が 21 世紀においてアジア太平洋地域の平和と安定に積極的に関わろうとするとき、日本とオーストラリアのパートナーシップはとりわけ重要である。それは、両国が自由主義的民主主義と市場経済という政治的・経済的基本理念、またアジア太平洋地域の平和と安定の実現という戦略的価値を共有すると同時に、こうした価値観とは必ずしも同調しないアジアの歴史と伝統のなかで生きているというアイデンティティをも共有し、両国の連携のための基盤が存在しているからである。日豪両国がともに信頼できるパートナーとして、国際社会において共同行動をとり、平和と安定に積極的に貢献していかなければならない。 秋学期の講義では、オーストラリアが第二次世界大戦後、「アジア太平洋国家」としてのアイデンティティを形成していく過程を概観する。オーストラリアとアジア地域との外交・安全保障・経済（貿易）面での関係の深まりを見ていく。 本講義ではアウトラインを提示したレジメを配付する。なお２～３回、小テストを実施する予定。	第１回：イントロダクション ～オーストラリア外交・経済を見る眼 第２回：オーストラリア経済の史的展開（春学期のまとめ） 第３回：第二次世界大戦後の世界とオーストラリア 第４回：冷戦時代のアジアとオーストラリア 第５回：南西太平洋と核問題 第６回：ベトナム戦争後のオーストラリア 第７回：アジア地域経済統合とオーストラリア 第８回：講義前半の総括と質疑応答 第９回：オーストラリアの開発協力政策 第 10 回：オーストラリアの人口政策（移民・難民） 第 11 回：オーストラリアの産業（資源） 第 12 回：オーストラリアの産業（製造・サービス業） 第 13 回：日豪関係の歴史展開～戦後から 70 年代① 第 14 回：日豪関係の歴史展開～80 年代から現在まで② 第 15 回：21 世紀オーストラリアの行方＆質疑応答
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：永野隆行ほか編著『オーストラリア入門』東京大学出版会、2007 年。 参考文献：講義第一回目に詳しい参考文献リストを配布	不定期に実施する数回の小テストの実施（30%）と学期末の定期試験（70%）による評価。

01～14 年度（春）	アフリカ経済論 a	担当者	佐野 康子

講義目的、講義概要	授業計画
講義目的： 多くのアフリカ諸国が独立を達成した 1960 年頃から半世紀あまりが経過した。世界最後の最大市場として期待を持って語られることの多いアフリカではあるが、その一方で独立当初から数多くの苦難を抱え、今なお困窮した生活を余儀なくされている人達も多い。 アフリカの現状を理解するためには、経済的な側面のみならず、歴史、政治、社会的な考察が不可欠である。よって、本講義では、経済的な側面に重点を置きつつも、アフリカの歴史、政治制度などについても触れる。なお、本講義では、アフリカの中でも特にサハラ砂漠以南アフリカ諸国に焦点を当てる。 講義概要： 春学期は、アフリカ諸国としての歩み、また国際社会におけるアフリカ経済の全体像の把握を目指す。本講義は、パワーポイントを用いて行う。また映像資料も用いる。	第 1 回　ガイダンス（多様なアフリカ） 第 2 回　アフリカの経済史：植民地前 I 第 3 回　アフリカの経済史：植民地前 II 第 4 回　アフリカの経済史：植民地時代 I 第 5 回　アフリカの経済史：植民地時代 II 第 6 回　アフリカの経済史：独立後 I 第 7 回　アフリカの経済史：独立後 II 第 8 回　アフリカの経済誌：独立後 III 第 9 回　アフリカを取り巻く国際環境 I 第 10 回　アフリカを取り巻く国際環境 II 第 11 回　アフリカを取り巻く国際環境 III 第 12 回　地域経済 I 第 13 回　地域経済 II 第 14 回　地域経済 III 第 15 回　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
第一回目の授業にて参考文献を紹介する。	学期末試験により評価する。

01～14 年度（秋）	アフリカ経済論 b	担当者	佐野 康子

講義目的、講義概要	授業計画
講義目的： 多くのアフリカ諸国が独立を達成した 1960 年前後から半世紀あまりが経過した。世界最後の最大市場として期待を持って語られることの多いアフリカではあるが、その一方で独立当初から数多くの苦難を抱え、今なお困窮した生活を余儀なくされている人達も多い。 アフリカの現状を理解するためには、経済的な側面のみならず、歴史、政治、社会的な考察が不可欠である。よって、本講義では、経済的な側面に重点を置きつつも、アフリカの歴史、政治制度などについても触れる。なお、本講義では、アフリカの中でも特にサハラ砂漠以南アフリカ諸国に焦点を当てる。 講義概要： 秋学期は、春学期の講義を踏まえた上で、グローバリゼーションの進展する国際社会におけるアフリカをテーマ毎に扱う。本講義は、パワーポイントを用いて行う。また、映像資料も用いる。	第 1 回　ガイダンス 第 2 回　アフリカへの支援 I 第 3 回　アフリカへの支援 II 第 4 回　アフリカへの支援 III 第 5 回　日本とアフリカ 第 6 回　累積債務と債務削減 第 7 回　民主化に向けて 第 8 回　ガバナンス 第 9 回　農業と食糧 第 10 回　製造業 第 11 回　人口と労働 第 12 回　環境問題 I 第 13 回　環境問題 II 第 14 回　アフリカ経済の展望 第 15 回　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
第一回目の授業にて参考文献を紹介する。	学期末試験により評価する。

01～14 年度（春）	東南アジア経済論 a	担当者	高安　健一

講義目的、講義概要	授業計画
この講義では、東南アジアで事業を展開している日本企業の視点に立って、各国の経済発展の軌跡および経済の特徴について学習します。 講義には二つの軸があります。一つは、東南アジア諸国の多様性に焦点をあてることです。東南アジアという地域概念が定着してから半世紀も経っていません。 もう一つは、共通の分析項目を設定することにより、各国を横並びで捉えることです。経済発展の初期条件、経済発展戦略、マクロ経済動向、産業構造の特徴、外国直接投資、日本との経済関係などについて解説します。加えて、各国が直面している経済的課題を取り上げます。 受講生が講義内容を、大学での研究や就職活動のみならず、卒業後も活用することを期待します。東南アジア経済論 b も履修して下さい。第 1 回の講義に必ず出席すること（出席カード配布予定）。	1. 講義の目的、成績評価 2. 東南アジア経済の概要 3. タイ(1)：経済発展の軌跡と特徴 4. タイ(2)：産業集積と輸出主導型経済 5. シンガポール(1)：経済発展の軌跡と人材戦略 6. シンガポール(2)：産業高度化戦略 7. シンガポール(3)：多国籍企業のグローバル拠点 8. マレーシア：脱工業化への模索 9. インドネシア：世界最大のイスラム国家の挑戦 10. ベトナム：ドイモイ（刷新）政策の意義と限界 11. カンボジア：経済復興から経済成長への道筋 12. ミャンマー：経済再建への胎動 13. 東南アジア諸国が抱える課題 14-15 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
教員が作成した資料を配布する。参考文献は、最初の講義で紹介する。	学期末試験（100%）。感想文や授業中の発言による加点あり。出席が一定回数を下回ると自動的に不可評価になるので注意のこと（詳細は第 1 回の講義で説明）。

01～14 年度（秋）	東南アジア経済論 b	担当者	高安　健一

講義目的、講義概要	授業計画
この講義では、東南アジアで事業を展開している日本企業の視点に立って、地域経済共同体としての東南アジア諸国連合（ASEAN）について学習します。 講義の柱は３つあります。第 1 は、1967 年に発足した ASEAN がいかなる経緯を経て地域経済共同体として発展し、多国籍企業をひきつけてきたかを理解することです。ラオス、カンボジア、タイ、ベトナムなどで構成されるメコン地域の開発構想についても解説します。 第２は、ASEAN における経済発展の担い手である華橋・華人資本、日本の自動車メーカー、邦銀の活動について学ぶことです。 第３は、わが国が ASEAN のさらなる経済発展のために担うべき役割を考えることです。 受講生が講義内容を、大学での研究や就職活動のみならず、卒業後も活用することを期待します。東南アジア経済論 a も履修して下さい。第 1 回の講義に必ず出席すること（出席カード配布予定）。	1. 講義の目的、成績評価等 2. 第 2 次世界大戦後の経済発展の軌跡 3. ASEAN 市場開拓に取り組む日本企業 4. 地域経済共同体としての ASEAN(1)：形成過程 5. 地域経済共同体としての ASEAN(2)：共同体の実現 6. 地域経済共同体としての ASEAN(3)：将来構想 7. ASEAN が直面する経済課題 8. 大メコン圏開発とインフラ整備 9. ASEAN の対域外自由貿易協定（FTA）戦略 10. わが国自動車メーカーのアジア展開 11. 邦銀のアジア展開 12. 経済発展の担い手としての華僑・華人資本 13. わが国と東南アジアの経済関係(1)：ASEAN の視点 14. わが国と東南アジアの経済関係(2)：日本の視点 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
教員が作成した資料を配布する。参考文献は、最初の講義で紹介する。	学期末試験（100%）。感想文や授業中の発言による加点あり。出席が一定回数を下回ると自動的に不可評価になるので注意のこと（詳細は第 1 回の講義で説明）。

01～14 年度（春）	中東経済論 a	担当者	平井　文子

講義目的、講義概要	授業計画
講義目的： 2011年初頭に始まったいわゆる「アラブの春」は、その後各国で様々な展開を見せるとともに、中東のみならずアフリカ、アジアにまで激変をもたらしている。本講義では、主にエジプト革命にいたる歴史的、政治経済的・ジェンダー的分析をおこなうことで、現代の中東・アラブの実態に肉薄する。 講義概要： 授業計画に従い、講義はテキストの第1章第2章第3章を中心に行う。内容はエジプトのナセル時代から現代までの変遷とパレスチナ問題、ヴェールに象徴されるジェンダー問題と多岐にわたる。必要に応じてVTRやDVDを鑑賞する。出席は取らないが、小レポートの提出がある。 なお、就職活動のために欠席しがちな4年生は極力履修を避けていただきたい。	１．現在の中東をどう見るか ２．中東に関する基礎知識 ３．２０１１年アラブ革命の経緯 ４．ナセル革命から６７年第３次中東戦争まで ５．サダトの門戸開放政策とムバラク政権 ６．パレスチナ問題の起源 ７．　英の中東政策とシオニズム運動 ８．ナチスのホロコーストとイスラエル建国 ９．第１次中東戦争～第４次中東戦争 １０．大イスラエル主義とパレスチナ国家設立運動 １１．中東における正義の実現 １２．ヴェール回帰現象の意味 １３．イスラームにおけるジェンダー １４．女性の社会進出と社会の民主化 １５．予備日
テキスト、参考文献	**評価方法**
平井文子著『アラブ革命への視角』（かもがわ出版、２０１２年）	小レポートと期末の試験による

01～14 年度（秋）	中東経済論 b	担当者	平井　文子

講義目的、講義概要	授業計画
講義目的： 中東における経済開発・経済成長という点からここ２、３０年来の中東を考える。輸出志向経済の開発を成功させたトルコの例と豊富な石油・天然ガスの生産・輸出を梃子に新しいタイプの成長路線をとっているペルシャ湾岸諸国の例を検討する。また、２０３０年にはオイルピーク（埋蔵量の半分の掘り尽くし）を迎えると言われている中、アメリカにおけるシェール・オイルの発見という新しい状況が見られるが、オイルメジャーズと産油国の確執の下、原油市場がどのように変遷してきたかを原油価格の変動を通して確認する。 講義概要： 授業計画に従い、テキスト第４章トルコについてまなび、次いで、配布プリントを参考にして、湾岸諸国の経済発展と中東原油をめぐる諸問題を考察する。必要に応じて録画テープやDVDを鑑賞する。 出席は取らないが、小レポートの提出がある。 なお、就職活動のため欠席しがちな４年生の履修は極力避けていただきたい。	１．現在の中東をどう見るか ２.中東に関する基礎知識①：中東の国々とその特徴 ３.中東に関する基礎知識②：歴史、文化、宗教 ４．中東の大国トルコについて ５．公正発展党政権の１０年間 ６．MUSIAD の台頭 ７．ギュレン運動 ８．中東石油は誰のものか ９．オイルメジャーズの支配 １０．OPEC の成立とオイルショック １１．市場原理と原油価格の変遷 １２．原油高騰と投機マネー １３．オイルマネーに基づく湾岸諸国の発展 １４．ドバイ型モデルの光と影 １５．カタールの国家戦略
テキスト、参考文献	**評価方法**
平井文子著『アラブ革命への視角』（かもがわ出版、２０１２年）	小レポートと期末の試験による

13 年度以降（春） 01～12 年度（春）	金融論 a 金融経済論 a	担当者	斉藤　美彦

講義目的、講義概要	授業計画
（目的） 金融の基礎を理解し、金融に関連した新聞記事が読め、議論ができるようになるということを目的とする。 （概要） 講義は、まずマネーと銀行業との関わり、すなわちマクロ的に貨幣供給はどのように行われているかについての解説からはじめる。そして銀行業による貨幣供給と決済システムとの関わりについても解説する。さらに金利の期間構造や銀行の収益構造についても解説する。	1. イントロダクション：銀行は特別な存在か？ 2. 支払システムの担い手としての銀行 3. 手形・小切手の仕組み等 4. 銀行の信用創造機能 5. 銀行の信用創造機能と中央銀行 6. 金融仲介機関のひとつとしての銀行（1） 7. 金融仲介機関のひとつとしての銀行（2） 8. 金利・資産価格・利回り（1） 9. 金利・資産価格・利回り（2） 10. 短期金融市場 11. 銀行業務 12. 銀行業への規制 13. 自己資本比率規制等 14. 信用秩序と銀行の健全経営 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：なし 参考文献：講義中に紹介する	期末試験・レポートによる

13 年度以降（秋） 01～12 年度（秋）	金融論 b 金融経済論 b	担当者	斉藤　美彦

講義目的、講義概要	授業計画
（目的） 金融政策についての議論が理解でき、自分なりの見解を持つことができるようになることを目的とする。 （概要） 近年の中央銀行の金融調節方式の変化を踏まえた上で、金融政策の基本から実際の中央銀行の金融政策運営、金融危機下の金融政策についてまで講義を行う。	1. イントロダクション 2. 金融政策と中央銀行・日本銀行 3. 中央銀行とは何か 4. 中央銀行の３つの機能 5. 資金需給の判断とその調節・短期金融市場金利の決定 6. 政策金利と金利体系・金利水準の変更と経済活動への影響 7. 日本経済の歩んできた道と金融政策 8. バブル経済の崩壊と不良債権問題 9. ゼロ金利政策 10. 量的緩和政策 11. インフレ・ターゲット論 12. 時間軸政策（フォワード・ガイダンス） 13. 金融機関のプルーデンス政策と中央銀行 14. 世界的金融危機と中央銀行の対応 15. まとめ（異次元緩和の評価）
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：熊倉修一『中央銀行と金融政策』晃洋書房、2013 年 参考文献：講義中に紹介する	期末試験・レポートによる。

01～14 年度（春）	金融システム論 a	担当者	斉藤　美彦

講義目的、講義概要	授業計画
（目的） 日本の金融システムの概要、主要金融機関、問題点等について理解できるようになることを目的とする。 （概要） 講義は、まず戦後日本の金融システムの特徴について解説した後に、金融自由化、バブル崩壊によりそれがどのように変化してきたか等について解説する。	1. イントロダクション：戦後金融規制の３本柱 2. 預金取扱機関の諸類型と預金保険制度 3. 高度成長期の金融構造 4. 金融自由化の進展と都市銀行（1） 5. 金融自由化の進展と都市銀行（2） 6. 金融自由化の進展と都市銀行（3） 7. 金融自由化の進展と都市銀行（4） 8. 金融自由化の進展と都市銀行（5） 9. バブルの形成・崩壊と金融機関（1） 10. バブルの形成・崩壊と金融機関（2） 11. バブルの形成・崩壊と金融機関（3） 12. 政府系金融機関の再編成 13. 銀証分離と証券会社 14. 消費者金融専門会社 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：斉藤美彦『金融自由化と金融政策・銀行行動』日本経済評論社、2006 年	期末試験・レポートによる

01～14 年度（秋）	金融システム論 b	担当者	斉藤　美彦

講義目的、講義概要	授業計画
（目的） 歴史的条件等から個性的なものとして発展してきた諸外国の金融システムについて理解することを目的とする。 （概要） 近代的金融システムの発祥の地であるイギリスの金融システムについて解説した後に、アメリカその他の諸国の金融システムについて解説する。さらに近年の世界金融危機についても解説する。	1. イントロダクション：グローバリゼーションの進展と金融システム 2. イギリスの金融システム（1） 3. イギリスの金融システム（2） 4. イギリスの金融システム（3） 5. イギリスの金融システム（4） 6. イギリスの金融システム（5） 7. イギリスの金融システム（6） 8. アメリカの金融システム（1） 9. アメリカの金融システム（2） 10. ドイツの金融システム（1） 11. 欧州通貨統合とユーロ圏の金融システム（2） 12. 世界金融危機（1） 13. 世界金融危機（2） 14. 世界金融危機（3） 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：なし 参考文献：斉藤美彦『イギリスの貯蓄金融機関と機関投資家』日本経済評論社、1999 年。斉藤美彦・簗田優『イギリス住宅金融の新潮流』時潮社、2010 年。他	期末試験・レポートによる。

01～14 年度（春）	財政学 a	担当者	野村　容康

講義目的、講義概要	授業計画
講義目的 本講義では、財政赤字、税制改革、年金改革、公共事業といったわが国の財政問題を考えていく際の手掛かりとなるように財政学の基礎的事項について概説する。本講の受講を通じて、財政の基礎的な制度とその機能について理解を深め、現実の財政問題について自分なりに考える力を身につけてほしい。 **講義概要** 前期は、どちらかと言えば政府の支出活動面に重点を置きながら、財政の機能とわが国財政の現状、公共支出に関する理論、政府債務の問題、公的年金問題等について解説する。後期は、政府収入の中で最も重要な租税に関する議論（租税理論、制度、税制改革論等）に焦点を絞って授業を進める。 **受講者への要望** 受講生は新聞などを通じてできるだけ財政制度改革、税制改正の動向についてフォローし、わが国の財政に関する問題意識を高めてほしい。なお、受講のためにはミクロ経済学の基礎的知識を習得していることが望ましい。	1．財政とは何か 2．財政学とその変遷 3．資源配分の調整機能 4．財政と所得再分配① 5．財政と所得再分配② 6．財政政策の理論① 7．財政政策の理論② 8．公共財の理論① 9．公共財の理論② 10. 補助金の効果 11. わが国財政の現状 12. 公債の制度と理論 13. 公的老齢年金① 14. 公的老齢年金② 15. 財政投融資
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト 八巻節夫『新財政学』文眞堂 参考書　『図説日本の財政』、『図説日本の税制』	原則として定期試験の成績で評価する。 レポートを加味する場合がある。

01～14 年度（秋）	財政学 b	担当者	野村　容康

講義目的、講義概要	授業計画
（財政学 a 参照）	1．租税の意義と根拠 2．租税の基礎的概念① 3．租税の基礎的概念② 4．課税の公平性① 5．課税の公平性② 6．課税の中立性① 7．課税の中立性② 8．租税の転嫁と帰着 9．包括的所得税論 10. 最近の税制改革論 11. 日本の租税体系 12. 個人所得課税 13. 法人所得課税 14. 間接消費課税 15. 資産課税
テキスト、参考文献	**評価方法**
（財政学 a 参照）	（財政学 a 参照）

01～14 年度（春）	公共経済学 a	担当者	高畑　純一郎

講義目的、講義概要	授業計画
＜講義の概要＞ ミクロ経済学の応用科目となる。春学期は、市場の失敗と、規範的な政府の活動範囲に関するトピック（公共財と外部性）を学習する。 ＜講義の目的＞ 市場経済における、最低限の政府の存在意義を理解し、政府の在り方に対する自分なりの考え方を持てるようにすることである。 ＜講義の方針＞ 講義中に練習問題を出題するので、手を動かして理解を深めてもらう。	1　イントロダクション 2　厚生経済学の基本定理 3　市場の失敗と政府 4　政府の役割と機能 5　公共財(1)：私的財と公共財 6　公共財(2)：公共財の自発的供給 7　公共財(3)：社会的最適 8　公共財(4)：サミュエルソン条件 9　公共財(5)：リンダール均衡とは 10　公共財(6)：クラーク・メカニズムと市場均衡 11　外部性(1)：外部性とは 12　外部性(2)：コースの定理 13　外部性(3)：ピグー税 14　外部性(4)：排出権取引 15　外部性(5)：各制度の比較
テキスト、参考文献	**評価方法**
授業では完全にテキストに沿って解説はしないが、参考書として以下を挙げておく； 『公共経済学』麻生良文　有斐閣	評価割合は試験(60%)、宿題(20%)、小テスト(20%)とする。

01～14 年度（秋）	公共経済学 b	担当者	高畑　純一郎

講義目的、講義概要	授業計画
＜講義の概要＞ ミクロ経済学の応用科目となる。秋学期は、政府支出を賄うための財源調達の方法を考えるにあたって、望ましい税制の在り方について学習する。 ＜講義の目的＞ 現実の税制を理解しながら、理想的にはどうあるべきかを自分なりの考えを持てるようになることである。 ＜講義の方針＞ 講義中に練習問題を出題するので、手を動かして理解を深めてもらう。	1　イントロダクション 2　公平な税制(1)：応能原則と応益原則 3　公平な税制(2)：現実の労働所得税制 4　公平な税制(3)：現実の資本所得税制 5　個別物品税(1)：一括税と死荷重 6　個別物品税(2)：税の帰着と弾力性 7　個別物品税(3)：ラムゼイ・ルール 8　個別物品税(4)：代替効果と死荷重 9　労働所得税(1)：税の生涯負担 10　労働所得税(2)：労働供給の決定 11　労働所得税(3)：代替効果と死荷重 12　労働所得税(4)：生活保護と負の所得税 13　資本所得税(1)：貯蓄の決定 14　資本所得税(2)：法人税 15　補足のトピックス
テキスト、参考文献	**評価方法**
授業では完全にテキストに沿って解説はしないが、参考書として以下を挙げておく； 『公共経済学』麻生良文　有斐閣	評価割合は試験(60%)、宿題(20%)、小テスト(20%)とする。

01～14 年度（春）	地方財政論 a	担当者	嶋田　崇治

講義目的、講義概要	授業計画
本講義では我々の生活を支える公共サービスを提供する地方公共団体の財政に関する制度や歴史について取り扱う。具体的には地方財政が果たす役割や機能に関する基礎知識の解説を行い、国際比較なども交えながら日本の地方財政の特質について考える。なお、地方財政を理解するためには中央政府を含めた日本財政全体の制度・動向・問題点についても理解しておく必要がある。そのため、とりわけ春学期には地方政府のみならず中央政府の財政についても触れる。 本講義の目的は受講生の地方財政に関する知識を豊富化させ、最終的には地方財政の問題に対して自らの見解を提示する能力を身に着けさせることにある。	1. イントロダクション 2. 財政とは何か、地方財政とは何か 3. 日本財政の現状と問題点① 4. 日本財政の現状と問題点② 5. 財政の三機能と地方財政の役割 6. 集権的分散システム 7. 予算原則と予算編成 8. 歳出・歳入構成と地方公共サービス 9. 地方税① 10. 地方税② 11. 国庫補助金 12. 財政調整制度 13. 地方交付税① 14. 地方交付税② 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献は講義内で紹介する。 適宜プリントを配布する。	基本的には期末試験の成績（80%）で評価するが、講義時に配布するリアクションペーパーの提出を通じた講義への貢献度（20%）も評価対象として加味する。

01～14 年度（秋）	地方財政論 b	担当者	嶋田　崇治

講義目的、講義概要	授業計画
（地方財政論 a 参照）	1. イントロダクション 2. 地方財政論 a の復習① 3. 地方財政論 a の復習② 4. 地方債① 5. 地方債② 6. 地方分権改革① 7. 地方分権改革② 8. 市町村合併の概要 9. 社会保障と地方財政① 10. 社会保障と地方財政② 11. 自治体財政健全化①（夕張市を例に） 12. 自治体財政健全化②（夕張市を例に） 13. 地方財政と財政赤字① 14. 地方財政と財政赤字② 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
（地方財政論 a 参照）	（地方財政論 a 参照）

01～14 年度（春）	環境経済学 a	担当者	浜本　光紹

講義目的、講義概要	授業計画
近年の環境問題の深刻化とともに，環境保全と経済活動の調和を求めて，新たな社会経済システムの構築への模索が試みられている。本講義では，経済学の立場から，環境破壊が進行する要因を検討し，環境保全型社会経済システムの構築のために環境政策はどのように設計される必要があるのかについて考えていく。 「環境経済学a」では，環境経済学の理論的基礎，環境資源の貨幣的評価とその手法，および環境問題の解決において司法や行政が果たす役割について講義を行なう。	１．　ガイダンス ２．　イントロダクション：環境経済学とは ３．　分析道具の解説：ミクロ経済学の基礎（１） ４．　分析道具の解説：ミクロ経済学の基礎（２） ５．　外部不経済論 ６．　費用便益分析（１） ７．　費用便益分析（２） ８．　環境評価手法（１） ９．　環境評価手法（２） １０．　環境評価手法（３） １１．　環境政策の規範的理論 １２．　環境政策（１）：分権的アプローチ １３．　環境政策（２）：地方政府と司法の役割 １４．　環境保全における政府の役割 １５．　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
浜本光紹『環境経済学入門講義』創成社（近刊予定）	定期試験による。

01～14 年度（秋）	環境経済学 b	担当者	浜本　光紹

講義目的、講義概要	授業計画
「環境経済学 b」では，日本や米国，欧州における環境政策の諸事例を検討しながら，地球温暖化に代表されるような地球環境問題に対処するための環境政策の制度設計はどうあるべきか，ということに関する政策的含意を導き出していく。特に，近年関心が高まっている排出権取引制度に対する批判的検討に重点を置きながら講義を進めていく。	１．　ガイダンス ２．　環境政策手段の基礎理論（１） ３．　環境政策手段の基礎理論（２） ４．　環境政策手段の基礎理論（３） ５．　欧州における環境税制改革 ６．　米国における排出権取引制度（１） ７．　米国における排出権取引制度（２） ８．　米国における排出権取引制度（３） ９．　地球温暖化問題と国際協調 １０．　京都議定書と排出権移転メカニズム（１） １１．　京都議定書と排出権移転メカニズム（２） １２．　欧州における排出権取引制度 １３．　地球温暖化対策の国際的枠組をめぐって（１） １４．　地球温暖化対策の国際的枠組をめぐって（２） １５．　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
浜本光紹『環境経済学入門講義』創成社（近刊予定） 浜本光紹『排出権取引制度の政治経済学』有斐閣	定期試験による。

01～14 年度（春）	都市経済学 a	担当者	倉橋　透

講義目的、講義概要	授業計画
【講義目的】 現代においては、人間の生活や経済活動はかなりの部分は都市で行われている。一方、人間が集まっていることで様々な問題が生じ、政策的な対応も必要になってくる。そのため、都市という空間を対象とした経済学を扱い、政策的にも都市政策を行う必要がでてくる。 この講義では、都市を経済学の立場から分析するとともに、実際に行われている政策を論じ、合わせてその経済学的な意味合いを検討する。 現在、政府や地方公共団体の行う政策はほとんど市場への働きかけを通じて行われることに鑑みれば、将来政策担当者たらんとする者にとっても、経済学を理解しそれによる現状分析を踏まえて政策を考えることが必要である。 この講義は、ミクロ経済学を用いて進めるので勉強しておくこと。 【講義概要】 春学期は都市総論として都市の定義、都市の存在する理由、中心市街地問題、都市計画制度等を論ずる。	１．講義の概要 ２．都市経済学の目的、意義、特徴、方法 ３．都市の定義 ４．都市の規模 ５．生産者行動の理論 ６．都市の存在する理由 ７．都市の発展段階 ８．中心市街地問題 ９．消費者行動の理論 １０．都市と土地利用（住宅の立地決定メカニズム）（その１） １１．都市と土地利用（住宅の立地決定メカニズム）(その２) １２．都市と土地利用（オフィスの立地決定メカニズム） １３．都市と土地利用（土地利用規制とその経済的影響） １４．都市の面的整備事業（土地区画整理事業） １５．まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
教科書は高橋孝明『都市経済学』（有斐閣ブックス）、参考文献は宮尾尊弘『現代都市経済学』第２版（日本評論社）、金本良嗣『都市経済学』（東洋経済新報社）とする。	定期試験による。

01～14 年度（秋）	都市経済学 b	担当者	倉橋　透

講義目的、講義概要	授業計画
【講義目的】 都市において特に政策課題になるものとして、土地・住宅問題、交通問題がある。特に土地・住宅市場の動向はマクロ経済全体の不安定要素にもなりうるものであり、2008 年秋の世界的な金融危機にも深くかかわっている。この講義では都市の個別的な問題を検討する。ミクロ経済学を用いて議論を行うので勉強しておくこと。 【講義概要】 秋学期は土地・住宅問題及び交通問題を検討する。	１．講義の概要 ２．市場の効率性 ３．市場の失敗 ４．土地サービスの需要 ５．土地サービスの供給 ６．地価の決定 ７．不動産バブルと対策 ８．土地政策（土地保有税） ９．住宅の特質と資産価格 １０．住宅価格とヘドニック・モデル １１．住宅政策（公共住宅供給、家賃補助、一般的な所得補助の比較） １２．住宅政策（家賃規制） １３．交通問題（混雑料金） １４．交通問題（費用逓減産業としての交通事業） １５．まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
教科書は高橋孝明『都市経済学』（有斐閣ブックス）、参考文献は宮尾尊弘『現代都市経済学』第２版（日本評論社）、金本良嗣『都市経済学』（東洋経済新報社）とする。	定期試験による。

01～14 年度（春）	経済地理学 a	担当者	犬井　正

講義目的、講義概要	授業計画
経済地理学は経済の諸事象の地理的配置を説明し、経済地域の成立・構造・機能を明らかにすることを目的とする。経済事象は農業、工業、商業など多岐にわたるので、本講義では農業地理学を主体にしながら、経済地理学の方法と内容を学んでいく。 単に講義による農業地理学の理論だけでなく、フィールドワークを実施するとともに、スライドなどを用いできるだけ農業の具体的な姿が把握できるように努める。また、適当なトピックスを選んで、受講者の意見を発表する場も設定する。さらに受講者は与えられた課題に関する小論を提出し、レポート・論文の書き方の基本を習得する。	1. 本講義のオリエンテーション、講義方法、講義内容等 2. 経済地理学の研究方法と研究対象について。 3. 経済地理学研究のためのデータの収集とその活用法。 4. 三角ヒストグラムによる産業構造の分析。 5. 農業活動と自然環境。 6. 農業生産と農業労働力。 7. 農業経営規模と土地の保有形態。 8. 農産物と市場・流通・輸送形態の関係について具体的な農業地域を事例として考察する。 9. 土地利用と土地利用計画・政策。 10. 日本と世界の諸地域の農業経営形態の差異と農業地域区分の方法を考察する。 11. 東京近郊洪積台地上の農業地域のフィールドワーク実施（日曜日に振り替えて実施する）。 12. 都市構造と農業地域 13. 都市農業と生産緑地 14. 近郊農業・遠郊農業・都市農業 15. 前期のまとめと評価。フィールドワークのレポート提出
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：D. グリッグ著『農業地理学』1997 年、農林統計協会	定期試験の結果（80%）、およびフィールドワークのレポート結果と講義への貢献度（20%）から判定する。

01～14 年度（秋）	経済地理学 b	担当者	犬井　正

講義目的、講義概要	授業計画
経済地理学は経済の諸事象の地理的配置を説明し、経済地域の成立・構造・機能を明らかにすることを目的とする。経済事象は農業、工業、商業など多岐にわたるので、本講義では農業地理学を主体にしながら、経済地理学の方法と内容を学んでいく。 単に講義による農業地理学の理論だけでなく、VTR やスライドなどを用いできるだけ農業の具体的な現実の姿がたが把握できるように努める。また、適当なトピックスを選んで、受講者の意見を発表する場も設定する。さらに課題テーマの小論を提出し、レポート・論文の書き方の基本を習得する。	1. 食と農－いのちを食べる意味。 2. 国家と農業政策。 3. 食糧自給率とフードマイレージ。 4. 日本の農業の変遷と農業地域の概観。 5. 食糧管理制度と需要供給曲線。 6. 米作地域の農業経営の特色と課題。 7. 農産物の自由化と日本農業の関係を文化、経済の視点からみる。 8. イギリスの農業の特色と農業地域の概観。 9. イギリスの LFA 地域と集約農業地域の特色を考察。 10. イギリスの工業化する農業と農業地域の特色。 11. イギリスの農産物の過剰生産と農業補助金政策。 12. ＥＵのＣＡＰ政策とイギリス農業地域の対応。 13. 環境保全型農業とデカップリング政策。 14. 食と農と環境のリンケージ。 15. 後期の講義のまとめと評価。
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：D. グリッグ著『農業地理学』1997 年、農林統計協会	定期試験の結果（80%）、およびレポート結果と講義への貢献度（20%）から判定する。

01～14 年度（春）	産業組織論 a	担当者	和久津　尚彦

講義目的、講義概要	授業計画
『プラクティカル産業組織論』の著者の泉田成美先生と柳川隆先生は、「産業組織論はエキサイティング！」と語っています。産業組織論がエキサイティングである理由の１つはこの研究領域が現実の姿を描くことにチャレンジしている所にあると思います。 経済学でよく出てくる完全競争は、売り手と買い手が非常に多く、個々の売り手・買い手は価格を決定する力を持っていないと仮定します。しかし、現実にはそのような市場は稀で、多くの産業で少数の企業が価格決定力を持って利潤を得ています。産業組織論は、必ずしも現実的ではない完全競争の仮定を一つ一つ現実の形に近付けてゆきながら、その時の市場問題に取り組んでいきます。 春学期は、ミクロ経済の基礎をおさらいした後、独占企業の行動、価格支配力の影響、合併などのトピックを扱います。 講義は、図や簡単な数式による説明があります。苦手に思う人もいると思いますが、丁寧に説明していきます。 入門レベルのミクロ経済学の知識があれば役立ちますが、前提とはしません。 トピック別に課題を数回出す予定です。	1. イントロダクション 2. 企業とコスト(1) 3. 企業とコスト(2) 4. 競争と経済厚生(1) 5. 競争と経済厚生(2) 6. 独占企業の行動(1) 7. 独占企業の行動(2) 8. 独占企業の行動(3) 9. 価格差別(1) 10. 価格差別(2) 11. 価格差別(3) 12. 合併、垂直統合と垂直制限(1) 13. 合併、垂直統合と垂直制限(2) 14. 合併、垂直統合と垂直制限(3) 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献：泉田成美・柳川隆『プラクティカル産業組織論』有斐閣アルマ、2008 年、他、適宜紹介します。	課題(40%)、期末テスト(60%)で総合評価します。

01～14 年度（秋）	産業組織論 b	担当者	和久津　尚彦

講義目的、講義概要	授業計画
『プラクティカル産業組織論』の著者の泉田成美先生と柳川隆先生は、「産業組織論はエキサイティング！」と語っています。産業組織論がエキサイティングである理由の１つはこの研究領域が現実の姿を描くことにチャレンジしている所にあると思います。 経済学でよく出てくる完全競争は、売り手と買い手が非常に多く、個々の売り手・買い手は価格を決定する力を持っていないと仮定します。しかし、現実にはそのような市場は稀で、多くの産業で少数の企業が価格決定力を持って利潤を得ています。産業組織論は、必ずしも現実的ではない完全競争の仮定を一つ一つ現実の形に近付けてゆきながら、その時の市場問題に取り組んでいきます。 秋学期は、春学期の内容を一部おさらいした後、少数の企業が市場に参加する寡占、価格支配力の影響、合併などのトピックを扱います。 講義は、図や簡単な数式による説明があります。苦手に思う人もいると思いますが、丁寧に説明していきます。 入門レベルのミクロ経済学の知識があれば役立ちますが、前提とはしません。 トピック別に課題を数回出す予定です。	1. イントロダクション 2. 独占企業の行動―復習(1) 3. 独占企業の行動―復習(2) 4. ゲーム理論の初歩(1) 5. ゲーム理論の初歩(2) 6. クールノー競争(1) 7. クールノー競争(2) 8. シュタッケルベルグ競争(1) 9. シュタッケルベルグ競争(2) 10. ベルトラン競争 11. 製品差別化(1) 12. 製品差別化(2) 13. 市場集中度(1) 14. 市場集中度(2) 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献：泉田成美・柳川隆『プラクティカル産業組織論』有斐閣アルマ、2008 年、他、適宜紹介します。	課題(40%)、期末テスト(60%)で総合評価します。

01 ～ 14 年度（春）	産業構造論 a	担当者	山越　徳

講義目的、講義概要

経済の発展、成長に伴い、様々な側面の経済構造が変化することはよく知られており、またその変化がより一層の発展、成長を促す。本講義ではそれらの構造変化の主たる産業構造の変動に注目し、近代的経済発展、産業社会の形成、生産技術構造、それらを支える経済構造、相互依存関係を考察し、高度経済成長や重化学工業化の意味を考える。そのため、その姿を捉える上で有力な分析道具の一つである産業連関表についても解説、それを用いた日本経済の分析についても見ていくことにする。なお第 1 回目の講義で参考文献の紹介、解説も行う。

授業計画

1. 経済成長、経済発展：経済成長とは、S.クズネッツの指標、経済構造の変化、工業化、高度化、多様化
2. 近代的経済発展：一人当たり国民所得、GNP、労働生産性、産業規模、産業社会、産業革命
3. 産業の概念：産業の経済学、生産構造、生産技術、産業分類、分業、産業統計、商品ベースと企業ベース
4. 経済成長と産業構造Ⅰ：経済進歩の歴史過程、エネルギー集約化、基本三部門分類、ペティの法則、AMS 分類
5. 経済成長と産業構造Ⅱ：労働力構成と所得構成、成長の弾性、所得弾性、時系列データとクロスセクションデータ
6. 経済成長と産業構造Ⅲ：発展段階説、製造業内部の構造と発展、消費財と投資財、最終財と中間財、輸入と国産化、輸入代替、生産規模
7. 経済成長と産業構造Ⅳ：輸入指向型工業化、先進工業国と NIES、雁行形態、重化学工業化、ローマクラブ、石油危機
8. 産業連関表とはⅠ：新 SNA、投入係数、逆行列、中間投入、中間需要、最終需要、付加価値部門、直接および間接の生産波及、総合依存関係
9. 産業連関表とはⅡ：産業特性、感応度係数と影響度係数、前方連関と後方連関
10. 産業連関表とはⅢ：投入係数の固定性と変化、貿易構造 スカイライン分析
11. 産業連関表による分析Ⅰ：構造変化の要因分析、投入係数の変化と技術変化、生産プロセスと産業部門、部門の再配列、ブロック化、三角形化、部門の独立性
12. 産業連関表による分析Ⅱ：素原材料系統の転換、工業原材料と生産規模、ユニットストラクチャー、構造転換、規模別 I-O 表
13. 産業連関表による分析Ⅲ：資本マトリックス、産職マトリックス
14. 産業連関表による分析Ⅳ：地域 I-O 表、国際 I-O 表、国際分業、公害 I-O 表
15. まとめ

テキスト、参考文献

宮沢健一『産業の経済学』第 2 版　東洋経済新報社
米倉誠一郎『経営革命の構造』岩波新書
鶴田俊正、伊藤元重『日本産業構造論』NTT 出版
尾崎巖『日本の産業構造』慶應義塾大学出版会

評価方法

レポート（課題は講義の中で提示）と期末テストの両方による。必ず両方とも対応すること。

01 ～ 14 年度（秋）	産業構造論 b	担当者	山越　徳

講義目的、講義概要

本来は産業構造論 a の講義内容を踏まえて、石油危機後の激しい構造変化、サービス経済化、ソフト化、情報化、国際化などの変動の事例の分析を通して、新しく出てきた諸問題、これまでの構造変化の指標にとってかわるべき新しい指標、産業構造の捉え方を一緒に考察していく。

授業計画

1. 産業構造の新しい方向：サービス化、ソフト化、情報化、多様化、高度化、複合化、国際化、構造変化の指標
2. 産業構造の新しい指標：財とサービス、サービスの生産物と生産性、有形財と無形財、間接労働と直接労働、労働投入と評価、構造変化の流れ
3. 産業内部の構造変化・ケーススタディⅠ：３つのオートメーション、高度経済成長期の生産技術と 80 年代 90 年代の生産技術、技術波及
4. 産業内部の構造変化・ケーススタディⅡ：鉄鋼、電機、時計、印刷、銀行、小売などの事例
5. 産業内部の構造変化・ケーススタディⅢ：ロボットとコンピュータ、労働への影響分析
6. 産業内部の構造変化・ケーススタディⅣ：ME 革命と IT 化、何が起きているか
7. 構造変化と就業構造Ⅰ：労働力の需要と供給、人口構造、産業構造と職業構造、基幹労働力と縁辺労働力、性別労働力
8. 構造変化と就業構造Ⅱ：日本の労働市場、新規学卒労働力、大企業と中小企業
9. 構造変化と就業構造Ⅲ：雇用制度、雇用慣行、雇用調整、労働の属性
10. 構造変化と就業構造Ⅳ：ソフト化、知識集約化と職業構造および女子労働
11. 産業と地域Ⅰ：地域活性化と産業、国際化と地域、大企業と中小企業、地場産業
12. 産業と地域Ⅱ：大都市産業、産業集積
13. 産業と地域Ⅲ：地域の取り組みの事例、商業集積、商店街
14. 経済政策、産業政策、労働政策の結びつき、地域活力、インキュベータ、自治体の役割
15. まとめ

テキスト、参考文献

関満博『フルセット型産業構造を越えて』中公新書
清成忠男、橘本寿朗『日本型産業集積の未来像』日本経済新聞社　他

評価方法

レポート（課題は講義の中で提示）と期末テスト両方による。必ず両方に対応すること。

05～14 年度（春） 01～04 年度（春）	社会保障論 a 社会政策 a	担当者	山岡　淳

講義目的、講義概要	授業計画
本講義では、社会保障制度を充実させた国家体制である「福祉国家体制」の前提となる思想や理論の変遷を取り扱います。 近代以降、多くの社会問題は、社会保障政策を中心とした、国家が国民の生活に積極的に関与していく政策によって解決されていきました。その背後には、ただ国家による国民に対する慈悲のみが存在していたわけではなく、時代ごとに、その時代を反映した、経済状況や社会状況、またそこから発した思想や社会組織の影響がありました。そもそも、社会保障制度とこれらの諸要件は不可分な関係です。 学生の皆さんには、本講義を通して、現在の社会保障政策が大きく扱われている福祉国家体制が、どのように成立、成熟していったのか、そして現在至るまでどのような問題や限界を構造的に持っているのか理解していただきます。 講義は授業計画通り進めていきますが、履修者の理解度を考慮しますので、一部の単元の内容が変更されることがあります。	1. イントロダクション 2. 近代社会と経済社会問題① 3. 近代社会と経済社会問題② 4. 経済社会思想と社会政策の展開① 5. 経済社会思想と社会政策の展開② 6. 多元社会化と国家の変質 7. 福祉国家の政策体系① 8. 福祉国家の政策体系② 9. 社会体制と政策思想の諸系譜 10. 福祉国家の諸困難 11. 福祉国家の調整問題① 12. 福祉国家の調整問題② 13. 福祉国家から福祉社会へ① 14. 福祉国家から福祉社会へ② 15. 総括
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：足立正樹編著『福祉国家の転換と福祉社会の展望』高菅出版。参考文献：藤岡秀英『社会政策のための経済社会学』高菅出版。	期末試験(90%)および授業への参加度（10%)による評価。なお、出席回数が 3 回以下の履修者の成績は F(不可)とする。詳細な評価方法は授業中に紹介する。

05～14 年度（秋） 01～04 年度（秋）	社会保障論 b 社会政策 b	担当者	山岡　淳

講義目的、講義概要	授業計画
本講義では、現代日本の社会保障制度の具体的な政策の内容と、それぞれの特徴と課題について取り扱います。 社会保障制度の今後のあり方や改革の内容をめぐって、国会が紛糾し、報道でも多く取り上げられていることからも、社会保障制度が国民生活へ大きな影響を持っていることがわかると思います。ただ、社会保障制度が「社会にとって重要な何か」というあいまいなものではなく、より具体的な制度を通して、何がどうして必要とされているのかを紹介していきます。 そのために、まず、日本の社会保障政策の概要を抑えたうえで、年金・医療・介護の制度の紹介をおこなっていきます。本講義を通して、学生の皆さんには、その文脈を理解したうえで、各制度の特徴や課題を経済学の視点を通して理解して頂きます。 講義は授業計画通り進めていきますが、履修者の理解度を考慮しますので、一部の単元の内容が変更されることがあります。 なお、試験には計算問題を含みます。	1. イントロダクション 2. 社会保障とは何か？ 3. マクロ統計からみた社会保障 4. 社会保障と国民負担・財政収支 5. 所得格差と所得再分配 6. 日本の医療保障制度の現状 7. 日本の医療保障制度の課題 8. 医療の経済学 9. 日本の介護保険制度の現状と課題 10. 介護保険の経済学 11. 日本の公的年金制度の現状 12. 日本の公的年季制度の課題 13. 公的年金の経済学 14. 近年の社会保障改革 15. 総括
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：小塩隆士『社会保障の経済学』(第 3 版)日本評論社。椋野美智子・田中耕太郎『初めての社会保障　福祉を学ぶ人へ』(第 9 版)有斐閣アルマ。	期末試験(90%)および授業への参加度（10%)による評価。なお、出席回数が 3 回以下の履修者の成績は F(不可)とする。詳細な評価方法は授業中に紹介する。

01～14 年度（春）	労働経済学 a	担当者	森永　卓郎

講義目的、講義概要	授業計画
労働経済学は、労働分野の諸問題を経済学の枠組みで解明する学問です。 この講義では、労働経済学の基礎理論を学びます。経済学の知識はあったほうが望ましいですが、知識がなくても理解できるように講義を進めます。	1．ガイダンス 2．労働経済学とは何か 3．無差別曲線と就業選択 4．労働需要 5．失業 6．雇用調整 7．情報の役割 8．雇用をとりまく構造変化 9．賃金と労働時間 10. 高齢者の就業促進 11. 人事と労働インセンティブ 12. 労働経済理論と現実の乖離 13. 男女共同参画社会 14. 若年労働 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
ネット上で講義資料を公開します	試験

01～14 年度（秋）	労働経済学 b	担当者	森永　卓郎

講義目的、講義概要	授業計画
労働経済学は、労働分野の諸問題を経済学の枠組みで解明する学問です。 この講義では、労働経済学の理論を現実の経済・社会に適用して、現代の雇用システムの問題点を探ります。	1．ガイダンス 2．ジニ係数と所得格差の現状 3．非婚化の進展と少子化 4．男女雇用均等法と税制 5．公平な税制とは何か 6．日本的雇用慣行とは何か 7．知的創造性を育む雇用制度とは 8．ＵＦＪ総合研究所の評価システム 9．自由と自己責任の評価がもたらすもの 10. ビジョナリーカンパニーと労働 11. イタリアはなぜ強いのか 12. 人はなぜ働くのか 13. 雇用安定と流動性の両立：フレクシキュリティの罠 14. 金融政策と労働市場 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
ネット上で講義資料を公開します	試験

01～14年度（春）	会計学a	担当者	内倉　滋

講義目的、講義概要	授業計画
「会計学a，b」という科目は、複式簿記原理の最低限の知識を前提として、それに内容的な意味付けを試みていくものであり、会計を言語に例えるならば「意味論」に相当するものである。そこで取り扱われる中身は、広義の意味での会計学の全領域ということになる。 そのうち「会計学a」では、最初に複式簿記の基本原理を ごく簡単に説明した上で、財務会計論の領域の諸問題を順次講義していきたい。具体的には、資産や負債の定義ということから始めて、最終的にはキャッシュフロー計算書や連結財務諸表の作成方法についての説明も予定している。 なお、本講義は、ここ数年 科目登録が抽選制になってしまい、設置学科の学生が希望しても受講できない事態になってしまっていた。そのため本年度については、経営学科には類似科目が設置されていることもあるので、経営学科生の履修を許可しないこととしたい。	1 オリエンテイション(本講義の 目的,目標 等) 2 テキスト第１章 決算書から見える世界(①決算書とは,②会計学の２つの領域) 3 テキスト第２章 会計と決算 その１：複式簿記の基本概念と 貸借対照表,損益計算書 4 テキスト第２章 会計と決算 その２：取引の仕訳 5 テキスト第２章 会計と決算 その３：勘定口座への転記 6 テキスト第２章 会計と決算 その４： 決算修正 7 テキスト第２章 会計と決算 その５：貸借対照表,損益計算書 の中身について 8 テキスト第２章 会計と決算 その５：間接法によるキャッシュフロー計算書 9 テキスト第２章 会計と決算 その６：直接法によるキャッシュフロー計算書 10 テキスト第２章 会計と決算 その７：グループ経営と決算書(連結財務諸表の作成) 11 テキスト第２章 会計と決算 その８：資産,負債 定義とリース取引 12 ①テキスト第２章第４節,②テキスト第３章 第１，２節 13 テキスト第３章 第３節：資産評価の基礎 14 総復習 その１……第２回講義～第13回講義の総復習 15 総復習 その２……期末試験の予行演習
テキスト、参考文献	**評価方法**
山浦久司･廣本敏郎 編著､『ガイダンス企業会計入門[第４版]』(白桃書房)	7～8割は期末試験の結果,残りは平常点(講義中の小テスト等) で評価する。その際、相対評価を基本とし、絶対評価を加味する。

01～14年度（秋）	会計学b	担当者	内倉　滋

講義目的、講義概要	授業計画
「会計学 b」は、「会計学 a」の知識を前提として、‘会計監査論’，‘管理会計論’，‘経営分析論’，‘税務会計論’といった領域の諸問題を、教科書に沿った形で講義していきたい。 なお、本講義は、ここ数年 科目登録が抽選制になってしまい、設置学科の学生が希望しても受講できない事態になってしまっていた。そのため本年度については、経営学科には類似科目が設置されていることもあるので、経営学科生の履修を許可しないこととしたい。	1 テキスト第３章 決算書のルール その１： 剰余金の額,剰余金の配当 2 テキスト第３章 決算書のルール その２：会計基準の登場,会計基準の国際的調和 3 テキスト第４章 :製造会社の決算書 第１節 4 テキスト第４章 :製造会社の決算書 第２節 その１：総合原価計算 その１ 5 テキスト第４章 :製造会社の決算書 第２節 その２：総合原価計算 その２ 6 テキスト第４章 :製造会社の決算書 第２節 その３：個別原価計算 7 テキスト第４章 :製造会社の決算書 第４節 標準原価計算 8 テキスト第５章 決算書の信頼性を確かめる 9 テキスト第６章 決算書の内部利用 第２節 ＣＶＰ分析 10 テキスト第６章 決算書の内部利用 第４節 機会原価概念,差額原価収益分析 11 テキスト第７章 決算書を読んでみよう 12 テキスト第８章 決算書と税金 13 テキスト第８章の特論：税効果会計 14 総復習 その１……第１回講義～第13回講義の総復習 15 総復習 その２……期末試験の予行演習
テキスト、参考文献	**評価方法**
「会計学 a」と同じ。	「会計学 a」と同様。

01～14 年度（春）	経営学 a	担当者	有吉　秀樹

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は、会社の経営がどのように行なわれているものなのかについて、大まかに理解してもらうことを目的としている。ある会社設立のケースを想定し、グループに分かれて、ビジネスプランを立ててもらう。企業経営の面白さと難しさを体感することを通じて、今後学ぶ様々な専門科目への理解･興味の橋渡しとなれば幸いである。	1. オリエンテーション 2～14. グループワークによるビジネスプラン作成 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
ケーススタディと参考資料を配布する	グループワークへの参加度と期末レポートにより評価する

01～14 年度（秋）	経営学 b	担当者	有吉　秀樹

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は、会社の経営がどのように行なわれているものなのかについて、大まかに理解してもらうことを目的としている。ある会社設立のケースを想定し、グループに分かれて、ビジネスプランを立ててもらう。企業経営の面白さと難しさを体感することを通じて、今後学ぶ様々な専門科目への理解･興味の橋渡しとなれば幸いである。	1. オリエンテーション 2～14. グループワークによるビジネスプラン作成 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
ケーススタディと参考資料を配布する。	グループワークへの参加度と期末レポートにより評価する。

01～14 年度（春）	経営学 a	担当者	岡部　康弘

講義目的、講義概要	授業計画
経営学は、かなり幅広い学問領域を含んでいる。主たるものでも、戦略論、組織論、組織行動論、人的資源論、国際経営論等がある。本講義はこれらの中で組織行動論に焦点を当てる。組織行動論とは、企業などの組織環境の中で人はなぜその行動を取るのかを理解することに主眼を置く。講義方法前半はパワーポイントを使い、なるべくわかり易く企業の実例をあげて理論の説明を行う。後半はグループに別れてケース分析を行い前で発表をする。	１．　ガイダンス ２．　モチベーション ３．　グループの性質 ４．　リーダーシップ ５．　コミュニケーション ６．　紛争と対立 ７．　意思決定 ８．　パワーとポリティクス ９．　人的資源 １０．　企業文化 １１．　組織構造 １２．　組織変革 １３．　ＤＶＤ（フラット化する世界） １４．　復習 １５．　Ｑ＆Ａ
テキスト、参考文献	**評価方法**
講義資料は毎回配布する。	評価は学期末試験による。出席は本学の慣例による。４回以上欠席は不可。遅刻については、公的機関の遅れ等以外の理由の入室は禁止。

01～14 年度（秋）	経営学 b	担当者	岡部　康弘

講義目的、講義概要	授業計画
経営学は、かなり幅広い学問領域を含んでいる。主たるものでも、戦略論、組織論、組織行動論、人的資源論、国際経営論等がある。本講義はこれらの中で組織行動論に焦点を当てる。組織行動論とは、企業などの組織環境の中で人はなぜその行動を取るのかを理解することに主眼を置く。講義方法前半はパワーポイントを使い、なるべくわかり易く企業の実例をあげて理論の説明を行う。後半はグループに別れてケース分析を行い前で発表をする。	１．　ガイダンス ２．　モチベーション ３．　グループの性質 ４．　リーダーシップ ５．　コミュニケーション ６．　紛争と対立 ７．　意思決定 ８．　パワーとポリティクス ９．　人的資源 １０．　企業文化 １１．　組織構造 １２．　組織変革 １３．　ＤＶＤ（フラット化する世界） １４．　復習 １５．　Ｑ＆Ａ
テキスト、参考文献	**評価方法**
講義資料は毎回配布する。	評価は学期末試験による。出席は本学の慣例による。４回以上欠席は不可。遅刻については、公的機関の遅れ等以外の理由の入室は禁止。

01～14 年度（春）	経営学 a	担当者	陰山　孔貴

講義目的、講義概要	授業計画
本講義では、ビジネスが運営されている仕組みについて学びます。講義のスタイルとしては、極力、私からの一方通行の講義をするのではなく、皆さんとのやりとりを大切にする双方向の講義を行いたいと考えています。 また、この講義は皆さんが将来、行うであろう仕事やキャリアについても考える時間となって欲しいと思っています。 私が経験してきたビジネスの現場の話も時には入れつつ、極力楽しく、皆さんと経営学を学んでいきたいと思っています。	1. 講義概要 2. 企業経営の全体像 3. 企業とインプット市場との関わり 4. 企業とアウトプット市場との関わり 5. 企業ケース① 6. 競争戦略のマネジメント① 7. 競争戦略のマネジメント② 8. まとめ（中間） 9. 多角化戦略のマネジメント 10. 企業ケース② 11. 国際化のマネジメント 12. マクロ組織のマネジメント 13. ミクロ組織のマネジメント 14. 企業ケース③ 15. まとめ（最終）
テキスト、参考文献	**評価方法**
第 1 回の講義にて説明します。	授業への貢献度、試験にて総合的に評価します。

01～14 年度（秋）	経営学 b	担当者	陰山　孔貴

講義目的、講義概要	授業計画
本講義では、ビジネスが運営されている仕組みについて学びます。講義のスタイルとしては、極力、私からの一方通行の講義をするのではなく、皆さんとのやりとりを大切にする双方向の講義を行いたいと考えています。 また、この講義は皆さんが将来、行うであろう仕事やキャリアについても考える時間となって欲しいと思っています。 私が経験してきたビジネスの現場の話も時には入れつつ、極力楽しく、皆さんと経営学を学んでいきたいと思っています。	1. 講義概要 2. 企業経営の全体像 3. 企業とインプット市場との関わり 4. 企業とアウトプット市場との関わり 5. 企業ケース① 6. 競争戦略のマネジメント① 7. 競争戦略のマネジメント② 8. まとめ（中間） 9. 多角化戦略のマネジメント 10. 企業ケース② 11. 国際化のマネジメント 12. マクロ組織のマネジメント 13. ミクロ組織のマネジメント 14. 企業ケース③ 15. まとめ（最終）
テキスト、参考文献	**評価方法**
第 1 回の講義にて説明します。	授業への貢献度、試験にて総合的に評価します。

01～14 年度（春）	経営学 a	担当者	小林　哲也

講義目的、講義概要	授業計画
現代企業の国際化と情報化の動きを中心に、経営学の基礎的な事項の学習を進めることを目的とする。 現代企業を取り巻く条件は、急速に変化している。新興諸国の工業化にともなって、世界の産業地図は大きく描き直されようとしているし、IT 革命の進展とともに、企業の組織や戦略にも大きな変化が見られる。 本講義では、主として日本経済および日本企業の経験に学びながら、経営学の基礎知識および現代企業の直面する問題を議論していく。日常的な経済に関する知識を養うために、新聞を毎日読む習慣をつけてほしい。	1．経済学と経営学①　ノートの取り方情報の集め方 2．経済学と経営学②　会社とは　経営とは 3．日本的経営とシステムとしての日本企業 4．GE の企業革命 5．日本的生産システムの進化 6．情報技術革命のインパクト 7．暴走する資本主義　「マネー資本主義」 8．技術革新と新しい国際分業 9．日本企業の海外進出 10. 世界の多国籍企業 11.　グローバリゼーション 12.　グローバリゼーション賛成・反対 13.　日本企業の行方 14.　日本経済の行方 15　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
三橋規宏他『ゼミナール日本経済入門』日本経済新聞社 上林憲雄他『経験から学ぶ経営学入門』有斐閣ブックス 後は、適宜講義中に紹介する。	授業への参加度および定期試験による。

01～14 年度（秋）	経営学 b	担当者	小林　哲也

講義目的、講義概要	授業計画
現代企業の国際化と情報化の動きを中心に、経営学の基礎的な事項の学習を進めることを目的とする。 現代企業を取り巻く条件は、急速に変化している。新興諸国の工業化にともなって、世界の産業地図は大きく描き直されようとしているし、IT 革命の進展とともに、企業の組織や戦略にも大きな変化が見られる。 本講義では、主として日本経済および日本企業の経験に学びながら、経営学の基礎知識および現代企業の直面する問題を議論していく。日常的な経済に関する知識を養うために、新聞を毎日読む習慣をつけてほしい。	1．経済学と経営学①　ノートの取り方情報の集め方 2．経済学と経営学②　会社とは　経営とは 3．日本的経営とシステムとしての日本企業 4．GE の企業革命 5．日本的生産システムの進化 6．情報技術革命のインパクト 7．暴走する資本主義　「マネー資本主義」 8．技術革新と新しい国際分業 9．日本企業の海外進出 10. 世界の多国籍企業 11.　グローバリゼーション 12.　グローバリゼーション賛成・反対 13.　日本企業の行方 14.　日本経済の行方 15　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
三橋規宏他『ゼミナール日本経済入門』日本経済新聞社 上林憲雄他『経験から学ぶ経営学入門』有斐閣ブックス 後は、適宜講義中に紹介する。	授業への参加度および定期試験による。

01～14 年度（春）	経営学ａ	担当者	鈴木　淳

講義目的、講義概要	授業計画
経営学には様々な各論があり、それぞれもまた専門分野として確立していて、これまでの学術的蓄積をもとに大学の経営学のカリキュラムは組まれています。しかし、予備知識なしにいきなり各論の講義を聴いても、それらの意義や重要性を認識するにはたいへんなことかもしれません。 そこでこの講義では、経営学の全体を見渡してどのような内容がどのような用語や表現で扱われているかを学び、専門的な科目を学んでいく上での助けになるように計画しました。 経営学の全体像をつかみ、これから学んでいくいろいろな科目の違いや関連性を理解し、各自の興味の対象や範囲を明らかにしていくことを目的としています。 なお全体として企業の創業から倒産までの「会社の一生」をたどるように講義内容を配列してあります。そういった面からも興味をもってもらえれば幸いです。	1. ガイダンスと序論 2. 企業形態と経営計画 3. 生産管理 4. 職能と組織 5. 人的管理 6. 株式公開 7. 株式会社金融 8. 財務管理 9. 研究開発とマーケティング 10. 事業展開 11. 国際経営 12. 企業統治 13. 社会的責任 14. 経営の失敗と企業の終り 15. 経営科学と意思決定
テキスト、参考文献	**評価方法**
小松章『基礎コース[経営学]-1 経営学（第 2 版)』新世社 2006。 参考書は随時紹介します。	期末試験（70%程度）と授業への参加状況（30%）を基準とします。

01～14 年度（秋）	経営学ｂ	担当者	鈴木　淳

講義目的、講義概要	授業計画
経営学には様々な各論があり、それぞれもまた専門分野として確立していて、これまでの学術的蓄積をもとに大学の経営学のカリキュラムは組まれています。しかし、予備知識なしにいきなり各論の講義を聴いても、それらの意義や重要性を認識するにはたいへんなことかもしれません。 そこでこの講義では、経営学の全体を見渡してどのような内容がどのような用語や表現で扱われているかを学び、専門的な科目を学んでいく上での助けになるように計画しました。 経営学の全体像をつかみ、これから学んでいくいろいろな科目の違いや関連性を理解し、各自の興味の対象や範囲を明らかにしていくことを目的としています。 なお全体として企業の創業から倒産までの「会社の一生」をたどるように講義内容を配列してあります。そういった面からも興味をもってもらえれば幸いです。	1. ガイダンスと序論 2. 企業形態と経営計画 3. 生産管理 4. 職能と組織 5. 人的管理 6. 株式公開 7. 株式会社金融 8. 財務管理 9. 研究開発とマーケティング 10. 事業展開 11. 国際経営 12. 企業統治 13. 社会的責任 14. 経営の失敗と企業の終り 15. 経営科学と意思決定
テキスト、参考文献	**評価方法**
小松章『基礎コース[経営学]-1 経営学（第 2 版)』新世社 2006。 参考書は随時紹介します。	期末試験（70%程度）と授業への参加状況（30%）を基準とします。

01～14 年度（春）	経営学ａ	担当者	高松　和幸

講義目的、講義概要	授業計画
講義目的：マネジメントの基礎概念を理解することとする。概念レベルとしての企業や経営、管理や組織、経営効率性や事業有効性等について、日常的な事例を交えてやさしく説明する。そこから見えてくる、マネジメントとはどのようなものかを一緒に考えてみたい。 講義概要：本講義では、マネジメントで明らかにしようとしている基本的な課題を取り上げる。企業はヒト・モノ・カネ・情報が大切だという。なぜ大切かというと、組織を構成するマネジメントの要素だからである。それを組み合わせる仕組みが株式会社や NPO などによる制度である。ものづくりの仕組み、ヒトを動かす仕組み等、システムとしてマネジメントを見ると、カネの動きを統制する財務、社会の器としての企業の新しい視点が学習効果を高める。	1. オリエンテーション・・本講義の全体像を紹介する 2. マネジメントとは何か 3. 株式会社の仕組みと組織 4. コーポレート・ガバナンス 5. 企業集団とグループ経営 6. ものづくりと生産システム 7. 企業の組織 8. 組織における人間行動 9. モチベーション 10. イノベーションの仕組み 11. 人的資源としての雇用管理 12. 企業の資金調達 13. BOP ビジネス 14. マッチングギフト「企業市民」としての企業 15. マネジメントのフロンティア・・この領域でこれまでに蓄積された知見は非営利組織をはじめ、より広い組織にも適用され、有用な分析用具として活用されている。その動向に注目して説明する
テキスト、参考文献	**評価方法**
適宜、プリント配布 拙著『経営組織論の展開』創成社など	レポート重視（授業中，クイズ等も行う）

01～14 年度（秋）	経営学ｂ	担当者	上坂　卓郎

講義目的、講義概要	授業計画
この講義は将来企業人として仕事をする上で必要となる「企業経営」に関する経営学の基礎的知識の習得をめざす。また諸君の企業に対する関心の惹起や見方を形成するための契機になるような講義を意図している。講義はテキスト、ハンドアウトをベースにして進める。なお講義と並行して日頃より新聞やニュース等で企業の動向に関心を持つことを勧める。 なお大幅な遅参や途中退出は原則として認めません。	1　変貌するビジネス 2　会社制度と企業経営 3　会社の目的と業績評価（１） 4　会社の目的と業績評価（２） 5　会社制度と経営 6　経営戦略の策定（１） 7　経営戦略の策定（２） 8　経営組織 9　マーケティング戦略 10　人的資源戦略 11　財務戦略（１） 12　財務戦略（２） 13　コーポレイト・ガバナンス 14　経営倫理 15　まとめ　※　講義の進捗にあわせて内容を変更する可能性がある
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：高橋宏幸他『現代経営入門』有斐閣を使用する。また参考資料を適宜配布する	定期試験による。追試、レポートは行わない(4 年生は注意すること)。

01～14 年度（春）	経営学 a	担当者	平井　岳哉

講義目的、講義概要	授業計画
経営とは、複数の人々が集まり、特定の目的を達成するために協働するもので、その場合、いい知恵を出して効率的と思われる最善の方法を講じることです。 　そこには、①組織の形成、②人を動かす仕組み、③成功の確率を高めるための戦略立案などが必要です。 　この講義では、経営学全般の事柄について、できるだけわかりやすい事例を使って、基礎的な知識の習得を図ります。	1　オリエンテーション 2　経営と組織 3　分業と協業 4　組織形態 5　モチベーション 6　リーダーシップ 7　組織における競争と協調 8　マーケティング① 9　マーケティング② 10　戦略の考え方 11　戦略理論① 12　戦略理論② 13　戦略理論③ 14　戦略理論④ 15　経済性分析
テキスト、参考文献	**評価方法**
特に指定しない。	期末試験の結果(90%)と講義での参加・貢献度(10%)

01～14 年度（秋）	経営学 b	担当者	平井　岳哉

講義目的、講義概要	授業計画
春学期と同じ。	春学期と同じ。
テキスト、参考文献	**評価方法**
春学期と同じ。	春学期と同じ。

01～12 年度（春）	経営学ａ（経済学科生選択履修者用）	担当者	上坂　卓郎

講義目的、講義概要	授業計画
この講義は将来企業人として仕事をする上で必要となる「企業経営」に関する経営学の基礎的知識の習得をめざす。また諸君の企業に対する関心の惹起や見方を形成するための契機になるような講義を意図している。講義はテキスト、ハンドアウトをベースにして進める。なお講義と並行して日頃より新聞やニュース等で企業の動向に関心を持つことを勧める。 なお大幅な遅参や途中退出は原則として認めません。	1　変貌するビジネス 2　会社制度と企業経営 3　会社の目的と業績評価（1） 4　会社の目的と業績評価（2） 5　会社制度と経営 6　経営戦略の策定（1） 7　経営戦略の策定（2） 8　経営組織 9　マーケティング戦略 10 人的資源戦略 11 財務戦略（1） 12 財務戦略（2） 13 コーポレイト・ガバナンス 14 経営倫理 15 まとめ　※　講義の進捗にあわせて内容を変更する可能性がある
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：高橋宏幸他『現代経営入門』有斐閣を使用する。また参考資料を適宜配布する	定期試験による。追試、レポートは行わない(4 年生は注意すること)。

01～12 年度（秋）	経営学ｂ（経済学科生選択履修者用）	担当者	高松　和幸

講義目的、講義概要	授業計画
講義目的：マネジメントの基礎概念を理解することとする。概念レベルとしての企業や経営、管理や組織、経営効率性や事業有効性等について、日常的な事例を交えてやさしく説明する。そこから見えてくる、マネジメントとはどのようなものかを一緒に考えてみたい。 講義概要：本講義では、マネジメントで明らかにしようとしている基本的な課題を取り上げる。企業はヒト・モノ・カネ・情報が大切だという。なぜ大切かというと、組織を構成するマネジメントの要素だからである。それを組み合わせる仕組みが株式会社や NPO などによる制度である。ものづくりの仕組み、ヒトを動かす仕組み等、システムとしてマネジメントを見ると、カネの動きを統制する財務、社会の器としての企業の新しい視点が学習効果を高める。	1. オリエンテーション・・本講義の全体像を紹介する 2. マネジメントとは何か 3. 株式会社の仕組みと組織 4. コーポレート・ガバナンス 5. 企業集団とグループ経営 6. ものづくりと生産システム 7. 企業の組織 8. 組織における人間行動 9. モチベーション 10. イノベーションの仕組み 11. 人的資源としての雇用管理 12. 企業の資金調達 13. BOP ビジネス 14. マッチングギフト「企業市民」としての企業 15. マネジメントのフロンティア・・この領域でこれまでに蓄積された知見は非営利組織をはじめ、より広い組織にも適用され、有用な分析用具として活用されている。その動向に注目して説明する
テキスト、参考文献	**評価方法**
適宜、プリント配布 拙著『経営組織論の展開』創成社など	レポート重視（授業中，クイズ等も行う）

01～14 年度（春）	経営学原理 a	担当者	岡部　康弘

講義目的、講義概要	授業計画
春学期は主にマクロ的視点から、企業を取り巻く環境（業界分析等)、社会・経済制度、企業の枠組み（市場取引か垂直統合か、サプライチェーン等)、企業の構成（多角化など）などに焦点を当てる。講義全体のテーマは、企業の活動は真空（Vacuum）の中で行われるのではなく、外部環境の制約を受けるということである。すなわち、企業が属する業界の特徴（完全競争、ニッチ、寡占、独占など)、サプライチェーン上のどこに位置するか、業界の取引慣習（垂直統合型、市場取引型、系列型など）などが、企業の活動をある程度規制する。このような、外部環境が企業の活動にどう影響を与えるかを考える。	１）ガイダンス ２）競争環境と内部資源（春学期の総論） ３）様々な環境分析ツールの紹介 ４）企業の競争優位を決める資源とは何か ５）なぜ業界により収益率に大きな差が出るのか ６）事業の範囲（規模の経済と範囲の経済） ７）市場と組織、市場のコスト、市場の失敗 ８）多角化の要因、多角化の形態 ９）多角化企業でのユニットの自律性と統合 １０）多角化企業での本社の役割とは １１）ブルーオーシャン戦略とは何か １２）ブルーオーシャン戦略の応用 １３）DVD（ヘッジファンド、TOB、プロキシーファイト） １４）復習 １５） Q&A
テキスト、参考文献	**評価方法**
毎回講義資料を配布する。参考文献：コリス・モントゴメリー著（2004)『資源ベースの経営戦略論』	評価は学期末試験による。出席は本学の慣例による。４回以上欠席は不可。遅刻については、公的機関の遅れ等以外の理由の入室は禁止。

01～14 年度（秋）	経営学原理 b	担当者	岡部　康弘

講義目的、講義概要	授業計画
秋学期は、春学期における外部環境分析を受けて、主にミクロ的視点か企業の活動に焦点を当てる。具体的には、寡占市場やニッチ市場でどのように競争優位を獲得するか、参入障壁をどのように活用するかあるいは乗り越えていくのか、バリューチェーン上の売り手や買い手はどのように交渉力を獲得していくのか、DSIR 市場でデイファクト・スタンダードをどう確立していくのかなどである。企業は、その企業が属する外部環境によってもたらされる制約の中で、どのように自社が競争優位にある強みを生かすかという仕組みを考えないといけない。そのような仕組みの選択肢について考える。	１）ガイダンス ２）事業戦略とは何か（ミッション、ビジョン他） ３）競争優位（ポジションと組織能力） ４）組織設計（ARC 分析） ５）組織のタイプ（「活用型」組織と「探索型」組織） ６）PIE の決定要因、PIE の分割、代替品と補完品 ７）競争のスペクトラムとニッチ市場、水平的差別化と垂直的差別化 ８）寡占市場での競争、戦略的相互作用 ９）既存企業の優位性、参入障壁 １０）買い手と売り手の交渉、ホールドアップ問題 １１）産業のライフサイクル、各期の戦略 １２）DSIR 市場、デイファクト・スタンダード １３）デイファクト・スタンダードの現実 １４）復習 １５）Q&A
テキスト、参考文献	**評価方法**
毎回講義資料を配布する。参考文献：サローナー・ポドルニー ・シェパード著（2002)『戦略経営論』	評価は学期末試験による。出席は本学の慣例による。４回以上欠席は不可。遅刻については、公的機関の遅れ等以外の理由の入室は禁止。

01～14 年度(春)	経営学原理 a	担当者	黒川　文子

講義目的、講義概要	授業計画
経営学が他の学問領域と異なる最も基本的かつ重要な問題を中心に講義する。その上に立って、今日的問題、すなわち規制緩和、企業の国際化と空洞化、E ビジネス等にアプローチする。経営学ほど変化の激しい領域はないので、原理を把握していれば、どのような状況にもうまく対処できよう。 講義では、経営学の理論の紹介だけでなく、実際の企業のケースを取り上げて、理解しやすいように授業を進めていく。経営学原理 a では、企業の目的、株式会社制度などの企業経営の基本的なコンセプトを理解した上で、経営戦略の策定について学習する。	1　講義の概要 2　企業経営とは何か 3　変貌する現代のビジネス 4　企業とビジネスの関係 5　ニュービジネスの登場と経営革新 6　現代の会社制度と企業経営 7　資本主義経済と株式会社 8　経済のグローバル化と株式会社の機構改革 9　企業の目的と業績評価 10　業績評価尺度 11　多角化企業と競争環境 12　持続的競争優位と戦略 13　職務とは何か 14　自動車産業の戦略 15　講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
黒川文子『製品開発の組織能力』(中央経済社、2005 年)	期末試験と授業への参加度によって、総合的に評価する。

01～14 年度(秋)	経営学原理 b	担当者	黒川　文子

講義目的、講義概要	授業計画
経営学原理 b では、まず経営戦略と密接な関係にある組織について講義する。最近、「アウトソーシング」や「バーチャル・コーポレーション」などで注目を浴びている「IT 革新とネットワーク組織」についても見ていく。 次に、生産、マーケティング、人的資源等の現代的な経営オペレーション・システムについて理解を深める。最後に、経営倫理やイノベーションとベンチャーといった、現代の経営にとって重要な問題についても焦点をあてて講義していく。	1　講義の概要 2　機能別組織とプロセス組織 3　事業別組織とカンパニー制 4　IT 革新とネットワーク組織 5　伝統的な組織間関係 6　日本的な企業グループと系列 7　伝統的なジョブ・ショップと流れ作業生産 8　モジュール組立方式とセル生産 9　トヨタのカンバン方式とリーン生産 10　マーケティング戦略 11　人的資源戦略 12　経営倫理 13　イノベーションとベンチャー 14　コーポレート・ガバナンス 15　講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
黒川文子『製品開発の組織能力』(中央経済社、2005 年)	期末試験と授業への参加度によって、総合的に評価する。

01～14 年度（春）	経営戦略論 a	担当者	陰山　孔貴

講義目的、講義概要	授業計画
本講義では、経営戦略論について学んでいきます。 企業にとって、経営戦略（企業が進む大きな方向性を示した長期的な構想）はとても大切なものです。大きな方向性を間違えた時、企業は危機的な状況となります。ただ、経営戦略には唯一の答えも存在しないため、その方向性を決めることは容易ではありません。そのことを皆さんに理解してもらうだけでも本講義の意味はあるのかと思っています。 講義のスタイルとしては、極力、私からの一方通行の講義をするのではなく、皆さんとの対話を含めた双方向の講義を行いたいと考えています。そのため、やる気のある学生の方のみの受講を希望します。 また、本講義では、私が実際に経験してきたビジネスの現場の話も時には入れつつ、みなさんと経営戦略論について学んでいきたいと思っています。	1. 講義概要 2. 企業経営の全体像 3. 経営戦略の大枠と成功例 4. 経営戦略の失敗例 5. 経営戦略を司る人とは 6. 業界の構造分析 7. 戦略グループ 8. ３つの基本戦略 9. 能力基盤の競争① 10. 能力基盤の競争② 11. 経営資源 12. 資源展開 13. 事業システム 14. まとめ① 15. まとめ②
テキスト、参考文献	**評価方法**
第 1 回の講義にて説明します。	授業への貢献度と試験にて総合的に評価します。

01～14 年度（秋）	経営戦略論 b	担当者	陰山　孔貴

講義目的、講義概要	授業計画
本講義では、経営戦略論について学んでいきます。 企業にとって、経営戦略（企業が進む大きな方向性を示した長期的な構想）はとても大切なものです。大きな方向性を間違えた時、企業は危機的な状況となります。ただ、経営戦略には唯一の答えも存在しないため、その方向性を決めることは容易ではありません。そのことを皆さんに理解してもらうだけでも本講義の意味はあるのかと思っています。 講義のスタイルとしては、極力、私からの一方通行の講義をするのではなく、皆さんとの対話を含めた双方向の講義を行いたいと考えています。そのため、やる気のある学生の方のみの受講を希望します。 また、本講義では、私が実際に経験してきたビジネスの現場の話も時には入れつつ、みなさんと経営戦略論について学んでいきたいと思っています。	1. 講義概要 2. 企業経営の全体像と経営戦略の大枠 3. 多角化戦略 4. 国際経営 5. 市場地位別戦略 6. ライフサイクル別戦略 7. 事業再生 8. 組織構造 9. 組織文化 10. 製品マネジメント 11. サプライチェーンマネジメント 12. イノベーション 13. 製品の価値づくり 14. まとめ① 15. まとめ②
テキスト、参考文献	**評価方法**
第 1 回の講義にて説明します。	授業への貢献度と試験にて総合的に評価します。

01～14 年度（春）	経営管理論 a	担当者	黒川　文子

講義目的、講義概要	授業計画
経営管理論ほど、時代の変化とともに進展した領域はない。古くは、単なる工場内の管理から、今日では、経営管理論は地球環境問題を含めて議論されている。アメリカでは経営学といえば経営管理論と同一視されているほど、経営学の中心領域であるので、基本的な事項を十分時間をかけて講義する。 経営管理論 a では、まず今日の企業制度を理解してから、経営管理論の歴史的展開を考察していく。	1. 講義の概要 2. 今日の企業制度 3. 現代企業のコーポレート・ガバナンス 4. 現代社会の変化と企業経営 5. 企業組織のマネジメント機能について 6. 現代における経営者（CEO）の機能と責任 7. テイラーの科学的管理法 8. ファヨールの管理論 9. 管理過程学派 10. 人間関係論とホーソン実験 11. 従来の管理機能論の枠組み 12. クーンツ理論 13. 管理機能論の新展開 14. 知識創造 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
未定	期末試験と授業への参加度によって、総合的に評価する。

01～14 年度（秋）	経営管理論 b	担当者	黒川　文子

講義目的、講義概要	授業計画
経営管理論 b では、働く人の人間的側面に焦点を当てて、いかに動機づけをすべきかについて理解を深めていく。次に、目標達成に向けて、組織のメンバーに影響を及ぼすリーダーの多様なリーダーシップについても見ていく。 最後に、変化の激しい企業環境の中で、どのような経営組織が環境に適合するかを考えた上で、経営者の役割を再確認していく。	1　講義の概要 2　動機づけの諸理論 3　マグレガーの X 理論と Y 理論 4　マズローの欲求段階論 5　動機づけ―衛生理論 6　期待理論 7　リーダーシップ論の多様な発展 8　オハイオ州立大学・リーダーシップ・プログラム 9　マネジリアル・グリッド論 10　企業文化と経営 11　経営組織の編成原理 12　経営組織の活性化 13　経営組織の革新 14　イノベーションと知財戦略 15　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
未定	期末試験と授業への参加度によって、総合的に評価する。

01～14 年度（春）	経営組織論 a	担当者	高松　和幸

講義目的、講義概要	授業計画
この講義では，伝統的組織論から近代組織論への発展を前提として，とくに近代組織論の内容について理解を深めることを目的とする。組織論においては，組織を取り巻く環境の土台のうえに，個人と組織との関わりがもっとも重要な課題であり，こうした諸問題をとりあげて論述する。 春学期では、伝統的組織論を出発点として，人間関係論におけるモチベーション理論やコンティンジェンシー理論をとりあげ，そのうえで近代組織論として，協働システムとしての組織，意思決定システムとしての組織，生存可能システムとしての組織に重点をおいて，その周辺の諸問題をとりあげる予定である。	1. **伝統的組織論①** 2. **伝統的組織論②** 3. **伝統的組織論③** 4. **近代組織論①** 5. **近代組織論②** 6. **経営組織モデルの発展段階①** 7. **経営組織モデルの発展段階②** 8. **組織とモチベーション理論①** 9. **組織とモチベーション理論②** 10. **組織とモチベーション理論③** 11. **組織とコンティンジェンシー理論①** 12. **協働システム①** 13. **協働システム②** 14. **意思決定システム①** 15. **意思決定システム②：まとめ**
テキスト、参考文献	**受講条件・評価方法**
高松和幸著『経営組織論の展開』創成社，2009.	受講条件：b も履修すること 評価方法：試験，レポートによる総合評価

01～14 年度（秋）	経営組織論 b	担当者	高松　和幸

講義目的、講義概要	授業計画
この講義では，伝統的組織論から近代組織論への発展を前提として，とくに近代組織論の内容について理解を深めることを目的とする。組織論においては，組織を取り巻く環境の土台のうえに，個人と組織との関わりがもっとも重要な課題であり，こうした諸問題をとりあげて論述する。 秋学期では，春学期で取り上げた内容に加味して、モチベーション理論や，近代組織論の協働システム、意思決定の問題、生存可能システムに重点をおいて，その周辺の諸問題をとりあげる予定である。	1. **組織均衡の理論①** 2. **組織均衡の理論②** 3. **ゴーイング・コンサーン①** 4. **サステナビリティ②** 5. **ワーク・モチベーション理論①** 6. **インセンティブ・モチベーション理論②** 7. **ワーク・モチベーション理論③** 8. **組織とコンフリクト①** 9. **環境のコンフリクト②** 10. **組織とサイバネティクス①** 11. **組織サイバネティクス②** 12. **生存可能システム①** 13. **生存可能システム②** 14. VSM① 15. VSM②
テキスト、参考文献	**受講条件・評価方法**
高松和幸著『経営組織論の展開』創成社，2009.	受講条件：a も履修すること 評価方法：試験，レポートによる総合評価

01～14 年度（春）	経営財務論 a	担当者	細田　哲

講義目的、講義概要	授業計画
講義の目的 我が国において「間接金融」主導型の金融システムは崩壊しつつあり、各国資本市場は、それぞれ高度化、多様化、国際化を遂げつつある。したがって、経営者（財務担当者）は、資本市場により関心を払って財務的意思決定を行わなければならない状況となっている。そこで、「資本市場」志向の財務的意思決定のあり方について説明し、同時に、日本企業が採用してきた財務政策の特色と問題点について検討する。 講義概要 各週別の講義予定を見られたい。	1「.1.企業の目的と財務政策」 a)企業による市場を通じた価値創造 2.「1.企業の目的と財務政策」 b)資本市場の役割、c)企業の財務的意思決定のフレームワーク 3.「2.資産の価値をどう評価するか」a)現在価値の評価 4.「2.資産の価値をどう評価するか」b)債権の評価 5.「3.株式の価値はどう決まる」a)配当割引モデルの考え方 b)一定成長配当割引モデルと株価収益率 6.「3.株式の価値はどう決まる」　c)配当割引モデルの応用、d)配当割引モデルの使い方 7.「4.リスクをどう測るか」　a)投資リスクの尺度 8.「4.リスクをどう測るか」　b)ポートフォリオのリスク 9.「4.リスクをどう測るか」　c)ベータ値と資本資産評価モデル 10.「5.資本コストとは何か」 a)資本コストとは、b)フリー･キャッシュ･フロー 11.「5.資本コストとは何か」　c)資本コストの推計方法 12.「5.資本コストとは何か」d)日本企業の資本コストの計算例 e)資本コストと資金コスト 13.「5.資本コストとは何か」　f)企業価値の推計 14.「6.完全市場と効率的市場」a)企業の財務行動は価値を生むか、 b)企業の投資行動はなぜ価値を生むのか 15.「6.完全市場と効率的市場」c)市場の効率性と株価形成　d)情報の非対称性とエージェンシー理論
テキスト、参考文献	**評価方法**
・井手正介、高橋文郎著『ビジネス・ゼミナール　経営財務入門』（日本経済新聞社）	期末試験の結果による。

01～14 年度（秋）	経営財務論 b	担当者	細田　哲

講義目的、講義概要	授業計画
講義の目的 我が国において「間接金融」主導型の金融システムは崩壊しつつあり、各国資本市場は、それぞれ高度化、多様化、国際化を遂げつつある。したがって、経営者（財務担当者）は、資本市場により関心を払って財務的意思決定を行わなければならない状況となっている。そこで、「資本市場」志向の財務的意思決定のあり方について説明し、同時に、日本企業が採用してきた財務政策の特色と問題点について検討する。 講義概要 各週別の講義予定を見られたい。	1.「7.投資の決定方法(1)」 2.「7.投資の決定方法(2)」 3.「8.望ましい資本構成とは」 a)完全資本市場における資本構成と企業価値 4.「8.望ましい資本構成とは」 b)法人税や倒産可能性が企業価値に与える影響 5.「8.望ましい資本構成とは」 c)企業価値の最大化と株価の最大化 d)資本構成決定の現実的な考慮点 e)日本企業の資本構成の動向 6.「9.配当政策の考え方」 a)配当政策の理論、b)配当政策をめぐる問題点 7.「9.配当政策の考え方」 c)株式配当と株式分割、d)日米企業の配当政策 8.「10.自社株取得」 a)自社株取得の本質、b)自社株取得の利用動機 9.「10.自社株取得」 c)自社株取得と株価評価 d)自社株取得をめぐる我が国の現状 10.「11.リスク管理とディリバティブの利用」 a)ディリバティブとは何か 11.「11.リスク管理とディリバティブの利用」 b)ディリバティブを利用した金利リスク管理 c)企業財務とリスク管理 12.「12.企業の合併・買収」 13. 伝統的財務分析とデュポン・システム 14.「13.新しい価値評価尺度(1)」 15.「13.新しい価値評価尺度(2)」
テキスト、参考文献	**評価方法**
・井手正介、高橋文郎著『ビジネス・ゼミナール　経営財務入門』（日本経済新聞社）	期末試験の結果による。

01～14 年度（春）	人的資源管理論 a	担当者	岡部　康弘

講義目的、講義概要	授業計画
人的資源管理（ＨＲＭ）は企業の経営戦略と結びつき戦略を履行するため能動的に人材育成などの人事政策・慣行を体系的に考えるものである。学生は自分達の側から企業をみるが、講義では、企業の側から見た人材という観点で考えるので、どのような人材が企業に求められているのか、どのように職業人キャリアを形成するべきかを考える示唆となる。前半はＨＲＭの理論的フレームワークから、キャリア計画までを行う。	１．　ガイダンス ２．　HRM とはなにか ３．　戦略的 HRM 環境 ４．　法律的環境 ５．　グローバル環境 ６．　人材計画と職務分析 ７．　募集 ８．　選別と配置 ９．　評価管理 １０．　教育訓練 １１．　キャリア計画と開発 １２．　キャリア計画の例 １３．　ゲストスピーカー １４．　復習 １５．　Q&A
テキスト、参考文献	**評価方法**
講義資料は毎回配布する。参考文献：DeNish & Griffin (2006) *Human Resource Management*.　Houghton Mifflin Company	評価は学期末試験による。出席は本学の慣例による。４回以上欠席は不可。遅刻については、公的機関の遅れ等以外の理由の入室は禁止。

01～14 年度（秋）	人的資源管理論 b	担当者	岡部　康弘

講義目的、講義概要	授業計画
後半は、報酬から最近のＨＲＭの問題までを扱う。特に現在企業が変化させようとしている雇用制度に焦点を当てる。具体的には、日本企業の特徴であった終身雇用、年功制、企業別労働組合が転換期を迎えていると考えられている。その後に出てきている形態はどのようなものか、それは企業や従業員にどのような影響を与えるのか。日本企業の競争優位の源泉である全員参加型経営はどう変革するのかを考える。	１．　ガイダンス ２．　基本的な報酬 ３．　インセンテイブ ４．　福利厚生 ５．　労務管理 ６．　労働環境の管理 ７．　グローバル人事 ８．　多様性の管理 ９．　新しい労働関係の管理 １０．　日本の成果主義 １１．　HRM の新しい課題１ １２．　HRM の新しい課題２ １３．　DVD（就職面接） １４．　復習 １５．　Q&A
テキスト、参考文献	**評価方法**
講義資料は毎回配布する。参考文献：DeNish & Griffin (2006) *Human Resource Management*.　Houghton Mifflin Company	評価は学期末試験による。出席は本学の慣例による。４回以上欠席は不可。遅刻については、公的機関の遅れ等以外の理由の入室は禁止。

01～14 年度（春）	国際経営論 a	担当者	小林　哲也

講義目的、講義概要	授業計画
グローバリゼーションの原動力の一つは、国境を越えて活動する多国籍企業である。現代企業は、財の生産や販売だけでなく、情報や金融の世界でも、グローバル化を進めている。生産・流通・広告・金融などでの技術革新により、新しい形で国際分業が再編成されていると言える。 本講義では、企業の国際化に伴う諸問題を包括的に議論し、グローバリゼーションを理解するための理論的枠組みを提供することを目的とする。 前半で主として理論・歴史を取り扱い、後半でケーススタディを行うので、通年受講が望ましい。	１．グローバリゼーション---「フラット化する世界」 ２．現代経済における多国籍企業 ３．巨大企業と「豊かな社会」 ４．コーポレートガバナンス ５．フォードシステム ６．日本的生産システム ７．情報技術革命と企業組織 ８．企業組織とビジネスのアーキテクチュア ９．イノベーションと競争優位 １０．　ハイテク産業と経営戦略 １１．　国際的な産業の再編成 １２．　暴走する資本主義 １３．　温暖化・フラット化・過密化 １４．　グローバリゼーションと日本企業 １５．　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
トーマス・フリードマン『フラット化する世界』日経新聞 J.K.ガルブレイス『ゆたかな社会』岩波書店 K..ポメランツ他『グローバル経済の誕生』筑摩など 適宜講義中に紹介する。	主として、定期試験による

01～14 年度（秋）	国際経営論 b	担当者	小林　哲也

講義目的、講義概要	授業計画
秋学期は、多国籍企業の活動にかかわるケーススタディを中心として、グローバリゼーションの現状を分析する。 特に新興国の台頭とともに、国際的な産業の再編成が進行中であること、その主要産業の変遷が 10 年単位から数年単位のスピードになっていること、またビジネスモデルに関しても、重厚長大で垂直統合的なものが変化を迫られているなど、現代の世界経済が大きな転換期に直面していることを、講義では議論していく。 日本企業の動向に関しては、「技術は優れているのにシェアを失っている」という議論が、まま見られる。このような「技術」に対する理解が、イノベーションの議論にとっては大問題であることも、解説してゆく。	１．日本企業の国際化 ２．日本企業の海外進出　戦後復興から 90 年代 ３．日本企業の海外進出　「摩擦」の政治経済学 ４．日本企業の海外進出　アメリカ ５．日本企業の海外進出　ヨーロッパ ６．日本企業の海外進出　アジアへの進出と撤退１ ７．日本企業の海外進出　アジアへの進出と撤退２ ８．「世界の工場」中国　長江デルタ ９．IT 革命と世界的な産業の再編成 １０．　ハイテク産業の動向　その１ １１．　ハイテク産業の動向　その２ １２．　自動車産業の再編 １３．　新しいビジネスモデルの登場 １４．　日本企業の課題 １５．　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
ジェフリー･ジョーンズ『国際経営講義』有斐閣 湯之上隆『日本型モノづくりの敗北』文春新書など 適宜講義中に紹介する。	主として、定期試験による

13 年度以降（春） 01～12 年度（春）	外国経営史 a 経営史 a	担当者	柳　敦

講義目的、講義概要	授業計画
企業行動、企業経営が、中世から近代初期までの歴史環境の中で、どのように変化、進化を遂げてきたかを理解することが講義の目的である。 欧米を中心とし、企業経営行動の歴史的変遷をたどる。各時代、各地域における企業行動の合理性（あるいは非合理性）を歴史的制約、文化的側面をも含めて考える。近代工業化以前の企業行動を概観し、ついで、英国における産業革命の特徴と企業経営の問題を検討する。	1 経営史の課題と問題 2 中世における社会のありかた 3 都市の形成とギルド制 4 遠隔地交易の発展 5 価格革命とその影響 6 株式会社制度の展開 7 近世における重商主義とアダム・スミス 8 近世英国における農業経営の変容 9 英国産業革命の開始 10 英国産業革命の進展 11 英国産業革命期の企業経営 12 英国産業革命期における労働と社会 13 工場制の導入と労働規律の変化 14 産業革命期における物流・流通システムの変化 15 資本主義とその精神
テキスト、参考文献	**評価方法**
教科書はとくに定めない。	学期末試験の成績によって評価を行う。

13 年度以降（秋） 01～12 年度（秋）	外国経営史 b 経営史 b	担当者	柳　敦

講義目的、講義概要	授業計画
近代工業化による企業や経営の変化をとらえつつ、20 世紀米国での事例を検討することで、現代の企業経営を考える基礎を構築することが目的である。 近代工業化の時代以降の欧米を中心とし、企業経営行動の歴史的変遷をたどる。各時期、各地域における企業行動の合理性（あるいは非合理性）を歴史的制約、文化的側面をも含めて考える。後発工業国であるフランス、ドイツ、米国の事例を検討しながら19 世紀における企業経営のあり方を考察し、次いで、20 世紀型企業経営の問題を考える。	1 後発国での工業化の特徴 2 19 世紀フランスにおける工業化とその特徴 3 19 世紀フランスにおける企業と企業経営 4 19 世紀ドイツにおける工業化とその特徴 5 19 世紀ドイツにおける工業化とその特徴 6 19 世紀後半から20 世紀初頭の米国における移民の流入と工業化 7 19 世紀後半における米国における工業化と国内市場の拡大 8 19 世紀末・20 世紀初頭の米国企業の特徴と事例 9 科学的管理法の展開 10 ビッグビジネスの展開 11 ビッグビジネスの展開と独占禁止法 12 企業と組織 デュポン社 13 1920 年代におけるフォード社の戦略 14 1920 年代におけるGM 社の戦略 15 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
教科書はとくに定めない。	学期末試験の成績によって評価を行う。

01～14 年度（春）	日本経営史 a	担当者	平井　岳哉

講義目的、講義概要	授業計画
日本経営史として、江戸期から現代に至るまでの日本企業の発展要因を学ぶものです。 過去において、創業、成長、失敗･倒産など激動期を経験した企業を事例に、企業の主体的行動の内容とその背景にある論理･原因について考察するとともに、主としてトップマネジメント層に限定されますが、先人達のとった選択の是非について議論をします。この講義を通じて、時代の変遷に左右されない普遍的な経営システム、あるいは逆に、時代によって変化している経営システムについて、ともに考えていきたいと思います。 歴史を学ぶことによって、皆さんには結果として、現在の企業経営のあり方を時間軸から鳥瞰･遠視できる力を習得してもらいたいと思います。 春学期は江戸期から第 2 次大戦まで、秋学期は第 2 次大戦以降を予定しています。	1　オリエンテーション 2　江戸期の商家経営① 3　江戸期の商家経営② 4　明治維新と近代企業の成立、官営工場の払い下げ 5　紡績業の発展 6　財閥① 7　財閥② 8　戦争と産業革命(重化学工業の発展) 9　都市型産業、企業サラリーマンの成立 10　新興財閥 11　総合商社の成長 12　大不況下の企業経営 13　企業合同、産業寡占 14　財閥の巨大化 15　戦時経済下の企業
テキスト、参考文献	**評価方法**
宮本又郎ほか『日本経営史』有斐閣 1995 年 宇田川勝ほか『マテリアル日本経営史』1999 年	期末試験の結果(90%)と講義での参加・貢献度(10%)

01～14 年度（秋）	日本経営史 b	担当者	平井　岳哉

講義目的、講義概要	授業計画
講義目的は、春学期に同じ。 秋学期は第 2 次大戦後を予定していますが、春学期の続きから講義を始めますので、若干の講義内容の変更が発生する可能性があります。	1　第 2 次大戦後の日本経済の推移(概観) 2　敗戦とＧＨＱの経済改革 3　財閥解体(財界追放、企業分割) 4　高度成長システム①(横の企業集団) 5　高度成長システム②(メインバンク) 6　高度成長システム③(産業政策) 7　高度成長システム④(日本的経営) 8　戦後の企業成長①(鉄鋼) 9　戦後の企業成長②(輸出企業) 10　戦後の企業成長③(家電) 11　戦後の企業成長④(自動車、生産方式) 12　戦後の企業成長⑤(自動車、生産系列) 13　戦後の企業成長⑥(流通) 14　石油ショックと企業 15　バブル経済以降の長期不況と企業
テキスト、参考文献	**評価方法**
宮本又郎ほか『日本経営史』有斐閣 1995 年 宇田川勝ほか『マテリアル日本経営史』1999 年	春学期と同じ。

01～14 年度（春）	マーケティング論 a	担当者	有吉　秀樹

講義目的、講義概要	授業計画
マーケティングは、消費者のニーズを企業の目標である利益獲得に結びつけるための経営上の重要なツールである。ただ単に「作れば売れる」という大量生産・大量消費の時代が終わりを告げた現在、消費者の嗜好はますます個別化してきている。どのような消費者をターゲットとするのか、そのような消費者の手元に確実に自社商品・サービスを届けるためには、どのような手段を用いたらよいのかといった問題について、マーケティングは答えを与えてくれる。講義では、マーケティング戦略と企業全体の戦略との関係を常に意識しながら、論理的かつ事例を交えて具体的に解説したいと思う。 教員による一方的な講義ではなく、双方向性やディスカッションを重視するので、教科書の該当箇所を事前に読んできていることが望ましい。	1. ガイダンス～マーケティングとは何か？ 2～4. マーケティング戦略のフレームワーク 5～9. 消費者の分析 10～14. 内部環境の分析 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
有吉秀樹『企業価値向上のマーケティング戦略』（中央経済社）を使用する。必要があれば適宜プリントを配布する。	授業中の発言と期末の小テストにより評価する

01～14 年度（秋）	マーケティング論 b	担当者	有吉　秀樹

講義目的、講義概要	授業計画
マーケティングは、消費者のニーズを企業の目標である利益獲得に結びつけるための経営上の重要なツールである。ただ単に「作れば売れる」という大量生産・大量消費の時代が終わりを告げた現在、消費者の嗜好はますます個別化してきている。どのような消費者をターゲットとするのか、そのような消費者の手元に確実に自社商品・サービスを届けるためには、どのような手段を用いたらよいのかといった問題について、マーケティングは答えを与えてくれる。講義では、マーケティング戦略と企業全体の戦略との関係を常に意識しながら、論理的かつ事例を交えて具体的に解説したいと思う。 教員による一方的な講義ではなく、双方向性やディスカッションを重視するので、教科書の該当箇所を事前に読んできていることが望ましい。	1. ガイダンス～マーケティングとは何か？ 2～3. マーケティング戦略のフレームワーク 4～6. 外部環境分析 7～8. 分析から戦略へ 9～11. 企業戦略の立案 12～14. マーケティング戦略の立案 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
有吉秀樹『企業価値向上のマーケティング戦略』（中央経済社）を使用する。必要があれば適宜プリントを配布する。	授業中の発言と期末の小テストにより評価する。

01～14 年度（春）	広告論 a	担当者	清水 公一

講義目的、講義概要	授業計画
広告が企業経営の中で果たす役割は大きいものがあります。経済的機能でみても広告は消費を促して、生産量を増やし、コストを引き下げます。また、社会的機能でみてもマスコミを支え、多くのテレビ番組を提供し、安価に社会情報を伝達することができます。就職活動のテクニックも広告戦略で応用することが出来ます。広告論 a は、まず世界のＣＭ、広告の歴史、広告取引のしくみ、広告費の国際比較、広告の予算編成などを学習します。 ＶＴＲやパソコンなどを使って、３０分ごとにクライマックスを設け、９０分間興味を持ち続けてもらえる授業を目指します。	1．広告の重要性と世界のＣＭ：学問体系と広告論。 2．広告の社会的経済的機能：プラス・マイナス機能。 3．広告の定義：ＡＭＡ、Ｗ．Ｂｏｌｅｎ、清水の定義。 4．広告の種類：機能別分類など。 5．広告の発展経緯：起源－中世。 6．広告の発展経緯：近代。 7．戦後日本の広告の動向：電波媒体の台頭。 8．広告と共生マーケティング：4P から 4C へ 9．コミュミケーションのプロセス：発信～受信。 10. 広告組織：広告主､広告会社､媒体社の組織。 11. 消費者保護と広告規制：公的・自主規制。 12. ＤＬＤ法：高度論理デザイン法。 I3. 広告計画のプロセス：計画、媒体、表現、効果。 14. 広告費と広告予算の設定：世界の広告費。15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
清水公一著(2014)「広告の理論と戦略」第１８版、創成社。	前期末試験の結果８０％を素点にし、課題、授業態度２０％を加味して評価します。努力した人が報われるような評価をします。

01～14 年度（秋）	広告論 b	担当者	清水 公一

講義目的、講義概要	授業計画
就職活動のテクニックに広告戦略が応用できると言いましたが、広告論 b では、企業や非営利組織の経営や管理にとって重要な「広告コミュニケーション戦略」について具体的に学習することを目的としています。 内容としては広告媒体戦略、インパクトのあるＣＭ制作の方法、広告効果測定法、消費者行動モデル、統合マーケティング・コミュニケーション（ＩＭＣ）などを理解してもらいます。 授業では、パソコンや VTR などの視聴覚機材を効果的に使い、３０分ごとにメリハリを付けて、９０分間、受講生を集中させるようにします。	1. 広告媒体の種類：他の媒体。 2. 新聞・雑誌媒体：特性、料金。 3. ラジオ・テレビ媒体：特性、CM の種類と料金。 4. 広告媒体戦略：到達と頻度、GRP、CPM。 5. 広告表現戦略：コピープラットフォーム。 6. 印刷広告の制作プロセス：サムネイル。 7. テレビ CM の制作（ＶＴＲ放映)。 8. 広告効果測定基準：DAGMAR、ARF モデル。 9. 広告効果測定法：視聴率の測定法、SD 法。 10. 消費者意思決定プロセス。 11. 消費者意思決定：ハワード／シェス・モデル。 12. インボルブメントと新しい効果モデル。 13. 統合マーケティング・コミュニケーション。 14. 販売促進、ＣＩ、ＰＲ、パブリシティ。 15. 広告論の応用。
テキスト、参考文献	**評価方法**
清水公一著(2014)「広告の理論と戦略」第１８版、創成社。	期末試験の点数８０％を素点にし、課題、授業態度２０％をポイントとして加味し、評価します。努力をした人が報われるような評価をします。

01～14 年度（春）	行動科学論 a	担当者	有吉　秀樹

講義目的、講義概要	授業計画
大量生産大量消費の時代が終わりを告げ、消費者は自分のニーズに合致した商品にのみ関心を示すようになっている。そのような時代における企業が生き残るための術として、消費者の行動に対する理解は必要不可欠なものであろう。本講義では、参加者自身が企業の戦略担当の立場になったつもりで、消費者の行動を論理的・科学的に分析し、戦略を立案する。ロジックを重視し、根拠のある推測から仮説を導き出し、それを検証する力が養えれば、本講義を受講した意義は大きいであろう。 この講義概要を見てもわかるように、本講座はマーケティング論の上位科目として位置付けられている。**マーケティング論に関する基本的な説明は一切行わないので、マーケティング論を受講済みの者でなければ、講義や議論についてゆくのは極めて困難である。登録を避けることを強く勧める！**	1.　ガイダンス（課題発表） 2～7. 分析作業 8. 中間プレゼン（課題の進捗状況による） 9～14. 分析作業 15. 最終プレゼン
テキスト、参考文献	**評価方法**
有吉秀樹『企業価値向上のマーケティング戦略』（中央経済社）を使用。	期末（場合によっては中間も）のプレゼン、レポートにより評価する。**マーケティング論を受講済みでない学生は、登録を避けることを強く勧める。**

01～14 年度（秋）	行動科学論 b	担当者	有吉　秀樹

講義目的、講義概要	授業計画
大量生産大量消費の時代が終わりを告げ、消費者は自分のニーズに合致した商品にのみ関心を示すようになっている。そのような時代における企業が生き残るための術として、消費者の行動に対する理解は必要不可欠なものであろう。本講義では、参加者自身が企業の戦略担当の立場になったつもりで、消費者の行動を論理的・科学的に分析し、戦略を立案する。ロジックを重視し、根拠のある推測から仮説を導き出し、それを検証する力が養えれば、本講義を受講した意義は大きいであろう。 この講義概要を見てもわかるように、本講座はマーケティング論の上位科目として位置付けられている。**マーケティング論に関する基本的な説明は一切行わないので、マーケティング論を受講済みの者でなければ、講義や議論についてゆくのは極めて困難である。登録を避けることを強く勧める！**	1. ガイダンス（課題発表） 2～7. 分析作業 8. 中間プレゼン（課題の進捗状況による） 9～14. 分析作業 15. 最終プレゼン
テキスト、参考文献	**評価方法**
有吉秀樹『企業価値向上のマーケティング戦略』（中央経済社）を使用。	期末（場合によっては中間も）プレゼン、レポートにより評価する。**マーケティング論を受講済みでない学生は、登録を避けることを強く勧める。**

01～14 年度（春）	保険論 a	担当者	岡村　国和

講義目的、講義概要	授業計画
本講義の目的は、現実の保険現象を広く理解し、現在進行中の保険事業をめぐる環境変化を分析する能力を収得することにあります。 春学期の目標は保険理論の理解であり、主として保険の技術や原則を中心に、保険システムの全体像について講義します。保険の本質的機能を十分理解すれば、隣接他業との相互関係や環境変化・市場再編の方向が理解でき、また保険における契約者保護の重要性を知ることができます。 上記のことを理解する前提として、近代保険業がなぜ生まれたのか、またその性格はいかなるものであるのか、を理解することが重要です。 なるべく丁寧に講義を進めることを心がけますが、進度やトピックスの挿入などによって、右記の授業計画の一部を割愛することがあります。	1　講義の進め方、保険学の学問的位置づけなど。 2　リスクとリスクマネジメントの一般理論について。 3　リスク理論と保険理論 4　期待効用に基づく保険モデルの解説。 5　保険の歴史(1)：原始共済と前近代的保険。 6　保険の歴史(2)：近代保険の生成と発展。 7　保険の構造(1)：保険の理論的構造。 8　保険の構造(2)：「危険負担」「損害填補」の一般原則。 9　保険の構造(3)：告知義務と通知義務。 10 保険各論(1)：生命保険の仕組みや機能。 11 保険各論(2)：自動車保険。 12 保険各論(3)：火災保険、第 3 分野保険。 13 巨大災害と保険（地震保険・原子力損害賠償保険)。 14 補論 15 春学期のまとめ。
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト　田畑康人・岡村国和編『読みながら考える保険論　増補改定版』(八千代出版、2013 年)	定期試験により評価しますが、小テストや講義感想などのミニレポートを書いていただくことがあります。

01～14 年度（秋）	保険論 b	担当者	岡村　国和

講義目的、講義概要	授業計画
秋学期は保険会社の経営についての講義を中心に講義を進めます。具体的には保険業の収益構造や保険市場の構造的変化について、日米の保険業を比較検討します。 収益面では、バブル期までの生保業の中心的な収益源泉が、保険販売収益ではなく金融収益であり金融収益が保険収益を上回るという本業と副業の収益面での「ねじれ現象」が発生していたことを確認します。 バブル崩壊後に生命保険も損害保険も保険会社の収益構造が大きく変容しましたが、重要であるにもかかわらず、一般的な教科書には余り記載されていない事実などを中心に解説します。 また、日本の大手生保会社は、「保険業法」に基づいて設立された相互会社（非営利中間法人）であると言うことを知らない人が多いと思いますので、これを機会に良く理解してください。	1　秋学期の講義目的や内容について 2　保険経営の一般的特徴 3　保険企業の形態：株式会社と相互会社 4　保険市場の主要な問題 5　保険の販売チャネルについて。 6　保険経営の特殊性(1))：保険技術的危険について。 7　保険経営の特殊性(2)：保険料の算定について。 8　資金調達からみた保険の限界とその拡張。 9　保険の価格（保険料率）の構造 10　予定利率をめぐる問題。 11　損害保険会社の収益構造。 12　保険収益のサイクルとコンバインドレシオ 13　生命保険の主力商品の変遷。 14　生命保険会社の収益構造。 15　秋学期のまとめ。
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト　田畑康人・岡村国和編『読みながら考える保険論　増補改定版』(八千代出版、2013 年)	定期試験により評価しますが、小テストや講義感想などのミニレポートを書いていただくことがあります。

13 年度以降（春） 01～12 年度（春）	国際貿易論 a 貿易論 a	担当者	米山 昌幸

講義目的、講義概要	授業計画
国際貿易論は、財・サービスの国際取引や資本・労働・経営資源の国際移動を分析対象とする学問分野です。 この講義の目的は、国際貿易や貿易政策の基礎理論や現実の貿易、貿易実務について学んで、現実の国際貿易のテーマを考察するための経済学的な思考方法を手に入れることです。国際貿易のテーマを考察するうえで有用な貿易理論の習得とあわせて、実際のデータを提示して国際貿易の実態についての理解も深めていきたいと思います。 春学期は、一般均衡分析を用いて伝統的な国際貿易の基礎理論を中心に講義します。国際貿易論でもっとも重要な概念である比較優位をはじめ、貿易パターン、貿易利益、比較優位の決定要因、産業内貿易と規模と経済などを取り上げます。 ミクロ経済学の基礎的なところから国際貿易論の分野へつなげるように、できるだけていねいに説明していきますので、貿易理論を学ぶことで、経済学的な思考方法で貿易を捉えられるようになってもらいたいと思います。	1. 戦後の日本経済と貿易の歩み 2. 貿易の取引と決済の仕組み(1) 3. 貿易の取引と決済の仕組み(2) 4. リカードの比較生産費説(1) 5. リカードの比較生産費説(2) 6. リカードの比較生産費説(3) 7. ヘクシャー＝オリーン理論(1) 8. ヘクシャー＝オリーン理論(2) 9. ヘクシャー＝オリーン理論(3) 10. 産業内貿易と規模の経済(1) 11. 産業内貿易と規模の経済(2) 12. サービス貿易 13. 貿易と経済活動・経済成長 14. 貿易と経済発展 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
未定。テキストには次のようなものを予定していますが、第 1 回目の授業で指定します。 石川城太・菊地徹・椋寛『国際経済学をつかむ[第 2 版]』有斐閣、2013 年。	基本的には定期試験の得点(100 点満点)を評価基準(第 1 回目の授業で説明する)に照らして評価する。ただし、練習問題の得点等もサービス点として加算する予定。

13 年度以降（秋） 01～12 年度（秋）	国際貿易論 b 貿易論 b	担当者	米山 昌幸

講義目的、講義概要	授業計画
国際貿易論は、財・サービスの国際取引や資本・労働・経営資源の国際移動を分析対象とする学問分野です。 この講義の目的は、国際貿易や貿易政策の基礎理論や現実の貿易、貿易実務について学んで、現実の国際貿易のテーマを考察するための経済学的な思考方法を手に入れることです。国際貿易のテーマを考察するうえで有用な貿易理論の習得とあわせて、実際のデータを提示して国際貿易の実態についての理解も深めていきたいと思います。 秋学期は、部分均衡分析を用いて貿易政策の基礎理論について学んだのち、実際的なトピックについて講義します。戦略的貿易政策、アンチ･ダンピング措置や緊急輸入制限措置(セーフガード)、WTO と地域貿易協定(RTA)、貿易と環境などのトピックを取り上げたいと思います。 ミクロ経済学の基礎的なところから国際貿易論の分野へつなげるように、できるだけていねいに説明していきますので、貿易理論を学ぶことで、経済学的な思考方法で貿易を捉えられるようになってもらいたいと思います。	1. 戦後の国際経済体制と世界貿易の発展 2. 貿易政策の目的 3. 貿易政策の手段 4. 部分均衡分析による貿易利益 5. 貿易政策の効果(1)―関税・生産補助金 6. 貿易政策の効果(2)―輸入数量制限・輸出自主規制 7. 保護貿易を擁護する主張 8. 戦略的貿易政策 9. アンチダンピングとセーフガード 10. 国際貿易のルールと貿易交渉 11. 地域貿易協定 12. 多国籍企業と直接投資 13. 国際労働移動 14. 貿易と環境 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
未定。テキストには次のようなものを予定していますが、第 1 回目の授業で指定します。 石川城太・菊地徹・椋寛『国際経済学をつかむ[第 2 版]』有斐閣、2013 年。	基本的には定期試験の得点(100 点満点)を評価基準(第 1 回目の授業で説明する)に照らして評価する。ただし、練習問題の得点等もサービス点として加算する予定。

01～14 年度（春）	証券市場論 a	担当者	髙　橋　　元

講義目的、講義概要	授業計画
「貯蓄から投資へ」と言われ、NISA が導入されるなど証券市場が生活者にとって身近な存在になりつつある。グローバリゼーションや自由化の進展に伴い、好むと好まざるとに関わらず、証券や証券市場が内外の経済や個人の生活に多大な影響を与える時代を迎えているのである。 本講義では、こうした時代背景を踏まえて、証券と証券市場を巡る制度、歴史、理論などを体系的に学ぶことにより、その国民経済的な意義を明らかにすることを目的とする。また、日々の出来事などについて実践的な解説を適宜施すことで、より理解を深めるよう臨みたい。これらを通じて、自己責任原則の下で多様なリスクに曝される個人が、それらを制御するために必要な最低限の知識涵養も目指していく。 証券市場論 a では、貨幣の発展形態としての証券の定義や証券市場のメカニズムなど、基本的な領域について幅広く学習ながらし、金融リテラシーを身につけていく。講義はスライドを用いた口述と板書を中心に、必要に応じてプリント類を配布する。授業は、原則として計画に沿って進行するが、金融資本市場の変化などに応じて、流動的に対応していく。	1．講義の概要――進め方、評価方法等のガイダンス 2．日本経済と証券市場 3．証券の意義と種類（その 1） 4．　〃　（その 2） 5．証券市場の機能と沿革（その 1） 6．　〃　（その 2） 7．証券市場の構成者 8．取引所の種類と機能 9．証券業務と証券会社 10．機関投資家と個人投資家 11．投資信託の仕組み 12．証券化の仕組み 13．新しい金融商品の基礎 14．証券市場の現状と課題 15．総括――まとめと期末試験へのアナウンス

テキスト、参考文献	評価方法
テキストは特に指定しないが、参考文献として下記を挙げる。『ベーシック証券市場論（改訂版）』福光寛・髙橋元／編、同文館／刊、2007 年	授業中不定期に実施するレポートの提出状況と内容、試験結果などを総合的に勘案し評価する。評価ウエイトは前者 30%、後者 70%を目途とする。

01～14 年度（秋）	証券市場論 b	担当者	髙　橋　　元

講義目的、講義概要	授業計画
「貯蓄から投資へ」と言われ、NISA が導入されるなど証券市場が生活者にとって身近な存在になりつつある。グローバリゼーションや自由化の進展に伴い、好むと好まざるとに関わらず、証券や証券市場が内外の経済や個人の生活に多大な影響を与える時代を迎えているのである。 本講義では、こうした時代背景を踏まえて、証券と証券市場を巡る制度、歴史、理論などを体系的に学ぶことにより、その国民経済的な意義を明らかにすることを目的とする。また、日々の出来事などについて実践的な解説を適宜施すことで、より理解を深めるよう臨みたい。これらを通じて、自己責任原則の下で多様なリスクに曝される個人が、それらを制御するために必要な最低限の知識涵養も目指していく。 証券市場論 b では、株式を中心に証券価格の評価などに関わる理論的な考察を行い、専門的且つ高度な知識の習得を図る。講義はスライドを用いた口述と板書を中心に、必要に応じてプリント類を配布する。授業は、原則として計画に沿って進行するが、金融資本市場の変化などに応じて、流動的に対応していく。	1．講義の概要――進め方、評価方法等のガイダンス 2．証券と価格形成 3．証券投資理論の基礎 4．株式と株式会社 5．金利の意義と債券投資理論 6．配当割引モデル（その 1） 7．　〃　（その 2） 8．株式投資尺度（その 1） 9．　〃　（その 2） 10．ポートフォリオ理論の基礎（その 1） 11．　〃　（その 2） 12．ポートフォリオ理論の発展形態 13．デリバティブズ 14．新しい投資理論の展開 15．総括――まとめと期末試験へのアナウンス

テキスト、参考文献	評価方法
テキストは特に指定しないが、参考文献として下記を挙げる。『ベーシック証券市場論（改訂版）』福光寛・髙橋元／編、同文館／刊、2007 年	授業中不定期に実施するレポートの提出状況と内容、試験結果などを総合的に勘案し評価する。評価ウエイトは前者 30%、後者 70%を目途とする。

01～14 年度（春）	企業論 a	担当者	平井　岳哉

講義目的、講義概要	授業計画
大学卒業後の進路として、就労の場である企業の存在は無視できないものがあります。しかし、学生の企業に対する問題意識は総じて希薄であり、企業に関する情報や知識も断片的・表層的なものでしかないものと考えられます。 本講義では、企業に関係する諸項目の概要説明を通じて、企業の多面的な性格を論じていきたいと思います。特に昨今、日本型経営システムは大きな転換期を迎えていると言われています。今後の方向性についても、最新の企業情報を織りまぜながら、ともに考えていきたいと思います。 春学期は、主として従業員の立場から人事関連の諸制度や勤労環境に焦点を当てます。	1　オリエンテーション 2　終身雇用 3　正規雇用・非正規雇用 4　高齢者雇用・定年 5　女性雇用 6　年功賃金 7　報酬制度全般 8　福利厚生 9　人事異動 10　昇進・キャリアツリー 11　採用 12　教育・研修 13　人事評価 14　労働時間・休暇制度 15　人本主義
テキスト、参考文献	**評価方法**
教科書は特に指定しない。	期末試験の結果(90%)と講義での参加・貢献度(10%)

01～14 年度（秋）	企業論 b	担当者	平井　岳哉

講義目的、講義概要	授業計画
講義目的等の基本的なスタンスは、春学期と同じです。秋学期は、主として企業の構造や外部主体（ステークホルダー）との関係に焦点を当てます。	1　労働組合 2　トップマネジメントと取締役 3　家族経営者と専門会経営者 4　家族企業 5　株式 6　コーポレートガバナンス① 7　コーポレートガバナンス② 8　企業グループ 9　中小企業 10　ベンチャー企業 11　社会貢献 12　企業リスク 13　企業と政府、公営企業 14　持株会社 15　業界再編
テキスト、参考文献	**評価方法**
春学期と同じ。	春学期と同じ。

05～14 年度（春）	企業経済論 a	担当者	和久津　尚彦

講義目的、講義概要	授業計画
企業はなぜ存在し、どのように行動し、どのような影響を社会や経済に及ぼすのか。企業経済学はこの問題を経済学的に解明しようとする学問分野です。 経済学でよく出てくる完全競争は、売り手と買い手が非常に多く、個々の売り手・買い手は価格を決定する力を持っていないと仮定します。しかし、現実にはそのような市場は稀で、多くの産業で少数の企業が価格決定力を持って行動しています。企業経済学は、必ずしも現実的ではない完全競争の仮定を一つ一つ現実の形に近付けてゆきながら、企業に関する様々な問題に取り組んでいきます。 春学期は、ミクロ経済学の基礎を学んだ後、独占企業の行動、価格支配力の影響、合併などのトピックを扱います。 講義は、図や簡単な数式による説明があります。苦手に思う人もいると思いますが、丁寧に説明していきます。 入門レベルのミクロ経済学の知識があれば役立ちますが、前提とはしません。 トピック別に課題を数回出す予定です。	1. イントロダクション 2. 企業とコスト(1) 3. 企業とコスト(2) 4. 競争と経済厚生(1) 5. 競争と経済厚生(2) 6. 独占企業の行動(1) 7. 独占企業の行動(2) 8. 独占企業の行動(3) 9. 価格差別(1) 10. 価格差別(2) 11. 価格差別(3) 12. 合併、垂直統合と垂直制限(1) 13. 合併、垂直統合と垂直制限(2) 14. 合併、垂直統合と垂直制限(3) 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献：泉田成美・柳川隆『プラクティカル産業組織論』有斐閣アルマ、2008 年、他、適宜紹介します。	課題(40%)、期末テスト(60%)で総合評価します。

05～14 年度（秋）	企業経済論 b	担当者	和久津　尚彦

講義目的、講義概要	授業計画
企業はなぜ存在し、どのように行動し、どのような影響を社会や経済に及ぼすのか。企業経済学はこの問題を経済学的に解明しようとする学問分野です。 経済学でよく出てくる完全競争は、売り手と買い手が非常に多く、個々の売り手・買い手は価格を決定する力を持っていないと仮定します。しかし、現実にはそのような市場は稀で、多くの産業で少数の企業が価格決定力を持って行動しています。企業経済学は、必ずしも現実的ではない完全競争の仮定を一つ一つ現実の形に近付けてゆきながら、企業に関する様々な問題に取り組んでいきます。 秋学期は、春学期の内容を一部おさらいした後、少数の企業と競争しあう寡占企業の行動、及びこれに関連する幾つかのトピックを扱います。 講義は、図や簡単な数式による説明があります。苦手に思う人もいると思いますが、丁寧に説明していきます。 入門レベルのミクロ経済学の知識があれば役立ちますが、前提とはしません。受講する皆さんのバックグラウンドに配慮して進めます。 トピック別に課題を数回出す予定です。	1. イントロダクション 2. 独占企業の行動―復習(1) 3. 独占企業の行動―復習(2) 4. ゲーム理論の初歩(1) 5. ゲーム理論の初歩(2) 6. クールノー競争(1) 7. クールノー競争(2) 8. シュタッケルベルグ競争(1) 9. シュタッケルベルグ競争(2) 10. ベルトラン競争 11. 製品差別化(1) 12. 製品差別化(2) 13. 市場集中度(1) 14. 市場集中度(2) 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献：泉田成美・柳川隆『プラクティカル産業組織論』有斐閣アルマ、2008 年、他、適宜紹介します。	課題(40%)、期末テスト(60%)で総合評価します。

13 年度以降（春） 01～12 年度（春）	ベンチャー企業論 a ベンチャービジネス論 a	担当者	上坂　卓郎

講義目的、講義概要	授業計画
ベンチャー企業も一つの企業であるという基本認識に立って、企業の役割や機能をトータルに把握できるようにする。その理解の上に立ち、ベンチャー企業特有の問題や政策支援の内容などを理解していく。 この講義を受講してすぐ起業できるわけではない。しかし将来起業したり、独立する際に知っておくべき基礎的な知識を習得する。また起業に関心はなくとも、意識の高い企業人や社会人になろうとする人は受講してほしい。他学部の学生も歓迎する。 経験則として単位取得と講義の受講は強い正の相関関係にある。各自判断のうえ受講すること。	1　会社とはなにか 2　会社の誕生（1） 3　会社の誕生（2） 4　会社の設立 5　会社の成長と組織 6　会社の資金調達 7　ベンチャー企業支援政策 8　ベンチャー企業と知財（特許）戦略 9　資本市場の仕組み １０ ベンチャー企業と上場市場の活用 １１ ベンチャー企業の内部管理体制 １２ 日本の起業風土 １３ ベンチャー起業家の講演 １４ 起業支援政策の実際 １５　まとめと課題 ※　進捗にあわせて内容を変更する可能性がある
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献：上坂卓郎『ベンチャー企業入門』中央経済社（2006）に準拠してすすめる。追加して毎回関連資料を配布する	定期試験による。なお追試、レポートによる評価は行わないので注意すること（特に４年生）

13 年度以降（秋） 01～12 年度（秋）	ベンチャー企業論 b ベンチャービジネス論 b	担当者	上坂　卓郎

講義目的、講義概要	授業計画
ベンチャービジネス論 a と同様だが、より専門的な話題を盛り込んだ内容とする。ベンチャー企業金融、ベンチャー企業の評価などの内容を取り上げる。また最近の盛んになっている企業買収など組織再編の関連テーマについても、ベンチャー企業の成長政策の一つとして触れていく。秋学期はビジネススクールで取り扱うベンチャー企業の話題を平易に解説していくつもりである。	1　ベンチャー企業と資金繰り 2　ベンチャーキャピタルの役割（1） 3　ベンチャーキャピタルの役割（2） 4　ベンチャー企業評価 5　起業家にとっての資本政策 6　ベンチャー企業とビジネスリスク 7　プライベートエクィティとM&A、MBO 8　ベンチャー企業の成長戦略 9　産業動向とベンチャー企業戦略立案 １０ ビジネスエンジェルの役割 １１ 新しい出口戦略 １２ 経営再起とベンチャー企業 １３ ベンチャーキャピタリストの実務 １４ ベンチャー企業の上場事例研究 １５ まとめと課題 ※　進捗にあわせて内容を変更する可能性がある
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献：上坂卓郎『ベンチャー企業入門』中央経済社（2006）。追加して毎回関連資料を配布する	定期試験による。なお追試、レポートによる評価は行わないので注意すること（特に４年生）

13 年度以降（春） 01～12 年度（春）	NPO マネジメント論 a 非営利組織マネジメント論 a	担当者	高松　和幸

講義目的、講義概要	授業計画
講義概要：非営利組織（NPO）マネジメント論は、NPO の事業や活動に関して、その運営の多様性について講義する。春学期では、基礎的な知識習得に努める。 この授業のねらいは、NPO などで期待される人材や組織運営に関する基礎を理解すると同時に、東日本大震災や各地で活躍する NPO 事例を取り上げる。NPO は地域・企業・行政によって支えられているが、その活動も多岐にわたるため、本講義でも多様な内容となる。そのため年間を通じて授業を受けることが望ましい。 講義目標：この講義は、NPO の活動を、マネジメントの視点から取り上げることで、NPO 本来の健全な活動ができることを学ぶことにある。	1. ＮＰＯとは何か：ボランタリー組織・フィランソロピー・ＮＧＯ・市民セクター 2. ＮＰＯの成立：ボランティア活動・ＮＰＯの萌芽 3. ＮＰＯの成立② 4. ＮＰＯの発展：ボランティア革命 5. ＮＰＯの規模：構造・分類・公益法人制度 6. ＮＰＯの規模② 7. ＮＰＯの形態：制度・市民活動団体 8. ＮＰＯの成立基盤：制度化・活動資金 9. ＮＰＯの経営環境：外部環境・政府との関係 10. ＮＰＯの経営管理：管理機構・意思決定 11. ＮＰＯの経営管理：管理機構・意思決定 12. ＮＰＯの管理手法：経営戦略・業績管理 13. ＮＰＯの会計制度：会計書類・会計基準 14. ＮＰＯの予算管理：予算制度・収支計算書 15. ＮＰＯの経営：まとめ
テキスト、参考文献	**受講条件・評価方法**
高松和幸『マッチングギフトとコミュニティの形成過程』創成社	受講条件：b も履修すること 評価方法：試験，レポートによる総合評価

13 年度以降（秋） 01～12 年度（秋）	NPO マネジメント論 b 非営利組織マネジメント論 b	担当者	高松　和幸

義目的、講講義概要	授業計画
講義概要：非営利組織（NPO）マネジメント論は、非営利組織の事業や活動、評価について取り上げる。 秋学期では、NPO 活動の事例に基づく学習と共に、NPO と地域・企業・行政との関係や協働について取り上げる。その活動もフィランソロピーやボランティア活動と共に東日本大震災の際には注目された。NPO 活動がテーマを持って地域や社会を変えようと、ボランティア活動の基礎を提供していることや、今後の地域を取り巻く環境を理解するためにも、現在の NPO 活動の理解が欠かせない。 講義目標：春学期と同じ	1. ＮＰＯの業績評価 2. ＮＰＯの経営分析 3. ＮＰＯの業績評価方法 4. ＮＰＯの業績評価方法 5. ＮＰＯの財務と非財務情報 6. ＮＰＯの国際比較：世界のＮＰＯ 7. アメリカのＮＰＯ 8. イギリスのＮＰＯ 9. ドイツのＮＰＯ 10. フランスのＮＰＯ 11. 中国のＮＰＯ 12. その他の国のＮＰＯ 13. ＮＰＯのＩＴ化 14. ＮＰＯの変化・価値 15. ＮＰＯの今後：まとめ
テキスト、参考文献	**受講条件・評価方法**
高松和幸『マッチングギフトとコミュニティの形成過程』創成社	受講条件：a を履修していること 評価方法：試験，レポートによる総合評価

01～14 年度（春）	企業文化論 a	担当者	齊藤　善久

講義目的、講義概要	授業計画
○企業文化論では企業の創業者が企業の課題をどのように捕らえて、どのように解決したかを学びます。 つまり「課題解決のプロセス」を学び、自分自身の課題解決のための能力を身に着けることを目標としています。 ○課題を発見し整理するために、ブレーン・ストーミングのスキルを演習で習得します。 ○また課題の解決は「アイデアを創造する」ことによって行います。そのため発想力を習得するために、さまざまな技法を演習やレポートにより学びます。 ○ブレーン・ストーミングは出席して体験しないと身につきません。小集団によるワイワイがやがや（わいがや）を何回か参加して体で実感して下さい。 ○この授業は特に２年生と３年生の受講を勧めます。	１、オリエンテーション ２、ブレーン・ストーミング解説と演習その１ ３、ブレーン・ストーミング演習その２ ４、いい仕事・いい会社・いい職場（従業員満足度） ５、演習 ６、顧客満足度と働きがいの関係 ７、演習 ８、発想技法　エッジのある言葉の作り方 ９、企業の社会的責任、 １０、演習 １１、発想技法と企画書の書き方 １２、総合演習発想作業 １３、総合演習まとめ作業 １４、発表と審査、講評 １５、講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
『ひらめきのマジック』さいとうぜんきゅう著 ボイジャー社　2007 年	レポート、試験点数を加え総合的に判断します

01～14 年度（秋）	企業文化論 b	担当者	齊藤　善久

講義目的、講義概要	授業計画
○春学期は企業の文化の明るい面を取り上げますが 秋学期は企業が持つマイナスの部分について考察します。 そうすることで企業の持つさまざまな姿をいろいろな角度から理解します。 ○秋学期も 7～８人のグループに分かれてブレーン・ストーミング演習を学びます。 企業文化を形成するのはチームの力です。才能・個性の違う個人が、お互いを認め合い刺激しあいながら共に力をあわせて作っていきます。 ○グループ演習を通じて友達とのコミュニケーション力を高めます。知らない人と話すのが苦手という人には特に受講を勧めます。 ○2 年生と 3 年生の受講を勧めます	１、オリエンテーション ２、ブレーン・ストーミング解説と演習１ ３、ブレーン・ストーミング演習２ ４、よくない企業とは ５、演習 ６、発想技法　五感を使い感性を磨く ７、演習 ８、企業不祥事の種類・原因・対策 ９、演習 １０、企業の事故の種類・原因・対策 １１、演習 １２、総合演習発想作業 １３、総合演習まとめ作業 １４、発表と審査、講評 １５、講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
『ひらめきのマジック』さいとうぜんきゅう ボイジャー社　2007 年	レポート、試験点数を加え総合的に判断します

01～14 年度（春）	研究・開発マネジメント a	担当者	鈴木　淳

講義目的、講義概要	授業計画
企業の事業展開や成長、存続のためには新製品や新サービスの開発が重要です。特に変化の激しい現代では、いかに効果的にそれらの開発と市場投入を行うかが大切です。このような経営活動の一つに研究開発（Research and Development; R&D）があります。 研究開発に直接携わるのはいわゆる理系と呼ばれる研究者や技術者たちですが、事業として成立するためには、経営学の素養を持った人がマネジメントの視点から企業の研究開発の方向性を示したり、研究開発プロジェクトの評価を行ったりすることも必要です。 この講義では、研究開発についての基本的な概念、研究開発と経営の関連性、プロジェクト管理、製品開発の本質と一般的な進め方、研究開発と知識経営の関連について扱います。 将来、新規事業や新製品、新サービスの開発などの仕事に関わりたいという人や、経営と技術の両面に興味を持っている人は是非学んでください。	1. ガイダンス，序論 2. 研究開発とは：科学技術と社会・産業・企業 3. 研究開発と経営（1）経営戦略との関連 4. 研究開発と経営（2）生産戦略との関連 5. 研究開発と経営（3）研究開発組織のマネジメント 6. 研究開発と経営（4）研究開発の拠点立地 7. プロジェクト管理（1）PERT，ステージゲート法 8. プロジェクト管理（2）プロジェクト評価方法 9. 製品開発（1）製品開発の本質 10. 製品開発（2）製品開発のプロセス 11. 製品開発（3）製品アーキテクチャ 12. 製品開発（4）コンカレントエンジニアリング 13. 製品開発（5）リーン開発・アジャイル開発 14. 研究開発と知識経営（1）暗黙知と SECI モデル 15. 研究開発と知識経営（2）技術者の知識獲得
テキスト、参考文献	**評価方法**
授業資料を配布します。 参考文献は講義の際に随時紹介します。	期末試験（70%）、授業への参加状況（30%）程度の基準で評価する予定です。

01～14 年度（秋）	研究・開発マネジメント b	担当者	鈴木　淳

講義目的、講義概要	授業計画
企業の事業展開や成長、存続のためには新製品や新サービスの開発が重要です。特に変化の激しい現代では、いかに効果的にそれらの開発と市場投入を行うかが大切です。このような経営活動の一つに研究開発（Research and Development; R&D）があります。 研究開発に直接携わるのはいわゆる理系と呼ばれる研究者や技術者たちですが、事業として成立するためには、経営学の素養を持った人がマネジメントの視点から企業の研究開発の方向性を示したり、研究開発プロジェクトの評価を行ったりすることも必要です。 この講義では、春学期からの続きとして研究開発と技術経営、研究開発と市場との関連、研究開発とイノベーション、その他近年注目されている考え方について扱います。春学期の内容が開発活動そのものを中心に見ていることに対し、秋学期は研究開発活動からの波及によることがらを多く扱っています。 将来、新規事業や新製品、新サービスの開発などの仕事に関わりたいという人や、経営と技術の両面に興味を持っている人は是非学んでください。	1. 研究開発と技術経営（1）MOT とは何か 2. 研究開発と技術経営（2）技術統合 3. 研究開発とマーケット（1） 4. 研究開発とマーケット（2） 5. 研究開発とイノベーション（1） 6. 研究開発とイノベーション（2） 7. 研究開発とイノベーション（3） 8. 研究開発とイノベーション（4） 9. 研究開発とイノベーション（5） 10. イノベーションと新興国 11. 少数精鋭主義と門戸開放主義，ゲームソフト開発事例から 12. 研究開発と近年の動向（1） 13. 研究開発と近年の動向（2） 14. モデリングとハイブリッドアプローチ 15. まとめと展望
テキスト、参考文献	**評価方法**
授業資料を配布します。 参考文献は講義の際に随時紹介します。	期末試験（60%）、レポート（25%）、授業への参加状況（15%）程度の基準で評価する予定です。

01～14 年度（春）	財務会計論 a	担当者	内倉　滋

講義目的、講義概要	授業計画
財務会計とは、ひと言で言えば、企業外部の利害関係者を報告対象とした企業会計のことである。本講義は、その意味の財務会計の内容紹介を目指したものである。その目的のため、主としてわが国における財務会計に関する慣習的な諸ルールを直接の分析対象に選び、その規定している内容と、それを支えている理論的な背景の紹介をしていきたい。 講義計画は右に掲げるとおりであるが、おおむね「財務会計論 a」では、財務会計の領域のうちで従来から議論されてきた伝統的な部分の概要を紹介していく予定である。 なお、履修に際し次の条件を課すこととしたい: (1) 複式簿記の基本的知識を前提に議論を出発させるため、簿記原理 a，簿記原理 b 両科目を修得していること(または同等の知識のあること)。 (2) 経営学科生以外が履修する場合には、会計学 a，会計学 b 両科目を修得していること。 (3) 2014 年度に限っては、「会計学原理 a」の修得者の履修を認めないことにさせていただきます。	1 オリエンテイション(本講義の 目的, 目標 等) 2 財務会計と財務会計理論 3 財務会計と関係法規 4 企業会計原則 5 貸借対照表 6 損益計算書 7 間接法によるキャッシュ・フロー計算書の作成 8 直接法によるキャッシュ・フロー計算書の作成 9 有価証券 10 固定資産 11 固定資産の減損と時価評価 12 繰延資産 13 Topical Issues 14 総復習 その１……第 2 回～第 13 回の総復習 15 総復習 その２……同形式の問題により 期末試験の予行演習
テキスト、参考文献	**評価方法**
	7～8 割は期末試験の結果, 残りは平常点(講義中の小テスト等) で評価する。その際、相対評価を基本とし、絶対評価を加味する。

01～14 年度（秋）	財務会計論 b	担当者	内倉　滋

講義目的、講義概要	授業計画
この「財務会計論 b」では、「財務会計論 a」の伝統的な財務会計の領域に関する知識を前提として、‘連結財務諸表’，‘税効果会計’，‘リース会計’，‘外貨換算会計’といった 比較的新しい問題(ないし、最近においてその制度的中身が大幅に改変された領域)をも、講義の対象としたい。数年前から施行されている会社法の計算規定の解説にも、ウェイトを置きたいと考えている。 なお、履修に際し次の条件を課すこととしたい: (1) 複式簿記の基本的知識を前提に議論を出発させるため、簿記原理 a，簿記原理 b 両科目を修得していること(または同等の知識のあること)。 (2) 経営学科生以外が履修する場合には、会計学 a，会計学 b 両科目を修得していること。 (3) 2014 年度に限っては、「会計学原理 b」の修得者の履修を認めないことにさせていただきます。	1 負債 2 引当金 3 資本 その 1：株主持分額の中身について 4 資本 その 2：株式報酬, ストック･オプション 5 資本 その 3：吸収型組織再編行為について 6 資本 その 4：剰余金の配当 7 資本 その 5:「純資産の部」の表示, 株主資本等変動計算書 8 連結会計 その 1：‘基本の基’ 9 連結会計 その 2:連結精算表, 連結株主資本等変動計算書 の作成 10 リース会計 11 税務会計 12 外貨換算会計 13 Topical Issues 14 総復習 その１……第 1 回～第 13 回の総復習 15 総復習 その２……同形式の問題により 期末試験の予行演習
テキスト、参考文献	**評価方法**
「財務会計論 a」と同じ。	「財務会計論 a」と同様。

01～14 年度（春）	管理会計論 a	担当者	香取　徹

講義目的、講義概要	授業計画
黒字倒産という言葉を知っていますか。会社は利益を出しているのに、倒産してしまうことです。なぜこんなことが起きるのでしょうか。会社が倒産するのは、資金がなくなるから倒産するのです。この資金のことをキャッシュフローといいます。管理会計は、会社の中のキャッシュフローをうまく使って管理することを目的としています。 会社では、将来に向かっていろいろなことが決定されていますが、その意思決定は利益を基準にして行われるのではありません。キャッシュフローによって行われているのです。この講義では、簡単な例題でキャッシュフローをうまく効率的に管理して方法を学びます。春学期はすぐに効果が表れる問題、つまり短期的な業務的意思決定について具体的に数値例を用いて解説し，演習を行います。	第 1 週　ガスダンス、管理会計とは 第 2 週　キャッシュフローで考える 第 3 週　失敗すると、いくら損? 第 4 週　輸出しますか? 第 5 週　会社が黒字倒産するとき 第 6 週　取替問題と減価償却 第 7 週　在庫が増えると、利益も増える? 第 8 週　カイゼン(改善)と制約 第 9 週　制約を緩めると 第 10 週　金額と効率、どちらで選ぶのか? 第 11 週　キャッシュフローの効率で選ぶ 第 12 週　キャッシュフローで選ぶ 第 13 週　複雑な案件で選ぶ 第 14 週　練習 第 15 週　テスト

テキスト、参考文献	評価方法
『意思決定の管理会計(仮題)』香取　徹、創成社	毎回の課題・宿題(60%)と最終の授業試験(40%)。

01～14 年度（秋）	管理会計論 b	担当者	香取　徹

講義目的、講義概要	授業計画
秋学期は、長期にわたるプロジェクトなどの問題を学びます。どうやって長期的な計画を立てるか、その計画はどのくらい利益をだすのか、などを Excel を使って学びます。そのために、貨幣の時間価値概念を理解して、戦略的意思決定へ進めていきます。理解を深めるために、具体的に数値例を用いて解説し、演習を行います。電卓を持参すること。	第 1 週　長期のキャッシュフロー問題 第 2 週　いまの 100 万円は来年いくら? 第 3 週　比較の時点をそろえる 第 4 週　金額か率か期間か 第 5 週　税引後で考えよう 第 6 週　投資案を作ろう 第 7 週　その投資は採算が取れますか? 第 8 週　独立案の選択問題 第 9 週　排反案の選択問題 第 10 週　混合案の選択問題 第 11 週　寿命の異なる投資案 第 12 週　不確実性に対して 第 13 週　Excel の実習 第 14 週　Excel の実習 第 15 週　テスト

テキスト、参考文献	評価方法
同上	同上

01～14 年度（春）	社会会計論 a	担当者	湯田　雅夫

講義目的、講義概要	授業計画
大企業、公営企業で普及している環境経営、環境会計を社会会計の視点から講義します。 環境経営、環境会計および CSR 会計は、21 世紀の企業経営において必要不可欠のものです。環境経営と環境会計および CSR 会計の内容を出来るだけわかりやすく、講義していきます。 皆さんも、新聞や雑誌で取り上げている環境問題に関する記事を出来るだけ読むように心がけてください。 **「社会会計論 a」と「社会会計論 b」は、連続した講義なので、「春学期」「秋学期」共に履修すること。**	1　オリエンテーション 2　社会会計、環境会計、環境会計の学び方、研究対象 3　環境経営、環境会計、CSR 会計の研究方法と関連領域 4　人類の歴史と環境問題 5　地球環境問題ならびに国際的取組み 6　国連の環境への取り組み① 7　国連の環境への取り組み② 8　循環型経済社会構築と諸課題 9　持続可能性と企業活動の 3 つの領域 10　環境会計の体系 3 つのアプローチ 11　環境会計アプローチの事例① 12　環境会計アプローチの事例② 13　環境会計アプローチの事例③ 14　環境会計アプローチに対する批判的考察 15. 春学期まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
湯田雅夫・大坪史治、2012 年度版『講義ノート』 参考文献はその都度指示します。	期末試験により評価します。

01～14 年度（秋）	社会会計論 b	担当者	湯田　雅夫

講義目的、講義概要	授業計画
春学期に引き続き、環境経営、環境会計および CSR 会計の具体的内容を講義します。 物量計算としての環境負荷計算と貨幣計算としての環境原価計算、そしてその組み合わせから環境効率を明らかにすることが出来ます。地球の環境容量との関連で、この環境効率を高めることは、大変重要です。 皆さん一人一人は、この講義で得た知識と技術を、是非、社会で実践してください。 **「社会会計論 a」と「社会会計論 b」は、連続した講義なので、「春学期」「秋学期」共に履修すること。**	1　秋学期オリエンテーション 2　環境負荷計算 物量計算 3　環境原価計算 貨幣計算 4　環境原価と環境負荷を統合する環境経営 5　国際標準 ISO と EMAS の内容と課題 6　環境監査 内部監査と外部監査 環境審査員の役割 7　環境効率 環境効率革命に向けて 8　環境効率 企業の事例 9　環境報告書の基本構造ならびに入手方法 10　環境報告書の評価方法 11　CSR および CSR 会計 12　持続可能性報告書および CSR 報告書 13　原発事故とリスクマネジメント 14　持続的な社会構築に向けて 15　授業のまとめと講評
テキスト、参考文献	**評価方法**
湯田雅夫・大坪史治、2012 年度版『講義ノート』 参考文献はその都度指示します。	期末試験により評価します。

01～14 年度（春）	原価計算論 a	担当者	齋藤　正章

講義目的、講義概要	授業計画
講義の目的 　原価計算には、大きく分けて、財務会計目的と管理会計目的という２つの目的があります。財務会計目的のための原価計算を「制度原価計算」といいますが、これは財務諸表作成のために必要な原価数値を計算する手続き全般を指します。他方、管理会計目的の原価計算は、経営管理のための原価計算で、企業の生産システム、製造技術、情報技術などの進歩や市場環境の変化に伴い、従来のシステムからの変革を迫られています。本講義は、この２つの視点から企業における原価計算の役割や手続きについて理解を深めることを目標としています。 講義概要 　「原価計算基準」にもとづく原価計算制度の枠内の個別原価計算を中心に講義を行います。	1. 原価計算総説 2. 原価とは何か 3. 原価計算の基礎手続き 4. 原価の費目別計算（１）材料費 5. 原価の費目別計算（２）労務費・経費 6. 原価の費目別計算（３）製造間接費 7. 原価の部門別計算（１）第１次集計 8. 原価の部門別計算（２）第２次集計 9. 原価の部門別計算（３）第３次集計 10. 個別原価計算（１） 11. 個別原価計算（２） 12. 個別原価計算（３） 13. 活動基準原価計算（１） 14. 活動基準原価計算（１） 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
『原価計算』奥村輝夫・齋藤正章・井出健二郎，新世社、2008 年.	定期試験の結果のみで評価します。

01～14 年度（秋）	原価計算論 b	担当者	齋藤　正章

講義目的、講義概要	授業計画
講義の目的 　原価計算には、大きく分けて、財務会計目的と管理会計目的という２つの目的があります。財務会計目的のための原価計算を「制度原価計算」といいますが、これは財務諸表作成のために必要な原価数値を計算する手続き全般を指します。他方、管理会計目的の原価計算は、経営管理のための原価計算で、企業の生産システム、製造技術、情報技術などの進歩や市場環境の変化に伴い、従来のシステムからの変革を迫られています。本講義は、この２つの視点から企業における原価計算の役割や手続きについて理解を深めることを目標としています。 講義概要 　「原価計算基準」にもとづく原価計算制度の枠内の総合原価計算、標準原価計算、枠外の直接原価計算および CVP 分析を中心に講義を行います。	1. 総合原価計算（１）概説 2. 総合原価計算（２）平均法・先入先出法 3. 総合原価計算（３）後入先出法 4. 総合原価計算（４）工程別計算 5. 総合原価計算（５）等級別計算 6. 総合原価計算（６）組別計算 7. 総合原価計算（７）副産物と連産品 8. 中間試験 9. 標準原価計算（１） 10. 標準原価計算（２） 11. 直接原価計算（１） 12. 直接原価計算（２） 13. CVP 分析 14. 特殊原価調査 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
『原価計算』奥村輝夫・齋藤正章・井出健二郎，新世社、2008 年.	定期試験の結果のみで評価します。

01～14 年度（春）	会計監査論 a	担当者	福薗　健

講義目的、講義概要	授業計画
（講義目的・概要） 財務諸表監査制度は、財務諸表の適正性についての意見を表明することを通じて、投資家を保護するとともに、証券市場の信頼性を確保することを目的としています。本講義では、大学生にとってはイメージし辛い『監査』というものについて、『理屈』だけでなく『監査現場で起こっている状況』などをお話することによって、監査の現実的な役割をイメージしてもらうことを目的とします。また、関連のある新聞記事、雑誌記事、ＤＶＤなども用いて、会計や監査を通じて、経済社会をイメージできればとも思っています。 春学期の講義では、監査の基礎的な考え方から実際の監査手続きなどを中心に学習していく予定です。 会計監査論の受講を通じて、『会計監査の基礎』について理解するだけでなく、『経済社会に対しての興味』をもって実社会に出る前の大切な学生生活にプラスになればと思っています。 （講義概要） 本講義は、テキストと補助レジメを利用した講義形式で進めますが、通り一遍の受け身受講では、受講時間が後々無駄になるため、参加意識を前提として出席してください。	１．監査のイメージ～監査は何のために必要か？ ２．財務諸表監査の前提～会社とはなにか？ ３．財務諸表監査の意義と目的～監査はなぜ必要か？ ４．日本における監査制度の発展～監査はどのように発展したのか？ ５．監査基準、監査の目的と二重責任～監査ルールはどのようになっているか？ ６．監査人の資質と適格性～監査はだれがやるのか？ ７．監査の実施～リスク・アプローチ～監査がどのような発想でやるか？ ８．監査の実施～監査計画と内部統制～監査はどうやって進めるか？ ９．監査の実施～監査手続論１～監査はどうやってやるか（具体例） １０．監査の実施～監査手続論２～同上 １１．監査の実施～監査手続論３～同上 １２．監査の実施～監査判断と監査証拠、監査調書～調べたものをどのように判断してまとめるか？ １３．監査事例研究１～実際の事例を考えてみよう① １４．監査事例研究２～実際の事例を考えてみよう② １５．春学期授業のまとめ
テキスト、参考文献	
テキスト： 監査論テキスト〈第 5 版〉山浦久司 (著)中央経済社	評価はレポートが中心としますが、出題が講義の内容が中心となるため、授業への参加度・貢献度も加味します。

01～14 年度（秋）	会計監査論 b	担当者	福薗　健

講義目的、講義概要	授業計画
（講義目的・概要） 財務諸表監査制度は、財務諸表の適正性についての意見を表明することを通じて、投資家を保護するとともに、証券市場の信頼性を確保することを目的としています。本講義では、大学生にとってはイメージし辛い『監査』というものについて、『理屈』だけでなく『監査現場で起こっている状況』などを交えて講義することによって、監査の現実的な役割をイメージしてもらうことを目的とします。また、関連のある新聞記事、雑誌記事、ＤＶＤなども用いて、会計や監査を通じて、経済社会をイメージできればとも思っています。 秋学期の講義では、監査の報告論、内部統制から新たな監査の領域までを幅広く学習していく予定です。 会計監査論の受講を通じて、『会計監査の基礎』について理解するだけでなく、『経済社会に対しての興味』をもって実社会に出る前の大切な学生生活にプラスになればと思っています。 （講義概要） 本講義は、テキストと補助レジメを利用した講義形式で進めますが、通り一遍の受け身受講では、受講時間が後々無駄になるため、参加意識を前提として出席してください。	１．後期開講にあたって～監査のイメージ ２．監査報告：監査意見～監査意見の種類は？ ３．監査報告：監査報告書～監査意見の伝え方は？ ４．監査関連問題：四半期レビュー～四半期決算にどう対応するか？ ５．監査関連問題：内部統制監査～内部統制ってなに？① ６．監査関連問題：内部統制監査～内部統制ってなに？② ７．監査関連問題：継続企業の前提についての監査～会社の継続性について監査するとは？ ８．監査関連問題：会社法監査、連結財務諸表監査～グループ会社の監査とは？ ９．監査関連問題：内部監査と監査役監査～会社内部の監査機関との外部監査の連携関係は？ １０．監査関連問題～環境監査、非営利法人等に関する監査～いろんな監査があります １１．監査関連問題～監査の国際的動向及び監査周辺の職業～会計お よび監査の動向は？ １２．監査からの広がり～コンサルティングと監査はどのように関連するか？ １３．株式公開と会計監査～公開と会計監査の関係は？ １４．関連トピックについて １５．秋学期授業のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト： 監査論テキスト〈第 5 版〉山浦久司 (著)中央経済社	評価はレポートが中心としますが、出題が講義の内容が中心となるため、授業への参加度・貢献度も加味します。

01～14年度（春）	税務会計論ａ	担当者	平　仁

講義目的、講義概要	授業計画
本講座では、税法の概要を理解し、強行法規であるが故に会計制度に対して逆基準性を強いることになる税法基準の意味を理解してもらいたい。 特にＩＦＲＳの進展に伴い、企業会計と税法に齟齬を来す場面が増大する可能性が大きいだけに、会計を学ぶ者が税法の本質を学ぶことの意味は小さくない。 本講座では、秋学期の税務会計論ｂで法人税法を学ぶ前に、税法を概観するとともに、所得税・消費税についても簡単に触れていく予定である。 また、本講座では、最初の2～30分を使い、税に限らず、時事問題等につき、書籍等を紹介しつつ、受講生に考えて頂きたいテーマについて話をします。厳しい指摘をすることも多いので、受講する際にはそれなりの覚悟をして頂きたい。 税理士・公認会計士等の会計プロフェッショナルを志望する方はもとより、国税専門官、将来起業を考えている方の積極的な受講を期待したい。	１．ガイダンス、税とは何か？ ２．租税公平主義 ３．租税法律主義 ４．租税回避 ５．納税義務者 ６．課税物件 ７．更正の請求 ８．税務調査 ９．推計課税 １０．源泉徴収制度 １１．税務訴訟 １２．所得税の構造 １３．所得区分 １４．消費税 １５．講義まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト出版準備中のため、講義中に適宜レジュメを配布。参考書として、増田英俊『リーガルマインド租税法（第三版）』、佐藤正勝『租税法』（同文館出版）	定期試験に加えて、加算点レポートを課す。

01～14年度（秋）	税務会計論ｂ	担当者	平　仁

講義目的、講義概要	授業計画
本講座では、春学期の税務会計論ａで学んだ税法概論を踏まえて、法人税法を講義する。 企業会計のルールとは異なる税法基準が、中小企業における実務指針になっているのが現実であるが、会計監査を要しない中小企業にとって、適正性・適時性を旨とする企業会計に従わずに、強行法規である税法基準に従うことは無理からぬことである。 税法基準の特殊性は別段の定めにあることから、本講座の中心論点は、この別段の定めを検討することにある。 なお、税務会計論ａ同様、最初の2～30分を使い、税に限らず、時事問題等につき、書籍等を紹介しつつ、受講生に考えて頂きたいテーマについて話をします。厳しい指摘をすることも多いので、受講する際にはそれなりの覚悟をして頂きたい。 税理士・公認会計士等の会計プロフェッショナルを志望する方はもとより、国税専門官、将来起業を考えている方の積極的な受講を期待したい。	１．ガイダンス、法人概念 ２．法人税の計算構造 ３．益金概念 ４．工事進行基準 ５．売上原価 ６．減価償却 ７．役員給与 ８．寄付金 ９．交際費 １０．貸倒損失 １１．繰越欠損金、繰戻還付 １２．組織再編税制、連結納税制度等 １３．国際課税 １４．地方法人税 １５．講義まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト出版準備中のため、講義中に適宜レジュメを配布。参考書として、三木義一『よく分かる法人税法入門』（ゆうひかく選書）、酒井克彦『裁判例からみる法人税法』（大蔵財務協会）	定期試験に加えて、加算点レポートを課す。

01～14 年度（春）	経営分析論 a	担当者	百瀬　房徳

講義目的、講義概要	授業計画
経営分析は、財務諸表分析として発展してきた。そして、このためには、統一した財務諸表の作成方法を促進させてきた。財務諸表の分析の始まりは、金融機関が貸付金の返済能力を診断したところにある。その後、証券市場では、収益性の分析を発展させてきた。現在では、特定の実体（例えば企業）の評価または診断、当該実体の属する産業の動向、国民経済の動向を分析するまでに発展している。歴史的発展過程をふまえる形で、経済環境と分析技法の二面により考察し、全体像の理解を深めることにする。	1　経営分析の現代における意義 2　米国の経済環境における手形市場の形成過程 3　手形市場、特に手形の割引に際しての銀行から見た信用分析の形成過程 4　信用分析の側面から見た財務諸表 特に貸借対照表を中心に 5　信用分析における 2 対 1 の原則から体系的な分析への過程 6　信用分析におけるキャッシュフローの意義 7　信用分析のケーススタディ ウォール、ブリス 8　信用分析のケーススタディ ギルマン、ウォール、シュマルツ 9　信用分析の新展開 10　収益性の分析(1) 11　収益性の分析(2) 12　生産性の分析とその応用 13　経営分析の意義とその限界 14　経営分析の主体とその目的 15　経営分析の種類
テキスト、参考文献	**評価方法**
前林 和寿『経営分析の基礎』森山書店	テスト

01～14 年度（秋）	経営分析論 b	担当者	百瀬　房徳

講義目的、講義概要	授業計画
代表的企業の有価証券報告書総覧に記載されている財務諸表を資料として、体系的な分析をする。特に、安全性、収益性、生産性について、解説しながら分析数値を算出する。そして、この分析数値が何を意味するかを考察する。この分析をテーマごとにレポートを完成させ、提出してもらう。	1　全般の解説 2　安全性の分析(1)　比率分析 （レポート提出） 3　安全性の分析(2)　資金移動表の解説 4　安全性の分析(3)　資金移動表の作成 （レポート提出） 5　収益性の分析(1)　各種資本利益率 6　収益性の分析(2)　資本利益率とレバレッジ効果 7　収益性の分析(3)　売上高利益率 （レポート提出） 8　収益性の分析(4)　利益増減の原因分析 （レポート提出） 9　生産性の分析(1)　付加価値の意義 10　生産性の分析(2)　付加価値の計算と数値の意味 11　生産性の分析(3)　付加価値表の作成 （レポート提出） 12　付加価値と付加価値税の関係 13　損益分岐点分析(1)　損益分岐点と意義 14　損益分岐点分析(2)　損益分岐点の計算と数値の意味 15　損益分岐点分析(3)　損益分岐点の計算 （レポート提出）
テキスト、参考文献	**評価方法**
前林 和寿『経営分析の基礎』森山書店	テスト

01～14 年度（春）	上級簿記（工業）a	担当者	香取　徹

講義目的、講義概要	授業計画
この上級簿記は、日商簿記検定 2 級の試験範囲のうち**工業簿記**を 1 年間かけて完全に制覇することを目的としています。日商簿記検定の 2 級の試験は、商業簿記と工業簿記の 2 種類の簿記の検定試験です。工業簿記は製造業で行われる簿記のことで、原価計算や管理会計論の基礎として重要な技術であるので、是非習得してほしいと思います。 簿記は難しいものではありませんが、技術ですから、身につけるためには、練習が必要です。そのため、毎回の講義では、一つずつ項目を説明し例題の解説をしてから講義に合せてワークブックで練習します。 簿記を始めて学習しようという人には履修を勧めません。 電卓を持参してください。	1 工業簿記の基礎 2 勘定連絡図 3 材料費 1 4 材料費 2 5 労務費 1 6 労務費 2 7 経費 8 個別原価計算 1 9 個別原価計算 2 10 同上 11 部門別個別原価計算 1 12 部門別個別原価計算 2 13 総合原価計算 1 14 総合原価計算 2 15 総合原価計算 3
テキスト、参考文献	**評価方法**
合格テキスト　日商簿記 2 級工業簿記　TAC 出版 合格トレーニング　日商簿記 2 級工業簿記　TAC 出版	毎回プリントを配布して問題解答練習(60%)、最終授業での試験(40%)。

01～14 年度（秋）	上級簿記（工業）b	担当者	香取　徹

講義目的、講義概要	授業計画
この講義は、上級簿記(工業)a を履修した人か、すでに簿記を学習した人を対象にしますので、初めて簿記を学習しようという人は履修しないことを勧めます。内容は上と同じです	1 総合原価計算 4 2 財務諸表 1 3 同上 4 標準原価計算 1 5 標準原価計算 2 6 同上 7 直接原価計算 1 8 直接原価計算 2 9 同上 10 材料副費 11 固定予算 12 相互配賦法 13 仕損 14 組別・等級別原価計算 15 工場会計
テキスト、参考文献	**評価方法**
同上	同上

01～14 年度（春）	上級簿記（商業）a	担当者	細田　哲

講義目的、講義概要	授業計画
講義の目標 「簿記原理」履修者あるいは「日商簿記検定」３級以上の合格者が、複式簿記に関するさらに高度の知識・技術を習得すること。また、近年続々と公表されている新会計基準の内容について理解を深めることを目標とする。 講義概要 春学期講義の内容 主たる講義テーマを列挙すると、次の通りである。 ○銀行勘定調整表の作成 ○手形取引の記帳 ○特殊商品売買取引に関する記帳 ○株式会社会計 ○本支店会計 ○帳簿組織	1.「1.銀行勘定調整表の作成」 2.「2.手形取引の記帳(1)」 a)手形裏書譲渡・割引に関する偶発債務についての記帳 3.　「手形取引の記帳(2)」 a)手形裏書譲渡・割引に関する偶発債務についての記帳 b)荷為替手形 4.「3.特殊商品売買取引(1)」 a)未着品売買、b)委託販売、c)受託販売 5.「3.特殊商品売買取引(2)」 a)未着品売買、b)委託販売、c)受託販売 6.「3.特殊商品売買取引(3)」　d)割賦販売 7.「4.株式会社会計(1)」 a)株式会社の資本金、b)資本剰余金、c)利益剰余金 8.「4.株式会社会計(2)」 d)剰余金の配当など e)社債の発行、利払、償還 9.「4.株式会社会計(3) 」 f)繰延資産、g)引当金、h)法人税等、i)会社の合併 10.「5.本支店会計(1)」 a)本支店会計とは b)支店分散会計制度と本店集中計算制度 11.「5.本支店会計(2)」 c)未達事項の整理、d)内部利益の控除と合併財務諸表 12.「5.本支店会計(3)」 c)未達事項の整理、d)内部利益の控除と合併財務諸表 13.「6.帳簿組織(1)」　a)普通仕訳帳と特殊仕訳帳 14.「6.帳簿組織(2)」　b)伝票式会計 15. 総まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
TAC 簿記検定講座 『合格テキスト日商簿記 2 級商業簿記』（TAC 出版）	期末試験の結果による。

01～14 年度（秋）	上級簿記（商業）b	担当者	細田　哲

講義目的、講義概要	授業計画
秋学期講義の内容 主たる講義テーマを列挙すると、次の通りである。 ○リース会計 ○ディリバティブ取引についての会計 ○退職給付会計 ○外貨換算会計 ○税効果会計 ○純資産（資本）についての会計	1.　「7.リース会計(1)」 2.　「7.リース会計(2)」 3.　「8.ディリバティブ取引についての会計(1)」 4.　「8.ディリバティブ取引についての会計(2)」 5.　「8.ディリバティブ取引についての会計(3)」 6.　「9.退職給付会計(1)」 7.　「9.退職給付会計(2)」 8.　「10.外貨換算会計(1)」 9.　「10.外貨換算会計(2)」 10.「10.外貨換算会計(3)」 11.「11.税効果会計(1)」 12.「11.税効果会計(2)」 13.「11.税効果会計(3)」 14.「12.純資産（資本）についての会計」 15. 総まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
TAC 簿記検定講座 『合格テキスト　日商簿記 1 級商業簿記会計学Ⅱ』 （TAC 出版）	期末試験の結果による。

01～14 年度（春）	国際会計論 a	担当者	橋　本　　尚

講義目的、講義概要	授業計画
国際会計は、企業活動の国際化、資金調達の国際化、多国籍企業の出現などにより新たに展開された企業会計の領域である。会計はビジネス社会における共通言語であり、もともと国という枠に限定される性質のものではないが、社会の制度として定着していく過程で、各国の政治、経済、社会的環境を色濃く反映してきた。こうした会計制度の相違は、財務諸表の国際理解の障害となるものであり、企業活動や資本市場のグローバル化とともに、国際比較可能性を有するグローバル・スタンダードが必要とされるようになった。国際会計基準審議会（IASB）が開発している国際財務報告基準（IFRS）は、質の高い単一のモノサシとして、わが国においても 2010 年 3 月期から上場企業（特定会社）の連結財務諸表に任意適用が認められている。 本講義においては、IFRSをめぐる内外の動向を概観するとともに、IFRSの特徴や基本的な内容について、日本の企業会計基準と比較しながら解説していく。	1　オリエンテーション 2　IFRS をめぐる内外の動向 3　IFRS 財団の組織 4　IFRS の構成 5　IFRS の特徴 6　財務報告に関する概念フレームワーク 7　公正価値および現在価値の概念 8　IFRS に基づく財務諸表 9　収益 10　棚卸資産 11　有形固定資産① 12　有形固定資産② 13　無形資産 14　減損 15　リース

テキスト、参考文献	評価方法
テキスト：橋本　尚・山田善隆　『IFRS 会計学基本テキスト（第 3 版）』　中央経済社　2012 年 参考文献：講義の中で適宜紹介する。	講義への取り組み状況などの平常点（30%）と試験の結果（70%）に基づいて総合的に判定する。

01～14 年度（秋）	国際会計論 b	担当者	橋　本　　尚

講義目的、講義概要	授業計画
国際会計は、企業活動の国際化、資金調達の国際化、多国籍企業の出現などにより新たに展開された企業会計の領域である。会計はビジネス社会における共通言語であり、もともと国という枠に限定される性質のものではないが、社会の制度として定着していく過程で、各国の政治、経済、社会的環境を色濃く反映してきた。こうした会計制度の相違は、財務諸表の国際理解の障害となるものであり、企業活動や資本市場のグローバル化とともに、国際比較可能性を有するグローバル・スタンダードが必要とされるようになった。国際会計基準審議会（IASB）が開発している国際財務報告基準（IFRS）は、質の高い単一のモノサシとして、わが国においても 2010 年 3 月期から上場企業（特定会社）の連結財務諸表に任意適用が認められている。 本講義においては、国際会計論 a に引き続いて IFRS の基本的な内容について、日本の企業会計基準と比較しながら解説していく。	1　引当金、偶発負債および偶発資産 2　従業員給付 3　ストック・オプション 4　金融商品① 5　金融商品② 6　法人所得税 7　企業結合 8　連結① 9　連結② 10　連結③ 11　持分法 12　外貨換算 13　セグメント情報 14　IFRS の初度適用 15　IFRS の将来像

テキスト、参考文献	評価方法
テキスト：橋本　尚・山田善隆　『IFRS 会計学基本テキスト（第 3 版）』　中央経済社　2012 年 参考文献：講義の中で適宜紹介する。	講義への取り組み状況などの平常点（30%）と試験の結果（70%）に基づいて総合的に判定する。

13 年度以降（春） 01～12 年度（春）	経済経営数学 a 経営数学 a	担当者	大床　太郎

講義目的、講義概要	授業計画
【講義目的】 広範な分野にわたっている経済・経営数学のさまざまなキーワードに触れ，少なくとも経済・経営数学に苦手意識を持たないようになることを目的とします. 【講義概要】 本講義では，例題や演習問題の豊富なテキストを用いて，経済・経営の諸課題における理論分析に必要となる数学の基礎を網羅的に概説します．解法の手引きを講義したのちに，授業参加者それぞれが演習問題を解き進めてもらいます. 秋学期の「経済経営数学b」とセットで開講しますので，基本的に通年で履修してください.	以下のような予定で，適宜修正しつつ進めます．第 1 回は，講義の進め方や単位の修得に関わる説明を行いますので，必ず受講してください. 第 1 回　イントロダクション 第 2 回～第 7 回　偏導関数・ラグランジアン等 第 8 回　小テスト① 第 9 回～第 13 回　行列・逆行列等 第 14 回　小テスト② 第 15 回　調整・質問用
テキスト、参考文献	**評価方法**
エドワード・T. ドウリング著，大住栄治，川島康男訳（1995）『例題で学ぶ入門・経済数学〈上〉』，シーエーピー出版.	授業貢献（50%）・期末試験（50%）. 詳しくは，第 1 回のイントロダクションで説明します.

01～13 年度以降 12 年度（秋）	経済経営数学 b 経営数学 b	担当者	大床　太郎

講義目的、講義概要	授業計画
【講義目的】 広範な分野にわたっている経済・経営数学のさまざまなキーワードに触れ，少なくとも経済・経営数学に苦手意識を持たないようになることを目的とします. 【講義概要】 本講義では，例題や演習問題の豊富なテキストを用いて，経済・経営の諸課題における理論分析に必要となる数学の基礎を網羅的に概説します．解法の手引きを講義したのちに，授業参加者それぞれが演習問題を解き進めてもらいます. 春学期の「経済経営数学a」とセットで開講しますので，基本的に通年で履修してください.	以下のような予定で，適宜修正しつつ進めます．第 1 回は，講義の進め方や単位の修得に関わる説明を行いますので，必ず受講してください. 第 1 回　イントロダクション 第 2 回～第 7 回　ヤコビアン・ヘッシアン等 第 8 回　小テスト① 第 9 回～第 13 回　積分・微分方程式等 第 14 回　小テスト② 第 15 回　調整・質問用
テキスト、参考文献	**評価方法**
エドワード・T. ドウリング著，大住栄治，川島康男訳（1996）『例題で学ぶ入門・経済数学〈下〉』，シーエーピー出版.	授業貢献（50%）・期末試験（50%）. 詳しくは，第 1 回のイントロダクションで説明します.

01～12 年度（春）	応用統計学 a	担当者	樋田 勉

講義目的、講義概要	授業計画
【講義目的】 この講義の目的は、統計的データ解析の基礎を理解し、現実の経済・経営データへの応用方法を習得することにあります。 【講義概要】 講義では、統計的データ解析の理論的な説明と、簡単な数値例の計算、統計解析ソフトウェア R を利用する実習を併用します。これにより、統計的データ解析の理解を深めるとともに応用力を養います。また、必要に応じて数学的な説明を加えます。 【注意】 1. 授業・実習・課題等に対する積極的な取り組みが不可欠である。 2. 統計学に関する基本的な知識を前提とする。 3. テキストや参考書等について、初回の授業で詳しく説明するので、必ず出席すること。	1. オリエンテーション 2. 1 次元データの分析（1） 3. 1 次元データの分析（2） 4. 2 次元データの分析（1） 5. 2 次元データの分析（2） 6. クロス集計表 7. 単純回帰分析（1） 8. 単純回帰分析（2） 9. 単純回帰分析（3） 10. 重回帰分析（基礎 1） 11. 重回帰分析（基礎 2） 12. 重回帰分析（基礎 3） 13. 重回帰分析（基礎 4） 14. 総合演習（1） 15. 総合演習（2）
テキスト、参考文献	**評価方法**
【参考書】 垂水・飯塚（2006）『R/S - PLUS による統計解析入門』共立出版.	レポート・発表（70%）、平常点（30%）

01～12 年度（秋）	応用統計学 b	担当者	樋田 勉

講義目的、講義概要	授業計画
【講義目的】 この講義の目的は、統計的データ解析の基礎を理解し、現実の経済・経営データへの応用方法を習得することにあります。 【講義概要】 講義では、統計的データ解析の理論的な説明と、簡単な数値例の計算、統計解析ソフトウェア R を利用する実習を併用します。これにより、統計的データ解析の理解を深めるとともに応用力を養います。また、必要に応じて数学的な説明を加えます。 【注意】 1. 授業・実習・課題等に対する積極的な取り組みが不可欠である。 2. 統計学に関する基本的な知識を前提とする。 3. 応用統計学 a の単位取得者を対象とする。	1. オリエンテーション、重回帰分析の復習 2. 重回帰分析（応用 1） 3. 重回帰分析（応用 2） 4. 重回帰分析（応用 3） 5. 質的従属変数モデル（基礎 1） 6. 質的従属変数モデル（基礎 2） 7. 質的従属変数モデル（基礎 3） 8. 質的従属変数モデル（基礎 4） 9. 質的従属変数モデル（応用 1） 10. 質的従属変数モデル（応用 2） 11. 質的従属変数モデル（応用 3） 12. 質的従属変数モデル（応用 4） 13. 総合演習（1） 14. 総合演習（2） 15. 総合演習（3）
テキスト、参考文献	**評価方法**
【参考書】 垂水・飯塚（2006）『R/S - PLUS による統計解析入門』共立出版.	レポート・発表（70%）、平常点（30%）

13 年度以降（春） 01～12 年度（春）	社会調査論 a 標本調査論 a	担当者	大床 太郎

講義目的、講義概要	授業計画
【講義目的】 アンケート調査設計が実際にでき，基礎的なデータ要約もできるようになることを目的とします. 【講義概要】 データの入手方法は様々ですが，社会科学においては社会調査によるデータ入手がとても大切です. 本講義では， グループワークによって，アンケート作成・実査・単純集計（・クロス集計）等の作業をしてもらいます. 本講義で収集するデータは秋学期の「社会調査論b」にも用いますので，基本的に通年で履修してください.	以下のような予定で進めます．第 1 回は，講義の進め方や単位の修得に関わる説明を行いますので，必ず受講してください. 第 1 回　イントロダクション・グループ分け 第 2 回～第 5 回　アンケート作成 第 6 回～第 7 回　アンケート実査 第 8 回～第 15 回　集計と整理・レポート作成
テキスト、参考文献	**評価方法**
講義中に配布します.	授業貢献（50%）・期末レポート（50%）. 詳しくは，第 1 回のイントロダクションで説明します.

13 年度以降（秋） 01～12 年度（秋）	社会調査論 b 標本調査論 b	担当者	大床 太郎

講義目的、講義概要	授業計画
【講義目的】 アンケート調査データの要約と報告ができるようになることを目的とします. 【講義概要】 データの入手方法は様々ですが，社会科学においては社会調査によるデータ入手がとても大切です. 本講義では， グループワークによって，アンケートに関わる分析作業と報告をしてもらいます. 春学期の「社会調査論a」とセットで開講しますので，基本的に通年で履修してください.	以下のような予定で進めます．第 1 回は，講義の進め方や単位の修得に関わる説明を行いますので，必ず受講してください. 第 1 回　イントロダクション・グループ分け 第 2 回～第 5 回　主成分分析 第 6 回～第 9 回　因子分析 第 10 回～第 13 回　高度な分析のはなし・調査結果の報告 第 14 回・第 15 回　最終報告書作成
テキスト、参考文献	**評価方法**
講義中に配布します.	授業貢献（50%）・期末レポート（50%）. 詳しくは，第 1 回のイントロダクションで説明します.

01～14 年度（春）	データベース論 a	担当者	長　慎也

講義目的、講義概要	授業計画
データベースは、コンピュータ上で大規模なデータを処理する際に必須のものであり、特に Web アプリケーションを作る上で重要な構成要素である。本授業では、データベースの構造、データの操作について学ぶ。 この授業では、まずデータの処理（検索・集計など）のしかたを、Excel を用いて簡単に学び、その後本格的にデータを操作するための言語として、SQL を学ぶ。SQL を用いて、データの検索、集計、追加、変更、削除という基本操作を学ぶ。 題材として、ショッピングサイトの商品データを用いる。商品を検索したり、集計したりする仕組みを作成する。 また、データベースと密接な関係がある Web アプリケーションについても扱う。ショッピングサイトの仕組みを簡単に実装し、Web アプリケーションの仕組みについて学ぶ。 作品制作課題を行う。受講者同士で作品の相互評価も行い、他の受講者との意見交換も重要視する。	1. ガイダンス（データベースとは） 2. Excel によるデータの集計 SQL によるデータの操作: 3. 商品データの作成 4. 商品データの検索 5. 商品データの集計 6. 商品データの変更．削除 7. 注文データの作成・テーブル同士の結合 8. 注文データの正規化 9. Web 画面を利用しての、商品の検索 10. フォームを利用しての、商品の検索 11. Web 画面を利用しての、商品の注文 12. 商品の表示方法の変更 13. 作品製作（設計） 14. 作品製作（実装） 15. 授業のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
毎回、資料を配布する	毎回の課題で評価する

01～14 年度（秋）	データベース論 b	担当者	長　慎也

講義目的、講義概要	授業計画
この授業は、春学期のデータベース論 a を履修していることを前提とする。 春学期に引き続き、データベースの構造、操作について学ぶ。本授業では、データベースを応用した、Web アプリケーションの構築を通じて、データベースの仕組みを学ぶ。 題材として、掲示板などの古典的な Web アプリケーションをまずとりあげる。そこに、ユーザの情報を管理する仕組みを導入し、ユーザ同士のつながりや、書き込みに対する評価などをデータで表現する。最終的には、最近のソーシャルネットワークで用いられているデータ構造を理解できるようにする。 作品制作課題を行う。受講者同士で作品の相互評価も行い、他の受講者との意見交換も重要視する。	1. ガイダンス（前期の復習） 2. 掲示板の書き込みデータの作成 3. フォームからの書き込みデータの作成 4. ユーザ情報の作成 5. ユーザ情報の削除 6. ユーザ情報と書き込みデータの結合 7. ユーザの認証 8. セッションの管理 9. ユーザ認証のセキュリティ 10. ユーザ間の関係の構築 11. ユーザ間の関係の構築(2) 12. ユーザ間の関係の構築(3) 13. 作品製作(設計) 14. 作品製作(実装) 15. 授業のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
毎回、資料を配布する	毎回の課題で評価する

01～14 年度（春）	データベース論 a	担当者	堀江 郁美

講義目的、講義概要	授業計画
はじめに、データベースの歴史を概観し、データベースの仕組みを学習する。 その後、関係データベースのもっとも単純な例として、表計算ソフト(MS-Excel)のデータベース機能を利用し、実習をしながらデータベースおよびその検索の基礎を学ぶ。 実際のデータとして国勢調査の結果の人口情報と、百人一首を利用し、それらの取り扱いを通じて数値中心のデータベースと文字列中心のデータベースの扱いの基礎を学ぶ。	1 データベース理論(1)：データベース概観 2 データベース理論(2)：データベース歴史 3 データベース理論(3)：データモデル 4 データベース理論(4)： データベースの三層スキーマ 5 データベース理論(5) ：データベース管理システム 6 データベース実習(1)：MS-Excel の基礎知識 7 データベース実習(2)：レコードの分類と集計 8 データベース実習(3)：レコードの抽出 9 データベース実習(4)： 論理関係、比較・照合関係 10 データベース実習(5)： ワイルドカードと検索 11 データベース実習(6)：条件検索(1) 文字列データの条件設定 12 データベース実習(7)：条件検索(2) 数値データの条件設定 13 データベース実習(8)：条件検索演習 14 データベース実習(9)：クロス集計 15 総合問題、まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：前田、和高、石田、松山、高柳共著『Windows 7 と情報活用- MS - Office2010 対応』共立出版、2012 参考書：鈴木健司『データベースがわかる本』オーム社、1998	授業態度、定期試験、レポートを加味して評価する。

01～14 年度（秋）	データベース論 b	担当者	堀江 郁美

講義目的、講義概要	授業計画
現在最も普及している関係データベースに焦点をあて、データベースの理論と実践を学習する。 理論としては、関係データベースの特徴からはじめ、順に、関係代数やデータ構造、問い合わせ言語 SQL について学習する。 実践としては､MS-Access を使用し､「データベース論 a」で MS-Excel 上に作成したデータを用い、データベース作成や問い合わせなどの実際の操作を学ぶ。 なお、この講義は「データベース論 a」の既習が前提となる。	1 関係データベース理論(1)：関係モデルと SQL 2 関係データベース理論(2)：キー、関数従属、整合性制約 3 関係データベース理論(3)：正規化理論 4 関係データベース理論(4)：正規化演習 5 関係データベース実習(1)：Access へのインポート 6 関係データベース実習(2)：主キーの設定、関係間の関連付け 7 関係データベース実習(3)：QBE による検索 8 関係データベース理論(4)：関係代数の演算 9 関係データベース理論(5)：関係代数と SQL 10 関係データベース理論(6)：SQL の構文と演算子(1) 11 関係データベース理論(7)：SQL の構文と演算子(2) 12 関係データベースの実際(4)：QBE と SQL 13 関係データベースの実際(5)：SQL による検索 14 関係データベースの実際(6)：データベース定義、更新処理 15 総合問題、まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考書：芝野耕司『SQL がわかる本』オーム社、1998	授業態度、定期試験、レポートを加味して評価する。

01～12 年度（春）	コピュータシミュレーション論 a	担当者	市川　新

講義目的、講義概要	授業計画
実社会において直面するマネジメント問題に取り組むためには、場面を仮想し演習する思考、すなわち、シミュレーション思考が求められる。この科目では、人間の思考力である脳内情報処理とそれを補完するコンピュータシミュレーションの両方を学ぶことによって、仮想演習思考力の修得をめざす。したがって、人間シミュレーション（ロールプレイ演習）が含まれる。 この科目には演習や実習が多く含まれる教育方法を採用する。一斉授業形式の講義主体ではないので受講にあたり準備すること。EXCELを使った経営意思決定のための分析手法も学習するので、基本機能ハンドブック類（入門書は不要）を携帯することが望ましい。	1. 小売業発注ビジネスゲーム：ガイダンスに代えて 2. 経営環境理解のためのマッピング１ 3. 経営環境理解のためのマッピング２ 4. 経営環境理解のためのマッピング３ 5. 社会情報データの収集法１ 6. 社会情報データの収集法２ 7. 階層分析シミュレーションによる経営問題解決１ 8. 階層分析シミュレーションによる経営問題解決２ 9. 階層分析シミュレーションによる経営問題解決３ 10. 時系列分析と予測シミュレーション１ 11. 時系列分析と予測シミュレーション２ 12. 時系列分析と予測シミュレーション３ 13. 顧客創造マッピングとプレゼン 14. 組織参加マッピングとプレゼン 15. 経営意思決定のためのシミュレーション思考
テキスト、参考文献	**評価方法**
毎回の講義については、プリントを配付する。教材アプリを配付するので、専用の USB メモリを用意することが望ましい。	この科目は能動的学習が必須なので、毎回の課題と作品の提出状況（60%）と内容（40%）によって評価する。

01～12 年度（秋）	コピュータシミュレーション論 b	担当者	市川　新

講義目的、講義概要	授業計画
実社会において直面するマネジメント問題に取り組むためには、場面を仮想し演習する思考、すなわち、シミュレーション思考が求められる。この科目では、人間の思考力である脳内情報処理とそれを補完するコンピュータシミュレーションの両方を学ぶことによって、仮想演習思考力の修得をめざす。したがって、人間シミュレーション（ロールプレイ演習）が含まれる。 この科目には演習や実習が多く含まれる教育方法を採用する。一斉授業形式の講義主体ではないので受講にあたり準備すること。EXCEL を使った経営意思決定のための分析手法も学習するので、基本機能ハンドブック類を携帯することが望ましい。 なお、コンピュータシミュレーション論 a と合わせて受講すると、授業計画の各項目に示すように店長などのミドルマネジメントが遭遇する主要な経営問題を経験的（体験的）に学習することになる。	1. 製造業発注ビジネスゲーム：ガイダンスに代えて 2. 価格戦略ビジネスゲーム１ 3. 価格戦略ビジネスゲーム２ 4. 価格戦略ビジネスゲーム３ 5. モンテカルロシミュレーション１ 6. モンテカルロシミュレーション２ 7. 流通シミュレーションモデル１ 8. 流通シミュレーションモデル２ 9. 流通シミュレーションモデル３ 10. 流通シミュレーションモデル４ 11. インターネットビジネスゲーム経営演習１ 12. インターネットビジネスゲーム経営分析１ 13. インターネットビジネスゲーム経営演習２ 14. インターネットビジネスゲーム経営分析２ 15. 経営意思決定のためのシミュレーション思考
テキスト、参考文献	**評価方法**
毎回の講義については、プリントを配付する。教材アプリを配付するので、専用の USB メモリを用意することが望ましい。	この科目は能動的学習が必須なので、毎回の課題と作品の提出状況（60%）と内容（40%）によって評価する。

01～14 年度（春）	マルチメディア論 a	担当者	大和田　勇人

講義目的、講義概要	授業計画
マルチメディアは従来のコンピュータで扱われていたテキスト、数値に加えて画像、音声、動画などの様々な情報形式を指すが、現在はインターネット閲覧ソフトで完全に統合されている。さらに最近は、Web サイトを簡単に作れる無料のツールが広く利用されており、従来の基本要素からマルチメディアを学ぶ手法は現実的ではなくなっている。本授業では、そうしたツールの中で WordPress を用い、Web サイトを構築できるための仕組みや方法を具体的な演習を通じて講義する。講義内容は、WordPress の仕組みと動作を紹介した後、テンプレートを核とした WordPress サイトの最新の構築技法をステップバイステップで進めていく。最近のホームページは WordPress で作成したものが非常に多いが、本講義によってそうした現実的なホームページやサイトを実践的に作成できる素養を身に付けることができる。授業の最後には、自分で Web サイトのテーマを決め、それに従ったサイトを自作してもらう。成績はそうした演習のプロセスでもって評価する。	1　Web の仕組みとマルチメディアの基礎を講義 2　コンテンツの投稿方法を講義・演習 3　テンプレートファイル作成：HTML で記事の個別ページを作成する方法を講義・演習 4　スタイルシートファイルの作成：記事のデザインを編集する方法を講義・演習 5　前後の記事へのリンクアイコンの作成方法を講義・演習 6　動画コンテンツの埋め込み方法を講義・演習 7　コメント投稿フォームの作成方法を講義・演習 8　コメントの投稿と表示の方法を講義・演習 9　Javascript によるコメント返信機能を講義・演習 １０　トップページの作成（１）：記事の一覧表示を講義・演習 １１　トップページの作成（２）：記事のサムネイル表示を講義・演習 １２　カテゴリとタグの作成方法を講義・演習 １３　タグページと月別ページの作成方法の講義・演習 １４　自作サイトの作成演習（１） １５　自作サイトの作成演習（２）
テキスト、参考文献	**評価方法**
WordPress ステップアップブック、エビスコム著、出版社ソシム。	リポート８０％、プレゼンテーション２０％

01～14 年度（秋）	マルチメディア論 b	担当者	大和田　勇人

講義目的、講義概要	授業計画
マルチメディアは、現在インターネット閲覧ソフトで完全に統合されており、マルチメディアの作成は一見簡単そうに思えるが、実は対象とする情報形式によって様々なソフトウェアやハードウェアを用いていく必要がある。本授業では、インターネット上でのマルチメディアシステムがどのような構成になっており、それをどのように作成していくかを、実例を挙げて講義しながら、それらを作成するために様々なソフトウェアを用いて実習を行う。具体的には、マーケティング、広告、ネットショップなどのビジネス上でのマルチメディアの応用事例を示し、それらがどのように体系的に構成されているかを講義する。次に、そうした事例に対応して、マルチメディア作成のソフトウェアを利用して、図形・画像処理・静止画・アニメーションを実際に取り上げ、マルチメディアシステムの構成方法を実習を通じて説明していく。その際、Web ページ上での情報統合に焦点を当て、マルチメディア作品を作成していくプロセスを学ぶ。さらに、これらで作成したファイルをインターネット上に載せ、最終的にプレゼンテーションを行う。	1　インターネットとマルチメディア：その特徴、利用方法を講義 2　HTML と CSS を講義・実習 3　HTML と Javascript を講義・実習 4　マルチメディアの実例：インターネット電話、ビジネスにおける実例を講義・実習 5　ホームページ作成（１）：静止画の掲載方法を講義・実習 6　ホームページ作成（２）：ページリンクの貼り方を講義・実習 7　ホームページ作成（３）：ページレイアウトの方法を講義・実習 8　アニメーション作成（１）：講義と実習 9　アニメーション作成（２）：講義と実習 １０　ＰＨＰによる動的 Web ページ作成（１）：講義と実習 １１　ＰＨＰによる動的 Web ページ作成（２）：講義と実習 １２　Web サーバへのファイル転送を講義・実習 １３　ネット上でのマルチメディア作成（１）：実習 １４　ネット上でのマルチメディア作成（２）：実習 １５　ネット上でのマルチメディア作成（３）：実習
テキスト、参考文献	**評価方法**
Web プログラミング　基礎からのステップアップ、大和田・金盛著、出版社コロナ社。	リポート８０％、プレゼンテーション２０％

01～14 年度（春）	マルチメディア論 a	担当者	柏原　賢二

講義目的、講義概要	授業計画
この授業では、コンピュータを用いて、マルチメディアコンテンツ作成に関する理論を学び、それに関連する実習を行う。 以下の 3 つが主要な実習内容である。 (I)第 3 週より第 8 週まで。画像加工ソフト(Paint, Photoshop elements)を用いた静止画像の作成と加工。レイヤーを使った静止画像の加工方法を学ぶ。 (II)第 9 週と第 10 週。ワープロソフト(Word)を用いて、文書にマルチメディアコンテンツを組み込む方法を学ぶ。 (III)第 11 週から第 15 週まで。プレゼンテーションソフトを用いたプレゼンテーション。PowerPoint でスライドを作成してもらい、実際に教室の前でプレゼンテーションをしてもらう。 実習と平行して、関連する理論を講義する。 たとえば、コンピュータ内でディジタル情報がどのように表されているかや、画像のファイル形式、コンピュータの中での文字情報の扱いなどである。	1 マルチメディアとは 2 情報のディジタル表現 3 静止画像の作成(Paint) 4 静止画像の作成(Photoshop Elements) 5 静止画像とレイヤー 6 静止画像とフィルター 7 静止画像のより高度な編集方法 8 静止画像の総合演習 9 マルチメディア文書の作成 10 ベジエ曲線 11 PowerPoint を使ったプレゼンテーションの作成 1 12 PowerPoint を使ったプレゼンテーションの作成 2 13 PowerPoint を使ったプレゼンテーションの発表 1 14 PowerPoint を使ったプレゼンテーションの発表 2 15 PowerPoint を使ったプレゼンテーションの発表 3
テキスト、参考文献	**評価方法**
特に指定しない。	レポート 70% 試験 30%

01～14 年度（秋）	マルチメディア論 b	担当者	柏原　賢二

講義目的、講義概要	授業計画
この授業では、コンピュータを用いて、マルチメディアコンテンツ作成に関する理論と実習をさらに深く行う。 以下の 3 つが主要な実習内容である。それぞれ、マルチメディアコンテンツの作品を制作し、提出してもらう。 (I) 第 1 週より第 5 週まで。Flash Professional を用いたアニメーションの作成。動くウェブページなどの作 成 に使われる Flash コンテンツの作成について学ぶ。 (II) 第 6 週から第 10 週まで、3 次元のコンピュータグラフィックスの扱えるソフトを用いて、3 次元グラフィックス画像のモデリングやレンダリング、テクスチャーマッピング、3D アニメーションの基礎を学び、それを応用して、簡単な CG 作品の作成を目指す。 (III) 第 10 週より第 15 週まで。Premiere Elements を使った動画編集の基礎。動画クリップをつなげたり、文字を入れてアニメーションしてみたり、映像に効果をいれるする方法を学ぶ。 実習と平行して、関連する理論を講義する。 たとえば、コンピュータにおける音声データの表現法や、映像の規格などについてである。	1 Flash を使った静止画の作成 2 Flash とレイヤー 3 Flash とアニメーション 4 写真と文字のアニメーション(理論:動画ファイル形式) 5 Flash コンテンツの作成(理論:インタラクティブなウェブ) 6 3DCG モデリング 7 3DCG レンダリング 8 3DCG アニメーション 9 3DCG (理論:インターネットサービス) 10 3DCG 作品の作成 (理論:デジタルと著作権) 11 動画の編集 1 (クリップの連結とフィルター) 12 動画の編集 2 (文字の挿入) 13 動画の編集 3 (理論:映像の規格) 14 動画の編集 4 (理論:音声データ) 15 動画の編集 5 (理論:モバイルと通信)
テキスト、参考文献	**評価方法**
特に指定しない。	レポート 70% 試験 30%

01～14 年度(春)	マルチメディア論 a	担当者	立田　ルミ

講義目的、講義概要	授業計画
この授業は、マルチメディアコンテンツ作成のためのアプリケーションを利用して実際にコンテンツを作成することにより、図形作成・画像処理、静止画作成、アニメーションの原理を学ぶことを目的とする。いろいろな種類の図形・画像作成のためのアプリケーションを利用し、画像編集や画像圧縮などの機能を学ぶ。また、アニメーションの原理について講義し、アニメーション作成のためのアプリケーションを用いて実習する。これらで作成したファイルを、紙媒体でも利用する。また、静止画画面作成のために必要なハードウェアとソフトウェアについて講義し、画像取り込みや合成方法についても実習を行う。また、これらのマルチメディアに対するファイル形式と圧縮方法についても講義を行うとともに実習する。最後に最終レポートとして、マルチメディア作品を制作する。	1　マルチメディアの基礎：講義 2　情報のデジタル表現：講義および実習 3　静止画像の作成：講義および実習 4　画像ソフトとファイル形式：講義および実習 5　静止画の作成：講義および実習 6　写真の加工：講義および実習 7　写真の合成と圧縮：講義および実習 8　スキャナーの原理と画像処理：講義および実習 9　デジカメの原理と画像処理：講義および実習 10　マルチメディアの処理：実習 11　アニメーションの原理と作成：講義および実習 12　文字アニメーションの原理と作成：講義および実習 13　プレゼンテーションツールの利用：講義および実習 14　マルチメディアの統合：講義および実習 15　マルチメディア作品の発表：実習
テキスト、参考文献	**評価方法**
立田ルミ他『情報メディア入門』 実教出版	試験 50%、レポート 50%

01～14 年度(秋)	マルチメディア論 b	担当者	立田　ルミ

講義目的、講義概要	授業計画
この授業は、インターネット上でのマルチメディアコンテンツがどのようなものかを実際に作品を作ることで、それらの原理を学ぶことを目的とする。ここでは、音声の取り込みおよび編集について講義と実習を行なう。またアニメーション作成のためのアプリケーションを用いて、アニメーション作成および音声入力を行なう。3D に関しては、ワイヤフレームモデルやサーフェスモデルなどのモデリングを行い、レンダリングを行なって３D作品を作成する。また、ビデオの取り込みのために必要なハードウェアとソフトウェアと、これらのマルチメディアに対するファイルと圧縮方法について講義と実習を行い、ビデオクリップを用いて動画編集を行なう。最終レポートとして、受講生が独自の作品を制作し、Web 上に発表する。このために、サーバーにアップする方法や HTML についても解説を行う。また、先輩たちの作成したマルチメディア作品を紹介する。	1　インターネットとマルチメディア：講義 2　音声の原理、取り込みと処理：講義および実習 3　音楽作成と編集（テキストファイル）：講義および実習 4　音楽作成と編集（MIDI ファイル）：講義および実習 5　Web ページの原理と静止画表示：講義および実習 6　Web ページの原理と音声：講義および実習 7　Web ページへのリンク：講義および実習 8　Web ページのレイアウト：講義および実習 9　Flash による画像アニメーション：講義および実習 10　Flash によるモーフィング：講義および実習 11　アニメーションの組み合わせ：講義および実習 12　映像の原理と編集と圧縮：講義および実習 13　３D の原理と作成：講義および実習 14　Web サーバーへのアップ：講義および実習 15　マルチメディア作品アップ：実習
テキスト、参考文献	**評価方法**
立田ルミ他『情報メディア入門』 実教出版	試験 50%、レポート 50%

01～14 年度（春）	情報検索論 a	担当者	福田　　求

講義目的、講義概要	授業計画
【目的】必要な情報を効果的に選択・入手する行為としての情報検索について理解を深める。特に，コンピュータ技術に基づく情報検索システムの知識を，解説および実習を通して体得する。 【概要】情報検索論 a （春学期）では，情報検索に関する基礎的な概念について解説し，情報検索を取り巻くシステムの仕組みを概観する。授業中では，情報検索についての理解を深めるために，教員による講義だけでなく，コンピュータを使った簡単な実習も行う。また，情報検索の「プロ」である図書館員に，「就職に役立つ情報検索」というテーマのもと，学内外のデータベースやその利用テクニックについて教えていただく予定である。	1　オリエンテーション；情報検索の定義；情報検索関連の資格 2　情報検索の種類，歴史 3　データベースの定義，意義，構成要素，種類，歴史 4　情報検索がうまくできないときの対処法 5　索引語；キーワードの選び方 6　シソーラス 7　前半部分のまとめ；質問受付 8　就職に役立つ情報検索 9　情報検索関連作業のプロセス (1) 10　情報検索関連作業のプロセス (2) 11　検索式 (1) 12　検索式 (2) 13　検索結果の評価 14　学術情報の検索 15　授業全体のまとめ；質問受付
テキスト、参考文献	**評価方法**
適宜指示する。	期末レポート（50%）。平常授業における課題レポートなどの実績（50%）。

01～14 年度（秋）	情報検索論 b	担当者	福田　　求

講義目的、講義概要	授業計画
【目的】必要な情報を効果的に選択・入手する行為としての情報検索について理解を深める。特に，コンピュータ技術に基づく情報検索システムの知識を，解説および実習を通して体得する。 【概要】情報検索論 b （秋学期）では，主にウェブ上の検索エンジン（Google 等）の仕組みについて解説する。誰もが何気なく日々使用している検索エンジンであるが，どのようにウェブ上の多様で大量な情報を集め，瞬時に検索できるようにしているのだろうか。また，検索結果では，どのような情報が優先的に表示されるのだろうか。学問の上でも就職活動の上でも情報収集時に皆さんに大きな影響力を持つであろうこの検索エンジンについて，一度立ち止まってじっくり考える機会となるよう，検索エンジンの基本的な要素や動作について説明する。 　また，検索エンジンの解説の合間に，CD-ROM データベースや商用オンラインデータベースを用いた情報検索の実習を行う。実習では可能なかぎり，受講者が今後の調査／研究活動で利用できるような情報源を紹介する予定である。	1　オリエンテーション 2　CD-ROM 検索 (1) 3　CD-ROM 検索 (2) 4　学内で行える情報検索 (1) 5　ウェブ上の検索エンジン(1)：インターネット／ウェブの基礎 6　ウェブ上の検索エンジン (2)：検索エンジンの種類 7　前半部分のまとめ；質問受付 8　ウェブ上の検索エンジン (3)一般的な検索エンジンの構造 9　ウェブ上の検索エンジン (4)：クロール 10　ウェブ上の検索エンジン (5)：インデックス 11　ウェブ上の検索エンジン (6)：検索結果の表示 12　情報検索という観点からのウェブサイト構築：SEO 13　学内で行える情報検索 (2) 14　最新の情報検索サービス 15　授業全体のまとめ；質問受付
テキスト、参考文献	**評価方法**
適宜指示する。	期末レポート（50%）。平常授業における課題レポートなどの実績（50%）。

01～14 年度（春）	情報システム論 a	担当者	今福　啓

講義目的、講義概要	授業計画
コンピュータを使ったシステムにより、我々の社会におけるさまざまな問題を解決する手法が数多く編み出されています。しかし、コンピュータの処理手順は人の思考過程と大きく異なるため、問題の解決方法は人とコンピュータの違いを考慮して作りだす必要があります。 この講義では、最初にコンピュータ内部でのデータ処理の基礎を学びます。その上で、さまざまな問題の解決手法がどのように構築されているのかについての詳細な内容を学びます。 講義を通じて、情報を処理するシステムとしてコンピュータがどのように利用されているのかという点について理解を深めることを目標とします。	1. 講義の目的と進め方、評価方法について 2. コンピュータのデータ処理、コンピュータ言語 3. 情報の格納形式 1－リスト、スタック、キュー、ツリー 4. 情報の格納形式 2－ハッシュ、マップ 5. 数式の表現と処理－ポーランド記法、逆ポーランド記法、二分木 6. 文字表現と処理－正規表現とパターンマッチ 7. つながりを科学する－グラフ、ネットワーク 8. つながりが生み出す問題 1－トポロジカル・ソート 9. つながりが生み出す問題 2－一筆書き、最短経路問題 10. 解決法を科学する 1－トップダウン的な解決法 11. 解決法を科学する 2－ボトムアップ的な解決法 12. 具体的な問題を解く 1－8 クイーン問題、15 パズル 13. 具体的な問題を解く 2－コイン問題、ナップサック問題 14. 具体的な問題を解く 3－完全情報ゲームの戦略決定 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献　紀平拓男、春日伸弥著：『アルゴリズムとデータ構造』Softbank Creative	講義時間内の課題（20%）と試験（80%）の合計点で判断します

01～14 年度（秋）	情報システム論 b	担当者	今福　啓

講義目的、講義概要	授業計画
コンピュータを用いてさまざまな問題を解決する場合、事前に決められた解決手順にもとづいて処理を行うようにシステムを構築することが一般的です。しかし実社会には、問題の構造や性質が時間とともに変化するため、あらかじめ解決手順を決めておくことができない問題が多く存在します。 このような問題をコンピュータによって解くには、時間とともに得られる情報を利用して、コンピュータ自身が問題の解決方法を作り出す必要があります。この講義では、コンピュータが自ら考え、学ぶことで問題解決を行う手法について学習します。	1. 講義の目的と進め方、評価方法について 2. 進化的計算－コンピュータ内部での進化 3. 進化的計算手法 1－遺伝的アルゴリズム 4. 進化的計算手法 2－遺伝的プログラミング 5. 進化的計算手法 3－GRAMMATICAL EVOLUTION 6. 進化的計算手法による問題解決の具体例 7. コンピュータによる学習問題の分類－教師あり学習、教師なし学習 8. 教師あり学習 1－人工ニューロンの構造 9. 教師あり学習 2－人工ニューロンで学習できる問題 10. 教師あり学習 3－人工ニューロンを複数つなげる（ニューラルネットワークの概要） 11. 教師なし学習 1－自己組織化マップ 12. 教師なし学習 2－TD 学習 13. 教師なし学習 3－Q 学習 14. コンピュータを使った実習 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
なし	講義時間内の課題（20%）と試験（80%）の合計点で判断します

01～14 年度（春）	プログラミング論 a	担当者	柏原 賢二

講義目的、講義概要	授業計画
コンピュータを使って、初歩的なプログラミングの演習を行なう。それを通じて、コンピュータ上でプログラムの動く仕組みを学ぶ。言語としては、Java を用いる。 具体的には、以下のようなプログラミングの基本の構造を学ぶ。 数字の扱い方、 結果の出力の仕方、 変数の使い方、 条件分岐、 繰り返し処理の方法 配列変数	1. コンピュータプログラムとは 2. Java のコンパイルの方法 3. 変数の宣言と、結果の出力 4. キーボードからの入力 5. 乱数発生と条件分岐 6. じゃんけんをするプログラム 7. 繰り返し処理 8. 繰り返し処理の応用 9. ループの入れ子 10. ループの入れ子の応用 11. 素数判定 12. 素因数分解 13. 配列変数 14. 配列変数の応用 15. 総合演習
テキスト、参考文献	**評価方法**
特に指定しない。	レポート 70%　試験 30%

01～14 年度（秋）	プログラミング論 b	担当者	柏原 賢二

講義目的、講義概要	授業計画
春学期に引き続いて、Java を用いた、プログラミングの演習をする。そして、オブジェクト指向の基本的な考え方も学ぶ。 具体的には、以下のようなプログラミングの基本の構造を学ぶ。 文字の扱い方 メソッド呼び出しについて 再帰呼び出しの方法 オブジェクトとクラス 毎回、課題を与えて、JAVA プログラムの作成をしてもらう。	1. 春学期の復習 基本編 2. 春学期の復習 配列編 3. 変数の型について。浮動小数点型 4. 円周率を求める 5. 文字列の処理 6. 文字型 7. メソッド呼び出し 1 8. メソッド呼び出し 2 9. メソッド呼び出し 3 10. メソッドの再帰呼び出し 1 11. メソッドの再帰呼び出し 2 12. オブジェクトとクラス 13. オブジェクトとコンストラクタ 14. クラスとメソッド 15. 総合演習
テキスト、参考文献	**評価方法**
特に指定しない	レポート 70%　試験 30%

01～14 年度（春）	プログラミング論 a	担当者	加藤　尚吾

講義目的、講義概要	授業計画
Windows の機能をフルに活用できるイベントドリブン型言語である Visual Basic 2010 をプログラミング言語としてとりあげ、様々なソフトウェアがどのように開発されているかを理解することを目的とする。また、同時に実際にプログラミングをどのようにすればよいかを理解することを目的とする。 基本的な命令から、その組み合わせまでを、例をあげて講義する。その後、ひとつひとつの命令に関して実際に Visual Basic 2010 でプログラミングの演習を行う。 ほぼ毎回、演習課題を行ってもらう。最後に自分でテーマを決めて、ソフトウェアの製作を行う。	1. 授業のガイダンスとコンピュータ概説 2. Visual Basic 2010 の概略 3. 簡単なプログラム作成（1） 4. 簡単なプログラム作成（2）: 四則演算 5. 簡単なプログラム作成（3）: キャッシュレジスター 6. 選択のあるプログラム作成（1） 7. 選択のあるプログラム作成（2） 8. 選択のあるプログラム作成（3）: オプションボタン、チェックボタンの利用 9. 選択のあるプログラム作成（4）: リストボックス 10. 繰り返しのあるプログラム作成（1）: If と Go To、For Next を用いた繰り返し 11. 繰り返しのあるプログラム作成（2）: Case、While 文 12. 繰り返しのあるプログラム作成（3）: 応用 13. 総合問題作成 14. 総合問題作成 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
立田ルミ著『文科系大学生のための VISUAL BASIC プログラミング』創生社	授業への積極的な取り組みと演習（40%）、レポート（60%）で総合的に評価する。

01～14 年度（秋）	プログラミング論 b	担当者	加藤　尚吾

講義目的、講義概要	授業計画
プログラム論 a で学んだ基礎的なプログラム作成方法を用いて、より複雑なプログラムを作成できることを目標とする。画像や音声などのマルチメディアがファイルとしてどのように扱われているかも理解することを目的としている。また、ファイルや Windows の他のアプリケーションとの連携についても理解し、さらにネットワーク対応のプログラムを作成することを目的とする。 本講義では、プログラム論 a と同様に、Windows の機能をフルに活用できるイベントドリブン型言語である Visual Basic 2010 をプログラミング言語としてとりあげる。 ほぼ毎回、演習課題を行ってもらう。最後に自分でテーマを決めて、ソフトウェアの製作を行う。	1. 授業のガイダンスとプログラミング論 a の復習 2. 図形の処理（1）: 直線を描く、曲線を描く 3. 図形の処理（2）: 円を描く、色を塗る 4. 図形の処理（3）: Windows の画像処理 5. 図形の処理（4）: ドラッグアンドドロップの利用 6. 音声、動画の処理 : 音声を録音する、音声を再生する 7. 配列とコントロール配列 : 一元配列、コントロール配列の利用 8. プルダウンメニュー : コンボボックス、プルダウンメニューの利用 9. ファイルの利用（1）: テキストファイルの読み込み 10. ファイルの利用（2）: 画像ファイルの読み込み 11. ファイルの利用（3）: シーケンスファイルの作成 12. ファイルの利用（4）: シーケンスファイルの読み込みと利用 13. インターネットの利用 : Visual Basic 2010 とホームページとのリンク 14. 応用（まとめ１） 15. 応用（まとめ２）
テキスト、参考文献	**評価方法**
立田ルミ著『文科系大学生のための VISUAL BASIC プログラミング』創生社	授業への積極的な取り組みと演習（40%）、レポート（60%）で総合的に評価する。

01～14 年度（春）	プログラミング論 a	担当者	立田　ルミ

講義目的、講義概要	授業計画
この授業では、Visual Basic をプログラミング言語として採りあげる。プログラムを実際に作成することで、様々なアプリケーションがどのように開発されているかを理解し、実際にどのようにプログラミングすればよいかを理解する事を目標としている。 そのために、Windows の機能をフルに活用できるオブジェクト記述型言語である Visual Basic で実際に例題を通じてプログラミングを行い、これらのことにより、プログラミングとはどういうものかを体得していただく。 ここでは、プログラミング言語の基本的な命令から始め、それらを組み合わせてどのようにプログラミングすればよいかを、例を挙げて講義し、それらの１つ１つの命令に対して解説と演習を行う。演習の課題として､1 週間に 1 度の課題を自分のポータルサイト（PorTa）から提出してもらう。最後に自分でテーマを決めて、簡単なアプリケーションを作成する。授業の最初では、先輩たちの作成したアプリケーションを紹介する。	1　授業のガイダンスとコンピュータ概説：講義 2　Visual Basic.の概略：講義および実習 3　文字の表示：講義および実習 4　入力と簡単な計算：講義および実習 5　関数の利用：講義および実習 6　飛び越し命令：講義および実習 7　条件判断による分岐：講義および実習 8　複数判断による分岐：講義および実習 9　選択用コントロールによる分岐：講義および実習 10　回数指定による繰り返し：講義および実習 11　条件指定による繰り返し：講義および実習 12　多重ループ：講義および実習 13　オブジェクトの組み合わせ：講義および実習 14　総合問題作成１：実習 15　総合問題作成２：実習
テキスト、参考文献	**評価方法**
立田ルミ著：文科系大学生のための Visual Basic プログラミング、創成社、2010	レポート 50%、試験 50%

01～14 年度（秋）	プログラミング論 b	担当者	立田　ルミ

講義目的、講義概要	授業計画
この授業では、プログラミング論 a で学んだ基礎的なプログラム作成方法を用いて、より複雑なプログラムを作成することを目的とする。ここでは、様々なアプリケーションがどのように開発されているかを理解し、実際にどのようにプログラミングすればよいかを理解する事を目標としている。そのために、Windows の機能を活用して Visual Basic で実際にプログラミングを行う。また、画像や音声などのマルチメディアがファイルとしてどのように扱われているかも理解することを目的としている。また、ファイルや Windows の他のアプリケーションとの連携についても理解し、さらにネットワーク対応のプログラムを作成するにはどのような命令が必要かを理解することを目的とする。最後に自分でテーマを決めてアプリケーションの製作を行い、最終のリポートとする。	1　プログラムの分割：講義および実習 2　プログラムの構造化：講義および実習 3　配列の処理：講義および実習 4　配列の入出力：講義および実習 5　文字列の処理：講義および実習 6　文字列の演算：講義および実習 7　図形の描画：講義および実習 8　画像の拡大・縮小：講義および実習 9　画像のアニメーション：講義および実習 10　音声の処理：講義および実習 11　ファイルの処理：講義および実習 12　メニューの処理：講義および実習 13　インターネットの利用：講義および実習 14　Visual Basic とホームページ：講義および実習 15　合問題作成：実習
テキスト、参考文献	**評価方法**
立田ルミ著：文科系大学生のための Visual Basic プログラミング、創成社、2010	レポート 50%、試験 50%

01～14 年度（春）	プログラミング論 a	担当者	堀江　郁美

講義目的、講義概要	授業計画
この授業では、Visual Basic をプログラミング言語として採りあげる。プログラムを実際に作成することで、様々なアプリケーションがどのように開発されているかを理解し、実際にどのようにプログラミングすればよいかを理解する事を目標としている。 そのために、Windows の機能をフルに活用できるオブジェクト記述型言語である Visual Basic で実際に例題を通じてプログラミングを行い、これらのことにより、プログラミングとはどういうものかを体得していただく。 ここでは、プログラミング言語の基本的な命令から始め、それらを組み合わせてどのようにプログラミングすればよいかを、例を挙げて講義し、それらの１つ１つの命令に対して解説と演習を行う。演習の課題として､1 週間に 1 度の課題を自分のポータルサイト（PorTa）から提出してもらう。最後に自分でテーマを決めて、簡単なアプリケーションを作成する。授業の最初では、先輩たちの作成したアプリケーションを紹介する。	1　授業のガイダンスとコンピュータ概説：講義 2　 Visual Basic.の概略：講義および実習 3　文字の表示：講義および実習 4　入力と簡単な計算：講義および実習 5　関数の利用：講義および実習 6　飛び越し命令：講義および実習 7　条件判断による分岐：講義および実習 8　複数判断による分岐：講義および実習 9　選択用コントロールによる分岐：講義および実習 10　回数指定による繰り返し：講義および実習 11　条件指定による繰り返し：講義および実習 12　多重ループ：講義および実習 13　オブジェクトの組み合わせ：講義および実習 14　総合問題作成１：実習 15　総合問題作成２：実習
テキスト、参考文献	**評価方法**
立田ルミ著：文科系大学生のための Visual Basic プログラミング、創成社、2010	レポート 50%、試験 50%

01～14 年度（秋）	プログラミング論 b	担当者	堀江　郁美

講義目的、講義概要	授業計画
この授業では、プログラミング論 a で学んだ基礎的なプログラム作成方法を用いて、より複雑なプログラムを作成することを目的とする。ここでは、様々なアプリケーションがどのように開発されているかを理解し、実際にどのようにプログラミングすればよいかを理解する事を目標としている。そのために、Windows の機能を活用して Visual Basic で実際にプログラミングを行う。また、画像や音声などのマルチメディアがファイルとしてどのように扱われているかも理解することを目的としている。また、ファイルや Windows の他のアプリケーションとの連携についても理解し、さらにネットワーク対応のプログラムを作成するにはどのような命令が必要かを理解することを目的とする。最後に自分でテーマを決めてアプリケーションの製作を行い、最終のリポートとする。	1　プログラムの分割：講義および実習 2　プログラムの構造化：講義および実習 3　配列の処理：講義および実習 4　配列の入出力：講義および実習 5　文字列の処理：講義および実習 6　文字列の演算：講義および実習 7　図形の描画：講義および実習 8　画像の拡大・縮小：講義および実習 9　画像のアニメーション：講義および実習 10　音声の処理：講義および実習 11　ファイルの処理：講義および実習 12　メニューの処理：講義および実習 13　インターネットの利用：講義および実習 14　Visual Basic とホームページ：講義および実習 15　総合問題作成：実習
テキスト、参考文献	**評価方法**
立田ルミ著：文科系大学生のための Visual Basic プログラミング、創成社、2010	レポート 50%、試験 50%

01～14 年度（春）	情報社会論 a	担当者	柴崎　信三

講義目的、講義概要	授業計画
近代社会は石炭や石油というエネルギーの発見によってものつくりの生産性が向上し、それが経済社会を動かす新しい価値を作ってきた。そこでは資本と設備や労働力の規模が、企業の価値を測る物差しとなった。 二〇世紀後半にいたって、コンピューターの登場による情報技術の進展は、こうした産業社会の枠組みを劇的に変えてゆく。それは単に生産、流通、消費という経済のプロセスの効率化ばかりではなく、産業活動の主役が「モノ」から「情報」へ転換することで「差異」を作り出す経済への転換を促した。グローバリゼーションと市場主義の急激な進展も、こうした情報化がもたらした大きな枠組みの転換である。 世界経済は地球環境や資源エネルギー、人口問題など文明の陰画による成長の与件が問われている。狩猟社会から農耕社会を経て、工業技術を核とする産業社会、さらに情報社会へと移り変わる局面をアルウィン・トフラーは「第三の波」と呼んだ。この授業ではこの情報化の波が経済社会をどのように変えつつあるのかを、企業組織や法規範、取引や政策とのかかわり、産業界における市場のグローバル化など、さまざまな角度から考える。	１　はじめに ２　「第三の波」 ３　電子商取引と社会 ４　ニューエコノミーの虚実 ５　バブル経済とＩＴ ６　企業組織の転換 ７　知的財産と企業経営 ８　著作権・特許権にみる保護と利用 ９　規制緩和と情報化 １０　事例・エンロン破綻 １１　情報化と国際競争力 １２　情報格差と消費社会のゆくえ １３　グローバリズムと金融危機 １４　メディアの役割 １５　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
各回、参考資料を配布する。佐和隆光『市場主義の終焉』（岩波新書）を参考文献とする。	定期試験の成績（80%）に加えて、通常の授業時間で行うリポートの実績（20%）を勘案して評価する。

01～14 年度（秋）	情報社会論 b	担当者	柴崎　信三

講義目的、講義概要	授業計画
産業社会から情報社会への転換は、さまざまな局面でそれまで社会を支えてきた個人と国家や社会をつなぐ規範やルールを大きく転換させようとしている。 産業社会における「私」と「公」の関係は、国民国家とよばれる枠組みの下で、個人の権利や利益をどのように社会の公共性と調和させるかという点に基調が置かれてきたが、それが大きな見直しを迫られている。 情報が社会に幅広く共有されることによって、それまで情報を独占することで維持されてきた国家や企業などピラミッド型の組織構造が崩れはじめた。個人が自由に情報をやりとりできる国境を越えたネットワークの広がりで、それまでの「私」と「公」を巡る安定した関係に代わる新たな秩序が手探されている。 インターネットによる個人の情報発信の高まりは、行政機構や企業、メディアなどによって代行されていた民主主義や市場の機能も変化させている。個人の「表現の自由」の領域が飛躍的に高まる一方、「プライバシー」や個人情報の流出のリスクが増大する。情報のグローバルなネットワークの広がりは、同時に所得格差の拡大やテロ事件などの社会リスク、世界的な金融危機とも密接にかかわっている。個人の自由と社会的監視という矛盾を抱えた情報社会の秩序のありかたを問う。	１　はじめに ２　電子政府と個人情報 ３　「表現の自由」とプライバシー ４　ネット犯罪とリスク ５　情報化と社会規範 ６　電子マネーとビットコインの「信用」 ７　民主主義における政治と情報化 ８　情報格差（デジタルデバイド） ９　NPO と互酬という仕組み １０　フラット化と社会の不平等化 １１　情報とソフトパワー １２　メディアと情報－情報は無償か １３　自由と監視 １４　信頼と情報―社会関係資本と「私」 １５　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
各回、参考資料を配布する。ロナルド・ドーア『働くということ』（中公新書）などを参考文献とする。	定期試験の成績（80%）に加えて、通常の授業で行うリポートの実績（20%）を勘案して評価する。

01～14 年度（春）	情報通信ネットワーク b	担当者	三宅　真

講義目的、講義概要	授業計画
情報通信ネットワークは，知識情報社会を支える重要な社会インフラストラクチャとして発展を続けています。携帯電話・スマートフォンはLTEの時代となり，無線LANはギガビット通信（IEEE 802.11ac）の時代となりました。これからも教育，医療，環境など，社会のさまざまな分野において，情報通信が活用され，新しいソリューションと新しい価値の創造が続いてゆくでしょう。 情報通信ネットワークの全体像を学ぶこと，情報通信を正しく，有効に活用するための基礎知識を身に付けることが講義の目標です。 講義では，情報通信のシステムとテクノロジーの基本的なことがらを実例に則して解説します。携帯電話・スマートフォンなどの身近なシステムを例に挙げて，情報通信の社会的側面と人間的側面に言及しながら，その全体像と発展動向をわかりやすく解説します。大量の情報を瞬時に通信できる時代にあって，情報の正しい扱い方についても考察を行います。他学部の学生諸君の受講も歓迎します。	1．講義のガイダンス，概論 2．情報通信ネットワークと社会の発展（1） 3．情報通信ネットワークと社会の発展（2） 4．情報通信信号（1）：ディジタル信号と２進数 5．情報通信信号（2）：正弦波信号とフーリエ変換 6．情報通信信号（3）：電波と周波数 7．情報通信システムの実際例（1） 8．情報通信システムの実際例（2） 9．情報伝送（1）：ディジタル信号伝送 10. 情報伝送（2）：パケット通信とインターネット 11. シャノンの情報理論（1）：情報と情報量 12. シャノンの情報理論（2）：情報の符号化 13. 情報と確率 14. 暗号通信 15. 講義のまとめ，テスト
テキスト、参考文献	**評価方法**
講義中に資料を配布します。教科書は指定しません。参考書は,『IT ロードマップ 2014 年版』(野村総研), 村井 純『インターネット新世代』（岩波新書）です。	授業時間内にテストを行います。レポート（40%），テスト（30%），平常点・授業への参加度（30%）によって総合的に評価します。

01～14 年度（秋）	情報通信ネットワーク a	担当者	今福　啓

講義目的、講義概要	授業計画
コンピュータやスマートフォン、タブレット端末といった情報通信機器を使い、ネットワークを通じてデータの送受信を行うことは我々の生活で必要不可欠になっています。それらの機器でどのような手順にもとづきデータの受け渡しが行われているのかを知るには、単なる機器の使い方だけでなく、通信の方法やネットワークの構造について知る必要があります。 この講義では、ネットワーク上で情報を送受信するための標準的な手順として使用されている TCP/IP とそれに関連する内容を中心に学びます。そしてコンピュータを使った実習を通じて、身につけた知識を実際に利用する方法についても学びます。 なお、授業計画の 14.にある実習は必ず参加すること。参加しない場合は単位を修得できません。	1. 講義の目的と進め方、評価方法 2. コンピュータネットワークとは 3. ネットワーク構築に必要なものーネットワークインターフェイスカード、ケーブル、ネットワーク OS 4. データ送受信の手順－TCP/IP の概要 5. TCP/IP 1－物理層 6. TCP/IP 2－データリンク層、MAC アドレス 7. TCP/IP 3－ネットワーク層、IP アドレス 8. TCP/IP 4－トランスポート層、ポート 9. TCP/IP 5－アプリケーション層 10. DNS の役割と構成 11. ルータを用いた外部ネットワークとの送受信 12. ネットワーク内部と外部のアドレス変換 13. ネットワークのセキュリティー暗号化 14. ネットワークコマンドを使用した機器情報の獲得（実習） 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
なし	講義時間内の課題（20%、必須）と試験（80%）の合計点で判断します

01～12 年度（春）	コンピュータネットワーク	担当者	未定（掲示で確認）

講義目的、講義概要	授業計画
講義目的： 現代社会を支える基礎的なインフラの一つとなったコンピュータネットワーク及びインターネットについて、その機能や社会的な影響だけに留まらず、内部的な仕組みを含む幅広い知識を学習する。更に、実習を通して、基礎的なWebプログラミングの知識とスキルも身に付ける。 講義概要： 前半では、コンピュータネットワークを支える基本的な情報技術について、ハードウェアとソフトウェアにまたがる様々な側面から講義を行う。後半では、応用例として、JavaScript言語によるプログラミング実習を行い、外部サイトのAPIを利用したWebアプリケーションの作成法を学習する。 前提知識： 初歩のプログラミングの知識があることが望ましい。	※ガイダンスには原則として必ず出席すること １．ガイダンス ２．コンピュータネットワークの基礎 ３．ネットワークモデル（OSI 参照モデル・TCP/IP） ４．物理層 ５．データリンク層 ６．ネットワーク層 ７．トランスポート層 ８．アプリケーション層 ９．情報セキュリティと暗号 １０．ネットワークと社会 １１．Web プログラミング（HTML 作成） １２．Web プログラミング（簡易 Web アプリの作成） １３．Web プログラミング（API の利用） １４．Web プログラミング（マッシュアップ） １５．総括（最終試験を実施する可能性あり）
テキスト、参考文献	**評価方法**
	基本的には最終試験の結果に基づいて評価する。その他、学習態度や講義中の課題を十分に加味して、総合的に評価する。詳細はガイダンスで説明をする。

（秋）		担当者	

講義目的、講義概要	授業計画
テキスト、参考文献	**評価方法**

13 年度以降（春） 01～12 年度（春）	コンピュータ・アーキテクチャ コンピュータアーキテクチャ	担当者	今福　啓

講義目的、講義概要	授業計画
市販のソフトウェアを使い、決められたデータ処理を行うだけであれば、コンピュータの内部構造について詳しく知る必要はありません。しかし、コンピュータに何が出来るのかを正しく理解するには、ハードウェアの詳細な構造について知ることが不可欠です。 この講義では、コンピュータのおおまかな構成についてから始まり、コンピュータ内部でデータがどのように処理されるのか、コンピュータを構成する要素がどのように作られているのかという詳細な点まで学びます。講義を通じて、コンピュータのハードウェアにかんする幅広い知識を身につけることを目標とします。	1. 講義の目的と進め方 2. コンピュータの構成要素－5 大装置 3. コンピュータの動作－データ処理の流れ 4. コンピュータ内部での演算 5. 演算の詳細 1－2 進数と算術演算 6. 演算の詳細 2－論理演算 7. 演算の詳細 3－シフト演算 8. 論理演算 1－組み合わせ回路 9. 論理演算 2－順序回路 10. 演算装置の構造 11. 記憶装置の構造 12. コンピュータの命令の種類 13. 制御装置－命令による各装置の制御方法 14. コンピュータの構築–各装置をつないでコンピュータをつくる 15. 講義内容のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
なし	講義時間内の課題（20%）と試験（80%）の合計点で判断します

		担当者	

講義目的、講義概要	授業計画
テキスト、参考文献	**評価方法**

（春） （春）		担当者	

講義目的、講義概要	授業計画

テキスト、参考文献	評価方法

13 年度以降（秋） 01～12 年度（秋）	情報と職業 情報と職業 a	担当者	小林　哲也

講義目的、講義概要	授業計画
情報社会の歴史的意義を解説した上で、インターネットをはじめとする情報技術が、社会に与えた影響について、議論していく。 Web2.0 ともいわれる情報社会の新しい意義を理解するには、ある程度ネットワークの仕組みやインターネットの特性などの技術的な側面にも立ち入って議論する必要がある。また、インターネットの普及にともなって、情報倫理や知的財産権をめぐる制度や法についても新しい解釈が迫られている。 インターネットの普及による社会の変化については、クラウド化、中国動漫新人類、３D プリンタなどのキーワードによって、ケーススタディも行う。 こうした技術的知識や制度的な議論をいとわない学生の参加を望む。参加者は、授業中に情報に関するテーマでのプレゼンテーションが課せられる。	１．序論：情報と職業について ２．インターネットの歴史と仕組み ３．インターネットの分権制と公開性 ４．IT 革命と企業組織 ５．国境を越える IT 空間 ６．クラウド・コンピューティング ７．Web2.0 ８．知的財産権をめぐって ９．知的財産権：ケーススタディ １０．　知的財産権：パブリック・ドメイン １１．　情報化社会の諸問題１　デジタル・デバイド １２．　情報化社会の諸問題２　情報倫理 １３．　プレゼンテーション １４．　プレゼンテーション １５．　プレゼンテーション

テキスト、参考文献	評価方法
近藤勲『情報と職業』丸善 遠藤誉『中国動漫新人類』日経 BP 中山信宏『著作権法』有斐閣 クリス･アンダーソン『Makers21 世紀の産業革命が始まる』NHK 出版など	授業参加（プレゼンテーションなど）およびレポート

01～14 年度（春）	アルゴリズム論 a	担当者	木村　昌史

講義目的、講義概要	授業計画
アルゴリズムとは、狭い意味ではコンピュータを用いた問題解決のための処理方法のことであり、プログラミングを行う上での前段階のものである。コンピュータによる処理は、必ずしも人間の思考による処理のプロセスとは同一ではなく、コンピュータ特有のものであることが多い。ここでは、比較的処理方法が確立されているコンピュータ科学の基礎をなす決定的アルゴリズムについて学ぶ。 春学期aでは「問題解決とは何か」の考え方から、結果が予測できる問題について、アルゴリズムの視覚化、図示化を行いつつその方法を理解する。基本的アルゴリズムは、大きな問題を扱う上での要素的手法であり、多くの分野に適用できる。授業では余裕があれば一部PCの実習も取り入れ、テーマごとにExcelやJavaScriptの基本的操作程度でアルゴリズムを実現する。	1. コンピュータとアルゴリズムの役割 2. インターネットとアルゴリズム 3. 論理表現とアルゴリズム 4. グラフ表現とアルゴリズム 5. データ構造とアルゴリズム 6. 探索のアルゴリズム 7. 文字列の探索 8. 整列のアルゴリズム（1）バブルソート等 9. 整列のアルゴリズム（2）クイックソート等 10. アルゴリズムと計算量 11. ハッシュ法のアルゴリズム 12. 木構造と索引付け 13. ダイクストラ・アルゴリズム 14. ヒューリスティック・アルゴリスム 15. 決定論的アルゴリズムのまとめと補足
テキスト、参考文献	**評価方法**
特に指定しない。 授業時に Web 資料などを提示する。	試験または実習レポート 80%、およびポータルサイトなどによる授業への参加度 20%で評価する。

01～14 年度（秋）	アルゴリズム論 b	担当者	木村　昌史

講義目的、講義概要	授業計画
春学期 a では狭い意味での決定的アルゴリズムを扱ったが、秋学期 b ではやや広い意味での問題解決へのアプローチとして非決定的アルゴリズムを中心に採り上げる。 コンピュータの処理による解決が困難な問題に対しては、処理を適用する以前に問題に対する正しい分析や深い洞察が必要である。こうした例としてゲームの必勝法や現象の将来予測などを採り上げるが、それぞれのルールや条件を深く分析する必要がある。そして困難となる要因とアルゴリズムの関係を明らかにする。問題解決へのアプローチには、分析的手法に加えて、コンピュータ特有の発見法的手法やシミュレーションの方法などが加わる。困難な問題に対して、これらは近似的な方法であるものの、十分に実用的価値を持つことを理解する。また例として経済・経営分野に関連したアルゴリズムの例題を取りあげる。春学期同様に実習も取り入れ、テーマごとに Excel や JavaScript でアルゴリズムを実現する。	1. 決定的アルゴリズムと非決定的アルゴリズム 2. ゲームにおけるアルゴリズム 3. 最適配置問題と枝刈り探索 4. 囚人のジレンマとゲームの理論 5. 乱数とモンテカルロ法 6. 株価変動の問題とシミュレーション 7. 在庫管理の問題とシミュレーション 8. 待ち行列の問題とシミュレーション 9. ナップザック問題 10. 巡回セールスマン問題 11. .困難な問題と NP 完全問題 12. .遺伝的アルゴリズム 13. .現代暗号の問題 14. .複雑な問題とアルゴリズム 15. .非決定論的アルゴリズムのまとめと補足
テキスト、参考文献	**評価方法**
特に指定しない。 授業時に Web 資料などを提示する。	試験または実習レポート 80%、およびポータルサイトなどによる授業への参加度 20%で評価する。

01～14 年度（春）	オペレーションズ・リサーチ a	担当者	伊呂原　隆

講義目的、講義概要	授業計画
オペレーションズ・リサーチ(OR)は，計画や管理の数理的側面に焦点をあて，社会や企業の活動の中に内在する法則性を知り，これを意思決定の一助とするものである． 本講義では確率的モデルを中心にして，モデル化とシステムの設計について理解を深めることを目的とする． 具体的には，前半で確率モデルを学ぶための基礎的事項，後半で確率的モデルを扱う． 前半の確率モデルに関する基礎的事項としては，平均や分散などの基本的統計量の計算からはじめ，ヒストグラムの作成，条件付き確率，確率変数，確率変数の期待値と分散そして基本的な確率分布について学習する． 後半では，ORの確率モデルで重要なマルコフ連鎖，シミュレーション，待ち行列理論について学習する． 本講義を受講するものは，高校数学Ⅰ，Ⅱ，A，B等を履修していることが望ましい．	1. ガイダンス 2. データの整理 3. 確率と確率変数 4. 確率と確率変数 5. 期待値と分散 6. 確率分布 7. 確率分布 8. 行列の基礎 9. マルコフ連鎖 10. マルコフ連鎖 11. マルコフ連鎖 12. シミュレーション 13. 待ち行列理論 14. 待ち行列理論 15. 確率モデル全体のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献： 森雅夫他，『オペレーションズ・リサーチⅡ』，朝倉書店	期末試験の結果(80%)を主な評価要素とするが，平常授業中における講師の質問に対する回答や積極的な発言(20%)も評価対象とする．

01～14 年度（秋）	オペレーションズ・リサーチ b	担当者	伊呂原　隆

講義目的、講義概要	授業計画
オペレーションズ・リサーチ(OR)は，計画や管理の数理的側面に焦点をあて，社会や企業の活動の中に内在する法則性を知り，これを意思決定の一助とするものである． 本講義では確定的モデルを中心にして，最適化モデルを中心としたシステムの設計について理解を深めることを目的とする． 具体的には，数理計画法およびその応用としての実務的問題を学習する． 数理計画法に関しては，線形計画問題や整数計画問題による定式化やExcelを用いた解法などについて学習する．定式化では，数多くの具体的な事例を通して，自分で現実問題の定式化ができるようになることを目指す．事例では，実務的に重要で興味深い最適化問題を取り上げ，社会におけるオペレーションズ・リサーチの果たす具体的な役割についても論じる． 本講義を受講するものは，高校数学Ⅰ，Ⅱ，A，B 等を履修していることが望ましい．	1. ガイダンス 2. 線形計画法 3. 線形計画法 4. 線形計画法 5. 輸送問題 6. 割当問題 7. ネットワーク問題 8. ネットワーク問題 9. 整数計画問題 10. 整数計画問題 11. クリティカル・パス 12. スケジューリング問題 13. スケジューリング問題 14. プロジェクト管理問題 15. 確定モデル全体のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献： 森雅夫他，『オペレーションズ・リサーチⅠ』，朝倉書店	期末試験の結果(80%)を主な評価要素とするが，平常授業中における講師の質問に対する回答や積極的な発言(20%)も評価対象とする．

01～12 年度（春）	システムズ・エンジニアリング a	担当者	広瀬　啓雄

講義目的、講義概要	授業計画
経営・経済や社会において、企業機密の漏洩や温暖化あるいは非正規雇用労働者の増加や成果主義への移行など、さまざまな現象が現れている。このような現象の本質を把握するためには、現象をひとつの問題として認識し、その本質を明らかにし問題解決へ導くことは大変重要なことであり、企業からも求められている今日の重要な課題の一つでもある。このような問題を解決するためのひとつのアプローチとしてシステム論的なアプローチとそれを支援する方法論がある。 本講義では、問題（現象）の本質を把握するための認識プロセスと、特に、今日企業で活発に活用されている具体的なシステム方法論を学習し、それを実際問題に展開できるようわかりやすく解説する。 尚、理論を実証する意味で、実際問題をJavaプログラミングで解く演習を行い、その報告書を作成する。Javaプログラミングに関しては，基礎から学習するので本講義を受講するための前提となる必修科目はない。	1 オリエンテーション：受講者の確認・決定 年間予定、授業方法 等の注意事項についての説明 2 システムズエンジニアリングの概念 3 システムと環境 4 システムと特性およびシステム分類 5 システム認識プロセス 6 システム認識プロセス基礎演習 7 グラフ理論の基礎 8 グラフ理論によるシステムモデリング 9 システムモデリングの実際問題への適用 10 システムモデリング演習 11 問題の定義と基本ﾓﾃﾞﾙ 12 問題解決法のフレームワーク-人事評価への応用 13 問題解決法とシステムモデリング 14 問題解決法の実際問題への展開 15 まとめ 授業の総括と理解度の確認
テキスト、参考文献	**評価方法**
天笠美知夫・崔冬梅著『経営システム的考え方』創成社、（2009 年）	事例演習およびそのレポート（30%）、ならびに期末試験の結果(70%)を考慮して成績評価する。

01～12 年度（秋）	システムズ・エンジニアリング b	担当者	広瀬　啓雄

講義目的、講義概要	授業計画
経営・経済や社会において、企業機密の漏洩や温暖化あるいは非正規雇用労働者の増加や成果主義への移行など、さまざまな現象が現れている。このような現象の本質を把握するためには、現象をひとつの問題として認識し、その本質を明らかにし問題解決へ導くことは大変重要なことであり、企業からも求められている今日の重要な課題の一つでもある。 このような問題を解決するためのひとつのアプローチとしてシステム論的なアプローチとそれを支援する方法論がある。 本講義では、問題（現象）の本質を把握するための認識プロセスと、特に、今日企業で活発に活用されている具体的なシステム方法論を学習し、それを実際問題に展開できるようわかりやすく解説する。 尚、理論を実証する意味で、Java プログラミングにより解決策を導く演習を行い、その報告書を作成する。Java プログラミングに関しては，基礎から学習するので本講義を受講するための前提となる必修科目はない。	1 システムと科学的アプローチ システムズエンジニアリング体系と方法論 2 システムの評価と意思決定―効用理論 3 機能分析と価値評価 4 価値評価のための具体的なアプローチ 5 実際問題による価値と評価演習 6 全社的品質管理 7 予測とデルファイ法 8 デルファイ法による予測問題の設定と分析 9 デルファイ法による実践（分析と予測項目の設定） 10 ｱﾝｹｰﾄ調査・分析と報告書の作成 11 予測：移動平均法 12 在庫管理：ＡＢＣ分析 13 スケジューリング：PERT,CPM 14 実際問題による予測・在庫管理・スケジューリング演習 15 まとめ 授業の総括と理解度の確認
テキスト、参考文献	**評価方法**
天笠美知夫・崔冬梅著『経営システム的考え方』創成社、（2009 年）	事例演習およびそのレポート（30%）、ならびに期末試験の結果(70%)を考慮して成績評価する。

01～12 年度（春）	経営システム工学ａ	担当者	鈴木　淳

講義目的、講義概要	授業計画
経営システム工学は、経営上の活動や諸課題をシステムとして見なして科学的・工学的な手法を中心に適用して解決にあたるための理論的な体系です。本講義は、経営システム工学を経営問題解決のための科学的アプローチとして捉え、問題解決における工学的技法の活用と意思決定プロセスの一般例を示し、文科系の学生にも経営問題の数的モデル化と処理の能力を涵養することを狙ったものです。春学期は経営活動と経営システム工学の関連、問題解決技法の概説、静的な意思決定を支援するモデルと技法を中心に扱います。 なお、2014年度は「経営システム工学ａ」としてこれまでの講義内容にそった内容を扱いますが、2015年度以降は経営意思決定の面をさらに強化した講義内容へ改編する予定です。このシラバスでの講義は本年度が最後となる予定ですので、この内容での受講を希望する学生は今年度履修するよう気をつけて下さい。	1 ガイダンスと序論 2 外部環境変化と経営システム工学 3 企業活動と経営活動の諸側面 1 4 企業活動と経営活動の諸側面 2 5 意思決定と経営システム工学 6 問題発見と統計的手法：QC7 つ道具と管理図 7 問題解決技法の概観 8 問題解決とモデルの利用 1 9 問題解決とモデルの利用 2 10 最適化とシミュレーション 11 静的な意思決定 1：線形計画法、生産計画問題 12 静的な意思決定 2：経営問題と線形計画モデル化 13 静的な意思決定 3：シンプレクス法と PC による解法 14 静的な意思決定 4：整数計画法と組合せ最適化 15 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：日下泰夫『経営意思決定－価値創造への経営工学アプローチ－』中央経済社，2009 年	期末試験を中心（約 70%）に、授業への参加状況などを加味（約 30%）して評価します。

01～12 年度（秋）	経営システム工学ｂ	担当者	鈴木　淳

講義目的、講義概要	授業計画
経営システム工学は、経営上の活動や諸課題をシステムとして見なして科学的・工学的な手法を中心に適用して解決にあたるための理論的な体系です。本講義は、経営システム工学を経営問題解決のための科学的アプローチとして捉え、問題解決における工学的技法の活用と意思決定プロセスの一般例を示し、文科系の学生にも経営問題の数的モデル化と処理の能力を涵養することを狙ったものです。秋学期は、時間的な変化を考慮した動的な意思決定、経済的な意思決定、多基準下での意思決定（特に階層分析法）、問題解決法と経営システム工学の関連性、技術経営とモデリング・アプローチ、情報化・創造化と経営意思決定、環境経営と経営意思決定、問題解決能力向上と経営システム工学などの内容を扱います。 なお、2014年度は「経営システム工学ｂ」としてこれまでの講義内容にそった内容を扱いますが、2015年度以降は経営意思決定の面をさらに強化した講義内容へ改編する予定です。このシラバスでの講義は本年度が最後となる予定ですので、この内容での受講を希望する学生は今年度履修するよう気をつけて下さい。	1 動的な意思決定 1：動的計画法、資源配分問題、多段決定過程 2 動的な意思決定 2：最適性の原理、定式化と解法 3 経済的な意思決定 1：経済分析の基礎概念 4 経済的な意思決定 2：投資分析の基礎手法 5 多基準下の意思決定-階層分析法 1 6 多基準下の意思決定-階層分析法 2 7 問題解決法と経営システム工学 1 8 問題解決法の経営システム工学 2 9 技術経営とモデリング・アプローチ 10 モデリング・アプローチによる商品開発モデル 11 情報化・創造化と経営意思決定 1 12 情報化・創造化と経営意思決定 2 13 環境経営と経営意思決定 14 問題解決能力向上と経営システム工学 15 講義のまとめと将来展望
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：日下泰夫『経営意思決定－価値創造への経営工学アプローチ－』中央経済社，2009 年	期末試験を中心（約 70%）に、授業への参加状況などを加味（約 30%）して評価します。

03～14 年度（春）	法学 a	担当者	大川　俊

講義目的、講義概要	授業計画
春学期の「法学a」では、法律を大きく二つに分類した場合の公法と私法のうち、後者に焦点を当てます。私法とは、自由・対等な私人間（個人間だけでなく、企業間、あるいは企業と個人間も含まれる）の法律関係を規律する法の総称です。本講はこれらの背後に存する基本的な考え方を理解することを目的とします。 買い物をすれば、取り立てて意識しなくとも、そこでは売買契約が成立するといったように、我々が日常生活を送る上では様々な形で法律が関わってきます。本講では、身の回りの法律関係から、現代の経済社会で主要な役割を果たす企業を取り巻く法律関係などについて具体的事例を織り交ぜながら解説します。	1. ガイダンス 2. 日常生活と契約（1） 3. 日常生活と契約（2） 4. 日常生活とアクシデント（1） 5. 日常生活とアクシデント（2） 6. 雇用社会のルール（1） 7. 雇用社会のルール（2） 8. 家族関係（1） 9. 家族関係（2） 10. 企業と法（1） 11. 企業と法（2） 12. 企業と法（3） 13. 消費者の保護（1） 14. 消費者の保護（2） 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストとして、池田真朗ほか著『法の世界へ〔第 5 版〕』（有斐閣、2012 年）を指定します。小型の『六法』も適宜参照しますので、持参してください。	学期末の筆記試験（100%）により評価します。

03～14 年度（秋）	法学 b	担当者	木藤　茂

講義目的、講義概要	授業計画
秋学期の「法学ｂ」では、春学期の「法学ａ」の理解を前提として、以下のような大きく２つの目的を意識しつつ、日本における法と法学について、いくつかの角度から様々な素材をもとに概観を行います。 第１に、日本における法ないし法律をめぐる基本的な事柄・論点等の理解を通して、法学ないし法学を学ぶ意味、あるいは「論理的思考力」「法的思考力」「リーガルマインド」といった言葉の意味を、法学部生ではないみなさんにこそこの機会に実感してもらいたいと思います。 第２に、春学期では「私法」の分野の内容が主に取り上げられてきたことを前提に、秋学期では「公法」の分野におけるいくつかの重要な法制度や法的論点について基礎的な知識・理解を得ることを、内容面での課題とします。 なお、特に第１の点にも関係しますが、この講義では、単なる知識の丸暗記ではなく自らの頭で理解しそれを基に適切な概念を用いて自らの言葉で表現するという、高校までとは違った“大学での学問”というものを意識し実践してもらうことにも重点を置きますので、こうした趣旨を十分に認識した上で講義に臨んでください。 この講義を通じて、法学という学問あるいは法学部生の日々の勉強の一端を垣間見ていただければと思います。	１．ガイダンス ２．日本における法と法学（１） ３．日本における法と法学（２） ４．日本における法と法学（３） ５．日本における法と法学（４） ６．日本における法と法学（５） ７．行政活動と法（１） ８．行政活動と法（２） ９．行政活動と法（３） １０．行政活動と法（４） １１．行政活動と法（５） １２．行政活動と法（６） １３．行政活動と法（７） １４．行政活動と法（８） １５．まとめ ※　講義は、基本的には、教員が作成するレジュメの流れに沿って行います。 レジュメは、「獨協大学ポータルサイト」から各自で予めダウンロード・印刷して教室に持参してもらいますが、詳細はガイダンスで説明します。
テキスト、参考文献	**評価方法**
教科書は使用しません。他方で、数多くの具体的な法令の条文を随時参照しますが、その準備は各自で行ってもらいます。詳細はガイダンスで説明します。	学期末の筆記試験（100%）により評価します。 ただし、受講人数によっては、出席状況確認等の意味も含めて、随時レポート等を課す場合もあります。

03～14 年度（春）	政治学総論 a	担当者	杉田　孝夫

講義目的、講義概要	授業計画
政治学は古来より支配の学であった。治者と被治者が身分的に異なっていた時代にあっては、支配身分のための「よき統治」のための学問であった。しかし治者と被治者が原理的に同一であるとされるデモクラシーの時代である現代においては、市民は、共通の法に従うという意味で被治者でありつつ、共通の法をつくり遂行していくためのわれわれの代理人たる治者を選ぶ選挙人であり、政治過程を監視し、評価する政治主体である。政治に対する深い洞察力が求められるのは、政治家や行政官などの専門家だけではない、それ以上に市民こそ政治についての教養を身につける必要があると言える。そのような意味で、政治学は私たち市民の教養の学である。 以上のような観点から、政治学的見方、概念を身につけ、現代政治に対する見通しを得ることを目的とする。 秋学期は、民主政治の歴史、国民国家と福祉国家、議院内閣制、選挙、政党、議会の制度と政治過程を講義する。	1. 古代の民主政治 2. 近代の民主政治 3. 自由主義と民主政治 4. 国民国家と民主政治 5. 民主政治への挑戦 6. 民主政治の再定義 7. 福祉国家の成立とその構造 8. 福祉国家をめぐる論争 9. 議院内閣制と大統領制 10. 日本の議院内閣制 11. 多数決型民主政治と合意形成型民主政治 12. 選挙制度と投票行動 13. 日本の選挙 14. 議会 15. 政党と政党制
テキスト、参考文献	**評価方法**
川出良枝・谷口将起編『政治学』東京大学出版会, 2012 年. ISBN: 978-4-13—32219-5	学期末試験による

03～14 年度（秋）	政治学総論 b	担当者	杉田　孝夫

講義目的、講義概要	授業計画
政治学は古来より支配の学であった。治者と被治者が身分的に異なっていた時代にあっては、支配身分のための「よき統治」のための学問であった。しかし治者と被治者が原理的に同一であるとされるデモクラシーの時代である現代においては、市民は、共通の法に従うという意味で被治者でありつつ、共通の法をつくり遂行していくためのわれわれの代理人たる治者を選ぶ選挙人であり、政治過程を監視し、評価する政治主体である。政治に対する深い洞察力が求められるのは、政治家や行政官などの専門家だけではない、それ以上に市民こそ政治についての教養を身につける必要があると言える。そのような意味で、政治学は私たち市民の教養の学である。 以上のような観点から、政治学的見方、概念を身につけ、現代政治に対する見通しを得ることを目的とする。 秋学期は、政策過程と官僚制、世論とマスメディア、地方自治、グローバル化、政治参加を講義する。	1．戦後日本の政党政治 2．政策過程 3．官僚 4．利益集団 5．世論形成とマスメディア 6．政治とメディアをめぐる諸問題 7．地方自治の制度 8．地方政治の動向 9．主権国家体制 10. 国際秩序構想の諸相 11. グローバル．イシュー 12.. 政治参加の理論 13. アイデンティティと承認をめるる政治 14. ジェンダーと政治 15. 討議による民主政治の重層化
テキスト、参考文献	**評価方法**
川出良枝・谷口将起編『政治学』東京大学出版会, 2012 年. ISBN: 978-4-13—32219-5	学期末試験による。

03～14 年度（春）	民法 a	担当者	納屋　雅城

講義目的、講義概要	授業計画
民法は、不動産の購入と住宅ローン、借金の連帯保証、マンションの貸し借り、ケガをさせられたときの損害賠償、結婚や相続など、私たちの日常生活に直接に関係してくる身近な法律である。 この授業では、民法を初めて勉強する人たちのために、民法の導入部分ともいえる民法典の「第一編　総則」と「第二編　物権」を中心として、民法の全体像を理解してもらうことを目的としている。具体的には、「法律行為の主体」、「法律行為の客体」、そして「法律行為とは何か」という 3 つの大きなテーマに分けて授業を進めていく。 ［注意］ 授業に出席する際には、教科書と2014年版の六法（民法が載っていれば、種類や出版社は問わない）を必ず持参すること。	1. ガイダンス 2. 民法の全体像 3. 自然人の権利能力 4. 失踪宣告 5. 制限行為能力者① 6. 制限行為能力者②、法人 7. 物・所有権 8. 所有権の取得、共同所有 9. 所有権の効力 10. 法律行為 11. 契約の成立、意思表示 12. 虚偽表示、心裡留保 13. 錯誤、詐欺・強迫 14. 無効、取消しなど 15. 全体のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
山野目章夫『民法 総則・物権 第 5 版（有斐閣アルマ）』（有斐閣、2012 年）。なお、講義開始日までに改訂版が出版されたときは、改訂版を使用する。	定期試験（100%）によって評価する。

03～14 年度（秋）	民法 b	担当者	納屋　雅城

講義目的、講義概要	授業計画
民法は、不動産の購入と住宅ローン、借金の連帯保証、マンションの貸し借り、ケガをさせられたときの損害賠償、結婚や相続など、私たちの日常生活に直接に関係してくる身近な法律である。 この授業では、民法典の「第一編　総則」の中の「代理（民法 99 条～118 条）」と「時効（民法 144 条～174 条の 2）」、そして「第二編　物権」の中の「物権変動」という 3 つの大きなテーマについて、関連する条文・判例（裁判所の立場）・学説を取り上げて説明をしていく。 ［注意］ 履修登録にあたっては、講義内容を正確に理解するためにも、（単に「授業に出ていた」というだけではなく）「民法入門」の単位を取得済みであることを強く推奨する。 なお授業に出席する際には、教科書と 2014 年版の六法（民法が載っていれば、種類や出版社は問わない）を必ず持参すること。	1. ガイダンス 2. 代理① 3. 代理② 4. 無権代理 5. 表見代理 6. 時効① 7. 時効② 8. 取得時効 9. 消滅時効 10. 物権変動 11. 不動産の物権変動① 12. 不動産の物権変動② 13. 不動産の物権変動③ 14. 動産の物権変動 15. 全体のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
山野目章夫『民法 総則・物権 第 5 版（有斐閣アルマ）』（有斐閣、2012 年）。なお、講義開始日までに改訂版が出版されたときは、改訂版を使用する。	定期試験（100%）によって評価する。

03～12 年度（春）	商法 a	担当者	髙木　正則

講義目的、講義概要	授業計画
私達は日常生活において商品を買い，あるいは鉄道に乗ったり荷物を送ったりといったサービスを利用している。このような商品供給やサービス提供の担い手の大部分は企業である。この企業に関する生活関係を規律する法分野が商法という法分野である。そして，本講義では商法の全体系の基礎をなす商法総則・商行為法に関する諸規定・諸制度について基本的な理解を得ること目標とする。なお，商法は私人間の生活関係を規律する私法という分野に属するが，企業に関する法という点で，同じ私法に属する民法に対する特別法という位置づけがなされる。そのため，商法の諸規定および商法上の諸制度を学ぶに際し民法のそれら（とりわけ財産法（総則，物権，債権）の分野）と比較することが多くなる。したがって，履修しようとする者は財産法に関する講義があればそれをすでに履修しているか履修中であることが強く望まれる。 商法aでは，商法総論および商法総則のうち営業の部分を除いた部分を学ぶ予定である。教科書を指定する一方で，担当者が作成したプリントを配布し（目下配布を予定しているプリントはもともと法学部での講義を念頭に作成したものなので経済学部の講義においては不必要ないし難解であると思われる箇所もあるが，講義を聴いていればプリントのどの部分が必要か理解できると思われる），講義はそのプリントに沿って進行する。なお，この講義は法学部の学生を対象としていないので基本的には学説対立までは深入りしない（ただし，やむを得ずそれに言及せざるを得ない場合もある）。	概ね，下記の順序で講義を進める予定である。 第１回～第４回： １.商法総論 第５回～第 14 回： ２.商法総則 (1)商人概念と商行為概念 (2)商号 (3)商業登記 (4)商業使用人 (5)代理商 (6)商業帳簿 第 15 回：まとめ ＊講義内容は必要に応じて変更することがある。
テキスト、参考文献	**評価方法**
淺木愼一著『商法総則・商行為法入門〔第２版〕』（中央経済社，2005 年），江頭憲治郎・山下友信編『商法（総則・商行為）判例百選〔第５版〕』（有斐閣，2008 年）	期末試験の結果（80%）によって評価するが，平常授業において抜き打ちで行う知識の確認のための小テストの結果（20%）も評価対象とする。

03～12 年度（秋）	商法 b	担当者	髙木　正則

講義目的、講義概要	授業計画
私達は日常生活において商品を買い，あるいは鉄道に乗ったり荷物を送ったりといったサービスを利用している。このような商品供給やサービス提供の担い手の大部分は企業である。この企業に関する生活関係を規律する法分野が商法という法分野である。そして，本講義では商法の全体系の基礎をなす商法総則・商行為法に関する諸規定・諸制度について基本的な理解を得ること目標とする。なお，商法は私人間の生活関係を規律する私法という分野に属するが，企業に関する法という点で，同じ私法に属する民法に対する特別法という位置づけがなされる。そのため，商法の諸規定および商法上の諸制度を学ぶに際し民法のそれら（とりわけ財産法（総則，物権，債権）の分野）と比較することが多くなる。したがって，履修しようとする者は財産法に関する講義があればそれをすでに履修しているか履修中であることが強く望まれる。 商法ｂでは，商法総則の範囲のうち営業の部分と商行為法を学ぶ予定である。つまり，春学期の商法ａの続きを内容とするので，本講義を履修しようとする者は担当者による商法ａの講義をすでに履修していることが前提となる。指定教科書，配布プリント，基本的には学説対立に深入りしないことなどについては商法ａにおけるのと同様である。	概ね，下記の順序で講義を進める予定である。 第１回：営業 第２回～第５回：商行為に関する通則 第６回：商事売買 第７回：交互計算 第８回：匿名組合 第９回：仲立営業 第 10 回：問屋営業 第 11 回：運送営業 第 12 回：運送取扱営業 第 13 回：場屋営業 第 14 回：倉庫営業 第 15 回：試験 ＊講義内容は必要に応じて変更することがある。
テキスト、参考文献	**評価方法**
淺木愼一著『商法総則・商行為法入門〔第２版〕』（中央経済社，2005 年），江頭憲治郎・山下友信編『商法（総則・商行為）判例百選〔第５版〕』（有斐閣，2008 年）	期末試験の結果（80%）によって評価するが，平常授業において抜き打ちで行う知識の確認のための小テストの結果（20%）も評価対象とする。

03～14 年度（春）	著作権法 a	担当者	長塚 真琴

講義目的、講義概要	授業計画
今どき、著作権という言葉を知らない人はもはや少ない。しかし、著作権を正しく知るには、著作権法の条文を読まなければない。それが独学ではなかなか難しいため、この講義が用意されている。 **この講義は入門講義であり、著作権に興味のある、あらゆる学部の学生を歓迎する。法律の知識がなくてもかまわない。**法的三段論法（論点抽出→規範定立→事例へのあてはめ）は授業では使うが、記述式事例問題として試験に出すことはない。なお、試験問題は分量が多く、勉強していない人は時間切れになる。 レジュメと新書を用い、裁判例に関する画像・音声やウェブサイトなど、視聴覚情報も重視しつつ講義を進める。 レジュメは毎週、講義の少し前に、ポータルサイトを通じて提供する（更新はツイッター@m_ngtk で知らせる）。著作権法の条文はレジュメの資料編に収録してある。	1 ガイダンスと導入 2 著作物１ 3 著作物２ 4 著作者と著作権者 5 著作者人格権 6 著作権１ 7 著作権２ 8 著作権３ 9 著作権の制限１ 10 著作権の制限２ 11 著作権の譲渡とライセンス 12 著作隣接権１ 13 著作隣接権２ 14 著作権の侵害 15 質問への回答と復習
テキスト、参考文献	**評価方法**
教科書：福井健策『著作権とは何か』（集英社新書） 参考書：中山他編『著作権判例百選 第４版』（有斐閣）	定期試験による。出席は重視しない。

03～14 年度（秋）	著作権法 b	担当者	長塚 真琴

講義目的、講義概要	授業計画
この講義では、著作物の種類や利用局面ごとに、著作権とその隣接分野で実際に起こった紛争や、法改正に向けてなされている議論を詳しく解説する。**法学部の講義として、著作権法の基礎知識のある学生に向けておこなう。**毎回、次週の予習のための文献が指定され、講義はそれを読んできたことを前提におこなわれる。 レジュメと予習文献を用い、裁判例に関する画像・音声やウェブサイトなど、視聴覚情報も重視しつつ講義を進める。 レジュメは毎週、講義の少し前に、ポータルサイトを通じて提供する（更新はツイッター@m_ngtk で知らせる）。 ○履修上の注意：**この講義は応用編である。著作権に関する予備知識なしでこの講義をいきなり履修しても、単位を取得できない可能性がきわめて高い。また、定期試験では、法的三段論法（論点抽出→規範定立→事案へのあてはめ）を用いる記述式の事例問題が出題される。**	1 ガイダンス 2 映画 3 ゲームソフト 4 インターネット１（アップロードとダウンロード／侵害の責任主体１） 5 インターネット２（侵害の責任主体２） 6 インターネット３（著作物性／引用） 7 音楽と放送 8 キャラクター 9 デザイン・応用美術 10 編集著作物 11 肖像権・パブリシティ権 12 高校教育と著作権 13 いわゆる疑似著作権 14 著作権をめぐる時事問題 15 質問への回答と復習
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考書：福井健策『著作権とは何か』、同『著作権の世紀』（共に集英社新書）、同『ネットの自由 vs. 著作権』（光文社新書）、『著作権判例百選第４版』（有斐閣）	定期試験による。出席は重視しない。

03～14 年度（春）	総合講座 a	担当者	経済学部

講義目的、講義概要	授業計画
学外から著名な方々を招き、講義をしていただきます。 総合講座の性質上、社会経済文化など広範なテーマが取り上げられます。それぞれの分野の研究者・専門家・実務家の豊富な経験に基づく知見や最新情報のエッセンスをうかがえる貴重な機会です。 学外からの講師をお招きするので、時間厳守で出席のこと。講義中の私語は厳禁。受講態度の悪いものは退室を命ずることがあります。	第 1 回講義で説明します。
テキスト、参考文献	**評価方法**
講師により参考文献が指示されることがあります。	授業中の態度およびレポートにもとづき総合的に判断します。詳細は第 1 回授業で説明します。

03～14 年度（秋）	総合講座 b	担当者	経済学部

講義目的、講義概要	授業計画
学外から著名な方々を招き、講義をしていただきます。 総合講座の性質上、社会経済文化など広範なテーマが取り上げられます。それぞれの分野の研究者・専門家・実務家の豊富な経験に基づく知見や最新情報のエッセンスをうかがえる貴重な機会です。 学外からの講師をお招きするので、時間厳守で出席のこと。講義中の私語は厳禁。受講態度の悪いものは退室を命ずることがあります。	第 1 回講義で説明します。
テキスト、参考文献	**評価方法**
講師により参考文献が指示されることがあります。	授業中の態度およびレポートにもとづき総合的に判断します。詳細は第 1 回授業で説明します。

03～14 年度（春）	特殊講義 a （金融資産運用論）	担当者	山崎　元

講義目的、講義概要	授業計画
この講義は、金融資産の運用について、理論・実際両面の基礎知識と考え方を伝えることを目的とする。 現在、世間的にもアカデミックにも個人の資産運用に関しては、十分な理論的基礎と実際に応用可能な方法とが組み合わせられた方法論が存在しない。残念ながら誤りを含む内容が「投資教育」と称して金融機関などを通じて一般に広まってるのが実態だ。そこで、「正しくて体系的な個人の資産運用の手法と知識」の内容を確立することを、本講義の大きな目的としたい。 講義では、受講者が個人として資産運用を理解し、具体的方法論を身に着けられるような内容を柱としつつ、関連する投資の理論や運用ビジネスの現実についてもお伝えしていきたい。 投資に関する理論的な研究は、モダンポートフォリオ理論や金融工学を経て、近年は行動経済学の影響も受けて、現在、流動的で、知的にも非常に面白い局面を迎えている。学生が金融市場をめぐるファイナンス（金融論）の研究に興味を持つようなガイダンスも行いたい。 個人のお金の運用に興味のある方、金融機関への就職を考える方、金融論の一分野としての投資理論に興味のある方などのご参加を期待する。	1. ガイダンス（「金融資産運用論」の概要） 2. 主な金融商品の紹介Ⅰ.（預金・債券） 3. 主な金融商品の紹介Ⅱ.（株式投資） 4. 主な金融商品の紹介Ⅲ.（外国為替、FX） 5. 主な金融商品の紹介Ⅳ.（投資信託・保険） 6. 運用における合理性と「投資と投機」の区別 7. 異時点間の価値比較（割引現在価値、利回り） 8. 「リスク」の意味と扱い方 9. 資産配分（アセットアロケーション）の作成方法 10. 個人の資産運用プロセスと方法（簡便法） 11. モダンポートフォリオ理論の理論構造 12. 「市場の効率性」とアクティブ運用・パッシブ運用 13. 行動ファイナンスの概要と思想 14. ビジネスとしての資産運用 15. まとめ（個人の資産運用再説）及び試験ガイダンス （注 1. 前半で個人の運用入門をカバーしたい 注 2．講義の内容、順番は入れ替えがあり得る）
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献として『お金の教室』（拙著、NHK 出版社）。学習用に『新しい株式投資論』（拙著、PHP 新書）、「ウォール街のランダムウォーカー」（バートン・マルキール、日経）	期末試験の結果（100%）による評価を原則とするが、事情によって試験にかえてレポートで評価する場合がある。評価は柔軟に行う。

03～14 年度（秋）	特殊講義 a （金融資産運用論）	担当者	山崎　元

講義目的、講義概要	授業計画
この講義は、金融資産の運用について、理論・実際両面の基礎知識と考え方を伝えることを目的とする。 現在、世間的にもアカデミックにも個人の資産運用に関しては、十分な理論的基礎と実際に応用可能な方法とが組み合わせられた方法論が存在しない。残念ながら誤りを含む内容が「投資教育」と称して金融機関などを通じて一般に広まってるのが実態だ。そこで、「正しくて体系的な個人の資産運用の手法と知識」の内容を確立することを、本講義の大きな目的としたい。 講義では、受講者が個人として資産運用を理解し、具体的方法論を身に着けられるような内容を柱としつつ、関連する投資の理論や運用ビジネスの現実についてもお伝えしていきたい。 投資に関する理論的な研究は、モダンポートフォリオ理論や金融工学を経て、近年は行動経済学の影響も受けて、現在、流動的で、知的にも非常に面白い局面を迎えている。学生が金融市場をめぐるファイナンス（金融論）の研究に興味を持つようなガイダンスも行いたい。 個人のお金の運用に興味のある方、金融機関への就職を考える方、金融論の一分野としての投資理論に興味のある方などのご参加を期待する。 （基本的に春学期と同内容です）	1. ガイダンス（「金融資産運用論」の概要） 2. 主な金融商品の紹介Ⅰ.（預金・債券） 3. 主な金融商品の紹介Ⅱ.（株式投資） 4. 主な金融商品の紹介Ⅲ.（外国為替、FX） 5. 主な金融商品の紹介Ⅳ.（投資信託・保険） 6. 運用における合理性と「投資と投機」の区別 7. 異時点間の価値比較（割引現在価値、利回り） 8. 「リスク」の意味と扱い方 9. 資産配分（アセットアロケーション）の作成方法 10. 個人の資産運用プロセスと方法（簡便法） 11. モダンポートフォリオ理論の理論構造 12. 「市場の効率性」とアクティブ運用・パッシブ運用 13. 行動ファイナンスの概要と思想 14. ビジネスとしての資産運用 15. まとめ（個人の資産運用再説）及び試験ガイダンス （注 1. 前半で個人の運用入門をカバーしたい。 注 2．講義の内容、順番には入替えがあり得る）
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献として『お金の教室』（拙著、NHK 出版社）。学習用に『新しい株式投資論』（拙著、PHP 新書）、「ウォール街のランダムウォーカー」（バートン・マルキール、日経）	期末試験の結果（100%）による評価を原則とするが、事情によって試験にかえてレポートで評価する場合がある。評価は柔軟に行う。

03～14 年度（春）	特殊講義ｂ（金融資産運用論）	担当者	山崎　元

講義目的、講義概要	授業計画
本講義では、投資に関する文献を読み込み、「投資」と「市場」についてじっくり考える。資金の運用者、投資家（機関・個人両方）、あるいは金融・財務マンとして一生にわたり、投資と市場を考える元になる理解の形成を目指したい。 テキストとしては、バートン・マルキール著「ウォール街のランダムウォーカー」（井出正介訳、日本経済新聞社）を主に用いる。同書は、株式市場の歴史、投資のプロの分析手法、モダンポートフォリオ理論、行動ファイナンスなどを網羅しつつ、「では、個人はどう投資したらいいのか」について述べた優れた啓蒙書だ。講師（山崎）は同書の結論の全てに賛成する訳ではないが（明白な「誤り」もあると思う）、投資について現実的な理解を深める手掛かりとして同書を超える本は今のところないと評価している。 テキストは一般向けの啓蒙書であり、専門的な予備知識はなくとも、一定の理解力があれば十分読める。本講義にも予備知識は不要だ。但し、本講義では、学生に、事前に該当箇所を読み込む「予習」と「授業への参加」を求める。 一回の授業は、（前半）学生への質問による内容の振り返りと論点の抽出、(中盤)講師からの解説と内容補足、(後半)質疑応答と議論、の形で行う。学生の活発な授業参加を楽しみにしている。	1. ガイダンス＋テキストの概要説明 2. 投資理論の学説とマルキールの立場（第 1 章） 3. 過去の「バブル」と日本のバブル（第 2、3 章） 4. 金融危機とバブルのパターン（第 4 章） 5. テクニカル分析について（第 5 章、6 章） 6. アナリストとファンダメンタル分析（第 7 章） 7. リスクとリターンの考え方（第 8 章） 8. ＣＡＰＭなどの現代ポートフォリオ理論（第 9 章） 9. 行動ファイナンスと伝統ファイナンス（第 10 章） 10. 「効率的市場」をいかに考えるか（第 11 章） 11. デフレ・インフレと資産運用（第 12 章） 12. ライフサイクルと個人の運用戦略（第 13 章） 13. 金融のプロの使い方（第 14 章） 14. J.M.ケインズの市場観と投資哲学（一般理論 12 章） 15. 全体の総括と試験のガイダンス （上記は、おおまかに予定するテーマを記したもの。予定は流動的で変更があり得る）
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストとしてバートン・マルキール「ウォール街のランダムウォーカー」（井出正介訳）。ジョン・メイナード・ケインズ「雇用、利子、お金の一般理論」（山形浩雄訳、講談社学術新書。他の翻訳でも可）	原則として期末試験によって評価する。単位認定の要求水準を高く設定するので、履修決定に当たっては、この点に留意されたい。

03～14 年度（秋）	特殊講義ｂ（金融資産運用論）	担当者	山崎　元

講義目的、講義概要	授業計画
本講義では、投資に関する文献を読み込み、「投資」と「市場」についてじっくり考える。資金の運用者、投資家（機関・個人両方）、あるいは金融・財務マンとして一生にわたり、投資と市場を考える元になる理解の形成を目指したい。 テキストとしては、バートン・マルキール著「ウォール街のランダムウォーカー」（井出正介訳、日本経済新聞社）を主に用いる。同書は、株式市場の歴史、投資のプロの分析手法、モダンポートフォリオ理論、行動ファイナンスなどを網羅しつつ、「では、個人はどう投資したらいいのか」について述べた優れた啓蒙書だ。講師（山崎）は同書の結論の全てに賛成する訳ではないが（明白な「誤り」もあると思う）、投資について現実的な理解を深める手掛かりとして同書を超える本は今のところないと評価している。 テキストは一般向けの啓蒙書であり、専門的な予備知識はなくとも、一定の理解力があれば十分読める。本講義にも予備知識は不要だ。但し、本講義では、学生に、事前に該当箇所を読み込む「予習」と「授業への参加」を求める。 一回の授業は、（前半）学生への質問による内容の振り返りと論点の抽出、(中盤)講師からの解説と内容補足、(後半)質疑応答と議論、の形で行う。学生の活発な授業参加を楽しみにしている。 （基本的に春学期と同内容）	1. ガイダンス＋テキストの概要説明 2. 投資理論の学説とマルキールの立場（第 1 章） 3. 過去の「バブル」と日本のバブル（第 2、3 章） 4. 金融危機とバブルのパターン（第 4 章） 5. テクニカル分析について（第 5 章、6 章） 6. アナリストとファンダメンタル分析（第 7 章） 7. リスクとリターンの考え方（第 8 章） 8. ＣＡＰＭなどの現代ポートフォリオ理論（第 9 章） 9. 行動ファイナンスと伝統ファイナンス（第 10 章） 10. 「効率的市場」をいかに考えるか（第 11 章） 11. デフレ・インフレと資産運用（第 12 章） 12. ライフサイクルと個人の運用戦略（第 13 章） 13. 金融のプロの使い方（第 14 章） 14. J.M.ケインズの市場観と投資哲学（一般理論 12 章） 15. 全体の総括と試験のガイダンス （上記は、おおまかに予定するテーマを記したもの。予定は流動的で変更があり得る）
	評価方法
テキストとしてバートン・マルキール「ウォール街のランダムウォーカー」（井出正介訳）。ジョン・メイナード・ケインズ「雇用、利子、お金の一般理論」（山形浩雄訳、講談社学術新書。他の翻訳でも可）	原則として期末試験によって評価する。単位認定の要求水準を高く設定するので、履修決定に当たっては、この点に留意されたい。

03～14 年度（春）	特殊講義 a（宇宙・深海への旅と生物多様性）	担当者	山根　一眞

講義目的、講義概要	授業計画
授業目的： 　私は潜水艇「しんかい2000」「しんかい6500」で深海底に潜航「驚くべきもの＝地球生命誕生時の世界」を見ました。また、7年間、60億キロの大宇宙航海を経て地球に帰還した小惑星探査機「はやぶさ」を豪州の砂漠で迎えました。生命起源探査のフロンティアは宇宙、深海なのです。米国の火星探査機「キュリオシティ」の目的も、アンデス山脈の海抜5000mに完成した史上最大の望遠鏡「アルマ」の目的も同じ。生物多様性の重要性が語られるようになった今、深海や宇宙探査の最新成果もふまえながら、生命起源と生物多様性の意味を解説、また今年打ち上げられる「はやぶさ2」の最新取材成果も随時報告します。 授業概要： 　授業では、アマゾン、深海、宇宙取材による成果、また自然界で観察、あるいは飼育・繁殖をしてきた生物の驚くべき生態を、映像や写真記録で報告。さらに生きたままの生物も教室に持参し、「実感」をもって生物多様性を学ぶことを目指します。	授業計画： （以下の内容を含めますが順序は変更があります） 01. 宇宙 137 億年の歴史を解明してきた科学者たち 02. 地球の誕生と生命の進化史の大ドラマ 02. 体重 3.3kg の超巨大蛙と 2.5g のアマガエル 04. 孵化させた 200 匹のナガコガネグモの生態 05. アマゾン「人喰い巨大ヘビ情報」が物語るもの 06.「吸血ヒル」飼育で学んだ生薬の歴史とビジネス 07. 深海 300℃超「熱水噴出孔」で発見した生命起源 08.「地球生命の起源は火星生命説」の経緯 09. 西表島取材 17 回＝ヤマネコ絶滅危機と開発 10. 稚内ゴマフアザラシ 300 頭来襲と環境激変 11. 魚屋と魚料理で知る食物連鎖とヒト 12. 新しい生物模倣工業「バイオミメティック」 13. ベンチャー企業が挑む「クモの糸」の工業化 14. ヤモリの指の「分子間力」が産み出す新製品 15. 農業、漁業、林業の新たなエコイノベーション
テキスト、参考文献	評価方法
『文庫版・メタルカラーの時代 6 ロケットと深海の挑戦者』（山根一眞著・小学館）、『小惑星探査機はやぶさの大冒険』（山根一眞著・マガジンハウス）、 映画『はやぶさ 遥かなる帰還』（山根一眞原作、東映 DVD）	レポート

03～14 年度（秋）	特殊講義 b（宇宙・深海への旅と生物多様性）	担当者	山根　一眞

講義目的、講義概要	授業計画
授業目的: 　春学期に準じます。 授業概要: 春学期に準じます。	授業計画： 授業には、最新の取材成果を取り入れているため、新しいテーマが随時、追加されます。
テキスト、参考文献	評価方法
春学期に準じます。	春学期に準じます。

03～14 年度（春）	特殊講義 a（専門英語）	担当者	小林　進

講義目的、講義概要	授業計画
経済学の文献を通じて英語の力を一層向上させたいか、または現在の英語の実力を維持したい人の受講が望ましい。英語の能力は努力を怠ると簡単に下がってしまうので、受講者は日頃の予習と復習を十分に行うことが大切である。英語の学習に一番必要なのは**忍耐力**である。遅刻をしないで毎回全力で頑張ろう。	受講者のレベルを考慮しながら講義中に述べる
テキスト、参考文献	**評価方法**
未定（プリント配布の予定）	平常の受講態度と努力を重視する。さらに期末の試験(プリント持ち込み可)を幾分加味して評価する。

03～14 年度（秋）	特殊講義 b（専門英語）	担当者	小林　進

講義目的、講義概要	授業計画
経済学の文献を通じて英語の力を一層向上させたいか、または現在の英語の実力を維持したい人の受講が望ましい。英語の能力は努力を怠ると簡単に下がってしまうので、受講者は日頃の予習と復習を十分に行うことが大切である。英語の学習に一番必要なのは**忍耐力**である。遅刻をしないで毎回全力で頑張ろう	受講者のレベルを考えながら講義中に述べる
テキスト、参考文献	**評価方法**
未定（プリント配布の予定）	平常の受講態度と努力を重視する。さらに期末の試験を幾分加味して評価する

		担当者	

講義目的、講義概要	授業計画

テキスト、参考文献	評価方法

03～14 年度（秋）	特殊講義 b（資本市場の役割と証券投資）	担当者	経済学部

講義目的、講義概要	授業計画
本講義では、毎回「野村證券グループ」の講師陣がリレー方式により、今日の資本市場に求められる役割と証券投資に関する基礎的な事項や考え方について、理論と実務の両面からわかりやすく解説する。証券･金融業界の第一線で活躍する「プロ」の生の声を聞けることは、単なる金融リテラシーの習得にとどまらず、今後の社会人としてのキャリア形成に向けて、自らの職業意識を醸成するうえでもきわめて有用な機会であると考える。	未定

テキスト、参考文献	評価方法
本講義での資料は、毎回受講者自身の手により事前にダウンロード・印刷のうえ持参すること。ダウンロード方法は初回の講義で説明する。	定期試験により評価する。

13 年度以降（春）	経済学（ミクロ）	担当者	木原　隆司

講義目的、講義概要	授業計画
（講義目的）この講義では、消費者や企業の行動、個々の市場の需要と供給・価格決定などについて分析する「ミクロ経済学」の基礎を学びます。 ミクロ経済学は、人々の経済行動を分析する最も基本的な経済学の分野であり、秋学期に学ぶマクロ経済学の基礎にもなるものです。また、環境問題や国際経済の問題を分析するにも、ミクロ経済学の知識は欠かせません。特に、秋学期の「サステナビリティ学」の中で学ぶ環境経済学は、ミクロ経済学を多くの課題に応用しています。 この講義でミクロ経済学の基礎と経済分析の基礎的手法（数学を含む）を身に着けることにより、経済学部での他の講義の理解を促進します。 （講義概要）この講義では、伊藤元重『入門・経済学』）の前半（Part1 ミクロ経済学）をテキストとして用いながら、消費者行動や企業行動、市場や資源配分の基礎理論のみならず、市場の失敗や不完全競争の理論、ゲーム理論や不確実性・情報の経済学まで、幅広く取り上げて解説します。 また、ミクロ経済学を学んでいくためには、ある程度の数学の知識（微分など）が必要です。この講義では、各回の授業で必要となる関数や微分の基礎も一緒に学び、その理解度を確認する小テストを授業中に行う予定です。	1. オリエンテーション・経済学とはどのような学問か 2. 需要と供給 3. 需要曲線と消費者行動 4. 費用の構造と供給行動 5. 市場取引と資源配分 6. ゲームの理論入門(1)（囚人のジレンマなど） 7. ゲームの理論入門(2)（協調のメカニズムなど） 8. 独占と競争の理論(1)（独占の理論） 9. 独占と競争の理論(2)（完全競争と独占的競争） 10. 市場の失敗(1)（外部効果） 11. 市場の失敗(2)（公共財など） 12. 不確実性と不完全情報の経済学 13. 消費者の理論(1)（無差別曲線・予算制約など） 14. 消費者の理論(2)（所得変化・価格変化・労働供給など） 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：伊藤元重『入門・経済学』第 3 版（日本評論社、2009 年）	授業への貢献と授業中の小テスト（40%）・定期試験（60%）

13 年度以降（秋）	経済学（マクロ）	担当者	木原　隆司

講義目的、講義概要	授業計画
（講義目的）この講義では、一国全体の GDP・消費・投資・貯蓄などマクロ経済変数の決定要因や物価・雇用・景気循環・経済成長・財政金融政策など経済全体の大きな動きについて分析する「マクロ経済学」の基礎を学びます。 マクロ経済学は、一国・一地域や国際経済全体を巨視的に俯瞰して、景気動向や物価・成長・為替レート変動・経済危機などの要因を探り、政策を提示する経済学の分野であり、新聞等で頻繁に取り上げられる経済問題に理論的な説明を与えます。また、財政金融問題や国際金融の問題を分析するにも、マクロ経済学の知識は欠かせません。 特に、専門科目の「国際金融論」、「国際開発論」、「国際公共政策論」などでは、マクロ経済学を多くの課題に応用しています。この講義でマクロ経済学の基礎と経済分析の基礎的手法（数学を含む）を身に着けることにより、経済学部での他の講義の理解を促進します。 （講義概要）この講義では、伊藤元重『入門・経済学』）の後半（Part2 マクロ経済学）をテキストとして用いながら、マクロの財市場・貨幣市場の均衡や財政金融政策の効果のみならず、ケインジアンと新古典派の考え方の相違、経済成長や為替レートなど国際マクロ経済学まで、幅広く取り上げて解説します。（なお、比較優位と国際貿易の理論はミクロ経済学の応用分野ですが、国際経済学の一分野として秋学期に紹介します） また、マクロ経済学を学んでいくためには、ある程度の数学の知識（微分・数列など）が必要です。この講義では、各回の授業で必要となる関数や微分、数列の基礎も一緒に学び、その理解度を確認する小テストを授業中に行う予定です	1. オリエンテーション・.マクロ経済学と GDP 2. マクロ経済における需要と供給 3. 有効需要と乗数メカニズム 4. 貨幣の機能 5. IS - LM 分析 6. マクロ経済政策 7. インフレと失業(1)（インフレーション） 8. インフレと失業(2)（失業） 9. 財政政策のマクロ経済分析(1)（短期的側面） 10. 財政政策のマクロ経済分析(2)（長期的側面） 11. 経済成長と経済発展(1)（経済はなぜ成長するか） 12. 経済成長と経済発展(2)（資本蓄積と経済成長） 13. 国際経済学(1)（為替レートと国際マクロ経済学） 14. 国際経済学(2)（比較優位と国際貿易） 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト；伊藤元重『入門・経済学』第 3 版（日本評論社、2009 年）	授業への貢献と授業中の小テスト（40%）・定期試験（60%）

13年度以降（春）	経済学（ミクロ）	担当者	倉橋　透

講義目的、講義概要	授業計画
【講義目的】 本講義は、皆さんが今後経済学を深く勉強していくにあたっての基礎知識を提供し、経済学的な考え方を身に付けてもらうことを目的とする。 また受け身でなく、自分の頭で考えることも重要である。 さらに、単に理論を学ぶのではなく、その背景の実体経済がどうなっているかを認識してもらいたい。 【講義内容】 春学期はミクロ経済学の分野を扱う。「市場と価格」がキーワードである。	１．講義の概要 ２．基礎的数学の復習 ３．ミクロ経済学とは（前提は合理的な人間や企業） ４．需要と供給 ５．価格弾力性 ６．消費者行動と需要曲線 ７．消費者余剰 ８．費用（限界費用、平均費用等）と供給曲線 ９．生産者余剰 １０．市場取引と効率的な資源配分 １１．消費税、関税、家賃規制と余剰分析 １２．市場の失敗（外部性） １３．市場の失敗（公共財） １４．資源配分と所得分配 １５．不確実性と不完全情報、まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：伊藤元重『入門　経済学』第３版（日本評論社）	定期試験による。

13年度以降（秋）	経済学（マクロ）	担当者	倉橋　透

講義目的、講義概要	授業計画
【講義目的】 本講義は、皆さんが今後経済学を深く勉強していくにあたっての基礎知識を提供し、経済学的な考え方を身に付けてもらうことを目的とする。 自分の頭で考えること、実体経済の認識を重視することは春学期と同様である。 【講義内容】 秋学期はマクロ経済学の分野を扱う。キーワードは「GDPと景気」である。	１．講義の概要 ２．景気の現局面 ３．マクロ経済学とは ４．GDPとは ５．GDPの三面等価 ６．潜在成長力 ７．財・サービス市場の均衡（４５度線分析） ８．貨幣の定義と機能 ９．信用乗数 １０．貨幣需要と貨幣供給、貨幣市場の均衡 １１．貨幣数量説 １２．財政・金融政策のメカニズム：ＩＳ－ＬＭ分析 １３．財政・金融政策のメカニズム：クラウディングアウトと対策 １４．フィリップス曲線 １５．経済成長、まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：伊藤元重『入門　経済学』第３版（日本評論社）	定期試験による。

13年度以降（春）	経済学(ミクロ)	担当者	小林　進

講義目的、講義概要	授業計画
最近は経済学の重要性が増しているにもかかわらず、たとえば多数の多重債務者の存在にみられるように経済学の基礎が十分に理解できていないことが憂慮されるので、１年生を対象にしたこの講義では価格メカニズムの必要性を十分に理解できるように講義を進める。また身近な経済の話題を通じて経済学への関心を高めたい。	講義中にプリント配布
テキスト、参考文献	**評価方法**
未定	学期末試験

13年度以降（秋）	経済学(マクロ)	担当者	小林　進

講義目的、講義概要	授業計画
１年生を対象にしたこの講義では、国内総生産(GDP)の概念の理解から出発して、一国の生産量の決定問題を取り扱う。また身近な経済の話題を通じて経済学への関心を高めたい。	講義中にプリント配布
テキスト、参考文献	**評価方法**
未定	学期末試験

13 年度以降（春）	経済学（ミクロ）	担当者	徳永　潤二

講義目的、講義概要	授業計画
ミクロ経済学は、個々の市場や個々人の行動の観点から、経済がどのように動くのかを分析する理論です。具体的には、需要と供給の理論を経済分析の道具として使うことで、経済がどのように動くかを分析し、様々な経済現象を説明しようするものです。 今後、皆さんが経済学のどのような専門分野を学ぶことになっても、ミクロ経済学の知識は、マクロ経済学と並んでとても役立ちますから、しっかりと理解して下さい。 授業計画にもあるように、需要曲線と消費者行動、消費者行動の理論・展開、企業行動の理論、一般均衡と資源配分、独占の理論、市場の失敗といったミクロ経済学の重要項目を学んだあと、最後にミクロ経済の応用（ゲーム理論など）についても簡単に紹介します。 講義ではパワーポイントを用いますので、私の説明も含めてしっかりとノートをとって下さい。授業中の私語や携帯電話の利用は厳禁です。授業に集中して下さい。	1. イントロダクション 2. 需要曲線と消費者行動（1） 3. 需要曲線と消費者行動（2） 4. 供給曲線と生産者行動（1） 5. 供給曲線と生産者行動（2） 6. 消費者行動の理論 7. 消費者行動理論の展開（1） 8. 消費者行動理論の展開（2） 9. 企業行動の理論（1） 10. 企業行動の理論（2） 11. 一般均衡と資源配分 12. 独占の理論（1） 13. 独占の理論（2） 14. 市場の失敗 15. ミクロ経済の応用
テキスト、参考文献	**評価方法**
使用しません。講義ではパワーポイントを用いますので、私の説明も含めてしっかりとノートをとって下さい。自習用のミクロ経済学のテキストを授業内で紹介します。	学期末テスト（60%）、授業内で課す小テスト（40%）により総合的に評価します。

13 年度以降（秋）	経済学（マクロ）	担当者	徳永　潤二

講義目的、講義概要	授業計画
マクロ経済学は、一国全体の観点から、経済規模がどのように変動するのかを分析する理論です。具体的には、一国の経済規模がどのように変動し、それに伴って雇用や物価、さらに国際経済がどのような影響を受けるのかを分析するものです。 今後、皆さんが経済学のどのような専門分野を学ぶことになっても、マクロ経済学の知識は、ミクロ経済学と並んでとても役立ちますから、しっかりと理解して下さい。 授業計画にもあるように、GDP、GDP の決定、消費と投資、貨幣の需要と供給、IS-LM 分析といったマクロ経済学の最重要項目を学んだあと、国際マクロ経済、労働市場と総需要・総供給、インフレ、デフレ、失業、経済成長についても講義します。	1. イントロダクション 2. GDP とは 3. GDP の決定（1） 4. GDP の決定（2） 5. 消費と投資 6. 貨幣の需要と供給（1） 7. 貨幣の需要と供給（2） 8. IS-LM 分析（1） 9. IS-LM 分析（2） 10. 国際マクロ経済（1） 11. 国際マクロ経済（2） 12. 労働市場と総需要・総供給（1） 13. 労働市場と総需要・総供給（2） 14. インフレ、デフレ、失業 15. 経済成長
テキスト、参考文献	**評価方法**
使用しません。講義ではパワーポイントを用いますので、私の説明も含めてしっかりとノートをとって下さい。自習用のマクロ経済学のテキストを授業内で紹介します。	学期末テスト（60%）、授業内で課す小テスト（40%）により総合的に評価します。

13 年度以降（春）	経済学（ミクロ）	担当者	童　適平

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は、経済学を専攻として勉強する受講生のために、基礎知識を提供し、更なる経済学の知識を勉強し、経済学的な考え方と分析方法を身につけてもらうことを目的とする。 本講義は、消費者行動や企業行動、完全競争市場や資源配分など基礎理論の解説だけでなく、市場の失敗や不完全競争の理論、ミクロ政策まで、幅広いミクロ経済学の知識を受講者に紹介する。 また、理論の解説だけでなく、その背景の実体経済の現象も取上げて、受講者の理解を深めることに努める。	第 1 回　経済学とは何か 第 2 回　消費と貯蓄 第 3 回　消費行動の理論 第 4 回　弾力性 第 5 回　労働と余暇 第 6 回　企業と生産活動 第 7 回　費用と利潤 第 8 回　完全競争市場 第 9 回　独占市場 第 10 回　政府の役割と公共財の供給 第 11 回　税金の取り方 第 12 回　ミクロ市場−完全競争− 第 13 回　ミクロ市場−寡占− 第 14 回　ミクロ政策（1） 第 15 回　ミクロ政策（2）
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：井堀利宏『入門経済学』第 2 版（新世社）	期末試験を行う。学期中数回小テストと練習を行う。小テスト練習の解答を考慮して 30%、期末試験 70%

13 年度以降（秋）	経済学（マクロ）	担当者	童　適平

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は、経済学を専攻として勉強する受講生のために、基礎知識を提供し、更なる経済学の知識を勉強し、経済学的な考え方と分析方法を身につけてもらうことを目的とする。 本講義は、マクロ経済指標であるGDP、マクロ経済変数である消費、投資、貯蓄などの決定要因、財政金融政策および物価、雇用、景気循環など経済全体の変動について分析するマクロ経済学の基礎を解説する。国際経済の貿易、為替レートおよび資本移動についても触れておき、経済のグローバリゼーションに関する知識を受講者に備えてもらうことを心がける。 また、理論の解説だけでなく、日本経済の実情も取上げて、受講者の理解を深めることに心がける。	第 1 回　GDP の概念 第 2 回　GDP の決定 第 3 回　IS-LM モデル 第 4 回　貨幣と金融市場 第 5 回　金融取引と金融機関 第 6 回　金融商品 第 7 回　財政政策（1） 第 8 回　財政政策（2） 第 9 回　金融政策 第 10 回　日本経済の成長とストックの蓄積 第 11 回　日本の公的社会保障制度 第 12 回　貿易の利益 第 13 回　国際収支と為替レート 第 14 回　貿易と資本移動 第 15 回　経済学の諸問題
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：井堀利宏『入門経済学』第 2 版（新世社）	期末試験を行う。学期中数回小テストを行う。学期中小テストを考慮して 30%、期末試験 70%

13 年度以降（春）	経済学（ミクロ）	担当者	益山　光央

講義目的、講義概要	授業計画
経済学(ミクロ)ではミクロ経済学を講義します。限られた講義回数でたくさんの事柄を学べるように、講義の進行は速いと思います。受講生にとって経済学は大学ではじめて学ぶ分野なので、戸惑いがあるかもしれませんが、なるべくわかり易い講義を心がけます。受講生には毎回の予習と復習を求めます。私語厳禁。	1　ミクロ経済学概観 2　消費者行動の理論 1 3　消費者行動の理論 2 4　消費者行動の理論 3 5　生産者行動の理論 1 6　生産者行動の理論 2 7　生産者行動の理論 3 8　生産者行動の理論 4 9　完全競争市場 1 １０　完全競争市場 2 １１　不完全競争と独占 1 １２　不完全競争と独占 2 １３　まとめ １４　質問 １５　質問
テキスト、参考文献	**評価方法**
大山道広・伊藤元重『国際貿易』　岩波書店	試験のみで評価

13 年度以降（秋）	経済学（マクロ）	担当者	益山　光央

講義目的、講義概要	授業計画
春学期に扱ったミクロ経済学とともに経済学の大きな柱であるマクロ経済学を学びます。 国民所得の決定というのが大きなテーマです。すべて基本的内容なので、きちんと理解する必要があります。 春学期の経済学(ミクロ)を履修しているほうがより理解が深まると思います。私語厳禁。	1　マクロ経済学概観 2　国民所得計算 1 3　国民所得計算 2 4　国民所得決定のメカニズム(消費関数) 5　国民所得決定のメカニズム(投資関数) 6　国民所得決定のメカニズム(乗数効果) 7　貨幣市場(流動性選好 1) 8　貨幣市場(流動性選好 2) 9　貨幣市場(中央銀行と貨幣供給) １０　IS 曲線 １１　LM 曲線 １２　財政・金融政策概観 １３　まとめ １４　まとめ １５　質問
テキスト、参考文献	**評価方法**
未定	試験のみで評価

13 年度以降（春）	経済学(ミクロ)	担当者	米山 昌幸

講義目的、講義概要	授業計画
「経済学(ミクロ),(マクロ)」は皆さんが経済学部のどの専門領域に進んでも支障がないように、学部教育の基礎的な部分を共通化して行う学部共通科目です。経済学を学ぶことで、経済学の理論的枠組みを用いて現実の経済社会についての理解が深まり、さらには問題解決の手掛かりを見出すことができるようになります。 この講義の目的は、初めて経済学を学ぶ皆さんに、経済学が現実経済を理解する上で、どのように有用であるかを知ってもらい経済学に興味をもってもらうこと、そして分析用具としての経済学の基礎的な考え方を理解してもらうこと、この 2 つです。経済学の基礎学力をつけることが、遠回りのようでじつは経済学的思考のセンスを磨くことにつながるのです。そのためには公務員試験問題のトレーニングも有益でしょう。授業では、新聞記事や経済データを提示しながら、経済学的な考え方に慣れてもらえるようにしたいと思います。 経済学の分野は、ミクロ経済学とマクロ経済学に大別されます。経済学(ミクロ)は、家計・企業・政府といった個々の経済主体の意思決定について考察しその相互作用を研究するミクロ経済学の入門について講義します。ビジネスの事例もできるだけ取り上げたいと思います。	1. 経済学とは 2. 市場競争 3. 競争市場と需要・供給の法則 4. 需給の変化と比較静学 5. 弾力性 6. 消費者余剰と交換の利益 7. 生産者余剰と生産の効率性 8. 市場取引と資源配分の効率性 9. 消費者行動と需要曲線 10. 生産者行動と供給曲線 11. 市場介入の経済効果 12. 外部不経済と市場の失敗 13. 価格支配力と不完全競争 14. 不確実性と不完全情報 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
未定。テキストには次のようなものを予定していますが、第 1 回目の授業で指定します。 伊藤元重『入門経済学(第 3 版)』日本評論社、2009 年。 清野一治『ミクロ経済学入門』日本評論社、2006 年。	基本的には定期試験の得点(100 点満点)を評価基準(第 1 回目の授業で説明する)に照らして評価する。ただし、練習問題の得点等もサービス点として加算する予定。

13 年度以降（秋）	経済学(マクロ)	担当者	米山 昌幸

講義目的、講義概要	授業計画
「経済学(ミクロ),(マクロ)」は皆さんが経済学部のどの専門領域に進んでも支障がないように、学部教育の基礎的な部分を共通化して行う学部共通科目です。経済学を学ぶことで、経済学の理論的枠組みを用いて現実の経済社会についての理解が深まり、さらには問題解決の手掛かりを見出すことができるようになります。 この講義の目的は、初めて経済学を学ぶ皆さんに、経済学が現実経済を理解する上で、どのように有用であるかを知ってもらい経済学に興味をもってもらうこと、そして分析用具としての経済学の基礎的な考え方を理解してもらうこと、この 2 つです。経済学の基礎学力をつけることが、遠回りのようでじつは経済学的思考のセンスを磨くことにつながるのです。そのためには公務員試験問題のトレーニングも有益でしょう。授業では、新聞記事や経済データを提示しながら、経済学的な考え方に慣れてもらえるようにしたいと思います。 経済学(マクロ)は、GDP、経済成長率、物価指数といった経済全体を捉える変数の決定を考察し、生産物市場・資本市場・労働市場の相互作用について研究するマクロ経済学の入門について講義します。景気指標、金融・財政政策、財政赤字、経済成長などのニュース、トピックもできるだけ取り上げたいと思います。	1. GDP とは 2. 所得循環、景気循環 3. 物価指数、インフレーション 4. 生産物市場と所得・支出分析(1) 5. 生産物市場と所得・支出分析(2) 6. 資本市場 7. 貨幣と日本銀行 8. 労働市場と失業 9. 総需要と総供給(1) 10. 総需要と総供給(2) 11. 財政政策と金融政策 12. 政府の役割と財政赤字 13. 為替レートと貿易 14. 経済成長と経済発展 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
未定。テキストには次のようなものを予定していますが、第 1 回目の授業で指定します。 伊藤元重『入門経済学(第 3 版)』日本評論社、2009 年。 二神孝一『マクロ経済学入門』日本評論社、2006 年。	基本的には定期試験の得点(100 点満点)を評価基準(第 1 回目の授業で説明する)に照らして評価する。ただし、練習問題の得点等もサービス点として加算する予定。

13年度以降（春）	経済学（ミクロ）（再履修者用）	担当者	倉橋　透

講義目的、講義概要	授業計画
【講義目的】 本講義は、皆さんが今後経済学を深く勉強していくにあたっての基礎知識を提供し、経済学的な考え方を身に付けてもらうことを目的とする。 また受け身でなく、自分の頭で考えることも重要である。 さらに、単に理論を学ぶのではなく、その背景の実体経済がどうなっているかを認識してもらいたい。 【講義内容】 春学期はミクロ経済学の分野を扱う。「市場と価格」がキーワードである。	１．講義の概要 ２．基礎的数学の復習 ３．ミクロ経済学とは（前提は合理的な人間や企業） ４．需要と供給 ５．価格弾力性 ６．消費者行動と需要曲線 ７．消費者余剰 ８．費用（限界費用、平均費用等）と供給曲線 ９．生産者余剰 １０．市場取引と効率的な資源配分 １１．消費税、関税、家賃規制と余剰分析 １２．市場の失敗（外部性） １３．市場の失敗（公共財） １４．資源配分と所得分配 １５．不確実性と不完全情報、まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：伊藤元重『入門　経済学』第３版（日本評論社）	定期試験による。

13年度以降（秋）	経済学（マクロ）（再履修者用）	担当者	倉橋　透

義目的、講義講概要	授業計画
【講義目的】 本講義は、皆さんが今後経済学を深く勉強していくにあたっての基礎知識を提供し、経済学的な考え方を身に付けてもらうことを目的とする。 自分の頭で考えること、実体経済の認識を重視することは春学期と同様である。 【講義内容】 秋学期はマクロ経済学の分野を扱う。キーワードは「GDPと景気」である。	１．講義の概要 ２．景気の現局面 ３．マクロ経済学とは ４．GDPとは ５．GDPの三面等価 ６．潜在成長力 ７．財・サービス市場の均衡（４５度線分析） ８．貨幣の定義と機能 ９．信用乗数 １０．貨幣需要と貨幣供給、貨幣市場の均衡 １１．貨幣数量説 １２．財政・金融政策のメカニズム：ＩＳ－ＬＭ分析 １３．財政・金融政策のメカニズム：クラウディングアウトと対策 １４．フィリップス曲線 １５．経済成長、まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：伊藤元重『入門　経済学』第３版（日本評論社）	定期試験による。

13 年度以降（春）	経済経営数学入門	担当者	陰山　孔貴

講義目的、講義概要	授業計画
本講義では、経済経営数学について学んでいきます。 数学というと、過去の経験から、苦手意識がある人が多いのではないでしょうか。ただ、皆さんが、今後、経済学や経営学を学んでいく中で、基礎的な数学の知識があるのとないのでは、その学びの楽しさが変わってきます。 本講義では、実際に皆さんに手を動かしてもらうことにより数学になれ、少しでも数学が楽しくなるような講義ができればと思っています。	1. 講義概要 2. 数学の基礎 3. グラフの読み方、1 次関数の式とグラフ 4. 2 次関数の式とグラフ 5. 微分の意味と計算方法① 6. 微分の意味と計算方法② 7. 練習問題① 8. まとめ（中間） 9. 単利と複利の計算 10. 割引現在価値① 11. 割引現在価値② 12. 等比数列の和（等比級数）の計算① 13. 等比数列の和（等比級数）の計算② 14. 練習問題② 15. まとめ（最終）
テキスト、参考文献	**評価方法**
第 1 回の講義にて説明します。	授業への貢献度と試験にて総合的に評価します。

13 年度以降（秋）	統計学入門	担当者	陰山　孔貴

講義目的、講義概要	授業計画
本講義では、統計学について学んでいきます。 統計学というと、難しい学問だとイメージする人が多いのではないでしょうか。ただ、皆さんが、今後、経済学や経営学を学んでいく中で、基礎的な統計学の知識があるのとないのでは、その学びの楽しさが変わってきます。 本講義では、実際に皆さんに手を動かしてもらうことにより統計学になれ、少しでも統計学が楽しくなるような講義ができればと思っています。	1. 講義概要 2. 度数分布表 3. ヒストグラムと累積度数分布 4. 平均値 5. 中央値 6. 最頻値 7. 練習問題① 8. まとめ（中間） 9. ばらつき度の諸指標① 10. ばらつき度の諸指標② 11. 練習問題② 12. 典型的なばらつきのタイプ① 13. 典型的なばらつきのタイプ② 14. 練習問題③ 15. まとめ（最終）
テキスト、参考文献	**評価方法**
第 1 回の講義にて説明します。	授業への貢献度と試験にて総合的に評価します。

13 年度以降（春）	経済経営数学入門	担当者	須藤　時仁

講義目的、講義概要	授業計画
「数学」というと非常に抽象的な学問であり、経済学や経営学とは無関係と思っている人も多いかもしれない。しかし、数学は、経済学や経営学の分野でも基礎的用具として非常に重要なものとなっている。本講義では、数学を非常に基礎的なレベルから理解することを目的とする。さらに、数学の抽象的な理解にとどまらず、数学が経済学や金融・証券等の分野でどのように利用されているのかについても講義する。 数学は抽象性が高いため、概念の説明を聞くだけではなかなか理解しづらい。講義では、受講生に例題を解いてもらう形で進めていきたい。	1. イントロダクション 2. 基礎知識の確認 3. 基礎的概念：方程式と不等式 4. 基礎的概念：関数 5. 2 次方程式の応用：利潤最大化 6. 指数の概念 7. 指数と金利 8. 対数の概念 9. 対数と成長率 10. 数列の概念 11. 等差数列と等比数列 12. 等比数列の和と貯蓄 13. 微分の概念 14. 微分の応用：利潤最大化 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
初回の講義で指示する。	定期試験により評価する。

13 年度以降（秋）	統計学入門	担当者	須藤　時仁

講義目的、講義概要	授業計画
経済学や経営学では様々なデータを扱う。しかし、データを単に眺めているだけでは、そのデータの特徴を理解することは難しい。統計学はデータの特徴を明確にするための非常に重要なツールである。本講義では、統計学の非常に基礎的な部分をわかりやすく説明することを目的とする。 講義の項目は数学ほど抽象性が高いものではないが、それでも概念の説明を聞くだけではなかなか理解し難い。そこで、経済経営数学入門と同様に、受講生に例題を解いてもらう形で進めていきたい。	1. イントロダクション 2. データの整理：度数分布とヒストグラム 3. データの代表値：平均 4. データの代表値：メディアンとモード 5. データの分布の形と平均、メディアン、モードの関係 6. データの散らばり具合：範囲・四分位範囲 7. データの散らばり具合：分散と標準偏差 8. 異なるデータの分布の比較 9. 確率変数と確率分布の概念 10. 平均と分散・標準偏差：離散型確率変数の場合 11. 二項分布・ポアソン分布 12. 正規分布 13. 標準正規分布とその応用 14. ベイズの定理 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
初回の講義で指示する。	定期試験により評価する。

13 年度以降（春）	経済経営数学入門	担当者	高畑　純一郎

講義目的、講義概要	授業計画
＜講義の概要＞ 経済学で用いる数学を学習する。 ＜講義の目的＞ 経済学では数学を用いて考えることがよくある。経済学の理論的な問題に直面した時に、数学によって考えられる下地を作ることがこの講義の目的である。 ＜講義の方針＞ 高校までに学習するような数学の復習を最初に行う。講義中に練習問題を出題するので、手を動かして理解を深めてもらう。	1. 式の計算(1): 演算の法則 2. 式の計算(2): 因数分解 3. 式の計算(3): 関数 4. 式の計算(4): 指数 5. 一次関数(1): 一次関数のグラフの読み方 6. 一次関数(2): 消費と所得の関係を式とグラフで表す 7. 二次関数(1): 売上げ最大化 8. 二次関数(2): 利潤最大化 9. 三次関数の式とグラフ 10. 微分の意味と計算方法 11. 偏微分の意味と計算方法 12. 単利と複利の計算 13. 割引現在価値 14. 等差数列と等比数列 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストは石川秀樹『経済学と経済学に必要な数学がイッキにわかる!!』とする。高校で使用した教科書・参考書も有用である。	評価割合は試験(60%)、宿題(20%)、小テスト(20%)とする。

13 年度以降（秋）	統計学入門	担当者	高畑　純一郎

講義目的、講義概要	授業計画
＜講義の概要＞ 統計の指標と確率の基本的な考え方を学習する。 ＜講義の目的＞ 経済学では膨大なデータを簡潔に要約した数字を読んで理解することが求められるが、そうした作法を理解し、自分でも活用できるようになることが本講義の目的である。 ＜講義の方針＞ 講義中に練習問題を出題するので、手を動かして理解を深めてもらう。	1. イントロダクション 2. 中心の位置の統計量 3. 変化を表す統計量 4. 散らばりの統計量 5. 標準偏差の活用 6. 散らばりのグラフ表現 7. 2 変数の関連性 8. ジニ係数とローレンツ曲線 9. 種々の物価指数 10. 順列と組み合わせ 11. 加法定理・独立 12. 条件付き確率とベイズの定理 13. 確率変数と確率分布 14. 種々の確率分布 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
授業では完全にテキストに沿って解説はしないが、参考書として以下を挙げておく； 稲葉由之『プレステップ統計学 I: 記述統計学』 宮川公男『基本統計学第 3 版』	評価割合は試験(60%)、宿題(20%)、小テスト(20%)とする。

13 年度以降（春）	経済経営数学入門	担当者	樋田 勉

講義目的、講義概要	授業計画
この講義では、経済学を学修するために最低限必要な数学的な知識の習得を目指します。 数学の学修には演習問題を自ら解くことが重要です。講義中の演習問題への積極的な取り組みは必須です。 注意事項：テキストと参考文献については第1回の講義で提示するので必ず出席すること。	1. オリエンテーション 2. 数学の初歩（1） 3. 数学の初歩（2） 4. 1 次関数、グラフ 5. 2 次関数、3 次関数（1） 6. 2 次関数、3 次関数（2） 7. 微分（1） 8. 微分（2） 9. 微分（3） 10. 逆関数 11. 指数と対数 12. 級数（1） 13. 級数（2） 14. 多変数の関数と偏微分 15. まとめ 小テストを行うことがあります。
テキスト、参考文献	**評価方法**
講義時に紹介する。	期末試験（80%）、平常点（20%）

13 年度以降（秋）	統計学入門	担当者	樋田 勉

講義目的、講義概要	授業計画
現代社会では企業・官公庁によってさまざまな統計データが収集され、意思決定に活用されています。この講義では、統計データを適切に集計・解釈するために必要な基礎的な統計学的手法の修得を目指します。統計学を修得するためには、実習・演習が重要であるため、講義時間中にも計算機を利用して練習問題に取り組み、学んだ知識を実際に利用できるようになることを目指します。講義中の演習問題への積極的な取り組みは必須です。 **注意事項**：テキストと参考文献については第 1 回の講義で提示するので必ず出席すること。	1. オリエンテーション、統計学の目的と役割 2. 度数分布 3. ヒストグラムと幹葉図 4. 平均、メディアン、モード 5. 加重平均、幾何平均 6. 比率の平均 7. 分散、標準偏差 8. 四分位偏差、箱ひげ図 9. 偏差値、変動係数 10. ローレンツ曲線とジニ係数 11. 散布図と相関係数 12. 回帰分析 13. 指数 14. 時系列データ 15. まとめ 小テストを行うことがあります。
テキスト、参考文献	**評価方法**
【参考書】 大屋幸輔（2011）『コア・テキスト統計学　第 2 版』サイエンス社.	期末試験（80%）、平常点（20%）

13 年度以降（春）	経済経営数学入門	担当者	徳永　潤二

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は、経済学を学ぶために必要な経済数学の基礎を習得することを目的とします。 経済学を学ぶにあたって数学が必要であることは分かっているが、すっかり数学の知識が抜け落ちているので、どうやって学べばよいか分からない、という人が多いのではないでしょうか。 本講義では、こうした数学アレルギーを克服するために、中学・高校の数学の基礎にも立ち戻りながら、経済数学の基礎を学んでいきます。経済数学の基礎が習得できれば、経済学の科目は理解しやすくなりますし、それに対する興味がさらに湧いてくるはずです。 講義ではパワーポイントを用いますので、私の説明も含めてしっかりとノートをとって下さい。授業中の私語や携帯電話の利用は厳禁です。授業に集中して下さい。	1. イントロダクション 2. 中学・高校数学の復習（1） 3. 中学・高校数学の復習（2） 4. 連立方程式 5. 1 次関数 6. 2 次関数 7. 3 次関数 8. 微分 9. 偏微分 10. 数列 11. 極限 12. シグマ 13. 単利と複利の計算 14. 割引現在価値と投資 15. 土地の値段の決定
テキスト、参考文献	**評価方法**
初回の授業で指示します。数学に苦手意識を持っているならば、中学・高校で使用した教科書と参考書も役立ちます。参考文献は適宜紹介します。	学期末テスト（60%）、授業内で課す小テスト（40%）により総合的に評価します。

13 年度以降（秋）	統計学入門	担当者	徳永　潤二

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は、まず統計学の初歩からスタートし、次に経済学の理解に役立つ統計学の重要項目を習得することを目的とします。 今後、演習をはじめとする様々な講義において経済データに頻繁に接することになるでしょう。しかし経済データを漠然と眺めているだけでは、そのデータの意味を正確に理解することは難しいでしょう。 本講義では、経済学に役立つ統計学の重要項目を習得することによって、経済データを正確に理解できるようになりましょう。 講義ではパワーポイントを用いますので、私の説明も含めてしっかりとノートをとって下さい。授業中の私語や携帯電話の利用は厳禁です。授業に集中して下さい。	1. イントロダクション 2. 統計表のグラフ表現 3. 平均値の役割と捉え方 4. 変化を表す統計量 5. 分散と標準偏差 6. 標準偏差の考え方の活用例（1） 7. 標準偏差の考え方の活用例（2） 8. 正規分布 9. 相関係数 10. 確率 11. 確率分布 12. 点推定（1） 13. 点推定（2） 14. 区間検定（1） 15. 区間検定（2）
テキスト、参考文献	**評価方法**
初回の授業で指示します。参考文献は適宜紹介します。	学期末テスト（60%）、授業内で課す小テスト（40%）により総合的に評価します。

13 年度以降（春）	経済経営数学入門	担当者	中村　健治

講義目的、講義概要	授業計画
経済学では各種の指標が数値化されて処理されます。このため数学が必須です。本講義では入門として、実数論などの厳密な議論は避け、実際に必要となる数学的処理について理解することを目的とします。このため一部は高校数学のレベルとなりますが、それを発展させて変分法や確率分布などにも触れます。講義では随時演習を含め、また小テストを行います。	1. 授業概要の説明 2. 数の分類、関数について 3. 連立一次方程式、一次不等式、線形計画法の初歩 4. 二次関数、二次不等式 5. 指数関数、小テスト 6. 対数関数 7. 指数関数、対数関数の使用例 8. 極限、関数の微分、極値、小テスト 9. 合成関数の微分 10. 関数の積分 11. 一次方程式系と行列式、小テスト 12. 一次方程式の解法、逆行列 13. 一変数の変分法、小テスト 14. 多変数の変分法 15. 経済学への応用
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献：中邨良樹『経済学を学ぶための数学的手法』（創成社、2012 年）、藤田渉、福澤勝彦、秋本耕二、中村博和『経済数学』（勁草書房、2000 年）、	授業参加（小テストを含む）（40%）、期末試験（60%）で評価します。

13 年度以降（秋）	統計学入門	担当者	中村　健治

講義目的、講義概要	授業計画
世の中には様々なデータの統計グラフがあふれています。しかし統計の指標は必ずしも分かり易いものではありません。偏差値もよく使われる指標ですが正確な理解が必要です。本講義は、入門としていろいろな統計のやり方がある、ということを知ってもらうことを主眼とします。 経済の統計図や理科年表などを使ってまず統計図の見方を示し、その後、偏差値、相関係数など各種統計指標の計算の仕方を説明します。その後、統計値のモデルとして様々な確率分布がありますがその概要を述べます。その応用として推定・仮説検定についても触れます。	1. イントロダクション 2. 様々なグラフと統計図 3. 統計の尺度（平均値、偏差値、トレンド、相関係数） 4. 統計図の演習、小テスト 5. 確率分布（1） 6. 確率分布（2） 7. 確率分布演習 8. 母集団と標本 9. 推定（1） 10. 推定（2）、小テスト 11. 検定の考え方 12. 仮説検定（1） 13. 仮説検定（2） 14. 仮説検定の演習 15. 復習
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献：基本統計学、豊田利久、大谷一博、小川一夫、長谷川光、谷崎久志『基本統計学[第 2 版]』（東洋経済新報社、2002 年）	授業参加（小テストを含む）（40%）、期末試験（60%）で評価します。

13 年度以降（春）	経済経営数学入門	担当者	米山 昌幸

講義目的、講義概要	授業計画
この講義では、経済・ビジネスの事例を取り上げ、その問題分析や課題解決のためにどのように数学が使われているのかを解説し、数学を使う意味やメリットを知ってもらいながら、数学的素養を育成していきます。 経済学部に入学された皆さんは、経済学・経営学の領域を文系と考えて進学された方が多いと思いますが、経済学・経営学の分野では数学的手法が多用されます。経済の豊かさを測る指標として GDP がありますが、これを人口で割った一人当たり GDP が増えているのかどうか、知らないで経済開発の議論はできません。企業収益の計算や在庫管理のモデル化ができない経営者が会社を大きくしていけるでしょうか。また単利、複利の計算の違いがわからない銀行員がいたら、そんなところに預金したくはないですよね。このように経済学、経営・ビジネスの領域も普通に「数字」を対象としており、数学的素養が必要なのです。 これまで皆さんがどちらかというと嫌いだった数学も、実際の経済・ビジネスの問題を考えるうえで、どのように使われているかを学ぶことで、きっと興味をもってもらえると思います。	1. 算数からの数学復習 2. 1 次関数 3. 2 次関数 4. 3 次関数 5. 指数と対数(1) 6. 指数と対数(2) 7. 微分の意味と計算方法 8. 全微分と偏微分 9. 経済学の最大化問題 10. 単利計算と複利計算、経済成長率 11. 割引現在価値 12. 等比数列とその和(1) 13. 等比数列とその和(2) 14. 意思決定問題の数式表現―モデリング 15. 連立方程式と行列
テキスト、参考文献	**評価方法**
未定。テキストには次のようなものを予定していますが、第 1 回目の授業で指定します。 石川秀樹『経済学と経済学に必要な数学がイッキにわかる!!』Gakken、2009 年。 平井裕久他『経済・経営を学ぶための数学入門』ミネルヴァ書房、2010 年。	基本的には定期試験の得点(100 点満点)を評価基準(第 1 回目の授業で説明する)に照らして評価する。ただし、練習問題の得点等もサービス点として加算する予定。

13 年度以降（秋）	統計学入門	担当者	米山 昌幸

講義目的、講義概要	授業計画
この講義では、経済、経営・ビジネスの事例を取り上げ、どのように記述統計や統計分析が使われているのかを解説しながら、統計学を使う意味やメリットを知ってもらい、統計学的手法の基礎を学びます。 この講義では、データの取られ方の問題点が意識できるようになる、データに対して適切な代表値をもとめることができるようになる、2 つのデータが得られたときに、その関係性を把握できるようになることを目的とします。 経済学は 2 変数間の関係を積み上げていって、最終的に分析対象としている変数が何に依存していてどう変化するかを分析する学問ですし、経営・ビジネスの領域では売上や企業収益、あるいは企業の競争力といった変数が何によって影響を受けるのかを知りたいのです。 記述統計を用いることも重要ですが、それだけでは言えることは限られます。さまざまな統計的手法を用いて分析することで、より正確な議論ができるようになります。皆さんは「風が吹けば桶屋が儲かる」という話は知っていると思いますが、統計的手法を使えば、風が吹いたときに、桶屋の収益にどれだけの影響があるのか、正確にわかるのです。	1. 基本的なグラフの見方・読み方 2. データの種類 3. 度数分布表 4. ヒストグラム 5. 代表値（平均値・中央値・最頻値） 6. 分布の散らばりの尺度 7. クロス集計表 8. 時系列データの基本的な見方 9. 確率の基礎 10. 標本調査 11. データの散らばりの指標 12. データの散らばりのグラフ表現 13. 2 変数の相関（相関、散布図、相関係数） 14. 確率（独立な試行、条件付き確率） 15. 推定と検定
テキスト、参考文献	**評価方法**
未定。テキストには次のようなものを予定していますが、第 1 回目の授業で指定します。 森棟公夫『教養 統計学』サイエンス社、2012 年。	基本的には定期試験の得点(100 点満点)を評価基準(第 1 回目の授業で説明する)に照らして評価する。ただし、練習問題の得点等もサービス点として加算する予定。

13 年度以降（春）	経済経営数学入門（再履修者用）	担当者	塩田　尚樹

講義目的、講義概要	授業計画
再履修者を対象として，経済学を学ぶうえで有用な数学の入門的な講義を行います． 学生のみなさんの中には，数学という名前を聞くだけで『無理！』と逃げ出したくなる人が，少なからずいるのではないでしょうか？みなさんがこれまで受けてきた数学や算数の授業と同様に，この授業でも毎回のように数・グラフ・式が登場します．よって，『数学が嫌いな人でも全く問題なし』などと安直な気休めは言いません． ただし，次の点は心にとめておいて下さい．この授業の目的は，数学そのものではなく，経済学関連科目を学ぶための基礎体力づくりです．いわゆる受験数学では，計算の正確さ・速さと複雑・怪奇な問題への対応力が要求されたかと思いますが，この授業では，素直な問題や典型的な例を自分が納得するまで考え，論理的思考を身につけることが重要です．したがって，必要なのは『頭の回転の速さ』よりも『知的謙虚さ』,『忍耐力』と『健全な好奇心』です．十分な基礎体力を，一人でも多くの人につけてもらえるように，授業を展開したいと思います． なお,『各人の授業を受ける権利』は『他の人の授業を受ける権利』を侵害しない範囲内で行使されるべきだと考えますので，授業態度のよくない人には退出してもらいます．	1. 授業計画の確認 2. 数学の好き嫌い 3. 数と四則演算 4. 式と方程式 5. 不等式 6. 座標とグラフ 7. 関数とグラフ 8. 連立方程式 9. ベクトル 10. 行列 11. 行列式 12. 産業連関表 13. 線型経済モデル 14. 産業連関分析 15. まとめ
テキスト	**評価方法**
使用しない．	定期試験で評価します．ただし，講義中の私語などの迷惑行為で減点する場合があります．

13 年度以降（秋）	統計学入門（再履修者用）	担当者	塩田　尚樹

講義目的、講義概要	授業計画
再履修者を対象として，経済統計の見方と経済データを扱うための統計的手法について入門的な講義を行います． 日本経済の状態は良いのか悪いのか，近年どのように変化しているのか，あるいは，世界各国と比べるとどうなのか？このような話題に関して，経済成長率・インフレ率・失業率・ジニ係数などの経済データと呼ばれる『数値』を使った議論が，新聞・ニュース・インターネットなどで頻繁に展開されています．各データの意味と限界を理解していないと,『数値』を使っている議論というだけでむやみにありがたがったり，逆に拒絶したりするという残念なことになりかねません． そこでこの授業では，経済の話によく出てくる『数値』の意味と限界について，初歩から解説していきます．なお，実際に自分でデータを集め加工・分析してみることが，統計学を身につける最も効率的な方法です．よって，超過負担にならない程度に宿題を出す予定です． なお,『各人の授業を受ける権利』は『他の人の授業を受ける権利』を侵害しない範囲内で行使されるべきだと考えますので，授業態度のよくない人には退出してもらいます．	1. 授業計画の確認 2. 測定の尺度 3. データの中心に関する代表値 4. 算術平均とラスパイレス指数 5. 調和平均とパーシェ指数 6. 幾何平均と成長率 7. 度数分布表とヒストグラム 8. 歪度と尖度 9. ローレンツ曲線 10. データの散らばりに関する代表値 11. 分散と標準偏差 12. 散布図と分割表 13. 共分散と相関係数 14. 自己相関係数 15. まとめ
テキスト	**評価方法**
使用しない．	定期試験で評価します．ただし，講義中の私語などの迷惑行為で減点する場合があります．

13 年度以降（春）	経済経営数学入門（再履修者用）	担当者	山下　裕歩

講義目的、講義概要	授業計画
経済学や経営学を学ぶ上で必要な数学の初歩を講義する。この半期間の講義で経済学・経営学に必要な数学が網羅されるわけではないが、さらなる数学の知識が必要となったときに自学できるような基礎力を修得することがこの講義の目的である。具体的には、右の授業計画に沿って進めて行くが、適宜、小テストを行うことによって理解を着実なものとしていきたい。	1. 経済学・経営学で必要な数学 2. 式の計算（１） 3. 式の計算（２） 4. １次関数と１次方程式：直線のグラフ 5. ２次関数と２次方程式：放物線のグラフ 6. 多変数関数（１） 7. 多変数関数（２） 8. 指数と対数（１） 9. 指数と対数（２） 10. 数列とその和 11. 差分方程式 12. 微分（１） 13. 微分（２） 14. 最大化問題（１） 15. 最大化問題（２）
テキスト、参考文献	**評価方法**
講義でレジュメを配布し教科書は特に指定しない。参考書は授業中に適宜紹介する。	学期末テスト（50%）と授業中の小テスト（50%）により評価する。

13 年度以降（秋）	統計学入門（再履修者用）	担当者	山下　裕歩

講義目的、講義概要	授業計画
経済学や経営学を学ぶ上で必要な統計学の初歩を講義する。経済学においても経営学においても、統計データを作成・入手し、それを要約・分析することは極めて重要である。この講義は、そのための第一歩という位置づけである。具体的には、右の授業計画に沿って進めて行くが、適宜、小テストを行うことによって理解を着実なものとしていきたい。	1. 記述統計と推測統計 2. 統計データの種類と分類 3. データの整理（１）：様々なグラフ 4. データの整理（２）：度数分布表 5. データの整理（３）：散布図 6. 基本統計量の計算（１）平均値・中央値・最頻値 7. 基本統計量の計算（２）分散・標準偏差・範囲 8. 基本統計量の計算（３）相関係数 9. 確率（１） 10. 確率（２） 11. 確率分布 12. 点推定（１） 13. 点推定（２） 14. 区間推定（１） 15. 区間推定（２）
テキスト、参考文献	**評価方法**
講義でレジュメを配布し教科書は特に指定しない。参考書は授業中に適宜紹介する。	学期末テスト（50%）と授業中の小テスト（50%）により評価する。

13 年度以降（春）	統計学 a	担当者	大床　太郎

講義目的、講義概要	授業計画
【講義目的】 1年次に開講されている「統計学入門」で学んだ基本的な統計学の概念について，具体的な例題を解きつつ定着させることを目的とします. 【講義概要】 本講義では，例題や演習問題の豊富なテキストを用いて，経済・経営の諸課題における実証分析に必要となる統計学の基礎を網羅的に概説します．解法の手引きを講義し，いくつか演習問題を解いて見せたのち，授業参加者それぞれが演習問題を解き進めてもらいます. 秋学期の統計学bとセットで開講しますので，基本的に通年で履修してください.	以下のような予定で，適宜修正しつつ進めます．第 1 回は，講義の進め方や単位の修得に関わる説明を行いますので，必ず受講してください. 第 1 回　イントロダクション・代表値 第 2 回　代表値（つづき） 第 3 回　小テスト① 第 4 回～第 5 回　ばらつき 第 6 回　小テスト② 第 7 回～第 8 回　確率① 第 9 回　小テスト③ 第 10 回～第 11 回　確率② 第 12 回　小テスト④ 第 13 回～第 14 回　正規分布 第 15 回　小テスト⑤
テキスト、参考文献	**評価方法**
吉田耕作（2006）『直感的統計学』，日経 BP 社.	授業貢献（50%）・小テスト（50%） 詳しくは，第 1 回のイントロダクションで説明します.

13 年度以降（秋）	統計学 b	担当者	大床　太郎

講義目的、講義概要	授業計画
【講義目的】 1年次に開講されている「統計学入門」で学んだ基本的な統計学の概念について，具体的な例題を解きつつ定着させることを目的とします. 【講義概要】 本講義では，例題や演習問題の豊富なテキストを用いて，経済・経営の諸課題における実証分析に必要となる統計学の基礎を網羅的に概説します．解法の手引きを講義し，いくつか演習問題を解いて見せたのち，授業参加者それぞれが演習問題を解き進めてもらいます. 春学期の統計学aとセットで開講しますので，基本的に通年で履修してください.	以下のような予定で，適宜修正しつつ進めます．第 1 回は，講義の進め方や単位の修得に関わる説明を行いますので，必ず受講してください. 第 1 回　イントロダクション・サンプリング理論① 第 2 回　サンプリング理論①（つづき） 第 3 回　小テスト① 第 4 回～第 5 回　サンプリング理論② 第 6 回　小テスト② 第 7 回～第 8 回　推定 第 9 回　小テスト③ 第 10 回～第 11 回　検定① 第 12 回　小テスト④ 第 13 回～第 14 回　検定② 第 15 回　小テスト⑤
テキスト、参考文献	**評価方法**
吉田耕作（2006）『直感的統計学』，日経 BP 社.	授業貢献（50%）・小テスト（50%）. 詳しくは，第 1 回のイントロダクションで説明します.

13 年度以降（春）	統計学 a	担当者	樋田 勉

講義目的、講義概要	授業計画
今日の高度情報社会では、一国の GDP や物価水準、企業の業績や株価、政党支持率やテレビ番組の視聴率など、様々な統計情報が収集・作成されている。企業や公的機関における業務から日常生活に至るまで、統計情報に触れる機会はますます増えている。このような多様な統計情報を有効に活用するための手法が統計学である。統計学は、統計情報をわかりやすく集計・表現したり、確率的なモデルを用いてデータの背後にある構造を推測・予測したりして、統計情報をさまざまな意思決定に活用するために用いられる。 この講義の目的は、統計情報を適切に分析・解釈するために必要な統計学的手法を習得することにある。統計学を習得するためには、理論の理解だけでなく、実習・演習も重要である。講義時間中に計算機を利用して練習問題に取り組み、学んだ知識を実際に利用できるようになることを目指す。	1. オリエンテーション、統計学の目的と役割 2. 度数分布、ヒストグラム 3. 平均、メディアン、モード 4. 分散、標準偏差、偏差値 5. 変動係数、比率 6. 散布図と相関係数 7. 記述統計のまとめ 8. 確率の概念 9. 加法定理と乗法定理 10. 条件付き確率とベイズの定理 11. 離散型確率変数と確率分布 12. 2 項分布、ポアソン分布、超幾何分布 13. 連続型確率変数と確率密度関数 14. 同時確率分布 15. 確率のまとめ 小テストを行うことがある。
テキスト、参考文献	**評価方法**
大屋幸輔（2011）『コア・テキスト統計学　第 2 版』サイエンス社.	期末試験（70%）、平常点（30%）

13 年度以降（秋）	統計学 b	担当者	樋田 勉

講義目的、講義概要	授業計画
今日の高度情報社会では、一国の GDP や物価水準、企業の業績や株価、政党支持率やテレビ番組の視聴率など、様々な統計情報が収集・作成されている。企業や公的機関における業務から日常生活に至るまで、統計情報に触れる機会はますます増えている。このような多様な統計情報を有効に活用するための手法が統計学である。統計学は、統計情報をわかりやすく集計・表現したり、確率的なモデルを用いてデータの背後にある構造を推測・予測したりして、統計情報をさまざまな意思決定に活用するために用いられる。 この講義の目的は、統計情報を適切に分析・解釈するために必要な統計学的手法を習得することにある。統計学を習得するためには、理論の理解だけでなく、実習・演習も重要である。講義時間中に計算機を利用して練習問題に取り組み、学んだ知識を実際に利用できるようになることを目指す。	1. 記述統計と確率の復習 2. 母集団と標本、標本分布（1） 3. 母集団と標本、標本分布（2） 4. 正規分布からの標本分布（1） 5. 正規分布からの標本分布（2） 6. 標本分布のまとめ 7. 推定（1） 8. 推定（2） 9. 推定（3） 10. 推定のまとめ 11. 標本サイズの決定 12. 統計的仮説検定（1） 13. 統計的仮説検定（2） 14. 統計的仮説検定（3） 15. まとめ 小テストを行うことがある。
テキスト、参考文献	**評価方法**
大屋幸輔（2011）『コア・テキスト統計学　第 2 版』サイエンス社.	期末試験（70%）、平常点（30%）

13 年度以降（春）	環境学	担当者	中村　健治

講義目的、講義概要	授業計画
環境学は自然と人間との関わりに関する学問です。人間活動が小さい時は人間活動は自然に大きく制約されてきましたが、人間活動が大きくなると人間と自然との相互の関連が重要となっています。 この環境も現代は地球的規模となり地球環境問題として認識されています。この地球環境問題としては、温暖化、オゾン層、酸性雨、海洋汚染、森林破壊、砂漠化、生物多様性の喪失、などが挙げられています。 本講義では自然環境に関する基礎知識とともに地球環境問題の各項目についての基礎知識を得てもらうことを目的とします。	1. 授業概要 2. 過去の環境問題 3. 我が国の環境問題 4. 地球環境の構造 5. 地球規模の環境問題 6. 地球温暖化（１） 7. 地球温暖化（２） 8. オゾン層（１） 9. オゾン層（２） 10. 酸性雨 11. 海洋汚染 12. 森林破壊 13. 砂漠化 14. 生物多様性の喪失 15. 私たちと環境
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献:増田啓子、北川秀樹『はじめての環境学[第２版]』（法律文化社、2012 年）	２回程度行う小テスト（30%）、参加状況（30%）と試験（40%）で評価します。

13 年度以降（秋）	サステイナビリティ学	担当者	木原　隆司

講義目的、講義概要	授業計画
(講義目的)「環境学」が自然科学領域から持続可能性（サステイナビリティ）を考えるのに対して、本講義では環境経済学、開発経済学など社会科学領域から環境・経済・社会の持続可能性について考えます。基礎的な経済学のツールを応用して、環境問題の持つ悪影響（外部不経済）を軽減・内部化するための政策（規制、所有権の確定、環境税、排出権取引等）や環境価値の評価手法などを学ぶとともに、資源制約の下で「持続可能な開発」を進め、経済・社会の持続可能性を維持していくための政策・国際協力手法を検討します。地球環境ファシリティー（GEF）などの資金メカニズム、アジアの開発・環境政策や RIO+20 など近年の環境・開発協力についても学びます。 （講義概要）この講義では、栗山・馬奈木（2012）『環境経済学をつかむ』を主なテキストとして用います。各 Unit のトピックについての理解を確実にするために、諸富他（2008）、小宮山他（2011）、OECD（2008）などの参考文献で補足します。 また、担当教員の財務省や国際機関での経験や、わが国や国際機関が行っている持続可能な開発に向けた政策実態を交えた説明をします。	1. オリエンテーション・サステイナビリティと環境経済学・開発経済学（Unit 0）（カッコ内はテキストの該当 Unit） 2. 経済発展と環境/ゴミ問題と循環型社会（Unit 1 、2） 3. 地球温暖化問題/外部性と市場の失敗（Unit 3、4） 4. 共有資源の管理/公共財とただ乗り（Unit 5,6） 5. 環境政策の理論(1)（直接規制・環境税・補助金）（Unit 7、8） 6. 環境政策の理論(2)（コースの定理・排出権取引）（Unit 9、10） 7. 環境政策の実際(1)（政策手段の選択・廃棄物政策）(Unit 11、12） 8. 環境政策の実際(2)（地球温暖化対策）（Unit 13、14） 9. 環境評価(1)（環境の価値、顕示選好法）（Unit 15、16） 10. 環境評価(2)（表明選好法、費用便益分析）(Unit17、18） 11. 企業の環境問題と生態系（環境対策・社会的責任・環境リスク・生物多様性）（Unit19、20、21、22） 12. 国際貿易・技術進歩と環境問題（Unit23、24） 13. 「持続可能な開発」に向けて(1)（理念・定義・環境クズネッツ仮説、エネルギー経済）（Unit25、26） 14. 「持続可能な開発」に向けて(2)（資金メカニズム、アジアの環境政策・開発協力、RIO+20） 15. 講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト；栗山浩一・馬奈木俊介『環境経済学をつかむ』（有斐閣、2012 年）/参考文献；諸富徹ほか『環境経済学講義』（有斐閣、2008 年）小宮山宏ほか『サスティナビリティー学』（東大出版会、2011 年)OECD *Sustainable Development* (2008)など	授業への貢献と授業中の小テスト（40%）・定期試験（60%）

13 年度以降（春）	社会経済史 a	担当者	新井　孝重

講義目的、講義概要	授業計画
◎中世の人々の暮らしの中に、宗教が色濃く影を落とした時代であったといわれている。この講座では、平安末期の源平争乱で焼け落ちた東大寺と、これを再建した勧進聖重源の活動を観ることによって、中世社会に果たした仏教の役割を考えたい。 （1）　東大寺を再建した男 （2）　重源の時代 （3）　信仰と経済	①　炎上する東大寺 ②　誰の力に頼るか ③　重源の業績 ④　木材をどこから運ぶか ⑤　出現した大群衆 ⑥　雨を突いて伊勢へ ⑦　重源の記憶 ⑧　法然と重源 ⑨　合戦の中の黒田荘（くろだのしょう） ⑩　天変地妖（てんぺんちよう）と飢餓・疫癘（えきれい） ⑪　源平合戦の余燼 ⑫　聖の社会事業 ⑬　新しい経済社会の出現 ⑭　後生の約束 ⑮　「荘園」外の経済
テキスト、参考文献	**評価方法**
新井孝重『黒田悪党たちの中世史』（NHK ブックス） （教科書を必ず携えて授業にのぞむこと） 参考文献　拙著『楠木正成』（吉川弘文館）	試験成績(100%)による。

13 年度以降（秋）	社会経済史 b	担当者	新井　孝重

講義目的、講義概要	授業計画
◎　中世は一揆の時代であるとも言われている。本講座では伊賀国の黒田荘に展開した中世後期の村の自治生活を、敵対する戦国大名の動きとの関係で観察する。地域自治とは何か、という問題を通じて民主主義の基礎を歴史的に考えたい。 （1）　戦乱の中の伊賀 （2）　自立する村 （3）　戦国のコンミューン	①　伊賀国の南北朝内乱 ②　錯綜する地侍の行動 ③　大規模な合戦は続けられない ④　国人領主の出現 ⑤　自立する村 ⑥　南都への志向 ⑦　悪党たち、起請文を提出 ⑧　タテの力とヨコの力 ⑨　惣国のコンミューン ⑩　内部の規律と「平和」 ⑪　織田信長軍、伊賀へ侵攻 ⑫　崩れ去る惣国・中世の黄昏 ⑬　兵農分離と石高制 ⑭　中世民衆の共同体をどうみるか ⑮　荘園史のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
新井孝重『黒田悪党たちの中世史』（NHK ブックス） （教科書を必ず携えて授業にのぞむこと） 参考文献　拙著『楠木正成』（吉川弘文館）	試験成績(100%)による。

13 年度以降（春）	地球環境論 a	担当者	中村　健治

講義目的、講義概要	授業計画
人間活動を支える自然環境について、自然そのものにある短期、長期、そして広域、局域での変動の様相をとその機構についての基礎知識を得てもらいます。特に気候システムの重要な要素の一つでありかつ人間社会そして生態系にとって重要な水循環の実態とその変動機構について講義します。 地球の歴史から始まり、地球の大気海洋の構造について講義する。次に人間の住む地球の特異性のもとになる水の存在とその循環について述べる。そしてより具体的かつ身近な気象として日本の気象・気候について説明します。	1. 講義概要 2. 地球環境の形成　－宇宙と地球、地球の歴史－ 3. 気候変化と人間の歴史 4. 地球大気の構造 5. 海洋の構造 6. 海洋の生物活動　－海洋基礎生産－ 7. 植生 8. 炭素循環 9. 水循環 10. アジアモンスーン－ 11. 水循環の実態　－雪氷域、極域、氷河と温暖化－ 12. 日本の気象と気候　－四季と典型的天気構造－ 13. 日本の気象と気候　－集中豪雨とリスク管理 14. エネルギー論（１） 15. エネルギー論（２）
テキスト、参考文献	**評価方法**
参考文献：「水の環境学」清水裕之/檜山哲哉/河村則行編），名古屋大学出版会，2011.	２回程度行う小テスト（30%）、参加状況（30%）と試験（40%）で評価します。

13 年度以降（秋）	地球環境論 b	担当者	中村　健治

講義目的、講義概要	授業計画
地球環境の実態とオゾンホールや地球温暖化に現れる人為的気候改変の実態を基礎として地球が有限であることを理解してもらいます。さらに現在の結果がどのような研究から得られているかを理解し、批判的に考える基礎を身につけてもらいます。 実例として土地利用、オゾンホール、地球温暖化について説明します。地球温暖化懐疑論についても述べ、ます。また地球規模での観測の主力となっている衛星観測について説明し、地球規模での環境の監視の実態について理解してもらいます。	1. 講義概要 2. 植生と陸面過程　－植生分布、気温、降水量－ 3. 土地利用と気候　－世界の土地利用、土地利用変化と気候－ 4. 大気の質 5. オゾンホール　－歴史と大気化学－ 6. オゾンホール　－フロン排出規制に至った道－ 7. 地球温暖化　－温暖化の基本と温室効果ガス－ 8. 地球温暖化　－実測と予測、IPCCの活動－ 9. 地球温暖化　－炭酸ガス要因懐疑論－ 10. 地球温暖化　－気候エンジニアリング－ 11. 衛星リモートセンシング　－地球環境の「見える化」 12. 衛星リモートセンシング　－衛星観測の概要－ 13. 衛星リモートセンシング　－衛星観測の原理－ 14. 衛星リモートセンシング　－衛星による世界の降水分布－ 15. 複雑系としての地球環境　－複雑系とは－
テキスト、参考文献	**評価方法**
	２回程度行う小テスト（30%）、参加状況（30%）と試験（40%）で評価します。

13 年度以降（春）	資源・エネルギー経済論 a	担当者	鈴木　滋

講義目的、講義概要	授業計画
我々人類はこの２１世紀において、地球環境問題に直面し、そして国際社会の持続可能な発展のために、将来に亘って安全で、安定的かつ効率的に供給可能な資源・エネルギーの選択を迫られている。このような状況を踏まえて、資源・エネルギーを経済的に考察し、更に地球環境・国際社会との関連性についても理解と解析する能力を養うことを目的とする。 本講義では、我々の生活と産業の基盤である資源・エネルギーとは何かに論点を置いて、その分類、資源量、コスト、国内外の利用形態・需給事情等について紹介し、基礎的な知識の習得を図る。また、薪炭から石炭、石油、ウラン（原子力）などへのエネルギー資源の変遷や環境配慮型の再生可能エネルギーなどについて検討し、枯渇性資源の環境への影響にも言及する。	1. オリエンテーション：授業概要等の説明 2. 資源・エネルギーとは何か？ 3. 資源とエネルギー資源との相違 4. エネルギー資源等の分類 5. エネルギー資源等の資源量 6. エネルギー資源等のコスト・国内外の利用形態 7. エネルギー資源の変遷 8. エネルギー資源の国内事情（需要と供給等） 9. エネルギー資源の海外事情（需要と供給等） 10. エネルギー利用と地球環境問題 11. エネルギー利用と環境技術・経済 12. 再生可能エネルギーの環境配慮と経済 13. 枯渇性資源と環境・経済 14. 資源・エネルギー経済と国際社会 15. まとめ 備考：授業の進度により若干の変更がある
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：特に指定しない。必要に応じてプリントを配布する。 **参考文献：**講義内容によって、適時指示する。	基本的には定期試験の結果（100%）による。

13 年度以降（秋）	資源・エネルギー経済論 b	担当者	鈴木　滋

講義目的、講義概要	授業計画
我々人類はこの２１世紀において、地球環境問題に直面し、そして国際社会の持続可能な発展のために、将来に亘って安全で、安定的かつ効率的に供給可能な資源・エネルギーの選択を迫られている。このような状況を踏まえて、資源・エネルギーを経済的に考察し、更に地球環境・国際社会との関連性についても理解と解析する能力を養うことを目的とする。 本講義では、資源・エネルギー問題と環境・経済との関係について学習する。資源・エネルギー問題については、国内外の事例を多数紹介すると共に、資源・エネルギーの開発に伴う環境と経済成長、エネルギー資源の選択と配分・市場経済、新エネルギーと社会構造変化・経済予測、さらに、核燃料サイクルと社会的共通資本も含めた経済的側面などについて検討する。	1. オリエンテーション：授業概要等の説明 2. 資源・エネルギー問題各論(1)：薪炭・石炭 3. 資源・エネルギー問題各論(2)：石油・天然ガス等 4. 資源・エネルギー問題各論(3)：原子力 5. 資源・エネルギー問題各論(4)：再生可能エネルギー(I) 6. 資源・エネルギー問題各論(5)：再生可能エネルギー(II) 7. 資源・エネルギー問題各論(6)：省エネルギー 8. 資源・エネルギー問題各論(7)：エネルギー資源以外の主な資源 9. 資源・エネルギー開発と環境・経済成長 10. エネルギー資源の選択と配分 11. エネルギー資源の選択と市場経済 12. 新エネルギーと社会構造変化・経済予測 13. 核燃料サイクルと経済 14. 資源・エネルギー・環境と社会的共通資本 15. まとめ 備考：授業の進度により若干の変更がある
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：特に指定しない。必要に応じてプリントを配布する。 **参考文献：**講義内容によって、適時指示する。	基本的には定期試験の結果（100%）による。

13 年度以降(春)	経済地誌 a	担当者	飯嶋　曜子

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は、統合が進展するヨーロッパにおける各地域の現状を把握することを目的とする。まず、ヨーロッパ地誌やＥＵの制度や歴史に関する基礎的な知識を習得する。そのうえで、特に EU の共通農業政策と、地域政策（構造政策）に焦点を当て、統合がヨーロッパの地域に与える影響や、ＥＵと各地域との関係について考察していく。 ＊注意 本講義は、ドイツ語学科の専門講義科目と、全学共通カリキュラムの全学総合科目との合併科目です。そのため、ドイツ語による資料を利用する場合もあります。	1. ヨーロッパとは何か 2. EU と地域 3. EU の制度 4. EU の機能 5. ＥＵの政策 6. ＥＵの形成・発展過程(1) 7. EU の形成・発展過程(2) 8. EU の形成・発展過程(3) 9. EU の東方拡大(1) 10. EU の東方拡大(2) 11. EU の農業政策(1) 12. EU の農業政策(2) 13. EU の構造政策(1) 14. EU の構造政策(2) 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
地図帳を毎回持参すること テキストは指定しない	レポートもしくは試験により評価

13 年度以降(秋)	経済地誌 b	担当者	飯嶋　曜子

講義目的、講義概要	授業計画
本講義は、ドイツの地域や都市の構造とその変容を把握することを目的とする。特に、ドイツ再統一、ヨーロッパ統合の深化と拡大、地方分権型国家、という三つの側面に光を当てて具体的な事例をもとに明らかにしていく。 ＊注意 本講義は、ドイツ語学科の専門講義科目と、全学共通カリキュラムの全学総合科目との合併科目です。そのため、ドイツ語による資料を利用する場合もあります。	1. 導入：ドイツの地域・都市 2. ドイツ再統一（1）：ベルリンの地政学 3. ドイツ再統一（2）：社会主義的都市の構造 4. ドイツ再統一（3）：東ドイツの地方都市 5. ドイツ再統一（4）：冷戦後の旧東ドイツ都市 6. ドイツ再統一（5）：プレンツラウアー・ベルク 7. ドイツ再統一（6）：ポツダム広場 8. ヨーロッパ統合（1）：EU とドイツ 9. ヨーロッパ統合（2）：統合と地域間格差 10. ヨーロッパ統合（3）：EU の構造政策、都市政策 11. ヨーロッパ統合（4）：ユーロリージョン 12. 地方分権（1）：多極分散型国家 13. 地方分権（2）：空間整備政策 14. 地方分権（3）：都市計画 15. まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
地図帳を毎回持参すること テキストは指定しない	レポートもしくは試験により評価

		担当者	

講義目的、講義概要	授業計画

テキスト、参考文献	評価方法

13 年度以降	情報メディア論	担当者	福田　求

講義目的、講義概要	授業計画
【目的】インターネット、そしてその上で展開されたさまざまなサービス（メールやウェブ、あるいは昨今の SNS など）によって、大量かつ多様な情報がやりとりされたり蓄積されたりしてきた。電子的な通信メディアや記録メディアによって世界中の人々がコミュニケーションを行っているのである。しかし、情報を媒介するものは電子的なものに限らない。たとえば従来の図書や雑誌といった印刷メディアは簡単に思いつくことができるが、そのほかにどのようなメディアが存在するのだろうか。この授業では情報の「乗り物」であるメディアの体系を理解することを目的とする。また、情報の発信、収集、交換といったメディアの利活用についても関連するトピック（学校教育／図書館など）とともに学習する。 【概要】はじめに、現在までのメディアの発達と変化について検討し、現代社会が高度情報社会であることを確認する。また，メディアの分類およびそれぞれの特性について学習し、目的や状況（例：学校教育／図書館）に応じてどのようなメディアを選択すべきかを考察する。次に、情報の発信、収集、交換という３つの情報利用行動をとりあげ、それぞれの具体的なあり方を実際のメディアを用いた演習を通して理解する。そして、メディアの取り扱いについて注意すべき点を、有害性／安全性や著作権との関わりから議論し、最後に授業全体のまとめを行う。	1. 講義の概要 2. メディアの種類；高度情報社会；学校教育 3. メディアとコンピュータネットワーク 4. メディアによる情報の発信（1）ウェブの標準技術(HTTP、URI、HTML)を例として 5. メディアによる情報の発信（2）ハイパーテキスト再考 6. メディアによる情報の交換:コミュニケーションの場としてのインターネット 7. 前半のまとめ：メディアを利用した情報の発信と交換、質疑応答 8. データベースと情報検索（1）：情報収集の例として 9. データベースと情報検索（2）：簡単な検索式の作成 10. インターネットにおける情報の検索 11. 獨協大学図書館を通じて利用できる多様なデータベース；教育／学習への応用 12. 情報検索以外の情報収集：SNS、RSS など 13. 取り扱いに注意すべき情報：有害情報、個人情報 14. メディアと著作権（学校教育関連事項を含む） 15. まとめ：これからのメディアの利活用；質疑応答

テキスト、参考文献	評価方法
適宜紹介する。授業の性格上、印刷メディアのみでなく電子メディアを多数紹介する。	期末レポート（50%）。平常授業における課題レポートなどの実績（50%）。

13 年度以降（春）	英語ビジネス・コミュニケーション（火３）	担当者	海老沢　達郎

講義目的、講義概要	授業計画
国際化時代にあって、異文化諸国とのビジネス・コミュニケーションを円滑にし、国際ビジネスを成功させ、誤解から生ずる摩擦を起こさせないための手段として、国際語としての英語の重要性は極めて高い。しかし、学生の大半が大学を卒業しても簡単なビジネス英文レター（メール）さえ書けないのが現状である。簡単なビジネスレターやメールを英語で書けたらどんなに素晴らしいことでしょう。**「英語ビジネス・コミュニケーション」**とあるように、**「英語＋ビジネス＋コミュニケーション」**の三つの学問を同時に行う奥の深い学問です。ビジネス英語に馴染みのない初心者に、英文 **Business Writing の基本を分かりやすく解説し、指導していきます。** 具体的に講義を説明します。本講義では英文貿易通信の基本を、テキストを使用して、取引関係の樹立から成立・履行・求償・解決までを講義し、基本的なビジネスレターの書き方を指導する。また、就職活動に必要な英文履歴書とカバーレターの書き方を分かりやすく講義いたします。 **水曜３限の英語ビジネス・コミュニケーションを同時に履修すると、半期で１年分の英語ビジネス・コミュニケーションが勉強できるように工夫いたしました。また、通年でも同様の勉強ができます。**一緒に勉強しましょう。 受講レベル：TOEIC600 点以上	1. 講義の説明 2. ビジネスレターの形式（「ビジネスレターの構成要素」） 3. ビジネスレターの形式（「スタイル・句読点」）と**練習問題１** 4. 効果的なビジネスレターの書き方（「読みやすさ・明瞭性・簡潔さ・具体性・”You” Attitude・礼儀正しさ」） 5. 効果的なビジネスレターの書き方（「偏見のない言葉の使用･能動態･積極性･Personal Touch」）と**練習問題２** 6. よく使用される表現（その１―「取引の申込み」） 7. よく使用される表現（その２―「引合い」）**練習問題３** 8. よく使用される表現（その３―「オファー」） 9. よく使用される表現（その４―「信用状」）**練習問題４** 10. よく使用される表現（その５―「積出し」） 11. よく使用される表現（その６―「クレーム」） 12. 英文履歴書と英文カバーレターの書き方 13. 英文 Business Writing **実践練習問題（その１）** 14. 英文 Business Writing **実践練習問題（その２）** 15. まとめ 授業計画は大体の目安であり、この通り授業が進むとは限らない。
テキスト、参考文献	**評価方法**
海老沢達郎著 『BUSINESS WRITING　英文ビジネスレター入門』（金星堂、2007 年・2011 年重版） プリント：必要に応じて随時配布する。	学期末の試験（70%）を中心にして、これに小テスト２回（20%）、毎回の授業への貢献度（10%）を参考にして総合的に評価する。尚、欠席は５回までとする。

13 年度以降（秋）	英語ビジネス・コミュニケーション（火３）	担当者	海老沢　達郎

講義目的、講義概要	授業計画
「英文経済記事の読み方」をテーマにして授業を進めていきたい。国際化時代にあって、外国からの経済情報を素早く、しかも正確に得ることは極めて重要なことである。しかし、TOEIC で 900 点を取得しても、英文の経済情報を英字新聞・雑誌・インターネット等で読みこなす英語力はほとんどないのが現状と言ってよいでしょう。英文経済記事をある程度読めたらどんなに素晴らしいことでしょう。**本講義では、「英文経済記事」に馴染みのない学生に、「英語で初歩的な経済記事を読みこなす能力」を養成することを目標とし、分かりやすく、指導していきます。** 具体的に講義を説明します。最初は、日本で発行されている英字新聞等の国内の経済記事を中心として基本的な勉強をしていきます。後半は、「国際経済」を交えて経済記事全般について本格的に勉強していきます。また、随時、授業中に経済用語（例えば、**ヨーロッパの債務危機、TPP**）について分かりやすく解説・説明していきます。 **水曜３限の英語ビジネス・コミュニケーションを同時に履修すると、半期で１年分の英語ビジネス・コミュニケーションが勉強できるように工夫いたしました。また、通年でも同様の勉強ができます。** 受講レベル：TOEIC600 点以上	1. 講義の説明 2.「英字新聞の特徴について（１）」 3.「英字新聞の特徴について（２）」 4.「Headline の読み方実践練習（１）」 5.「Headline の読み方実践練習（２）」 6.「Lead の読み方実践練習（１）」 7.「Lead の読み方実践練習（２）」 8.「Lead の読み方実践練習（３）」 9.「Lead の読み方実践練習（４）」 10.「本格的な経済記事の読み方実践練習（１）」 11.「本格的な経済記事の読み方実践練習（２）」 12.「国際経済記事の読み方実践練習（１）」 13.「国際経済記事の読み方実践練習（２）」 14.「国際経済記事の読み方実践練習（３）」 15. まとめ 授業計画は大体の目安であり、この通り授業が進むとは限らない。
テキスト、参考文献	**評価方法**
プリント使用	学期末の試験（70%）を中心にして、これに小テスト２回（20%）、毎回授業への貢献度（10%）を参考にして総合的に評価する。尚、欠席は５回までとする。

13 年度以降（春）	英語ビジネス・コミュニケーション（水３）	担当者	海老沢　達郎

講義目的、講義概要	授業計画
「英文経済記事の読み方」をテーマにして授業を進めていきたい。国際化時代にあって、外国からの経済情報を素早く、しかも正確に得ることは極めて重要なことである。しかし、TOEIC で 900 点を取得しても、英文の経済情報を英字新聞・雑誌・インターネット等で読みこなす英語力はほとんどないのが現状と言ってよいでしょう。英文経済記事をある程度読めたらどんなに素晴らしいことでしょう。**本講義では、「英文経済記事」に馴染みのない学生に、「英語で初歩的な経済記事を読みこなす能力」を養成することを目標とし、分かりやすく、指導していきます。** 具体的に講義を説明します。最初は、日本で発行されている英字新聞の国内の経済記事を中心として基本的な勉強をしていきます。後半は、「国際経済」を交えて経済記事全般について本格的に勉強していきます。また、随時、授業中に経済用語（例えば、**ヨーロッパの債務危機、TPP**）について分かりやすく解説・説明していきます。 **火曜３限の英語ビジネス・コミュニケーションを同時に履修すると、半期で１年分の英語ビジネス・コミュニケーションが勉強できるように工夫いたしました。また、通年でも同様の勉強ができます。** 受講レベル：TOEIC600 点以上	1. 講義の説明 2.「英字新聞の特徴について（１）」 3.「英字新聞の特徴について（２）」 4.「Headline の読み方実践練習（１）」 5.「Headline の読み方実践練習（２）」 6.「Lead の読み方実践練習（１）」 7.「Lead の読み方実践練習（２）」 8.「Lead の読み方実践練習（３）」 9.「Lead の読み方実践練習（４）」 10.「本格的な経済記事の読み方実践練習（１）」 11.「本格的な経済記事の読み方実践練習（２）」 12.「国際経済記事の読み方実践練習（１）」 13.「国際経済記事の読み方実践練習（２）」 14.「国際経済記事の読み方実践練習（３）」 15. まとめ 授業計画は大体の目安であり、この通り授業が進むとは限らない。
テキスト、参考文献	**評価方法**
プリント使用	学期末の試験（70%）を中心にして、これに小テスト２回（20%）、毎回の授業への貢献度等（10%）を参考にして総合的に評価する。尚、欠席は５回までとする。

13 年度以降（秋）	英語ビジネス・コミュニケーション（水３）	担当者	海老沢　達郎

講義目的、講義概要	授業計画
国際化時代にあって、異文化諸国とのビジネス・コミュニケーションを円滑にし、国際ビジネスを成功させ、誤解から生ずる摩擦を起こさせないための手段として、国際語としての英語の重要性は極めて高い。しかし、学生の大半が大学を卒業しても簡単な英文レター（メール）さえ書けないのが現状である。簡単なビジネスレターやメールを英語で書けたらどんなに素晴らしいことでしょう。**「英語ビジネス・コミュニケーション」**とあるように、**「英語＋ビジネス＋コミュニケーション」**の三つの学問を同時に行う奥の深い学問です。ビジネス英語に馴染みのない初心者に英文 **Business Writing の基本を分かりやすく解説し、指導していきます。** 具体的に講義を説明します。本講義では英文貿易通信の基本を、テキストを使用して、取引関係の樹立から成立・履行・求償・解決までを講義し、基本的なビジネスレターの書き方を指導する。また、就職活動に必要な英文履歴書とカバーレターの書き方を分かりやすく講義いたします。 **火曜３限の英語ビジネス・コミュニケーションを同時に履修すると、半期で１年分の英語ビジネス・コミュニケーションが勉強できるように工夫いたしました。また、通年でも同様の勉強ができます。** 受講レベル：TOEIC600 点以上	1. 講義の説明 2. ビジネスレターの形式（「ビジネスレターの構成要素」） 3. ビジネスレターの形式（「スタイル・句読点」）と**練習問題１** 4. 効果的なビジネスレターの書き方（「読みやすさ・明瞭性・簡潔さ・具体性・”You” Attitude・礼儀正しさ」） 5. 効果的なビジネスレターの書き方（「偏見のない言葉使用・能動態・積極性・Personal Touch」）と**練習問題２** 6. よく使用される表現（その１―「取引の申込み」） 7. よく使用される表現（その２―「引合い」）**練習問題３** 8. よく使用される表現（その３―「オファー」） 9. よく使用される表現（その４―「信用状」）**練習問題４** 10. よく使用される表現（その５―「積出し」） 11. よく使用される表現（その６―「クレーム」） 12. 英文履歴書と英文カバーレターの書き方 13. 英文 Business Writing **実践練習問題（その１）** 14. 英文 Business Writing **実践練習問題（その２）** 15. まとめ 授業計画は大体の目安であり、この通り授業が進むとは限らない。
テキスト、参考文献	**評価方法**
海老沢達郎著『BUSINESS WRITING　英文ビジネスレター入門』（金星堂、2007 年・2011 年重版） プリント：必要に応じて随時配布する。	学期末の試験（70%）を中心にして、これに小テスト２回（20%）、毎回の授業への貢献度（10%）を参考にして総合的に評価する。尚、欠席は５回までとする。

13 年度以降（春）	英語ビジネス・コミュニケーション（木３）	担当者	杉山　晴信

講義目的、講義概要

時系列的な貿易取引の流れに沿って、各取引段階における英語のビジネス通信文（Business　Correspondence）を読解し作成する技術を身につけるとともに、貿易実務に関する基礎知識を幅広く習得することがねらいです。

具体的には、まず、貿易取引の段階ごとに（右記参照）、下記のテキストに収録されているビジネス通信文の内容を詳細に検討します。さらに、それぞれの単元（春学期はUnit1~12）における実務知識、通信文のスケルトン・プラン（skeleton plan）、および専門語彙(technical terms) を学ぶとともに、通信文の読解（英文和訳)と作成（和文英訳）の訓練を行います。

なお、右記の授業計画は、授業の進捗状況によって多少の変更があるかもしれません。

＊注意：　このシラバスは**木曜日3時限**の授業のものです。杉山担当のもう1つの同一名称科目とは内容が異なります。

受講レベル：TOEIC600点以上

授業計画

1. 春学期の授業内容と授業計画を詳しく説明します。
2. ビジネス・コミュニケーションの概念、目的、文体上の特徴、専門語彙などについて詳しく説明します。
3. 「市況」の通信文の読解・作成を行います。
4. 「取引先の発見」の通信文の読解・作成を行います。
5. 「取引の申込み」の通信文の読解・作成を行います。
6. 「信用照会」の通信文の読解・作成を行います。
7. 「引合い」の通信文の読解・作成を行います。
8. 「引合いに対する返事」の通信文の読解・作成を行います。
9. 「オファー」の通信文の読解・作成を行います。
10. 「カウンター・オファー」の通信文の読解・作成を行います。
11. 「注文」の通信文の読解・作成を行います。
12. 「注文の受諾」の通信文の読解・作成を行います。
13. 「注文の謝絶」の通信文の読解・作成を行います。
14. 「成約」の通信文の読解・作成を行います。
15. 春学期の授業の総復習と質疑応答を行います。

テキスト、参考文献

（テキスト）　杉山晴信『英文ビジネス通信実践演習２１講（三訂版)』(三恵社、2013 年）および配布プリント
（参考書）　杉山晴信『貿易実務の英語　ビジネス英文メール　パーフェクトブック』(すばる舎、2009 年)

評価方法

期末試験の結果（概ね 80%の比重）および平常授業における小テストや課題レポートの実績（概ね 20%の比重）を合計して評価します。

13 年度以降（秋）	英語ビジネス・コミュニケーション（木３）	担当者	杉山　晴信

講義目的、講義概要

時系列的な貿易取引の流れに沿って、各取引段階における英語のビジネス通信文（Business　Correspondence）を読解し作成する技術を身につけるとともに、貿易実務に関する基礎知識を幅広く習得することがねらいです。

具体的には、まず、貿易取引の段階ごとに（右記参照）、下記のテキストに収録されているビジネス通信文の内容を詳細に検討します。さらに、それぞれの単元（秋学期はUnit13~21）における実務知識、通信文のスケルトン・プラン(skeleton　plan)、および専門語彙 (technical terms) を学ぶとともに、通信文の読解（英文和訳)と作成（和文英訳）の訓練を行います。

なお、右記の授業計画は、授業の進捗状況によって多少の変更があるかもしれません。

＊注意：　このシラバスは**木曜日３時限**の授業のものです。杉山担当のもう１つの同一名称科目とは内容が異なります。

受講レベル：TOEIC600 点以上

授業計画

1. 秋学期の授業内容と授業計画を詳しく説明します。
2. ビジネス・コミュニケーションの概念、目的、文体上の特徴、専門語彙などについて詳しく説明します。
3. 「信用状の開設と訂正」の通信文の読解・作成を行います。
4. 「海上保険」の通信文の読解・作成を行います。
5. 「輸出手配」の通信文の読解・作成を行います。
6. 「船積み」の通信文の読解・作成を行います。
7. 「輸入手配」の通信文の読解・作成を行います。
8. 「決済」の通信文の読解・作成を行います。
9. 「クレーム」の通信文の読解・作成を行います。
10. 「クレーム調整」の通信文の読解・作成を行います。
11. 「会社社交文」（推薦状）の読解・作成を行います。
12. 「会社社交文」（案内状）の読解・作成を行います。
13. 「会社社交文」（礼状）の読解・作成を行います。
14. 「会社社交文」（見舞状）の読解・作成を行います。
15. 秋学期の総復習と質疑応答を行います。

テキスト、参考文献

（テキスト）　杉山晴信『英文ビジネス通信実践演習２１講（三訂版)』(三恵社、2013 年）および配布プリント
（参考書）　杉山晴信『貿易実務の英語　ビジネス英文メール　パーフェクトブック』(すばる舎、2009 年)

評価方法

期末試験の結果（概ね 80%の比重）および平常授業における小テストや課題レポートの実績（概ね 20%の比重）を合計して評価します。

13 年度以降（春）	英語ビジネス・コミュニケーション（木４）	担当者	杉山　晴信

講義目的、講義概要	授業計画
国際商取引、特に貿易取引を学ぶために必要なことは、端的に言って、「モノ・カネ・カミ」の流れを理解することに尽きます。この授業では、このうちの「カミ」、すなわち各種の英語による貿易関係書類、および関連する英文ビジネス文書(Business Documents) の読解と作成の要領を学びながら、貿易実務の基礎知識を習得します。 具体的には、工業製品 の輸出入を想定して、貿易取引の各段階に登場する代表的な貿易関係書類と関連文書のサンプルを教材に用いて、各々の書類の意義と目的、作成者と提出先、記載事項、読解と作成の注意点など、書類に関する実務的な知識を学びながら貿易取引の流れを理解し、その後で当該書類を実際に読解あるいは作成する実習を行います。春学期は、成約にいたるまでの段階に登場する代表的なビジネス文書として、レター・オブ・インテント（Letter of Intent ; LOI）、スポット売買契約(One-shot Sales Contract) の表面約款と裏面約款、長期売買契約書(Long-term Sales Contract)、取扱説明書(Instruction Manual) などを扱います。 なお、右記の授業計画は、授業の進捗状況によって多少の変更があるかもしれません。 **＊注意**：このシラバスは**木曜日４時限**の授業のものです。 受講レベル：TOEIC600点以上	1. 春学期の授業内容・授業計画を詳しく説明します。 2.-3. LOIの意義と目的や作成上の注意点について説明し実際のサンプルを検討します。 4.-5. 実際の案件に基づき LOI 作成の実習を行います。 6.-8. スポット売買契約書の目的や作成上の注意点について説明し、「表面約款」および「裏面約款（一般取引条件)」の現物のサンプルを検討します。 9-10. 長期売買契約書について説明し、現物のサンプルを「実質条項」を中心に検討します。 11-12. 製造物責任（Product Liability）の観点から英文取扱説明書作成上の注意点について詳しく説明します。 13-14. “Plain English”を用いた取扱説明書作成の方略を検討します。 15. 春学期の授業の総復習と質疑応答を行います。
テキスト、参考文献	**評価方法**
（テキスト）当方で用意するプリント （参考書）杉山晴信『貿易実務の英語　ビジネス英文メール　パーフェクトブック』(すばる舎、2009 年)	期末試験の結果（概ね 80%の比重）および平常授業における小テストや課題レポートの実績（概ね 20%の比重）を合計して評価します。

13 年度以降（秋）	英語ビジネス・コミュニケーション（木４）	担当者	杉山　晴信

講義目的、講義概要	授業計画
国際商取引、特に貿易取引を学ぶために必要なことは、端的に言って、「モノ・カネ・カミ」の流れを理解することに尽きます。この授業では、このうちの「カミ」、すなわち各種の英語による貿易関係書類、および関連する英文ビジネス文書(Business Documents) の読解と作成の要領を学びながら、貿易実務の基礎知識を習得します。 具体的には、工業製品の輸出入を想定して、貿易取引の各段階に登場する代表的な貿易関係書類と関連文書のサンプルを教材に用いて、各々の書類の意義と目的、作成者と提出先、記載事項、読解と作成の注意点など、書類に関する実務的な知識を学びながら貿易取引の流れを理解し、その後で当該書類を実際に読解あるいは作成する実習を行います。秋学期は、履行および決済の段階に登場する代表的なビジネス文書として、商業送り状(Commercial Invoice)、船荷証券（Bill of Lading; B/L）、保険証券（Insurance Policy）等の船積書類、輸出申告書と輸入(納税)申告書、荷為替信用状（Documentary Letter of Credit; L/C）などを扱います。 なお、右記の授業計画は、授業の進捗状況によって多少の変更があるかもしれません。 **＊注意**：このシラバスは**木曜日４時限**の授業のものです。 受講レベル：TOEIC600 点以上	1. 秋学期の授業内容・授業計画を詳しく説明します。 2. 各種の船積書類(Shipping Documents; S/D)の意義と目的、作成上および読解上の注意点等を説明します。 3.-4. 商業送り状のサンプルを検討し、作成する実習を行います。 5.-6. 船荷証券と保険証券のサンプルを検討し、各々の記載事項を読解する実習を行います。 7. 輸出通関および輸入通関について詳しく説明します。 8.-9. 輸出申告書（Export Declaration; E/D）を作成する実習を行います。 10.-11. 輸入(納税)申告書（Import Declaration; I/D）を作成する実習を行います。 12.-14. 荷為替信用状による決済の仕組を詳しく説明し、サンプルを検討しながら信用状の記載事項をチェックする実習を行います。 15 秋学期の授業の総復習と質疑応答を行います。
テキスト、参考文献	**評価方法**
（テキスト）当方で用意するプリント （参考書）杉山晴信『貿易実務の英語　ビジネス英文メール　パーフェクトブック』(すばる舎、2009 年)	期末試験の結果（概ね 80%の比重）および平常授業における小テストや課題レポートの実績（概ね 20%の比重）を合計して評価します。

13 年度以降（春）	英語ビジネス・コミュニケーション（月１）	担当者	信　達郎

講義目的、講義概要	授業計画
目的 ビジネス英語という英語はない。要は、ビジネスの現場で使われる英語（English for business）である。企業に勤務して、痛感することは平均的な英語力の不足で､多忙な業務を通じて英語力伸ばすと言うことはきわめて困難である。やはり、英語力の基本は大学時代に学ぶ必要がある。このコースは、基本的に英語力をつけることをメインにし､最低限度の実務の内容を取り上げる科目である。ビジネスに関しても、自主的に興味を持ち、取り組んでもらう姿勢が求められる。 講義概要 基本的に演習科目で、授業の進め方は、宿題と教科書、それにプリント（英文ビジネスコラム）の３部構成で、参加型の授業である。また、夏休み前の授業では、黒板を使っての演習が多くなる。将来、企業に就職を希望し、ビジネスセンスをすこしでも養いたいと希望する学生を優先する。担当講師自身の、企業を含め長い英語圏での生活経験、それに昔、アメリカでのMBA課程で学んだり､教えたりした経験を生かせればと思う。レベル的には、TOEICの650点、英検の準１級を目標に定めたい。とにかく明るく、楽しいクラスにしたい。積極的な発言歓迎。なお、授業計画はあくまで取り上げる内容の参考で、進行具合などにより変更がありうる。 受講レベル：TOEIC600点以上	下記の授業計画はあくまで暫定的なもので進行状況により変更することがある。 1　ビジネス英語の特徴 2　プリント①（英文ビジネスコラム） 3　国際取引概略Ⅰ 4　プリント② 5　国際取引概略Ⅱ 6　プリント③ 7　引合（inquiry） 8　プリント④ 9　オファーⅠ（offer） 10　プリント⑤ 11　オファーⅡ 12　プリント⑥ 13　プリント⑦ 14　プリント⑧ 15　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストは指定しないが、参考書として以下のものが勧められる。 『マルチトピックのビジネス英語』信 達郎他、南雲堂 フェニックス､『ビジネスレターが書ける英単語・例文辞典』、 信 達郎著、南雲堂フェニックス	受講姿勢 25%、発表／リサーチレポート 25%、ペーパーテスト 50%。

13 年度以降（秋）	英語ビジネス・コミュニケーション（月１）	担当者	信　達郎

講義目的、講義概要	授業計画
目的 ビジネス英語という英語はない。要は、ビジネスの現場で使われる英語（English for business）である。企業に勤務して、痛感することは平均的な英語力の不足で､多忙な業務を通じて英語力伸ばすと言うことはきわめて困難である。やはり、英語力の基本は大学時代に学ぶ必要がある。このコースは、基本的に英語力をつけることをメインにし､最低限度の実務の内容を取り上げる科目である。ビジネスに関しても、自主的に興味を持ち、取り組んでもらう姿勢が求められる。 講義概要 基本的に演習科目で、授業の進め方は、宿題と教科書、それにプリント（英文ビジネスコラム）の３部構成で、参加型の授業である。将来、企業に就職を希望し、ビジネスセンスをすこしでも養いたいと希望する学生を優先する。担当講師自身の、企業を含め長い英語圏での生活経験、それに昔、アメリカでのMBA課程で学んだり､教えたりした経験を生かせればと思う。レベル的には、TOEICの650点、英検の準１級を目標に定めたい。とにかく明るく、楽しいクラスにしたい。積極的な発言歓迎。なお、授業計画はあくまで取り上げる内容の参考で、進行具合などにより変更がありうる。 受講レベル：TOEIC600点以上	下記の授業計画はあくまで暫定的なもので進行状況により変更することがある。 1　契約１（contract） 2　プリント⑦ 3　契約Ⅱ 4　プリント⑧ 5　クレームⅠ（claim） 6　プリント⑨ 7　クレームⅡ 8　プリント⑩ 9　企業内組織の英語 10-15　プレゼンテーションの実習 授業と平行して、10 月下旬からはリサーチペーパーの作成を予定。
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストは指定しないが、参考書として以下のものが勧められる。 『マルチトピックのビジネス英語』信 達郎他、南雲堂 フェニックス､『ビジネスレターが書ける英単語・例文辞典』、 信 達郎著、南雲堂フェニックス	受講姿勢 25%、発表／リサーチレポート 25%、ペーパーテスト 50%。

13 年度以降（春）	英語ビジネス・コミュニケーション（月 2）	担当者	信　達郎

講義目的、講義概要	授業計画
目的 ビジネス英語という英語はない。要は、ビジネスの現場で使われる英語（English for business）である。企業に勤務して、痛感することは平均的な英語力の不足で､多忙な業務を通じて英語力伸ばすと言うことはきわめて困難である。やはり、英語力の基本は大学時代に学ぶ必要がある。このコースは、基本的に英語力をつけることをメインにし､最低限度の実務の内容を取り上げる科目である。ビジネスに関しても、自主的に興味を持ち、取り組んでもらう姿勢が求められる。 講義概要 基本的に演習科目で、授業の進め方は、宿題と教科書、それにプリント（英文ビジネスコラム）の３部構成で、参加型の授業である。また、夏休み前の授業では、黒板を使っての演習が多くなる。将来、企業に就職を希望し、ビジネスセンスをすこしでも養いたいと希望する学生を優先する。担当講師自身の、企業を含め長い英語圏での生活経験、それに昔、アメリカでのMBA課程で学んだり､教えたりした経験を生かせればと思う。レベル的には、TOEICの650点、英検の準１級を目標に定めたい。とにかく明るく、楽しいクラスにしたい。積極的な発言歓迎。なお、授業計画はあくまで取り上げる内容の参考で、進行具合などにより変更がありうる。 受講レベル：TOEIC600点以上	下記の授業計画はあくまで暫定的なもので進行状況により変更することがある。 1　ビジネス英語の特徴 2　プリント①（英文ビジネスコラム） 3　国際取引概略Ⅰ 4　プリント② 5　国際取引概略Ⅱ 6　プリント③ 7　引合（inquiry） 8　プリント④ 9　オファーⅠ（offer） 10　プリント⑤ 11　オファーⅡ 12　プリント⑥ 13　プリント⑦ 14　プリント⑧ 15　まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストは指定しないが、参考書として以下のものが勧められる。 『マルチトピックのビジネス英語』信 達郎他、南雲堂 フェニックス､『ビジネスレターが書ける英単語・例文辞典』、 信 達郎著、南雲堂フェニックス	受講姿勢 25%、発表／リサーチレポート 25%、ペーパーテスト 50%。

13 年度以降（秋）	英語ビジネス・コミュニケーション（月 2）	担当者	信　達郎

講義目的、講義概要	授業計画
目的 ビジネス英語という英語はない。要は、ビジネスの現場で使われる英語（English for business）である。企業に勤務して、痛感することは平均的な英語力の不足で､多忙な業務を通じて英語力伸ばすと言うことはきわめて困難である。やはり、英語力の基本は大学時代に学ぶ必要がある。このコースは、基本的に英語力をつけることをメインにし､最低限度の実務の内容を取り上げる科目である。ビジネスに関しても、自主的に興味を持ち、取り組んでもらう姿勢が求められる。 講義概要 基本的に演習科目で、授業の進め方は、宿題と教科書、それにプリント（英文ビジネスコラム）の３部構成で、参加型の授業である。将来、企業に就職を希望し、ビジネスセンスをすこしでも養いたいと希望する学生を優先する。担当講師自身の、企業を含め長い英語圏での生活経験、それに昔、アメリカでのMBA課程で学んだり､教えたりした経験を生かせればと思う。レベル的には、TOEICの650点、英検の準１級を目標に定めたい。とにかく明るく、楽しいクラスにしたい。積極的な発言歓迎。なお、授業計画はあくまで取り上げる内容の参考で、進行具合などにより変更がありうる。 受講レベル：TOEIC600点以上	下記の授業計画はあくまで暫定的なもので進行状況により変更することがある。 1　契約１（contract） 2　プリント⑦ 3　契約Ⅱ 4　プリント⑧ 5　クレームⅠ（claim） 6　プリント⑨ 7　クレームⅡ 8　プリント⑩ 9　企業内組織の英語 10-15　プレゼンテーションの実習 授業と平行して、10 月下旬からはリサーチペーパーの作成を予定。
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキストは指定しないが、参考書として以下のものが勧められる。 『マルチトピックのビジネス英語』信 達郎他、南雲堂 フェニックス､『ビジネスレターが書ける英単語・例文辞典』、 信 達郎著、南雲堂フェニックス	受講姿勢 25%、発表／リサーチレポート 25%、ペーパーテスト 50%。

13 年度以降（春）	環境ビジネス論 a	担当者	山根　一眞

講義目的、講義概要	授業計画
授業目的: 私たちの文明は、人類史上経験したことのないほど豊かな繁栄を実現しました。しかし、その文明のありようは危機的な破綻を始めています。豊かさを維持しながら持続可能な発展を続けていくためには、まったく新しい環境を基軸にした経済システムを構築していく必要があります。それは、私たちにとってまったく新しい、わくわくするような挑戦です。1997 年、私は、ジャーナリストとしてこの問題を取材する一方で、環境を基軸にした新しい産業革命「環業革命」を提唱、国内外でその実現を訴えてきました。講義では、この環業革命をふまえながら、幅広く科学・技術分野での熱い挑戦を伝えます。 授業概要: 授業では、40 年にわたってジャーナリストとして世界各国、日本各地で取材を続けてきた映像や写真記録を投影しながら進め、「実感」をもって環境ビジネスの世界を学ぶことを目指します。また、最新の取材成果も授業で報告します。	授業計画: (以下の内容を含めますが順序は変更があります) 01. 恐竜絶滅から哺乳類、人類時代と地球環境 02. 5300 年前のミイラ「アイスマン」と火 02. 蒸気機関が世界経済を変えた産業革命 04. 石油発見とアメリカの大物企業家たち 05. T型フォードで始まった自動車文明 06. 鉄 --- アマゾン巨大鉱山から製鉄所への旅 07. 地球温暖化危機と 1992 年リオ地球サミット 08. 崩壊する氷河と北極の異変 09. 見舞い始めた巨大気象災害の時代 10. プリウスとガソリンスタンドの経営危機 11. 独自取材映像による原子力発電所 12. 世界取材で知った自然エネルギーの挑戦と限界 13.「省エネ」という大イノベーション 14. まったく新しいエネルギー技術への道 15. 企業が進むべき環業革命への道

テキスト、参考文献	評価方法
『環業革命』（山根一眞著・講談社・大学内丸善書店に在庫あり） 『文庫版・メタルカラーの時代 14・クールアースの創世記』（山根一眞著・小学館） 『メタルカラー烈伝 温暖化クライシス』（山根一眞著・小学館）	レポート

13 年度以降（秋）	環境ビジネス論 b	担当者	山根　一眞

講義目的、講義概要	授業計画
授業目的: 春学期に準じます。 授業概要: 春学期に準じます。	授業計画 : 授業には、最新の取材成果を取り入れているため、新しいテーマが随時、追加されます。

テキスト、参考文献	評価方法
春学期に準じます。	春学期に準じます。

13 年度以降（春）	国際公共政策論 a	担当者	木原　隆司

講義目的、講義概要	授業計画
（講義目的）国際公共政策論では、一国のみでは解決困難な経済社会問題に対して、より良い状況を生み出すために各国が広域的・地球規模で協力して行うべき政策・機関・枠組みの形成等について学びます。 国際相互依存が高まり制度・政策の調整が必要な現在、「国際公共政策論 a」では、国際公共政策に応用可能な国際政治、国際経済、公共財、経済成長などの基礎理論を学んだ上で、国際経済政策・政策協調の態様を、国際経済協力・貿易・通貨金融・環境などの普遍的・地域的国際機関や協力の枠組みに焦点をあてながら検討します。 **（講義概要）**講義形式。ただし学生への質疑応答を重視します。国際公共政策の策定・評価に用いる経済理論を復習した上で、国際公共政策の核となっている国際機関の一般的な態様について学習します。その後、貿易・通貨金融・環境など個別の国際公共政策を形成している国際機関・協力の枠組みについて学びます。担当教員の実務経験を踏まえた講義とします。	授業計画 第１回：イントロダクション 第２回：国際政治と国際公共政策 第３回：マクロ経済学と国際公共政策（国際金融論等） 第４回：ミクロ経済学と国際公共政策（国際貿易論等） 第５回：経済成長理論と国際公共政策（開発援助論等） 第６回：国際政策協調と国際機関（国際相互依存等） 第７回：国際機関概説（分類・設立動因等） 第８回：国際機関の構造・機能・意思決定 第９回：国際公共財としての国際機関 第 10 回：国際経済協力の枠組み（G20 、ASEAN+3 等） 第 11 回：貿易面の国際協調（1）（WTO 等） 第 12 回：貿易面の国際協調(2)（FTA,等） 第 13 回：通貨・金融面の国際協調(1)（IMF 等） 第 14 回：通貨・金融面の国際協調(2)（CMI、ABMI 等） 第 15 回：持続可能な成長のための国際協調（GEF 等）
テキスト、参考文献	**評価方法**
特定のテキストは用いず、授業の各回に講義のレジメを配布する/参考文献：最上敏樹『国際機構論』、横田洋三『新国際機構論』、橋本他『国際金融論をつかむ』ほか	講義への貢献（20%）、中間レポート（２０%）、定期試験（60%）により評価します。

13 年度以降（秋）	国際公共政策論 b	担当者	木原　隆司

講義目的、講義概要	授業計画
（講義目的）国際公共政策論では、一国のみでは解決困難な経済社会問題に対して、より良い状況を生み出すために各国が広域的・地球規模で協力して行うべき政策・機関・枠組みの形成等について学びます。 アジアなど新興国が高成長を示す一方、途上国間の格差が大きくなる中、「国際公共政策論 b」では、国際公共政策の一つである開発援助に焦点を当て、開発途上国の実態、近年の国際援助潮流、ドナー間の援助協調、地球環境保全などのための国際公共財援助、内戦の経済効果と紛争後支援、東アジアへの高齢化対策支援、我が国援助の開発効果などを詳細に検討します。 **（講義概要）** 講義形式。ただし学生への質疑応答を重視します。 開発援助の概念・基礎を説明した上で、開発援助協力の各トピックについて、理論・実証結果・援助実態を理解できるようバランスよく講義します。担当教員の実務経験を踏まえた講義とします。	授業計画 第１回：開発援助概観（1）（開発途上国・開発援助って何？） 第２回：開発援助概観（2）（開発援助アキテクチュア等） 第３回：開発援助の新潮流（1）（制度政策環境の重視等） 第４回：開発援助の新潮流（2）（脆弱国支援、債務問題等） 第５回：援助協調の政治経済学（1）（援助動機、協調の理論等） 第６回：援助協調の政治経済学（2）（援助協調の実態等） 第７回：国際公共財援助（1）（国際公共財援助の理論等） 第８回：国際公共財援助（2）（地球環境、GMS 等） 第９回：内戦の開発経済学と紛争後支援（1）（理論等） 第 10 回：内戦の開発経済学と紛争後支援（2）（実証等） 第 11 回：高齢化する東アジア（1）（現状・要因、影響等） 第 12 回：高齢化する東アジア（2）（金融市場・協力等） 第 13 回：援助効果（1）（援助と成長、短期成長促進援助） 第 14 回：援助効果（2）（援助の拡散・細分化等） 第 15 回：まとめ、援助を巡る国際政治と経済
テキスト、参考文献	**評価方法**
テキスト：木原隆司『援助ドナーの経済学』2010 年（授業の各回に講義のレジメを配布します） 参考文献：**西垣他『開発援助の経済学』（第 4 版）2009 年**	講義への貢献（20%）、中間レポート（20%）、定期試験（60%）により評価します。

13 年度以降（春）	国際開発論 a	担当者	木原　隆司

講義目的、講義概要	授業計画
（講義目的）国際開発論では、開発経済学のみならず開発社会学・開発政治学等を用いて経済発展に伴う開発課題を分析し、持続可能（Sustainable）ですべての人々にその恩恵が行き渡る（Inclusive）開発のための戦略・政策を検討することにより、開発途上国の経済・社会・制度上の問題と処方箋を包括的に理解します。 「国際開発論 a」では、貧困・ガバナンス・社会開発などの開発問題に対する経済学、政治学、社会学等のアプローチ手法を学ぶとともに、これらの理論や実証分析を基に、成長、貧困、格差、制度、財政、金融、資金フローなどのマクロ経済的な開発課題を検討します。 **（講義概要）**講義形式。ただし学生への質疑応答を重視します。開発途上国の概要を学んだ上で、国際開発論への経済学・政治学・社会学からのアプローチを検討し、途上国の成長・貧困・マクロ経済政策・国際金融への適用を学びます。担当教員の実務経験を踏まえた講義とします。	授業計画 第１回：　イントロダクション 第２回：開発途上国とは（一人当たり GDP,人口等） 第３回：国際開発論とは－開発経済学からのアプローチ (1) 第４回：国際開発論とは－開発経済学からのアプローチ (2) 第５回：国際開発論とは－開発政治学からのアプローチ 第６回：国際開発論とは－開発社会学からのアプローチ 第７回：経済成長論（１）（新古典派成長理論等） 第８回：経済成長論（２）（内生的成長理論等） 第９回：貧困と格差(1)（所得分配（ジニ係数）等） 第 10 回：貧困と格差(2)（クズネッツの逆 U 字等） 第 11 回：　マクロ経済・財政・金融システムと開発（1） 第 12 回：マクロ経済・財政・金融システムと開発（2） 第 13 回：国際金融と開発（1）（国際収支等） 第 14 回：国際金融と開発（2）（対外債務等） 第 15 回：まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
特定のテキストは用いず、授業の各回に講義のレジメを配布します/　参考文献:大坪等『国際開発学入門』、Todaro & Smith *Economic Development* ほか	講義への貢献（20%）、中間レポート（20%）、定期試験（60%）により評価します。

13 年度以降（秋）	国際開発論 b	担当者	木原　隆司

講義目的、講義概要	授業計画
（講義目的）国際開発論では、開発経済学のみならず開発社会学・開発政治学等を用いて経済発展に伴う開発課題を分析し、持続可能（Sustainable）ですべての人々にその恩恵が行き渡る（Inclusive）開発のための戦略・政策を検討することにより、開発途上国の経済・社会・制度上の問題と処方箋を包括的に理解します。 「国際開発論 b」では、人口動態・都市化、農業・産業化、教育、医療保健、労働、人的資本、貿易・投資など社会セクターや開発のミクロ経済的側面のほか、環境（持続可能な開発）、紛争（内戦）、開発政策と援助などについて検討します。 **（講義概要）**講義形式。ただし学生への質疑応答を重視します。国際開発論への経済学・政治学・社会学からのアプローチを復習した後、途上国の人口動態、産業構造、人的資本、環境、貿易・投資問題への適用を学び、最後に持続可能な開発政策・援助政策を検討します。担当教員の実務経験を踏まえた講義とします。	授業計画 第１回：　イントロダクション 第２回：国際開発論へのアプローチ（前期の復習） 第３回：人口動態・都市化と開発（1）（人口転換等） 第４回：人口動態・都市化と開発（2）（人口移動等） 第５回：農業・産業化と開発（二重構造経済発展等） 第６回：人的資本と開発（1）（教育、ジェンダー等） 第７回：人的資本と開発（2）（保健・医療等） 第８回：環境と開発（1）（持続可能な開発等） 第９回：環境と開発（2）（都市環境、地球温暖化等） 第 10 回：貿易・投資と開発（1）（貿易構造等） 第 11 回：貿易・投資と開発（2）（直接投資等） 第 12 回：紛争と開発（内戦の開発経済学等） 第 13 回：開発政策の策定（開発戦略、MDB s 等） 第 14 回：開発援助の役割と効果（ODA 等） 第 15 回：まとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
特定のテキストは用いず、授業の各回に講義のレジメを配布します/　参考文献：大坪等『国際開発学入門』、Todaro&Smith *Economic Development* ほか	講義への貢献（20%）、中間レポート（20%）、定期試験（60%）により評価します。

13 年度以降（春）	開発社会学	担当者	北野　収

講義目的、講義概要	授業計画
グローバルとローカルなものの対抗・交渉は現代の地球社会を考える重要な視座の１つです。 近年、alternative（もう１つの）という言葉を時々耳にします。グローバル化の進展に対抗するように、ローカルな文化や環境を重視したもう１つの動きが内発的な発展として世界各地で活発化してきています。 この講義は、開発文化論として、グローバル化と国民国家に翻弄される伝統社会・文化と社会的弱者達の変容と反応について考えます。講義される事例は、担当教員の調査研究の成果であるメキシコ南部の先住民族に関するものが中心となりますが、地域研究ではなく、アジアその他の地域の事例も適宜交え、より普遍的な視点から、発展途上地域の開発問題について考察します。 開発と貧困、ジェンダー、教育、宗教、先住民族の権利、構造的暴力と民衆、ＮＧＯや協力する者の立場といった話題を、現場の事例をみながら考えてきます。 （参考文献） W.ザックス『脱「開発」の時代』、N.ローツェン他『フェアトレードの冒険』、J.フリードマン『市民・政府・ＮＧＯ』、P.フレイレ『被抑圧者の教育学』、B.トムゼン『女の町フチタン』、H.ノーバーグホッジ『ラダック：懐かしい未来』、S.ラトゥーシュ『経済成長なき社会発展は可能か？』、北野収『国際協力の誕生』	１．講義の概要 ２．豊かさの指標：開発とは何か、貧困とは何か ３．近代化と文化変容（ビデオ『懐かしい未来』） ４．貧者と共に生きる：フェアトレード誕生秘話 ５．教育・学び・文化 ６．ジェンダーとフェミニズム ７．宗教と社会開発 NGO ８．ローカルメディアとアイデンティティ戦略 ９．開発ワーカーと異文化適応※教室内ワークショップ 10. 開発は自分たちの手で（ビデオ『グラミン銀行』予定） 11. 新自由主義・構造調整と農民・先住民の自己防衛 12. 巨大開発計画と地域住民・NGO 13. 貧者と人間の尊厳（ビデオ『セバスチャン・サルガド（「アフリカ」等で知られる写真家）』予定） 14. 日本の開発経験：生活改善運動と一村一品運動から 15. まとめ、試験対策
テキスト、参考文献	**評価方法**
（テキスト）北野収『南部メキシコの内発的発展と NGO』勁草書房。※DUO 等で各自購入してください （参考文献）上欄を参照。	期末試験（70%）、学期中課題（30%）、授業貢献（＋α）。

		担当者	

講義目的、講義概要	授業計画
テキスト、参考文献	**評価方法**

13 年度以降（春）	国際 NPO 論 a	担当者	長瀬　理英

講義目的、講義概要	授業計画
国際的なNPO(Non-Profit Organization：非営利組織)またはNGO(Non-Governmental Organization：非政府組織)について、世界各地の具体的な事例を基に、「Non／非」がついている意味、すなわち政府や企業の取り組みとの違いについて考察しながら理解を深めます。具体的な事例は主に、①人道支援（自然災害および紛争)、②開発協力および③マイクロファイナンス／ソーシャルビジネス／ＢＯＰビジネスの分野からとりあげます。 国際NPO／NGOが関わるアクターには、援助する側の政府／国際機関、民間企業、市民社会などだけでなく、援助を受け取る側の政府、NGOおよび市民社会、CBO(Community-based Organization：地域社会組織)／PO(People’s Organization：民衆組織)／援助を受ける当事者がいます。これらのアクターの関係に目を配りながら、特に当事者にとってどのような効果や影響が生じているかについて議論、検討を加えます。 そして、国際NPO／NGOが果たしている意義・役割およびその変化について、具体的な文脈から理解するとともに、「Non／非」の視点から批判的に検討していきます。	1. イントロダクション／オリエンテーション 2. 国際 NPO／NGO と関係するアクターに関する概観 3. 人道支援の実際(1)：震災 4. 人道支援の実際(2)：紛争 5. 各アクターの取り組み比較と当事者に対する効果・影響 6. 国際 NPO／NGO の取り組みに関する評価 7. 開発協力の実際(1)：メコン河流域（カンボジア・トンレサップ湖）住民の生活 8. 開発協力の実際(2)：大メコン圏(GMS)地域経済協力プログラム 9. 各アクターの取り組み比較と当事者に対する効果・影響 10.国際 NPO／NGO の取り組みに関する評価 11.ソーシャルビジネスの実際(1)：フェアトレード 12.ソーシャルビジネスの実際(1)：マイクロファイナンス 13.各アクターの取り組み比較と当事者に対する効果・影響 14.国際 NPO／NGO の取り組みに関する評価 15.国際 NPO／NGO に関するまとめと将来展望
テキスト、参考文献	**評価方法**
毎回、プリントを配布。	平常点 30%、期末レポート 70%

13 年度以降（秋）	国際 NPO 論 b	担当者	長瀬　理英

講義目的、講義概要	授業計画
「国際 NPO 論 a」では、実際に現場で起きていることを考察しながら、国際 NPO／NGO は何かについて理解を深めますが、この講義では、具体的な事例を踏まえながらも理論的な背景について考察していきます。 すなわち、「貧困」をテーマに取り上げ、国際機関・援助国、学界、NPO／NGO を含む実践者らが「貧困」に取り組むアプローチを比較していきます。主なアプローチには、従来型かつ依然として主流にある所得（経済成長）アプローチ、新しい枠組みを提供しているケイパビリティ・アプローチおよびこれに基づく人間開発ならびに人間の安全保障アプローチ、国際 NPO／NGO を中心に進められている権利基盤アプローチや新しい豊かさ（「良き生」）アプローチがあります。 これらのアプローチを比較検討するうえでは、具体的な事例をテキストとして、各々のアプローチが実際に生じている問題を解決するうえでどのように有効か、または有効でないかについて議論します。 そのうえで、国際 NPO／NGO のとるアプローチについて、「Non／非」および当事者の視点から批判的に検討していきます。	1. イントロダクション／オリエンテーション 2.「貧困とは何か」(1)：グローバル化とアフリカ・ヴィクトリア湖周辺住民の生活① 3.「貧困とは何か」(2)：同上② 4.「貧困とは何か」(3)：「貧困」をどのようにとらえるかについての議論 5. 所得アプローチの視点と取り組み 6. ケイパビリティ・アプローチ（＋「構造的暴力」）の視点と取り組み(1) 7. 同上(2) 8. 人間開発アプローチの視点と取り組み 9. 人間の安全保障アプローチの視点と取り組み 10.権利基盤アプローチの視点と取り組み 11.新しい豊かさ（「良き生」）アプローチの視点と取り組み 12.「貧困」に対するアプローチの比較と背景にある思惑・利害関係 13.NPO／NGO の変化と「Non／非」および当事者の視点から見た批判的検討(1) 14.同上(2) 15.講義のまとめ
テキスト、参考文献	**評価方法**
毎回、プリントを配布。	平常点 30%、期末レポート 70%

		担当者	

講義目的、講義概要	授業計画

テキスト、参考文献	評価方法

13 年度以降（秋）	地域メディア論	担当者	岡村　圭子

講義目的、講義概要	授業計画
Think Globally, Act locally というフレーズを一度は耳にしたことがあるだろう。そこに示されているように、多文化共生やグローバル化、さらには環境問題や福祉の問題を考えるうえで、「地域」もしくは「ローカル」は重要なキーワードのひとつである。それを頭に置いたうえで、本講義を受講してほしい。 本講義で扱うローカル・メディア（地域メディア）は、ある特定のエリアにおける情報を伝える媒体、すなわち『Tokyo　Walker』や『散歩の達人』などの地域情報誌や、各地域・地方で発行されているミニコミ誌、クーポン付きのフリーペーパーなどの紙媒体、さらに FM、CATV、ウェブサイトも含む。さらに、各地のエスニック・コミュニティで発行されているエスニック・メディアもここではローカル・メディアとしてとりあげたい。それらが、多文化が共生する社会においてどのような役割を果たしてきた／いる／いくのか、またどういった機能がそこに要求されているのかについて、受講者とともに考えてゆきたい。 学期の後半は、受講者自身が制作したローカル・メディアを提出・発表してもらう。	１．イントロダクション ２．グローバル化とローカルコミュニティ ３．地域・地方文化の復権とメディア ４．各地のローカル・メディア（１） ５．各地のローカル・メディア（２） ６．各地のローカル・メディア（３） ７．メディアによる地域文化の創造（１） ８．メディアによる地域文化の創造（２） ９．多文化共生とローカル・メディア（１） １０．多文化共生とローカル・メディア（２） １１．災害時におけるローカル・メディアの役割 １２．受講者による発表（１） １３．受講者による発表（２） １４．受講者による発表（３） １５．まとめ

テキスト、参考文献	評価方法
岡村圭子『ローカル・メディアと都市文化』ミネルヴァ書房	レポート（50%）と授業内での作品発表（50%） 【履修者多数の場合は期末テストを行う】

シラバス 経済学部

2014年4月1日発行

獨協大学教務課

〒340-0042　埼玉県草加市学園町1－1
電　話　048-946-1657

学　　科	学年	氏　　名
学科	年	